

WarLines 日本皇国海軍士官奮闘録

佐藤五十六

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1945年8月15日、日本は連合国に降伏することを決定した。

多くの国民を、苦しめることとなった長い戦争が終わり、日本軍は解体されるはずだった。

何を間違えたのか、解体されなかった日本軍の戦いぶりは修羅のごとくであった。

そして、時は巡り、ある新米海軍士官が、孤軍奮闘していく物語である。

途中で性転換・TS要素があります

目次

設定集

国防白書 仮想敵国のまとめ

国防省内局組織表

プロローグ

プロローグ

VOYAGE. 1

VOYAGE. 2

VOYAGE. 3

VOYAGE. 4

VOYAGE. 5

第一章

VOYAGE. 6

VOYAGE. 7

VOYAGE. 8

VOYAGE. 9

VOYAGE. 10

VOYAGE. 11

閑話 尋問

VOYAGE. 12

VOYAGE. 13

VOYAGE. 14

VOYAGE. 15

VOYAGE. 16

VOYAGE. 17

145 134 126 120 113 107 102 96 86 80 73 67 61 52 48 43 35 19 13 6 1

VOYAGE.	37	341
VOYAGE.	36	335
VOYAGE.	35	328
VOYAGE.	34	319
VOYAGE.	33	313
VOYAGE.	32	305
VOYAGE.	31	297
VOYAGE.	30	292
VOYAGE.	29	287
VOYAGE.	28	280
VOYAGE.	27	270

第二章

ある韓国海軍退役士官の回顧録	その2	262
ある韓国海軍退役士官の回顧録		254

韓国海軍士官の回顧録編

第三次竹島紛争戦闘報告書		249
VOYAGE.	26	239
VOYAGE.	25	230
VOYAGE.	24	211
VOYAGE.	23	197
VOYAGE.	22	191
VOYAGE.	21	185
VOYAGE.	20	170
VOYAGE.	19	158
VOYAGE.	18	152

VOYAGE.		56	525
第三章			
VOYAGE.		55	518
VOYAGE.		54	511
事件のあとで、 世間は			499
VOYAGE.		53	496
VOYAGE.		52	491
VOYAGE.		51	475
VOYAGE.		50	469
VOYAGE.		49	458
VOYAGE.		48	450
閑話 バレンタイン・ ウオーズ			444
VOYAGE.		47	433
VOYAGE.		46	416
VOYAGE.		45	408
VOYAGE.		44	384
VOYAGE.		43	376
VOYAGE.		42	371
VOYAGE.		41	364
VOYAGE.		40	358
VOYAGE.		39	352
VOYAGE.		38	347

設定集

国防白書 仮想敵国のまとめ

日本皇国は海洋国家である。

先の大戦は、シーレーンを破壊されたがために、稼働戦力の消失という事態に見舞われた。

その反省により、我が国は強力な対潜作戦部隊の育成と維持に、心血を注いできた。

昨今では、中韓両国の経済発展に伴い、日本皇国に対する軍事的脅威は増してゆくばかりだ。

　　～米国（○）～

《米国の動向》

イラクやアフガニスタンにおける戦闘により、国家財政が危機的な状況にある。

それに伴い、在外米軍再編を含む軍備削減が、議会で多数を占める共和党により要求されている。

それが、米国のアジアにおける軍事的プレゼンスを低下させ、中国の台頭を抑えられない要因である。

《米国の現状》

陸軍の空挺部隊、海軍の空母打撃群、空軍の戦略・戦術部隊、さらには海兵隊の海兵遠征部隊など、十分な緊急展開能力を維持している。

また、在日米軍基地の返還を急速に進めるなど、軍備縮小を進めている。

ただし、海空軍と海兵隊という海外展開部隊の能力と規模は維持していく方針のようだ。

《米国の対外関係》

米国は2007年に対外戦争法を施行した。

この法案は主要な仮想敵国を2～3か国に限定し、その方面の米軍を強化する方針だ。

その他の国家に対しては、経済援助を行うなどの友好的関係を維持している。

　　～ 中華民国（台湾）（○）～

《中華民国の動向》

安定した経済成長のもと、計画的に軍備の近代化を進めている。

日米からの軍事援助により、中国本土からの攻撃には、十分な反撃を行えるだけの戦力を保持している。

《中華民国の現状》

予備役も含めて、160万人の兵士に渡す兵器の近代化が進んでいないこと、海軍力の整備が進んでいないことが問題である。

《中華民国の対外関係》

世界的に孤立しており、友好関係を樹立している国は少なくなっている。

また、米国の台湾関係法や日本皇国の台湾援助法により、一定以上の兵器を導入できている。

　　～ 中国（●）～

《中国の動向》

経済発展を下地とした軍拡を推し進める中国軍は、2000年代の頃と比べても、格段に着実に遠方への展開能力を強化しつつある。

また、陸海空軍、さらには戦略ロケット部隊である第二砲兵部隊は、最新鋭の装備群で更新されつつある。

必要であれば、周辺海域の島嶼を奪取することも可能となるだろう。

《中国の現状》

経済体制の行き詰まりから、軍の近代化は急減速が掛かっている。

そのため、陸海空軍では装備の更新が中途半端で終わっている。

そして内外に敵が多く、何か緩急あれば、中国軍が暴発する恐れがある。

《中国の対外関係》

南シナ海で見せた恫喝による外交など、敵を作りやすく、関係国などからは警戒を強められている。

領土問題を我が国や中華民国、ベトナム、フィリピン、韓国、インドなどと抱え、周辺国ではロシアとパキスタンが友好関係にあるのみである。

そのロシアやパキスタンとしても、日米に対して事を構えるだけの度胸はない。

そのため、中国の同盟国は一切存在しないのだ。

↳ 韓国 (●) ↳

《韓国の動向》

日本皇国と同じように、米国の同盟国であり、国内に在韓米軍が駐屯している。

経済発展に伴い、軍拡、特に海軍力の整備を推し進める。

日本皇国との間には、竹島・対馬といった領土問題、従軍慰安婦問題などの懸案事項が存在し、これまでもこれからも日本皇国との対決姿勢に変わりはない。

《韓国の現状》

中国のバブルが弾けたことにより、経済の失速が見られ、海軍力の整備にはストップが掛かっている状態である。

対北朝鮮の防衛を在韓米軍が肩代わりしている状況であり、米国政府としても頭痛の種であるようだ。

過去に何度も日本皇国との間で、領土紛争を戦ってはいるが、何れも敗北している。

装備こそ最新鋭のものであるが、陸海空軍の練度は高いとは、お世辞でも言えないのが現状だ。

《韓国の対外関係》

国土の三方を仮想敵国に囲まれているため、残る一方の中国とは比較的友好的な関係を結ばざるを得ないようだ。

また、ベトナム戦争時の所業が東南アジア諸国連合加盟国に伝わっており、アジア地域内で孤立しているようだ。

また、日本皇国との国交回復の交渉も難航しており、いつまた戦争状態に入ってもおかしくない。

↳ 北朝鮮 (●) ↳

《北朝鮮の動向》

最高指導者の交代を受け、国際的に孤立を深めつつある。核兵器を搭載した弾道ミサイルの開発を進めている。米国のテロ支援国家再指定も、現実味を帯びていると見られる。

《北朝鮮の現状》

弾道ミサイルの発射実験や核実験を含め、現状の世界秩序への挑発を繰り返している。

兵士の頭数は揃っても、与えられる装備は旧式のものばかりで、戦力とは到底言い難い。

また、海軍力や空軍力は貧弱で、日本皇国に直接侵攻するほどの力はない。

そして、党や軍の特殊部隊を増強しており、非対称戦の準備を進めていると見られる。

《北朝鮮の対外関係》

全世界的に孤立を深めてはいるが、イランやイスラム国といった国家や組織とは、友好関係を維持しているようだ。

少し前には、中国経由で北朝鮮に入国するイランの核技術者やミサイル技術者も確認されている。

↳ロシア(△)↳

《ロシアの動向》

資源により経済が好転したために、軍の近代化を推し進めている。第五世代戦闘機の開発を進めており、世界のなかでも軍事技術大国の1つである。

《ロシアの現状》

欧米からの経済制裁と原油安が経済を直撃し、軍の近代化は思ったように進んでいない。

ウクライナ領土のクリミア半島に侵攻するなどの野蛮な行為を続けており、経済が疲弊してきている。

それでも総合的に見て、世界第三位の軍事力は健在だ。

《ロシアの対外関係》

クリミア半島侵攻により、旧西側諸国との関係が悪化している。

信頼できる同盟国が存在しないという点が、ロシアの行動を抑制しているとも言える。

以上、2018年度版国防白書より抜粋

文中の記号、○は同盟国、●は仮想敵国、△はどちらとも言えない、である。

国防省内局組織表

国防省

予算

支出 1兆8千252億7千万円（陸海空軍も含む）

歳入 2兆6千200億円

職員数 2万5千000人

施設数 900ヶ所

業務車 700両

航空機 3機

国防省

大臣官房

大臣秘書官室

軍基地被害等対策室

国会対策部

陸軍部

総務一課

総務二課

総務三課

人事一課

人事二課

人事三課

会計課

海軍部

総務一課

総務二課

総務三課

人事一課

人事二課

会計課

空軍部

總務一課
總務二課
總務三課
人事課
會計課
統合參謀本部
統合參謀本部長秘書官室
法務部
統合広報室
国防計画部
陸軍參謀本部
海軍軍令部
空軍作戰部
在日外國軍連絡官室
台灣連絡官室
情報本部
事務局
總務係
對外情報局
画像解析部
音声解析部
電子解析部
通信解析部
兵器情報部
対人工作部
特定工作部
航空宇宙部
電腦作戰部
国家安全保障部
情報業務・防諜業務群
公安部隊

情報保全隊
サイバー対策部
テロ対策局
対テロ作戦司令部
対テロ情報部
陸軍情報部
海軍情報部
空軍情報部
地理測量局
陸上地理部
水路部
空路部
特務部
特殊測量部隊
国防施設本部
建設計画部
技術計画部
警備部
国防監察本部
憲兵総隊
総隊司令部
中央機動憲兵隊
北部方面憲兵隊
東部方面憲兵隊
中部方面憲兵隊
西部方面憲兵隊
南部方面憲兵支隊
憲兵業務監察室

第1部
第2部

軍法會議事務局
第1部
第2部
第3部
第4部
国防裝備庁
技術研究本部
陸上研究所
艦艇研究所
航空研究所
誘導弾研究所
先端技術研究所
補給兵站本部
管理部
輸送部
調達計画部
監査部
地方協力局
北海道東北国防部
関東甲信越国防部
近畿中部国防部
中国四国国防部
九州沖縄国防部
各47都道府県地方協力本部
教育・文化関係部局
国防大学校
横須賀本校
理工学部
人文社会学部
朝霞分校
医学部

看護学部
福岡分校
陸軍幹部候補生課程
江田島分校
海軍幹部候補生課程
奈良分校
空軍幹部候補生課程
陸軍幹部学校
海軍幹部学校
空軍幹部学校
軍指揮幕僚学校
業務学校
情報学校
砲術学校
水雷学校
機関学校
通信学校
警備学校
国防省立図書館
市ヶ谷本館
国防省資料部
市ヶ谷別館《市ヶ谷記念館》
練馬本館《リクーンワールド》
浜松本館《スカイ・パーク》
横須賀分館《不審船資料館》
呉分館《鉄のくじら館》
佐世保分館《セイлтаワー》
舞鶴分館《旧鎮守府資料館》
国防大学校図書館
防衛研究所
商務局

施設内販売部
燃料生産部
京浜製造所
阪神製造所
東北製造所
福利厚生局
日本皇国軍共済組合
保険部
特別公務災害支払関係特務部
日本皇国軍特別銀行部
業務部
融資部
在郷軍人会
軍人再就職支援機構
医療関係部
国防大学校医学部附属病院
日本皇国軍中央病院
中央病院硫黄島分屯医院
中央病院移動医務隊
日本皇国軍札幌病院
大湊病院
松島病院
百里病院
横須賀病院
富士病院
岐阜病院
舞鶴病院
阪神病院
呉病院
高知病院
福岡病院

” ” ”

那霸病院
都城病院
佐世保病院

プロローグ プロローグ

1945年8月30日、1機の飛行機が厚木飛行場に降り立った。9月2日に予定されている日本の降伏に先だつて、^G連合国最高司令官総司令部^Hの司令官であつたマッカーサー元帥が、日本国内に入ったのである。

彼の執務する場所として、接收された第一生命館に腰を落ち着けたマッカーサー元帥のもとを訪ねた日本政府関係者に向かつて放つた彼のせりふは衝撃的であつた。

「日本軍？」^{ジャパニーズアーミー}

「あつていいでしょ」

「えっ、いいんですか？」

我々が受諾したポツダム宣言では、軍隊は解散と聞いていたのですが

「えっ？」

「えっ！」

旧日本軍の扱いを巡つて日本政府と^G連合国最高司令官総司令部^Hの間では、そんな間抜けな会話が繰り広げられたという。

無論、口調はこの限りではなく、もっと厳肅なものだっただろう。

そこに、マッカーサー元帥が、思い出したように付け加えた。

「あっ！」

日本に到着する前に、本国から電報が届きまして、此れを見ていた
「だきたい」

そう言つて、彼が差し出したのは、ハリートルーマン大統領から、日本の天皇、総理大臣に宛てた親書であつた。

厚木に到着した公用使から受け取つた親書を携えて、東京に入ったのだ。

「我々が、^{ジャパン}日本に求める役割は、たった一つ。

それは、価値観を共有する資本主義、自由主義を守るために、反共

の防波堤となることである。

「そのために、我々はいくつかの改革を貴国に対し、要求することになる」

当初、日本政府内部で検討されていた憲法改正案以上の、内容に関してはより踏み込む形で、連合^G国最高司令官^H総司令部^Qから原案が示された。

その原案に、政府部内にいた共産主義者が、交戦権の否認、軍隊の廃止を盛り込もうとしたものの、特別高等警察を改編する形で発足した国家警察本部公安局の要員によって、逮捕され阻止に成功した。

ソ連を含む連合国内で取りまとめられていた約定を破棄してまで、連合^G国最高司令官^H総司令部^Qが日本軍の維持を選択したことには、米^H国大統領官邸^Hの主の意向が働いていたことは想像に難くない。

当時のアメリカ大統領、トルーマンは、同じ連合国のイギリスの首相であるアトリーの承認のもと、日本軍を解体しなかったのは、マッカーサーの言う通り、20年後の国際情勢を睨み、日本を反共の防波堤とすることが目的だった。

その結果生まれたのが、原案で盛り込まれそうになった過剰なまでの平和主義を薄めた日本皇国憲法第九条である。

皇国憲法第九条

一項 日本皇国政府は国際紛争解決の手段としての戦争を放棄する。

ならばに、武力による威嚇、侵略的行動、またはこれに類されるような軍事的行動はこれを認めない。

二項 日本皇国政府及び国民は平和という崇高な理想の元に生存する権利を有する。

これは、如何なる国家、人民によっても阻害されることは許されない。

三項 前項の目的を達成するために、日本皇国政府は陸海空軍またその他の戦力を維持しつづける。

結果、日本帝国軍は日本皇国軍として再編されることになった。

憲法改正と同時期に、日本軍の組織改編が進められ、陸軍航空隊と

海軍基地航空隊の一部とが合併して、空軍が設置されるなどして、大きな進展があつたが、米軍が提示した課題のうち、取り扱ひの問題となつたのは沿岸警備隊である。

「沿岸警備隊の創設？」

沿岸警備隊つて、何だ？」

「はい、沿岸警備隊というのは、国家における海上の治安維持を担う組織です」

まだ、霞が関に海軍省があつたときに、この議論が持ち上がった。どういう組織なのかいまち理解出来ずに渋面の日本海軍士官に、説明に現れた米海軍及び米国沿岸警備隊の士官は終始丁寧であつた。従来、日本の海上治安維持は各鎮守府所属の諸艦艇によつて行われており、それを全国的な組織として置こうと言う発想はなかつたのだ。

「その沿岸警備隊というのは海軍の一部門として置いても構わないのでしょうか？」

「どういふことでしょうか？」

質問の意図が理解できなかったのか、米国人達は質問に質問を返した。

「つまり、我が国の海軍には海上護衛総隊が存在しております。

これを改編して編成しても大丈夫なのかと聞きたかつたのです」

「その組織に必要な能力及び装備をつけるのであれば、大丈夫です。

大統領の意向で、ソ連や中華民国への賠償艦を除き、日本海軍の艦船は現状を維持されます」

唯一残つた主力艦であつた長門型戦艦の売却により、日本皇国海軍は大量の駆逐艦やフリゲートを、アメリカよりバーターで供与された。

主砲や殆どの艦内装備品を日本国内で取り外された”長門”は、ビキニ環礁での原爆実験に使用され、その生涯に幕を下ろした。

結果、大量の駆逐艦やフリゲートによつて生まれたのが、日本皇国海軍沿岸警備部隊、英訳すると”Imperial・Japanese・Navy・Coast・Guard・Fleet”と呼ばれる部

隊である。

国防六法と呼ばれる内の沿岸警備法を設置及び活動根拠とし、武器使用基準の甘さから、世界中の犯罪者から恐れられている。

その沿岸警備部隊は45000人の人員そして2兆6000億円もの予算を誇る。

検挙した人間の罰金や保釈金もすべて沿岸警備部隊ひいては海軍の予算となるために、財務省から予算を削られるたびに検挙率が上がるのはお約束である。

1946年の第1次隊の編成完結以来、日本の海防の最前線に立ち続けた彼らの練度や装備の質は、中小国の海軍を上回り、過去に起こった第二次竹島沖海戦第二夜戦と呼ばれる国境紛争においては韓国海軍の広開土大王級駆逐艦に一步も引かず装備の劣るはずの海防艦で圧倒したという伝説も残っている程である。

その様子を上空からP-3Cで見ていたシャア好きの米海軍将校はシャアボイスで三回も違う事を呟いたという。

広開土大王級駆逐艦に海防艦が立ち向かって行った時にこう呟いた。

「見せてもらおうか。」

日本の海軍の実力とやらを」

まだ戦いは始まったばかりで、余裕というか、楽しんでいるような口ぶりである。

しかし、戦いの中盤くらいに海防艦が正面から砲撃戦を挑んだ時にはこう叫んだそうである。

「イツクレイジー」

完全に素が出ていた。

そして最終的に駆逐艦を撃沈した時に落ち着いたように見せてこと言ったという。

「化つ、に、日本の海軍は、ば、化け物か？」

そこには、純粹な焦りと化け物への畏怖がこもっていた。

その結果、この年からハワイで2年に一度行われる環太平洋共同演習に連合艦隊とは別で沿岸警備部隊にご指名がかかる

るようになったという。

準軍事的組織であるとは言え、本質自体は海上警察と何ら変わりない組織であるところの沿岸警備隊が参加を要請されたり、招待される国は、日本以外にはない。

この事実を以て、日本皇国海軍は世界の海軍関係者すらも恐怖する存在となった。

世界第二位とも言われる外洋作戦部隊である連合艦隊、そして世界最大、最強を誇る沿岸防衛部隊である沿岸警備部隊、米軍ですらも怖れる日本の楯であり、矛の部隊である。

そして、2017年4月

日本いや世界中の海は危険であった。

全世界の海域で航行する貨物船の何割かが、消息を絶ち、行方不明になった。

何かしらの怪物が現れた訳でも、海賊が跳梁跋扈している訳ですら無い。

ただ、天気が荒れやすくなっているのだ。

たかが天気と思われるかもしれないが、船乗りが航海中に一番警戒するのは周辺の海象、つまりは天気である。

現代においても天気一つで船が沈むことも有り得るのだ。

多くの船舶の犠牲の後に、世界は対策のために重い腰をあげた。

というのも、世界の海洋というのは古代より、政治的な謀略の舞台であったからで、どうしても対策に乗り出すことにはやがる国というのは存在したからである。

まず行われたのは、準軍事的組織である各国の沿岸警備隊の連絡調整機関としての International Maritime Safety Organization 国 際 海 上 保 安 機 構、略して I M S O の設置である。

そこを受け皿として、各国の収集した海象の情報を、世界規模のデータベースを構築し、常に更新された情報が世界中の商船に対して頒布されている。

また、海賊や密輸といった国際犯罪情報の共有も行われており、政治的な問題の絡まない範囲での、協力が行われている。

それでも世界中の通商、特に海運は止まってはいない。
それでも偏に日本皇国海軍沿岸警備部隊やその他の国の沿岸警備隊
の活動があつてこそである。

VOYAGE. 1

2018年3月、神奈川県横須賀市走水にある国防大学校横須賀本校と呼ばれる施設に、その組織へと配属される人物がいた。

この国防大学校は、日本皇国陸海空軍における高級幹部養成のための国防省に設置された特別の機関であり、生徒数は5学年全て合わせておよそ4600人、その内訳は陸軍が2000人、海軍が1500人、空軍が1000人と各国からの留学生が100人ほどである。

また、1学年では40名前後の学生で、1個の分隊が編成され、陸海空軍の要員別に分かれた候補生たちで、合計22個分隊が存在している。

また、この学校の特徴として、各分隊が持ち回りで、学校の事務業務や大学校施設の警備などを実施していることがあげられる。

というのも、士官の1番の仕事は、事務仕事であることは有名な話であり、少尉という士官の1番下の階級であっても、4等水兵の数倍の仕事が待っているのだ。

そのため、学生のうちから、それに慣れさせることは必要なことだったのだ。

あとは人件費の削減と言う重要な問題の解決にも繋がっている。そして、今日はその学校の最高学年である5回生の卒業式が執り行われていた。

5年間の長きにわたる教育期間を終えた学生たちが、その中でも一番、濃くて、辛くて、そして、思い出に残る1日となるであろう日である。

その卒業生の集団のなかに、佐竹紀一兵曹長がいた。

彼は日本皇国海軍出身の父母を持ち、俗に2世軍人と呼ばれている人物である。

第22分隊の先任曹長という中学や高校で言うところの学級委員のような立場に就いており、職務としては、分隊教官と学生間の相互連絡に当たるものと、国防大学校の内規に規定されている。

人柄よし、成績よし、頭脳よし、体力よしという文武両道という言葉

葉の似合う男であった。

今日卒業する佐竹学生以下の900名は、国防大学校学生の制服を着て、講堂の指定された席に着席して待機していた。

今回卒業する佐竹学生たちも去年までにやってきたことだが、国防大学校の卒業式は1回生から4回生で編成された実行委員会を筆頭とする各役員による式の運営が行われ、毎年、天皇陛下のご臨席を賜るほどに、豪華な式が開かれている。

国防大学校制服を着た学生が、警備・儀仗、運営、会場誘導、調理などの諸役員に分かれ、卒業生を見送るために式を行うのだ。

去年までお世話になった先輩たちだ。

役員に当たる学生たちも、準備に気合いが入る。

全校生徒の3倍近い人数を収容できるほどの、大規模な地下講堂には、多数の来賓や卒業生の家族でごった返していた。

そうしている間に、開式の時間となったのを確認した司会がマイクを取り、話し始める。

「ただ今より、第68期国防大学校学生卒業式を開式します。

開式の辞、卒業式実行委員会委員長、島田学生」

大きな返事をして、壇上上がったのは、4回生のなかでも最先任の立ち位置にある学生であった。

「ただ今より、国防大学校卒業式の開式を宣言します」

そう言うなり、島田学生は舞台脇に下りていった。

「本校学生による特別儀仗を行います」

司会の学生の言葉に、4回生の学生の指揮のもと、95式小銃と呼ばれる木製のボルトアクション式儀仗銃を携行した学生が、3個小隊入場する。

「右向け、止まれ。

立て銃」

控え銃と呼ばれる両手で銃を保持して、行進するための姿勢から、立て銃と呼ばれる身体の脇に銃を保持する姿勢に、指揮官の指示を持って移行する。

黒い詰め襟の上に、儀仗隊飾緒と呼ばれる金色のモール、銃剣を着

けた白い弾帯を肩から提げた学生たちが、整然と行進して、指揮官の指示の通り、揺らぎのひとつもなく止まり、銃を動かす様には、部隊の士気の高さが現れていた。

「捧げ銃」

指揮官の号令に、銃を持った全員が銃身の被筒に 両手をかけて、持ち上げる。

その動きひとつとっても、澁みはなかった。

タイミングも申し分なく、臨時に召集された隊員も2週間の猛特訓の成果が現れており、舞台袖から様子を見ていた陸戦教官も頷きを見せるほどであった。

「立て銃」

タイミングを見計らった指揮官が、腰に提げた剣を抜く。

指揮官の号令を待たずに、半分の学生が回れ右をし、事前の訓練の通り、銃を振り回した。

控え銃から様々な構えに移る。

一通りの展示が終わった後に、令なく気を付けの姿勢に戻る。

それを確認した指揮官が、剣を鞘に戻して、号令をかける。

「右向け前へ、進め」

会場が拍手に包まれる中を、指揮官の号令で、儀仗隊が退出していく。

「学校長、式辞」

式は司会の言葉と共に、肅々と進んでいく。

「諸君らに私が出会ったのは、5年前のことだった。

まだ私が副校長をしていて、全国各地から着隊してきた諸君らを、この学校の正門で出迎えた。

そのときの諸君らの様子は、期待や不安の混じった姿であったと記憶している。

だが、5年間の課程を終えた諸君らの顔には、立派な兵士としての顔が浮かんでおり、これからの未来への期待が見てとれる。

ここまでの長い長い課程のなかで、諸君らは大きく成長した。

この学校を出た後は、陸海空軍の実戦部隊の指揮官として、日本各

地に配置されることになり、そして、この中からは、陸海空軍のトップに上り詰める人間もいるでしょう。

これからの人生において、ここで得た経験が糧となることを祈り、訓示とする」

「天皇陛下、訓示」

学校長と入れ替わるようにして、登壇された天皇陛下に敬意を表し、司会の学生が卒業生と教官方といった軍人たちに、学校長と同じようにかしいーらあなか頭の号令をかける。

頭の敬礼は、日本皇国陸海空軍統合参謀本部第8号礼式規則に関する達に定められたものであり、主として軍に在籍する人物に向けて、行われるものである。

それには憲法上は唯一の大元帥であり、日本皇国軍の統帥権を、名目上保持しており、最高指揮官である天皇陛下、天皇陛下から指揮権を委任されている総理大臣、行政組織としての国防省の最高責任者であるとともに、日本皇国軍の最高指揮官代行である内閣総理大臣の下で、統合参謀本部長を通じて、日本皇国軍全体を統督する国防大臣、国防大臣不在時の代行を行う国防副大臣、大臣、副大臣の補佐を行う国防大臣政務官も含まれると、日本皇国陸海空軍統合参謀本部から出された第8号礼式規則に関する達の補則に定められている。

「この度は、ご卒業おめでとうございます。

あなた方は、国防と言う重大な責務に就かれることと思います。

そして、日本各地においても同様の高貴な志を持って、日本皇国軍に入隊し、教育訓練に励む若者たちがおられ、この国の未来への期待を一身に背負っておられます。

諸君らは、その若者たちを指揮すると言う立場である士官である。その意味と立場の重さを感じて、此れからの職務に当たってもらいたい。

純粹で高貴な若者たちの活躍を祈念して、私からの訓示とします」
天皇陛下の優しげな、それでいて凜とした口調で話されるお言葉は、短いながらも多くの卒業生に感銘を与えた。

それは佐竹学生にも変わりはなかった。

天皇陛下が壇上から下りられると同時に、司会が次の人物を紹介する。

「総理大臣、訓示」

司会の言葉に、来賓席から総理大臣が登壇する。

「第68期国防大学校学生の諸君、卒業おめでとう。」

君たちはこれから、国防の最前線で活躍される若人の一人として、全国に配置されることとなります。

今現在、北朝鮮の核・弾道ミサイル問題、竹島、尖閣諸島を巡る問題など、我が国を取り巻く国際情勢は大きく変化を続けています。

先行きの見えないことも多く、諸君らには大きな苦労を掛けることになると思う。

また、昨年度には災害が多発し、また離島や海洋における救難や急患輸送など、600回近い数にも及ぶ災害派遣任務が、日本皇国陸海空軍部隊によって実施されるなど、今では諸君らの存在は国民が文化的な最低限度の生活を維持するためには、必要不可欠なものとなっています。

1800年代の創設以来、諸君らの先輩は数千にも及ぶ実任務に出勤し、国益の保護に活躍してきたことは、日本人として、いえ日本と言う国に生まれた一人の人間として、大きな誇りであります。

国民からの大きな期待を背負う諸君ら、戦場の最前線に送られるかもしれない諸君らに、幸せが多からんことを祈念して、私からの訓示とする」

卒業式には、その他にも多くのプログラムがある。

優等生賞、精励賞授与、来賓紹介、国防大学校校歌斉唱、宣誓が終わった。

宣誓というものは、私は、わが国の平和と独立を守る日本皇国軍の使命を自覚し、日本皇国憲法及び法令を遵守し、一致団結、厳正な規律を保持し、常に徳操を養い、人格を尊重し、心身をきたえ、技能をみがき、政治的活動に関与せず、強い責任感をもって専心職務の遂行にあたり、事に臨んでは危険を顧みず、身をもつて責務の完遂に務め、もつて国民の負託にこたえることならびに、幹部たる軍人に任命され

たことを光栄とし、重責を自覚し、幹部たる軍人たるの徳操のかん養と技能の修練に努め、率先垂範職務の遂行にあたり、もつて部隊団結の核心となることを誓いますという内容のものを読み上げて、これからの軍人生活に対して、心を引き締めるものである。

卒業式以外のプログラムとして、昼のバイキング形式の食事会、陸戦演練の展示、そして最後が分隊解散式を行った後に、関係者らによる見送りが行われる。

「以上で、卒業式を終了します。

昼食会をはさんでから、陸戦演練展示を行います」

昼食を食べた後、内閣総理大臣や天皇陛下の座る来賓席の前を、陸戦服装に着替えた学生たちは行進して、国防大学の敷地に隣接する日本皇国軍小原台陸戦演習場に、分隊毎に集結する。

ルール無用の陣取りゲームを陸戦演練として、採用したのは、数年前に在籍していたとあるサブゲー好きの陸戦教官だったという。

空砲の装填された小銃を手に持ち、弾帯に着けたポーチには、多数の30発入り弾倉を持っていた。

これもまた、国防大学の恒例行事となっており、内外の来賓の楽しみのひとつである。

「いやはや、すごい勢いですな」

高台に設置された観客席には、100インチモニターが数台設置され、演習場各地での戦況を表示していた。

どこもかしこも、戦況は一進一退で、何も起こらない。

この異常さを、理解できる者は軍の関係者に限られた。

突撃を繰り返すというのが、この戦争における唯一許された戦術ドクトリンである。

そこにある結末は単純で、最強を決めて終わるはずであるが、今回はそこに向かうことはない状況である。

正攻法しか、正面からぶつかることしか許されない状況で、勝利を掴み取るためには、鍛え抜いた自らの肉体、高い士気と高い技量の3つが必要である。

そして、ある部隊が動き始めたとき、異変は起こる。

「バレンタインの悪夢の再来だな」

状況を見ていた校長が、その異変の中心に気づいて、ため息と共に漏らした。

陸軍の想定にいつもある戦車や砲兵の支援、それのないこの戦場において、今年は海軍の勢いがすごかった。

「バレンタインの悪夢？」

にしても、今年の陸軍は、腰が引けておるな」

陸軍参謀総長も口を開いた。

校長の言葉に疑問を持ちながらも、自分が気付いたことを感想として述べる。

情報科将校として、最前線の将兵から臆病者の謗りを受け続けてきた参謀総長にとっては、歩兵科将校としての教育を受けた者の含まれる部隊が苦戦は、許されない事態であったらしく、こう続けた。

「直ちに対策を練らねばなるまい。」

栄光ある皇国陸軍歩兵が、この様では陛下に顔向けできん」

その言葉を聞いていた校長が、学生たちを援護するべく、口を開く。「彼らも全力で戦っています。」

何しろ、今年の海軍は上海の生き残りがいますから。

実戦経験のない彼らでは、対抗することは難しいでしょうな」

「上海事変の生き残りですか？」

第三次上海事変と呼ばれる戦闘は、人民解放軍南京軍区の台湾強硬派により、中華民国主席が拉致監禁された事件を発端として、生じたものであり、日台両国の特殊部隊数百名と中国軍歩兵師団数個、10万人との全面衝突であった。

戦闘の経過について多くを語る必要はなく、日台両国の戦略的勝利、戦術的敗北であった。

台湾主席は無事に台湾に到着したが、特殊部隊には多くの死傷者が出た。

たった数百の特殊部隊を包囲したのは、台湾強硬派の将官の率いる部隊であり、一般市民をも巻き込むことに、一切のためらいがなかった。

20倍とも言われる敵兵に包囲された特殊部隊の隊員たちは、無謀な突撃を血路を開くために行い、その命を散らしていった。

「あの時の……あの地獄からの生き残りが、学生にいたのですか？」

参謀総長は、当時、情報本部対外情報局東アジア方面監督官として、沖縄県嘉手納町にある日本皇国空軍嘉手納基地で、作戦の後方支援を行っていた。

アメリカ陸軍特殊部隊、デルタフォースの隊員がその話を聞いて、モガデイシオの戦闘を引き合いに出して、日本の特殊部隊とは戦いたくない。

あのような状況であれば、ソマリの民兵にすら苦戦した我々の部隊は全滅している。

生き残りがいたことすら、奇跡だと言えるレベルだ。

我が米軍に、ぜひスカウトしたいね。

その言葉で、救われた兵士が何人いただろうか。

そんな話を聞いたことがあったのが、今の陸軍参謀総長であった。その言葉に頷きを見せた校長に、その地獄の生き残りの存在を知り、それは仕方ないとの意識も芽生えてきていた。

「むう、ならば、うちが負けるのも致し方あるまい」

「まあ、それがうちの甥っ子なんだがな」

隣に座っていた海軍軍令部総長が、会話に割り込んで言う。

「いやはや、上海に行ってたとは知らなかったがね。

報告書を見て、目玉が飛び出そうになったよ」

黒いスーツの制服に身を包んだ海軍軍令部総長は、豪快に笑う。

「やはりと言うか、子は親の背中を見て育つ。

そして、血にも抗えないようだ」

海軍軍令部総長は言うが、嬉しさと同時に憎々しさをも感じさせる言葉であった。

「失礼、今私が口にしたことは、忘れてください」

軍令部総長という役職に就いているとは言え、彼にも出来ること出来ないことがある。

例えば、気に入らない人間を消し去ることなどである。

「そうですね。」

今は観戦に集中しましょう」

校長はそう言って、話題を打ち切った。

その頃、佐竹曹長率いる海軍兵中心の第22分隊は、ゲリラ戦の準備を進めつつあった。

「先任曹長、準備良し」

「了解。」

作戦を説明する。

我が分隊は直ちに突撃し、前方の油断しきった陸軍の部隊の後背を突く。

我が分隊の後背には、空軍の部隊がいる。

敵に手酷い一撃を加えた後、空軍部隊の方向に撤退する。

我が部隊の奇襲によって浮き足だった陸軍部隊の注意を、後背の空軍部隊に誘導できれば、共倒れも期待できる。

以上だ。

状況としては、時間がない。

直ちに作戦を開始する」

各方面に派遣した斥候からの報告によると、第22分隊の存在に気付いた者は存在せず、各部隊とも全周を警戒していた。

だが、それは見せかけだけで、油断している人間の存在は、佐竹曹長から見れば、分かりやすかった。

「バレンタインの戦訓を生かせていないな。」

自分が教官なら、全員を落第させている」

斥候からの報告をまとめたメモに、目を落としながら、佐竹曹長は呟いた。

そして、顔を上げて、銃のグリップを握り直した。

陸軍部隊を襲える絶好のポイントに差し掛かったときに、佐竹曹長は指示を出した。

「いけっ、いけー！」

海軍部隊は勢子のように騒がしくしながら、陸軍部隊に迫っていく。

予想外の方向から、迫ってきた海軍部隊の存在に、陸軍部隊は壊滅寸前にまで追い詰められていた。

銃撃が交錯しながらも、勢いに乗る海軍の部隊は、最初の1分で半数以上を倒した。

頃合いよしと見た佐竹曹長は、撤退を指示した。

「撤退、反転して空軍部隊に突っ込め」

佐竹曹長の指示に従った部隊は、急停止し、勢いはそのままに、空軍部隊の中央を駆け抜けた。

突然の攻撃に混乱していた陸軍部隊の注意は散漫で、空軍部隊を攻撃してきた敵だと認識してしまうレベルであった。

結果、復讐の念に燃える陸軍の部隊は、空軍部隊に突入していく。

「引っ掛かったな。」

馬鹿どもめ」

驚き硬直していた空軍部隊に対して、痛烈な打撃を加えた陸軍部隊は、殺し尽くす勢いで暴れまわったものの、空軍部隊の逆襲を受けて全滅。

空軍部隊の方も、復讐を誓う別の陸軍部隊の攻撃を受けて、全滅するなど戦場は混乱を続けていた。

戦場の混乱の作り方とその利用の仕方は、佐竹曹長は上海での一週間で嫌というほど、詳しく学び、身に付けていた。

戦場において、人の心理というものは、重要な要素の一つであった。陸軍将校であれば、国防大学校後期課程における初級戦場心理学課程において、学ぶはずのことであるが、咄嗟の戦場で応用できるほど、

彼らは冷静でいられなかった。

「古人曰く、勝つて兜の緒を締めよと東郷元帥も言われている。

一手、一手を確実に指して、確実な勝利を納めていこう」

勢いに乗る海軍の部隊、佐竹曹長の率いる分隊ではあったが、佐竹曹長は油断や慢心を諫め、次からの戦闘に備えた。

後に立体機動と呼ばれるようになる歩兵機動を用いながら、海軍の部隊を運用していた。

「1時間でケリを着けるぞ」

多くの学生、明日からは兵士のタマゴとして、日本各地に配属される若鷲が、次々、戦死判定を受けて、戦線を離脱していく。

「さつきも言ったが、教官の介入による終結まで、あと1時間しかない。」

我々の強さを他に示すためにも、ここは一気に畳み掛けるぞ」

佐竹曹長は、ここで決着をつけることにした。

「突撃せよ。」

高台を奪取し、我が分隊旗を高台に掲げろ」

最後まで生き残った部隊は、演習場で1番の高台に陣地を作り、籠城戦を決め込んでいた。

士気に勝る佐竹曹長指揮の分隊は、一気に高台の陣地に雪崩れ込んだ。

「降伏します」

その高台からは、戦闘の状況がはっきりと見えていた。

死にたくなければ、白旗を揚げるしかない。

そんな算盤勘定のできる人間が、高台に立て籠る選択をした堀北曹長で、卒業後は陸軍少尉に着任し、どこかの部隊に配置される予定だ。

「ふむ、戦略目的は達した。」

「この防備を固めろ」

時間が来るまでは、勝利にはならない。

また何が起ころとも知らず、警戒は強く行われていた。

「残る敵は3個分隊120人ほどだな。」

「ここに攻め込んでくる気概のある奴は、いないだろう」

高台の上を占拠した佐竹曹長率いる分隊を、他の分隊は遠巻きに見守るのみだ。

「状況終了、繰り返す、状況終了。」

「教務部警備隊による強制介入を開始する」

国防大学校最強の陸戦部隊が、介入を開始した。

遠巻きにしていた3個分隊を撃滅した彼らは、佐竹曹長たちが陣取る高台に向け、侵攻を開始していた。

「着け剣、突撃用意」

佐竹曹長は、決断を下した。

「突撃、俺に続けえ」

89式小銃を片手に、佐竹曹長は飛び出した。同期たちもそれにつられて、飛び出していく。

さすがに歴戦の教務部警備隊を相手では、分が悪かった。

第22分隊は、佐竹曹長を残し全滅。

佐竹曹長は奮戦虚しく、戦死判定が下った。

だが、彼は警備隊に一矢報いることができた。

教務部警備隊半数の戦死判定とともに。

陸戦演習が終わると、分隊解散式と全員がうきうきで待つ配属発表がある。

「お前らは今日をもって、国防大学校海軍部を卒業するが、未だにためえらはどうしようもない連中だ。

しかし、ここで学んだことを忘れずに薰陶努力すれば、ちよつとはまともになるだろう。

これまでの努力を継続していくように、以上」

分隊解散式の途中、これまでエリートとして天狗になっていた幹部候補生の鼻っ柱を幾度となくへし折ってきた分隊の班長の言葉は、学生達の胸に大きく刻まれていた。

そして、彼らには大きな楽しみがあった。

それは、自分の配属先である。

開校当初の学校長の意向から、配属先は知らされないことが慣例となっていた。

その秘匿具合は、生徒一個人が持つ情報収集能力を上回っていた。秘匿の徹底は、情報軍人により行われており、それを凌駕することなど学生では不可能だった。

全員の職種・特技は、教育の都合上、既に知らされている。

だからこそ、自分の職種・特技から類推しようとする人間もいたが、そんなことができる人間は少ない。

先任班長である准尉が、前に歩んできた。

手には赤い蠟で封をされた封筒がある。

そして、封筒の封印を解いた前任班長が、大きく深呼吸をして、嗚咽の混じった声で言った。

「配属先を知らせる。」

一回しか言わんからな、聞き逃すなよ」

敗戦時に再編成された日本皇国軍は初等士官教育も、他国に例を見ないものとなっている。

これが陸軍士官学校、海軍兵学校、それに新設される空軍の教育機関を統合設立したもので、国防大学校である。

5年制の省庁管轄の大学校で、各軍部と学部があり、陸軍部、海軍部、空軍部が軍部と呼ばれるもので、後は理学部、工学部、医学部、人文社会学部の四つの学部から成り立っている。

軍部では、各軍における戦術、戦略を教えている。

ここは、最初の三年間で大学課程を終わらせると、後の二年を使って各陸海空軍の士官候補生教育が行われる。

また、医学部であれば、4年間の集中教育の後、研修医としての訓練を国防大学校医学部付属病院で受けながら、陸海空軍軍人としての教育を受けている。

また成績が優秀であれば、どの人物であっても、中尉任官も有り得る。それに戦前では考えられなかったことだが、陸海空軍の仲は良好

だ。共通の財務省敵がいて、さらに同じ釜の飯を食った仲というのは強固

である。そしてここを卒業した者は、そのまま第一線の部隊へと配属される。

「佐竹紀一兵曹長、海軍中尉に任命する。
沿岸警備部隊大阪警備府艦隊海防艦”ひなぎく”砲雷科付きを任

ず」

「拝命します」

全員の配属を言い終わった後、最後に分隊長が前に出る。

朝礼台の上に立った分隊長は、目に涙を浮かべ、嗚咽を漏らしなが

ら、言った。

「本日をもって、第22分隊の指揮を解く。

私は諸君らの赴任地での、幸福と幸運を祈っている」

陸海空軍のどこに進むのかも問わず、今年卒業する全員が卒業式のあつた講堂の前に集合する。

全員が帽子を脱いでいる。

そして全員で帽子を放り投げた。

これが国防大学校卒業式の恒例である。

そして、もう一度、国防大学校校歌を全員で熱唱し、それぞれの同期の友人との別れを惜しむのだ。

「佐竹か？」

「どうした、堀北？」

「卒業だな」

「だな」

「俺は東京に残るが、お前は怎么样了んだ？」

「大阪へ行くよ」

「そうか、頑張ってくれよ」

「警察には捕まるなよ。」

後、憲兵にも」

「ああ、分かつてる」

「じゃあ、行くか」

短い言葉を交わした後、二人は別れた。

真反対の道を歩むことになる二人ではあつたが、この二人の胸のなかは、再会の予感が溢れていた。

2018年 4月4日 堺市堺港 大阪警備府

四大鎮守府や新設された大湊鎮守府とは違い、沿岸警備部隊がもつぱら使用している基地が多数あり、それらをまとめて警備府もしくは分駐所と呼称している。

大阪警備府もその一つではあるが、意外とその歴史は古い。

他の警備府が新設されたのに対し、大阪警備府自体は戦前に発足した阪神海軍部が前身である。

それが1941年11月に改編され、大阪警備府となった。大阪市から堺市に移転したものの、その歴史は連綿と続いている。警備府の事務所で挨拶をした後、埠頭に出ようとして美人の女の人にぶつかった。

「君が佐竹中尉だな？」

「そうですが、貴女は？」

「海防艦“ひなぎく”艦長、二階堂雪少佐だ」

「失礼しました」

謝罪の言葉とともに敬礼をする。

これは軍人としての礼儀だ。

「かしこまらんでいい。

今は私服だ。

時に佐竹中尉、君は料理が出来るかい？」

何故そんなことを聞くのだろうか？

調理員ぐらい何処実家の艦にもいるだろうに。

「高校時代に定食屋実家を手伝ってたんで、人並みには出来ると思います
が」

「ちようど良かった。

君を補給員長に任命する」

「えっと、失礼ですけど、調理員いないんですか？」

質問に返ってきたのは、肯定の言葉であった。

私を絶望させるには十分である。

「曹がもっぱら料理を担当してたんだが、そいつも連合艦隊に引き抜かれてな。

料理の出来る奴がこの”ひなぎく”に残ってないんだよ。

というか幹部自体、この艦にほとんど残ってない。」

切実そうな、なおかつ涙まで浮かべてそう言う。

（えっ、今なんて言いました？、幹部がほとんど残ってない？、やってられるか。

とやさぐれかけたこともありました。

しかし、来てしまったものは後悔のしようがありません）

「あつ、そうだ。」

「ついでに君を先任将校にも任命する」

再び思いついたように、役職を付け加える。

ちなみに、先任将校というのは昔であれば駆逐艦クラスの艦艇にあつた役職で副長に相当する。

大抵が砲術長もしくは水雷長のどちらかの兼任であつた、つまり現在に当て嵌めると同時に砲雷長にも任命されたことになる。

「あの私に重責を負わさないでいただきたいのですが」

（ついでに言う私の自己紹介をどれだけ長くすれば気が済むのだろう。）

日本皇国海軍沿岸警備部隊大阪警備府艦隊海防艦“ひなぎく”先任将校兼補給員長、中尉、佐竹紀一。

とてつもなく長い。

文句の一つでも言いたくなるが、我慢だ我慢。

上官に文句を言ったら、即刻離島に飛ばされる）

「構わないだろう。」

特に難しい仕事なんて無いし」

精一杯の抗議をこの人はばつさり切り捨てた。

「ようは慣れだ慣れ。」

頑張つて慣れてくれよ。」

（最後のは無理ですって、私は天才じゃありません。）

平々凡々な凡人ですから。

お願いですから無茶なことは言わないでください。）

私の精一杯の心の声が聞こえること等なかった。

「では“ひなぎく”に行こうか」

こうして私の海軍での生活が始まったのでした。

VOYAGE. 2

海防艦というのは日本皇国海軍のみに存在する艦艇区分で基準排水量1000tクラスの艦艇の事を言う。

昔であれば、除籍寸前の旧式戦艦や巡洋艦の事を指す言葉であったのだが、第二次世界大戦の折りに中型の対潜艦艇というふうに対象が変わっていった。

ちなみに大阪警備府所属の海防艦“ひなぎく”のカタログスペックは、それなりである。

基準排水量 1050t 満載時排水量 1200t
全長 50.96m 全幅 12.7m 喫水 2.5m
機関出力 6000馬力 速力 41.85kt 乗員 45名

兵装 オットー・メララ62口径76mm速射砲 2門

Mk41VLS 8セル

ハーブーン 2発 VL-A 4発

ESSM 8発

CIWS 2基

三連装短魚雷発射管 2基

M2ブローニング12.7mm機関銃 2丁

見た感じから重武装のごつごつした艦である。

というかバランスがおかしい。

転覆事故を起こさないか心配である。

これでも最新鋭の海防艦で、対水上、対潜、対空のすべてに対応可能という触れ書きである。

佐竹中尉の頭に入っているスペックというのは、この程度だ。

埠頭に停泊中の“ひなぎく”を見ても同じ事しか思いつかなかつた。

「結構立派なんですな」

「こう見えても、最新鋭艦だからな。」

立派でなくてはな」

二階堂雪少佐の口調には自嘲が見えた。

「それにこちらとしても、驚いたよ。」

国防大学のハンモックナンバー上位の者が沿岸警備部隊を希望するなんてな」

「何ですか？」

駄目だったんですか？」

「そんなことは無い。」

むしろ大歓迎なのだが、たいていの人間が連合艦隊を希望するのだ。

こつちに来るのは問題児ばかりだったから、拍子抜けしたんだよ」
（いやいや、問題児ばかりでも無いと思う。）

たいていの奴は礼儀正しく節度ある人間だと思ったんだが、そうでもないらしい」

「ここが君の職場であり、住居でもある」ひなぎく」だ。

”ひなぎく”へようこそ、佐竹中尉」

「お世話になります」

艦内に入ると意外に広いという印象だった。

「今日はゆつくりするといい。」

明日については夜にまた連絡する」

「出航用意。」

もやい放て。

帽振れ」

矢継ぎ早にだされる指示に従い、帽子を振る。

「即訓練なんて聞いてないんですけど、昨日の晩も連絡なんて無かったですし」

「すまない、連絡先を聞くのを忘れていた。」

そろそろX時アワーだな。」

封緘命令書を開けて見ろ。」

面白い事が書かれてるはずだぞ」

（面白い事って、何だ？）

この人達の事だから、かなりの無茶振りのような気がする）

「宛、”ひなぎく” 前任将校

想定、大阪湾内に不審船あり。

速やかにこれを排除せよ。

ただし、艦長は急病に倒れ休養中である。

標的艦”？”

訓練艦”ひなぎく”

発、大阪警備府司令部」

(はい来ました、ただのイジメです。

何か相手にはとてつもない物が来そうです)

「演習開始。

じゃ、ここで見てるから」

日本皇国海軍配備の海防艦には戦闘情報センタ^cーと艦橋が統合された戦闘情報艦橋^bが設置されている。

理由としては、海防艦が小型過ぎて設置するスペースが無いこと、駆逐艦以上に装甲が無いために何処に設置しても同じだからである。

二階堂少佐の声とともに、佐竹中尉は奈落に突き落とされた。

(こんな急に言われても、困るんです。

目で急かさないうください)

見た目は中肉中背の普通の人である佐竹中尉は、肝っ玉の大きさも普通であった。

「戦闘部署発動。

教練対水上戦闘用意。

繰り返す、教練対水上戦闘用意。

見張り員は艦内へ退避せよ」

仕方なくお決まりの言葉を告げ、艦内が緊張に包まれたようだ。

(ダメだ、胃がキリキリする。

後で胃薬もらっておこう)

「対水上電探に感。

方位 195、距離 100000m、数 1、速力 21kt。

反応から、ふぶき型駆逐艦と断定されます」

「駆逐艦が相手なら、普通はこっちが相手の姿を見る前にデストロイ

されませぬ」

誰かに聞かせる訳でもなく、一人つぶやく。

「仕方ないか。」

「停船命令を送れ」

「手順通りの命令を送る。」

日本皇国海軍作成の不審船舶対処要項によると、停船命令、撃沈警告二段階の警告を無視した場合、即座に船体への攻撃を認めている。

今はその第一段階だ。

テツパチ鉄帽を被り直し、前を見据える。

「停船命令を無視。」

「航行を継続中、針路、速力そのまま」

”ひなぎく”に一人だけ配置されているオペレーターが淡々と報告する。

「警告を送れ。」

「教練対空戦闘用意」

（まあ、無視して来るのは分かってますよ。

駆逐艦だから普通に近づいて来るだろうな）

「警告を無視。」

「対空電探に感。」

「目標より高速飛行物体の発射を確認。」

「距離、85000m、数、2」

「取り舵いっぱい」

意外に知られていない事実ではあるが、海防艦は舷側から見てもレーダー反射断面積が小さい。

大半のミサイルが舷側から接近することは、よほどの馬鹿でも分かることだ。

それに合わせるように、たいていの艦艇でも、対空火器は舷側に向けて最大の火力を展開するように配置されている。

海防艦が駆逐艦殺しを達成するには、この辺の事も利用しなくてはいけない。

「発展型シーパローミサイル発射用意。」

弾数、4」

データ・リンクシステムの応用による仮想空間での戦闘は21世紀という時代を感じさせる。

「18000mです」

オペレーターの声がESSMの有効射程に入ったことを告げる。

「ESSM一斉発射」

”ひなぎく”における対空戦闘の虎の子である発展型シースパロームミサイルを惜し気もなく投入する。

「命中、2」

全弾の迎撃に成功」

「ハーブーン発射用意。」

弾数、2」

これらは海防艦に搭載されている対艦ミサイルのすべてである。

この訓練においてはハーブーンはESSM以上に出し惜しみ出来ない兵器である。

通称ミニ・ハーブーンと呼ばれている海防艦用の対艦ミサイルは通常のものより射程が短い。

それでも小型軽量な本体は、海防艦の対艦用兵装として欠かせない物となっている。

「撃てえ。」

続いて面舵いっぱい」

「面舵いっぱい」

マイクを取り出し、機関室に繋ぐ。

「機関出力いっぱい、最大戦速」

「機関出力いっぱい、最大戦速。」

よおそろ」

返答を聞いてマイクを置く。

「右舷砲撃戦用意」

時速77.5kmで猛進する”ひなぎく”は標的の駆逐艦”ふぶき”に一時間半ほどで接敵出来るだろう。

有利な点は相手もこちらと同じオート・メララ62口径76mm速

射砲しか搭載していない上に、砲門数も一対二であることが挙げられる。

それに小型だから、被弾する確率も低い。

この戦い、冷静に戦えば海防艦に有利であった。

”ふぶき” 戦闘情報センター

定期修理の為に横須賀鎮守府に入港していた”ふぶき”は紀伊水道を抜け、大阪湾に入るところであった。

ここで咄嗟の演習が開始されることとなっている。

「停船命令を受信しました」

生真面目な副長が伝えて来る。

「演習の始まりだな。」

で、”ふぶき”と”ひなぎく”の距離は？」

恒例となっている新人の試験の仮想敵に”ふぶき”が選ばれるとは思わなかった。

「およそ、95000と言ったところだと思われます。」

こちらが駆逐艦である事を意識しているようですね」

副長の言うことは正しい。

「意外と冷静だな。」

油断もしていない。

パニックになつてくれた方が、こちらには有利なんだが」

パニックになったり、油断していたりする者は、こちらに近い地点で警告を発してしまった時点で、仮想敵を演じる艦艇から集中砲火を

浴び、撃沈判定が下ったこともあった。

他にも、警備府や鎮守府に逃げ帰ってしまった例もある。

どれも不合格であり、後々まで部下にナメられる原因であった。

この時点で十分に合格点と言える。

「ふっ」

自然と笑みがこぼれていた。

「撃沈警告を受信しました。」

って、どうしたんですか？」

「いや、何でもない。」

ハーブーン発射用意。

片舷の全火力を投射する。

と言つても、たったの二発だけだが」

そう言つて、苦笑する。

「撃てえ」

距離が85000mつまり85kmまで近づいたところで、対艦ミサイルをお見舞いする。

もちろん種類は、純正のハーブーンだ。

一発命中しただけで、海防艦には致命傷となり得る。

「命中まで、あと5秒、5、4、3、2、1、時間。」

命中判定確認できず、全弾迎撃されたもよう」

コンソールにかじりつく砲雷士の報告が入る。

「対空搜索用レーダー」に感。

ハーブーンが2、接近中。

距離、80000」

「海防艦”ひなぎく”が転針。

本艦へ最大戦速で接近。

本艦主砲射程に進出するまでに、一時間半ほどだと思われま

す。電測員二人からの報告が入った。

「左舷砲撃戦用意。」

ハーブーンと同時に対処する。

本艦も最大戦速」

「最大戦速、よおそろ」

矢継ぎ早に指示を出しつづける。

「ハーブーン、距離、15000」

「シースパロー発射用意。」

「斉発射」

「撃墜判定、1、もう一発はさらに接近。

距離、10000」

「主砲撃ち方始め」

飛来しているミサイルには強力な弾幕が展開されるであろう。

「CIWSコントロールオープン」

「迎撃間に合いません。」

本艦に命中判定、ヘリ格納庫大破炎上中」

「ダメージコントロールを開始せよ」

VOYAGE. 3

「距離、15000」

うちいかたはじめ
「撃ち方始め」

海防艦と駆逐艦で指揮をとっていた二人は同時に同じ事を言った。
76mm砲弾が互いの航跡に交差する。

実際は一発も発射されてはいない。

だが、システム上は互いに被弾判定が続出していた。

「所詮はただのガキだったって訳だ」

”ふぶき” 戦闘情報センターCICで艦長はつぶやいた。

「海洋警備には十分だが…」

ん、撃ち方やめ。
うちいかたやめ

無駄玉を撃つな」

つぶやいた後の顔には驚愕が残る。

「畜生」

砲雷士の一人がつぶやく。

”ふぶき”の主砲の射界から”ひなぎく”の姿は消えていた。

次の瞬間には命中判定が連続する。

「ヘリコプター格納庫付近に命中判定。

燃料管に引火、撃沈判定」

モニターを見ていた副長が淡々と述べる。

「あつちに甘すぎないか？」

誰かが言った、言わんとする事も理解できる。

(だが、新人相手にハンデが無けりやただの弱いものイジメだ)

その気持ちを抑えながら、艦長は一喝する。

「ぐだぐだ言うな。」

負けたのは、俺達の実力不足だ。

多少のハンデくらいで負けるようじゃ、俺達はまだ弱いという事
だ」

艦長に言われれば、ぐうの音も出ない。

「演習終了、大阪警備府へ帰投する。」

以上」

「本艦各部に多数の命中判定」

「被害は？」

「戦闘の継続に問題なしと判定されます。」

「ならいい。」

流石にきついな」

(一撃で沈められれば、問題無いんだが。

そんな弱点は無いし)

第二次世界大戦で大海戦を経験した日米海軍の艦艇は、重要箇所は効果的に防護されている。

居住区画を犠牲にしても、兵装や機関科区画を守り切るのが日米のやり方だ。

だから、機関科区画を狙うよりも、他の弱点を狙うべきなのだ。

「狙うポイントをお考えでしたら、あの辺りはどうでしょう？」

指差したのは、”ふぶき”のヘリコプター格納庫であった。

ミニ・ハーブーンの命中判定が下っている箇所であり、破損判定が出ている箇所でもある。

何かしらの弱点かもしれない。

「機関出力、赤30

面舵10」

「アイ・サー、赤30」

「アイ・サー、面舵10」

「目標、ヘリコプター格納庫周辺、”ひなぎく”全砲門開け。
うちいかたはじめ
撃ち方始め」

”ひなぎく”は搭載されている全火力を投射する。

76mm砲は100発／毎分のバーストに設定している。

だから、”ふぶき”は万遍なく叩かれているはずだ。

”ふぶき”命中判定多数、うち一発が燃料管に命中引火、撃沈判定。

現在の”ひなぎく”の状況は、オートローメラ76mm砲二門共、弾切れにより使用不能、ESSM、ASROC、短魚雷のみ残弾あり。

船体にいたっては、中破。

演習評価、C。

以上です」

「どちらにしても、演習は終了です。

艦長に指揮権を返還します」

そう佐竹中尉は初めての演習を締めくくる。

「分かった。

本艦はこれより大阪警備府へと帰投する。

針路008」

二時間後、堺港第一海軍埠頭、そこに”ひなぎく”の姿はあった。

「位置固定。

投錨」

ラツタルが据えられ、舷門が設置される。

母港とは言え、艦内への人の出入りの監視は怠らない。

『ひなぎく』先任将校佐竹紀一中尉、至急警備府事務室まで出頭してください。

警備府司令官がお待ちです』

ラツタルから埠頭へ下りた佐竹中尉に”ふぶき”艦長間宮十三中

佐は話しかけてきた。

「従軍記念章の授与だ。

ピシツときめてこい」

第四十三号従軍記念章、通称駆逐艦殺しは特殊な代物である。

甲もしくは乙があり、実戦において駆逐艦以下の艦艇をもって駆逐艦撃沈を行った者には甲が、演習において前の条件を達成した場合に乙が授与される。

さらにこの記念章は総理大臣ないし国防大臣もしくは海軍の軍令部総長の承認無しに授与が認められている。

しかも、それが沿岸警備部隊こしやけいびたいでは一種のステータスなのだ。

これを持っていれば、大抵の海軍施設で歓迎される。

埠頭の近くにある大阪警備府の建物は築十年の比較的新しい清潔感のある建物だ。

地上四階、地下三階からなる建物の中では百人ほどの海軍兵士が勤

務している。

上は警備府司令官の少将、下は事務処理担当の二等水兵までである。

大都市近郊の警備府ということで、海軍少将が司令官として着任している。

一階にある受付にて、身分ついで用件を告げる。

「佐竹紀一中尉、たった今出頭致しました」

「佐竹中尉ですね。」

あつ、はい、司令官室にて司令官がお待ちです。

案内します」

受付にいた水兵はタッチパネルを確認し、確かに呼び出されていることを確認する。

「よろしく頼む」

水兵の後について行くと、四階の司令官室に着いた。

「原口一等水兵入ります。」

佐竹中尉の到着です」

「ご苦労。」

下がってよし」

「了解。」

「佐竹紀一中尉入ります」

「そうかたくならんでもよい。」

私が大阪警備府司令官、九十九莞爾少将だ。

そうそう私が男色とか言う噂が立っているようだが、真実ではない。

ただの女嫌いだ。

私個人としても改善せねばと思っではいるが、話はそううまくは転ばないのだ。

一度女の腹黒さを見てから、心的外傷トラウマになってしまったな。

それに君の戦いぶり、地下で見させてもらったよ。

中々じゃないか、我が警備府の将来のエースは君に決まったな」
かなりのマシンガントークであった。

その上突然話の方向が変わる。

初対面の人間はドン引きだろう。

佐竹中尉としても、第一印象は最悪に近かった。

「それでだが、佐竹中尉に第四十三号従軍記念章乙を授与する。

申請書類はこれにまとめてある。

必要事項を記入の上で、明後日までに提出してほしい。

以上」

「はあ、了解。

失礼します」

警備府本棟を出た佐竹中尉は埠頭の”ひなぎく”に戻った。

艦内の食堂の中では、”ふぶき”艦長間宮十三中佐と”ひなぎく”

艦長二階堂雪少佐が話をしていた。

笑い声も聞こえて来るから、話も弾んでいるのだろう。

「おう、戻ったのか？

強烈だっただろ？」

何がとは言わないが、理解できる。

「あつ、はい。

そうですね。

凄かったです」

あくまでも何とは言わない。

「あれでも、元は最強の海防艦乗りだったのよ。

それと補給員長の初仕事、明日の昼からにするから」

金曜日の昼、つまりは海軍名物の金カレーである。

「カレーですか？」

「うん、一応、ここに先代のレシピがあるから、これで作ってくれれば、

大丈夫、失敗しないと思うわ」

「分かりました。

これから、仕込みに入りますんで。

先に失礼します」

VOYAGE. 4

4月6日(金)早朝5時、日本皇国海軍大阪警備府海軍第1埠頭、沿岸警備部隊所属海防艦”ひなぎく”調理室。

今の時刻は、総員起こしの1時間前である。

繰り返して言うが、起床ラッパの鳴り響く1時間前である。

そんな時間に起きているのは、当直に当たっている兵士で、特に停泊中の現在は最低限の人数を残し、眠りに就いている。

「これでいいか。」

芋も柔らかいし、辛さも控えめだ」

海軍の幹部用作業服に錨マークの入った白エプロンを着用した男が、茶色い物体の入った鍋をグツグツ煮込んでいた。

日本皇国海軍の伝統かつ最終兵器^{リースアルウェボン}、カレーである。

断じて、生物兵器ではない。

佐竹中尉はメシマズの訳ではないが、茶色い物体と聞いて、そう思った人には、そう訂正しておく。

調理室の辺りにはカレーの匂いが漂っていた。

”ひなぎく”のカレーのレシピによると、小さく切られた人参、じゃが芋と玉葱がトロトロになるまで煮込み、そこに厚く切られたブロッコリーの牛肉がゴロゴロしている。

味付けも甘めで、辛い物が苦手な人も食べやすい。

今回のカレーには間に合わなかったが、鷹の爪、山椒をブレンドした辛味調味料も試作してみた。

次の機会に備えて、大量備蓄しておこう。

4月6日(金)午前7時、総員起こしから1時間、朝礼から乾布摩擦、ラジオ体操、日本皇国海軍沿岸警備部隊の慣習となっているスクラムである。

これらを軽くこなして、前任将校としての書類仕事を行いながら、1ヶ月の食事の献立を考える。

(牛の卵とじも有りだな。

後はまあ、他の艦と同じにするか)

国防大学校同期卒業で連合艦隊所属艦に配属された奴でも、ここまでは働くことはないはずだ。

なぜなら、その艦にはたくさん的人员が配置されており、初任幹部に過重な仕事が割り振られないからだ。

「佐竹中尉、これは訓練計画と出航計画なんだが、この艦の幹部としての意見が聞きたい」

スペース節約のために、艦長室その他の執務室を廃止しているために、艦長と二人で士官室にて仕事を片付けている。

しかも、艦長と前任将校の寝室は同じ部屋であった。

今の海防艦では男性と女性が艦長もしくは前任将校として被らなように配慮されていたはずである。

仕方なく、士官室に寝袋を持ち込み、そこで寝泊まりをしていた。

「意見と言われても、私のような未熟者に、考え付きません」

「意見は無いのか、ではこの計画でいこう」

事務処理の終わった書類が山になっているのを見て、ふと時計を確認する。

「今は11時20分ですか、今からカレーの準備をして来ます」

「もうそんな時間か、私もカレーを楽しみにしている。」

早く準備してきて」

4月6日（金） 12時00分 ヒトフタマルマル、艦内食堂。

「久しぶりの手作りの料理だぜ。」

「旨そうだなあ」

調理員の転属以来、出来合いの物しか食べてなかった乗員達は、心からワクワクしていた。

「早く食いたいぜ。」

この時のために、朝飯は抜いてたんだ。

朝っぱらから、カレーの匂いがして、精神衛生に悪いぜ」

「ほんと拷問だった、生まれて初めて、俺の理性GJって思ったよ」

「そういえば、新人ちゃんはどうよ？」

俺、機関科だから、上の様子とかが分からないんだ」

カレーをよそいながら、世間話にこうじる。

古参それに中堅どころの乗員ともなると、自らの居住空間をより良いものにしようと言う心理が働く。

つまり、自分達の上司を査定し始める。

あいつは頼りにならない、使えない、無能など仲間内での評価だから遠慮のない言葉が並ぶ。

「俺が見てきた中でも、かなり優秀な部類なんじゃないか。

まあもう少し様子見をしようかな」

そう言うのは、前任伍長、海防艦“ひなぎく”における最先任の曹長であり、場合によっては幹部からも恐れられる、そんな人物である。

あと2年で退役になるような、軍隊組織の表も裏も知っている人である。

だから、国防大学校出の頭の固い少尉よりも経験を積んでいるし、彼の意見は大抵がそのときの最善もしくは次善策であった。

つまり、幹部からは絶大な信頼を勝ち得ている。

最新鋭駆逐艦やイージス駆逐艦からも乗組の誘いを受けているが、なぜ“ひなぎく”に乗り続けているのかが謎である。

本人いわく、“ひなぎく”が好きだかららしい。

そんな彼の言うことだから、部下たちもすんなり信用する。

「これ準備するだけでも大変だろうな。

後でちゃんと礼はしておけよ」

「了解。

それで今晚の料理は何ですか？」

「んっ、カレーうどんみたいだが」

貼り出されている献立表を確認して伝える。

「そうですか、席に行つて、さっさと食いますか」

「おお、そうだな」

「機関科は昼から各部の最終点検です。

出航も近いってことを感じますね」

「砲雷科も、昼から兵装の点検と1週間分の食料の積み込みだ。予定では明日から出航なんだが、今晚には全員が帰艦するだろう」

カレーを口に運びながら、話を続ける。

「そうですか、にしてもカレー旨いですよね」

「ああ、そうだな。」

「前のやつと大して変わらないな」

「ふう、満足です。」

「じゃあ、上司もうるさいので機関科の方へ戻ります」

「同時刻、”ひなぎく”士官室

「旨いな」

「今日に関しては、手間も時間もかからないように、カレーうどんです」

海防艦の補給科には、インスタント系の食品、例えば、レトルトのカレーなどが戦闘糧食Ⅲ型として用意されている。

これは、他兵科と兼任することが多い補給科の負担を軽減するためではあるが、それが使用されることは少ない。

それは補給科が少なくない志願者^料達^理により編成されることが多いためである。

「材料に関してはどうだ？」

「不足はないか？」

「注文した分も昼には届くので、不足はないと思います。」

「大阪湾を南下するんですよね？」

「カレーを食べながら、今後の予定を確認する。」

「ああ、由良基地に寄港したあと、大阪警備府に帰還する予定だ。」

「特に問題はあるまい」

「さらに由良でも、物資を受け取る予定です」

「俺の見た限りでは、補給と乗員の休養も十分です。」

「それに久々の手料理を食えて、皆、舞い上がってます」

機関長が告げる。

”ひなぎく”指揮序列第3位であり、叩き上げの特務少尉である。

昼食会兼会議として、士官室を利用していた。

「それでは、午後は各部の整備を念入りにお願ひします」

艦長の締めと同時に、3人の幹部は艦内へ散っていく。

VOYAGE. 5

4月6日午後、機関室・機械室

「出航に備え、各部の徹底した整備・点検を行う。」

少しの異常も見逃さないように、各員は気張ってかかれ」

「了解」

機関長の訓示と共に機関科員は各部に散っていく。

海防艦”ひなぎく”に搭載されているのはロールスロイスもしくはGM社が三菱重工業と共同開発したガスタービンエンジンである。

既存の艦艇用製品をモデルに必要な出力を再計算して、設計し直した海防艦専用の逸品である。

大きさの割に高出力なのが特徴ではあるが、他の艦船に採用されたと言う話は聞かない。

出力と小型さを必要とするのは、海防艦だけであり、他のスペースが少しでも余る艦は整備のしやすい通常のものを選択するからだ。

「上じや砲雷科の連中が物資を運んでんだよな」

煤と汗にまみれた顔を手で拭いながら、機関科員の一人が言う。

「そうだな。」

「こつちもきついが、あつちもきついだろうな」

小さいから、点検整備もやりにくい。

ドライバーを回すのや、中を覗くのも一苦勞である。

COGAG方式の機関室には手間のかかる上に異なる形式のエンジンが2組4つも積まれている。

『四分隊各員に告ぐ。』

現在の作業を中止して、至急第6区画に集合せよ』

アナウンスが入る。

大抵の作業が急を要するものではない。

作業を放棄して、大半の兵士が第6区画に向かう。

所帯の小さな海防艦では機関科員は工作科員も兼務しているからだ。

第6区画は艦底後部、舵機室がある辺りである。

駆けつけてみると、そこには大きな亀裂が走り、少し水が漏れ出し
ている。

何故か、このようなことが海防艦では多発している。

無論、強度の基準は軍艦だから、多少の無茶な航行ではこのような
事態は起こり得ないはずだ。

「おそらくは無理に軽く造った皺寄せが来てるんだだろうな。

ここら辺も見事に歪んでやがる。

むしろ、この程度の浸水ですんだことが幸運だぜ。

誰か艦長に報告してこい」

古参の機関科員は苦々しげだ。

取り敢えず、あるだけの応急パッチを張り付けておく。

「次の定期修理はいつだ？」

2ヶ月先だと、仕方ないな」

機関長は怒鳴る。

「警備府中からあるだけの応急パッチを持ってこい。

他の艦よりも、うちの艦が優先だ」

指示を聞いた下士官が兵を連れて、外に向かう。

今出ていった面々のことだから、警備府の人間を宥めすかして、あ
るだけ根刮ぎ持つてくるだろう。

その間にあとの下士官兵は倉庫から応急パッチを持ち出してくる。

縦40 cm×横60 cm×厚さ9 mmの鋼板は、枚数が枚数だけに、かな
りの重さである。

一苦勞して運び込んだ応急パッチを溶接していく。

浸水には雑巾を使い、拭き取っていく。

バケツや排水ポンプを使うほどではない。

海防艦“ひなぎく” 上甲板

ただでさえ狭い甲板の上には、砲雷科、船務科、さらには艦内で暇
そうにしていた兵士が集められていた。

予定では物資の搬入は砲雷科だけで行う予定だったが、人手が足り
なくなることを見越した艦長の手回しで乗員の7割が集結していた。

「これは第一食料庫に運んでください」

艦内食料庫の第一と第二の違いは冷蔵庫／冷凍庫か普通の暗室かの違いである。

補給員長として木箱を一瞥して、中身を確認する。

そして、どこに運ぶかを指示する。

海軍部内での評価によると、海防艦幹部を務めた者は、大抵が事務処理能力に長けているという。

それもこなさなくてはならない仕事の数を考えれば、納得できる。

「第一食料庫満杯です。」

どこに置いておきますか？」

砲雷科の一曹が聞いてくる。

スペースを頭のなかで思い出す。

「食堂内に置いておいてください。」

あとで整理しておきます」

「了解」

動員された兵士達の獅子奮迅の働きによって、物資の搬入は予定より早く終了した。

4月6日、午後3時 調理室

キューピーのテーマ<♪>

「今朝作ったカレーを暖め直して、少し辛めの味付けに変更します。」

って、何でレシピを言わなきゃいけないんですか？

紙で提出で良いじゃないですか」

「紙で理解できないから、教えてもらいに来たんじゃないか。」

言っておくが、私に女子力を求めるなよ」

開き直ったようで、艦長は胸を張る。

「これ、結構恥ずかしいんですよ。」

分かってます？」

「分からないな。」

しかし、カレーの作り方がわからないんじゃない意味無いな」

今朝の5時に起きて、グツグツ煮込んだカレーだ。

簡単には作れまい。

問題は艦長の料理の腕だろうか。

「この後で、うどんを入れるだけです。簡単でしょ？」

「ふむ、確かにカレーうどんは簡単だ。しかし、カレーは無理だ。」

絶対に作れない」

その告白には、さすがの佐竹中尉も驚かされる。というか、開いた口が塞がらない。

むしろ、顎が外れそうなくらい全開だ。

確かにお店のレベルのカレーを作るのは難しい。

だが、平均的な味のカレーであれば、簡単にできる。

言ってしまうえば、普通の小学生でもできる。

「殴ってもいいですか？」

「いや、駄目だろ」

「グーパンチならOKですか？」

「駄目だ」

「鉄拳ならアリですか？」

「殴ることにかわりないだろう。」

と言うことで、一から教えてください」

「だが断る」

「あなた方は何、コントしてるんですか？」

たまたま通りがかった先任伍長が言う。

「コントじゃない。」

なので、今からお前を上官不敬として処分を申し渡す。

何処かその辺のトイレでも磨いてろ」

見事にハモった。

しかも処分の内容も同じだった。

先任伍長が笑いながら、姿を消したあと、機関科員の一人が飛び込んでくる。

「艦長、大変です。」

ああ、先任将校も居られましたか。

第6区画に大きな亀裂が発見されました。

機関長の指示で、各部より応急パッチを掻き集めています」
「分かった。」

今すぐ我々も向かう」

4月6日、午後3時30分 ”ひなぎく” 第6区画

「機関長、詳細を報告しろ」

現れた艦長と前任将校は、現場を一瞥して報告を求めた。

「原因は確定しておりませんが、ここの強度が要求値に満たなかったようです。」

現在、機関科総出で応急修理中です」

「分かった。」

報告ご苦労」

「はっ」

状況を確認し、問題はないと判断したようだ。

「では戻ろう。」

追加で書類を書かなくてはならなくなった」

4月6日、午後4時

士官室

「これが破損報告書、君のこれからの海軍生活において、かなりの回数見ることになる物だ。」

その書類は、必要なところだけが空欄となっており、そこに必要事項を書き込み、署名捺印することで書類は成立する。

特に故障や各部の破損が多い艦、それに新鋭艦には必須の書類である。

何故、新鋭艦に必要なのかと言うと、新鋭艦特有のトラブルが多いためである。

”ひなぎく”はそのリストのトップに位置している。

何故なら、小型艦に無理矢理、大型艦用の戦闘システム^{FCS}を組み込んだ試験艦との扱いであり、就役して既に1年、港に留まることも少なくなかった。

無論、あとに建造された”さかき”型海防艦にはこの”ひなぎく”のデータがフィードバックされており、このような煩わしさからは解

放されている。

本当に羨ましい限りだ。

「ここにここに署名と印鑑を押してほしい。」

あと、ここここにも」

軍隊は官僚組織の1つと言われるように、事務仕事の無駄が多い。

例えば各種書類の枚数が数cmに達するのは当たり前。

そのせいで、仕事が滞ることなど、ざらにあることなのだ。

「さかき型海防艦の方が楽なのかなあ」

書類を仕上げていくうちに、愚痴が増える。

「いや、あっちの方がきついらしい。」

何でも戦闘情報指揮所を改めて設置したせいで、その分、乗員の居住スペースが減ったそうだ。

艦政本部の連中は何考えてんだか」

”ひなぎく”の就役してからの運用評価では戦闘情報艦橋の設置で、艦長やその他の幹部が艦橋とCICを行き来する必要がなく、総合的には問題がないと判断された。

しかし、防御力に欠けるとも指摘されているが、海防艦の紙のような装甲であれば何処にあっても同じだと言う意見もあった。

それでも、艦政本部の頭でっかちはCICの復活を決定した。

その結果、”さかき”型海防艦は戦闘能力こそ”ひなぎく”と同等だが、居住性は劣ってしまったていた。

「ここでよかつたのかなあ？」

「身内最良のようだが、その通りだと思う。」

まあ、国防大学校上位の君に気を使ったんじゃないか」

上位でさらに中尉任官ともなれば、実戦部隊の連合艦隊司令長官・沿岸警備部隊隊長もしくは、中央の国防省海軍部部長・海軍軍令部部長に将来就任する可能性が高くなる。

だから人事も気を使う。

本人の希望と部隊の要望、どちらかを天秤にかけて判断するのだ。

「ここは、ひとは優しいし、言うことはいんですよね」

「そうだろう」

4月6日、午後6時 食堂

「いただきます」

食堂に集まった幹部も含めた45人の乗員は一斉に手を合わせて、食べ始める。

昼に続いたのカレーではあつたが、皆には好評であつた。

「味が少し違うな。」

「これはこれでうまい」

4月6日、午後6時45分

警備府内にある大浴場へと向かう。

目的は湯船である。

大坂の湯と名付けられた風呂には、天然温泉なんて贅沢なものは引かれてはいない。

脱衣場で服を脱いでいると、見覚えのある背中が見えた。

「何でここにいらっしゃるんですか?」

「俺がここにいたら不味いのか?」

質問に質問を返された。

やはり”ふぶき”艦長、間宮十三中佐であつた。

”ふぶき”の風呂で十分でしょうに、折角付いてんだから」

「ああ、その事か。」

たまには真水の風呂に入りたいんだよ。」

「今は接岸してるから、真水はすぐ給水されるでしょう?」

「たまには、でかい風呂にも入りたいんだよ」

言ってることが無茶苦茶な気しかない。

「そうですか」

頭を無理矢理納得させる。

そして、関わらないように気を付けて距離をとる。

「で、どうよ?」

海防艦は忙しいだろ?

ありやあ地獄だからな。

まあ三年耐えれば、国防省海軍部・海軍軍令部への栄転もあるから

な。

まあ、頑張れよ」

だが、儚い希望は粉碎された。

関わりたくないから、近寄らないようにしていたのに、相手から近付いてきた。

しかし、そんな不快感を吹き飛ばすほどに、湯船のお湯は気持ちがいい。

事務方の兵士が、日替わりでオリジナルミックスのバスクリンをC Mのごとく、気合いを込めて放り込む。

湯加減は、その気合いに比例して最高だ。

「ふう」

息をつく。

身も心も洗われるようだ。

4月6日、午後7時20分

30分の入浴のあとには、嬉し恥ずかし艦内巡検だ。

これは艦内における治安および規律維持のためのものである。

「砲雷科各員は、現在入浴中です。」

航海科、機関科もそのあとに入るようになっていきます」

「では機関科区画に向かおうか？」

「了解」

艦内を巡って、巡検を行いながら、各部からの報告を受ける。

「第6区画に起こった亀裂以外、特に問題はありません。」

機関科からは以上です」

生真面目な機関科員が報告する。

「分かった。」

次は航海科に行こうか？」

航海科、居住区を見回ったあと、戻ってきた砲雷科員からも報告を受ける。

「特に問題は認められませんでした。」

よって、解散」

4月7日、午前8時 大阪警備府第1埠頭

「出航用意。

帽ふれ！」

堺港の岸壁を離れた”ひなぎく”は由良基地に向けて針路をとつた。

第一章

VOYAGE. 6

日本皇国海軍由良基地

和歌山県日高郡由良町に所在する海軍基地で、海軍後方支援群大阪警備府施設管理部隊由良分遣隊が基地管理を担当している。

さらに、ここは紀伊水道に面し、大阪湾の入り口をさしかためる重要な位置にあるため、大阪湾ひいては、瀬戸内海防衛の要石として、由良分駐所を設置、海防艦2隻を含む沿岸警備部隊艦艇が配備されている。

4月7日、ふたさんまるまる23:00、由良基地埠頭に停泊中の”ひなぎく”士官室

「1週間と聞いてたんですけど、1日で着きましたよ?」
「すまない。」

この書類の打ち間違いだ。

由良から太平洋での外洋各種訓練及び領海監視に1週間の予定だったんだ。

全て、私の落ち度だ。

本当にすまない」

ずいぶん間違いである。

海軍内でも、懲罰の対象となりうるだろう。

でも、上司で先輩なので強くは言わない。

というか、言えない。

「次からは気を付けてくださいよ」

「ああ、そのつもりだ」

20:00に由良基地に着いた”ひなぎく”はそのまま停泊の位置に到達すると、錨を下ろし、艦を固定させた。

「明日から上陸を許可する。」

今日そして明日はゆっくり休め。

そして遊ぶ。

「明後日からは、地獄の訓練が待ってるぞ。以上」

全艦に放送の形で伝える。

舷門も立てられず、ひっそりと夜は明けていく。

しかし、艦は眠らない。

暁の中で空が赤く染まる頃

「おはようございます。」

佐竹中尉は早いですね?」

「おはよう。」

「これでも第二分隊長だからな。」

舷門の管理も、第二分隊船務科の仕事だ」

海軍人事規則によつて、日本皇国海軍軍艦籍にある全ての艦艇に各分隊が編成されていて、各分隊につき1人、分隊長を置いている。

原則として、分隊長は艦長を除く幹部将校しか任じられない上に、兼務も認められていない。

しかし、現状として海防艦には幹部がほとんどいないため、下士官を分隊長として任命するか、兼務かのどちらかを選択している。

”ひなぎく”の場合、後者を選択しているが、これらに関して、海軍に改善できる予算も人員もない（名目上はであり、連合艦隊司令部や至るところにある閑職に居座る無能をクビにすれば、そのどちらも確保できる。）ため、普段は規則にうるさい憲兵隊も黙認している。「船務科の誰かを呼べばいいじゃないですか?」

第一、第二、第四、第五分隊長兼務は忙しいでしょうに」

テントと机、ICカードリーダーを出してきて、埠頭の上に並べておく。

「一応呼んだんだがなあ」

佐竹中尉は頭をかきながら苦笑する。

「まあ、朝飯は既に準備しています。」

手は抜いてますが、手が空いたら食べておいってください」
昼

「すみませんでしたあ。」

奴らにはよおしく言い聞かせますので、平に平にご容赦を」

和歌山県警御坊警察署由良駐在所の前で見事なスライディング土下座を披露したのは、佐竹中尉である。

「海軍さん、頭あげてえや。」

そちらさんには、何の過失も無い言うんは確認がとれてます。

そうでもないよ、即保安小隊を呼んでますわ」

保安小隊は、鎮守府以外の海軍施設において基地警備および警察業務を担当しており、海軍最後の良心とも呼ばれている。

鎮守府では憲兵隊が編成されていて、こちらは海軍の管轄ではなく、国防省人事監察本部が管轄し、小規模基地において重大事件が発生した場合、保安小隊ではなく憲兵隊が捜査を担当する。

とまあ、ややこしい構図となっている。

「正直なところ、奴らが黙ってくれて助かったんですわ。」

あの中の一人が、地元の有力者の息子でしてな。

どこで左翼にかぶれたのか、地元こゝに帰るなり、やりたい放題でみんな困ってたんですわ」

由良の町に遊びに出掛けた”ひなぎく”乗員達は、男達に絡まれ、警察のお世話になったと言う。

そう連絡を受けて、駆け付けた佐竹中尉の見たものは、お茶と煎餅を出され、もてなされている部下達であった。

「ただ、もつと盛大にあちら側にやってほしかったですわ。」

それなら、こつちも微罪じゃなく即逮捕できましたのに」

「わたしらは連合艦隊のやつらとは違います。」

あいつらなら、骨の1本や2本いったかもしれませんが」

「ハハハ、違いねえや」

1人の言葉に全員が肯定を返す。

「少しは謝れ。」

少しは反省しろ。」

全員に鉄拳制裁を喰らわせる。

「ずびばぜんでじたあ」

「よろしい。」

お巡りさん、お世話になりました」

鼻血を流し、顔の歪んでいる連中を縄で縛り上げて、由良基地まで連行する。

和歌山県警の警察官もこれには苦笑するしかない。

「お前ら全員、これから1ヶ月の寄港先での上陸を禁止する。

どうせ、大阪近海しか彷徨かないから、大丈夫だろ？」

後ろで愕然としているようだ。

歩きが鈍い。

「ちやつちやと、動け。

全員、昼飯抜きにするぞ」

「「んな、殺生なく。」

慈悲を、慈悲をプリーズ」

「そう言うなら、反省しやがれ。

居残る兵士達の晩飯作ってたんだぞ。

「こちとら」

「ハイハイ」

宴会（仮）

「大型艦ならな、提灯行列って言うのがあって、幹部総出で宴会をやるんだが、この船にはそんなにいないから、無理そうだな。

よし、酒買ってやろうぜ？」

「よし、やろうぜ、じゃありません。

本艦は明日にでも、外洋に出航し、各訓練及び領海監視任務につく事となっています。

二日酔いでその予定ぶち壊すつもりですか？」

艦長の申し出を、脱兎のごとくピシャツと撥ね退ける。

「でも、だって…」

「でももだつても、ありません。

こんなことを言わせるなんて、私はあなたの母親ですか？

違うでしょう？」

往生際の悪い艦長を一喝する。

「ハイ」

項垂れる艦長をフォローするのも、部下の仕事だ。

(で、あれ、何でこんなに忙しいんだっけ?)

人間、ふとした瞬間にどうでもいいことを思い出すものである。

「また、大阪に戻ったらやりましようね?」

「ですから、今日のところは諦めましようね?」

「うん、そうする」

未だに、グスングスン言っている艦長は納得したのか素直に戻っていく。

(それにしても、あの人のキャラが掴みにくいな。

見た目通りの大人な女性と言うところもあれば、さつきみたいな子供っぽいところもある)

心の中で分析してみても、答えはでない。

出航

由良基地を発った”ひなぎく”は3日間の航海の末、警備区境界線の端に近付いていた。

紀伊半島南端を少し三重県に入ったところである。

それ以上は、伊勢湾警備も担当する名古屋警備府及びそれに付随する分駐所の担当である。

「艦回頭、180」

大きく円を描きながら、旋回する。

「今だと、旋回半径が無闇に大きいだろうか?」

そんな時には錨を使うこともある。

これは非常手段であるからして、錨を切る必要もあつて、面倒だ」通信兵が駆け込んでくる。

「海軍気象部大阪方面分遣隊よりの最新の気象報告です。

読み上げます。

南南東、やや強い風。

紀伊半島より突き出てくる低気圧の影響により、ところにより強い雨。

波浪に注意。

以上」

「了解。

全艦に発令。

訓練中止、訓練中止。

天候により、遭難船の発生が増える可能性がある。

十分に警戒せよ」

言いたいことを言い終わると、インカムを下ろす。

「暖かいお茶用意してきます」

たった1人の第四分隊^{補給科}として、やることはたくさんある。

しかし、事態は予想の遥か上を行っていた。

VOYAGE. 7

紀伊半島沖・太平洋上

低く垂れ込めた雲から降り頻る大雨、そして時折轟く雷鳴の中を”ひなぎく”は由良基地に向けて進んでいた。

「対水上電探に感あり。」

反応から19トンクラスの漁船と思われます。

方位、191、距離、65000」

「こんな天候でか？」

取り敢えず、本部に状況を報告し次第、距離、3000で停船命令を発せよ」

日本皇国海軍は、海上通商保護そして海上治安維持の観点から、不審船には厳しく対応してきた。

それに悪天候の中を外洋に向けて出航する漁船なんて言うのは聞いたことがない。

十中八九、不審船と判断できる。

佐竹中尉は、指示を出すと共に、インカムを取った。

「艦長、非常事態発生。」

我が国領海内に、不審船あり。」

『分かった。』

で、先任、至急、第五分隊を召集せよ。

臨検準備だ』

艦長はそう命じた。

海防艦の第五分隊は臨検科と呼ばれ、海軍特殊部隊、通称：ヤシマでの訓練を受けた猛者が多い。

第一分隊から選抜された彼らは、陸軍からスカウトが来るほどの戦闘能力を保持している。

そして、特殊作戦徽章と呼ばれる高等特技章を肩に着けた下士官兵の姿は艦の中でも、凛々しく映える。

「了解。」

しかし、この天候だとR^リI^ッH^ッBや内火艇は使えませんか。

「どう接敵しますか？」

佐竹中尉は挙げなかつたが、水中工^{フログマン}作員による水中からの制圧と言
う手もある。

しかし、天候が天候だけに、二次被害の可能性もあり、考慮にも入
れていない。

『これを相手にぶつける。

それしかあるまい』

「分かりました」

インカムを艦内放送に繋ぎ、情報を伝達する。

「第五分隊要員は、武器倉庫に集合せよ。」

繰り返す、第五分隊要員は、武器倉庫に集合せよ。」

フツと、息をつくくと、艦長が艦橋に着いたところだった。

艦長に報告する。

「武器倉庫に向かいます。

あとは頼みます」

「指揮は任せろ。」

突入は強襲となる可能性が高い。

準備は万端にしておけ」

「了解」

佐竹中尉が、艦橋を出ていった直後、インカムを全艦に繋ぐ。

「全艦に発令。」

臨検部署発動、各員は対戦車^Rロケット^P及び小銃^Gに注意。

そして航海科員、先任の代わりに1名、艦橋に上がれ」

「警備府司令部及び近畿港湾局、四国港湾局よりの交戦許可下りまし
た。」

また、近隣の土佐清水分駐所・由良分駐所より海防艦や対潜コル
ヴェット、ミサイル艇の増援があります」

国防関連六法により、軍の権限は強大と言えど、平時の武器使用は
厳しく制限されている。

危害、威嚇射撃問わず訓練以外での銃火器の使用は、所属司令部及
び国土交通省各部、詳しく言うとう陸運局・港湾局・航空局の許可が必

要で、これらの部署も軍に合わせて、24時間体制で待機している。
「対水上砲撃戦用意。」

本艦はこれより戦闘状態に入る」

日本皇国海軍高知航空基地・沿岸警備部隊航空群第5航空隊

第5航空隊はP3C哨戒機やUH60JR救難機を保有し、24時間体制での領海警備救難体制を敷いている。

「発動機運転を開始せよ」

整備員が見守るなかを、右端から順に始動していく。

全てのプロペラが問題ないと判断した整備員は固く握った右手の親指を立てた。

「発動機、オールグリーン」

「了解。」

オーシャンフラワーより管制へ。

離陸準備完了。

離陸許可を求む」

『管制より日本皇国海軍第51飛行隊、オーシャンフラワーへ。』

離陸を許可する。

滑走路に進行せよ』

「了解」

P3C哨戒機はゆっくり誘導路上を進んでいく。

滑走路に入った哨戒機は、発動機の出力を最大にした。

『管制より上空にいる帝国航空865便へ。』

着陸は許可できない。

5分間、上空の待機空域にて待機せよ』

軍民共用空港として高知空港が、2004年に開港するまでは、海軍専用施設として運用されていた。

だから、航空管制も国土交通省ではなく海軍の管轄となっている。

「オーシャンフラワーより管制へ。」

離陸許可を求む」

『管制よりオーシャンフラワーへ。』

離陸を許可する。』

「了解。

感謝する」

滑走路をP3C哨戒機が進んでいく。

緊急時には戦闘機の離着陸も考慮された3000メートル級の滑走路を半分も使わずに、離陸する。

短距離^S離離^T着陸^L性能、これは、プロペラ機にしかない利点である。

すると、順調に上昇していく。

北北東には厚く広がった曇天が、その下では、大雨の中で海防艦が不審船を追跡しているはずだ。

『方位、090、高度そのまま3000を維持し、次の指示があるまで、そのまま飛行せよ』

沿岸警備部隊が装備している船舶、航空機は、全て重武装の軍仕様である。

その事に批判がないわけではない。

しかし、太平洋戦争のトラウマが残る海軍首脳部には、戦時に対潜艦艇・対潜作戦機をいくら動員できるか、これが勝利の鍵だと考えていた。

だから、日本皇国海軍はP3C哨戒機含む対潜作戦機を300機ほど、装備している。

日本近海でのパトロールには、常に相当数の機体が飛んでいる。

冷戦時代の津軽・対馬両海峡では30分おきに、哨戒機が飛来する始末であったと聞く。

『詳しい情報は、海上の艦艇待ちだが、紀伊半島沖合にて不審船が確認された。

オーシャンフラワーは高度、1000の低高度より接近。

赤外線を用いて、情報収集に当たれ』

沿岸警備部隊航空群のP3C哨戒機には、本家皇国海軍艦隊航空隊のP3C哨戒機よりも高性能の赤外線^F探査装置^Iを積み込んでいる。

無論、これは海上での行方不明者捜索のための装備である。

「了解」

真つ直ぐ紀伊半島に向かって飛ぶ。

大きく張り出した雲の中に入る。

大雨が窓に打ちつけ、雷鳴が閃光と共に轟く。

「電探で捕捉しました。」

後方に、「ひなぎく」その前方。

距離、103000、相対速度、443 km/h。

今のところ、逆探に反応なし」

「携SAMに注意。」

赤外線撮影準備。

フレアー投下準備。

撮影開始と同時に投下しろ」

熱源追尾方式の携SAMは、フレアーをバラ撒けば躲せないこともない。
い。

「赤外線撮影準備完了。」

いつでもいけます」

「指示あるまで待機。」

電探員、異状は無いか？」

「特にはありません。」

距離、10000」

「音探員、撮影を開始せよ」

通信員、LINK16データリンクを使って、市ヶ谷と海上の艦艇に転送してや
れ」

P3C哨戒機の撮影した赤外線画像は鮮明に武器の存在を示して
はいたが、それがどんな武器かまでは判別がつかなかった。

突如、機内を警告音が満たす。

「ミサイルにロック・オンされました。」

退避行動を…」

「チャフをバラ撒け」

戦術航空士の声を断ち切った機長の怒声で、機内が動き始める。

「了解」

武器員がチャフを改めて放出する。

携帯式のSAMの近接信管は、他の対空ミサイルと比べる必要もな

いくらい、性能で劣る。

しかも照準誘導を射手が直接行うために、よく揺れる船上から命中させるのは難しい。

発射されたミサイルも、チャフが効いたのか、P3C哨戒機を掠めることはなかった。

「我々も限界まで追跡する。」

航法員、いつまで飛んでられる?」

「偵察の時に、燃料を喰った以外は、無駄遣いはしていないので、あと6時間は上空に留まれると思います」

日本皇国国防省統合参謀本部海軍軍令部総長執務室

「紀伊半島沖の我が国領海内にて、不審船が発見されたとの、通報あり」

報告を受けた男は軍令部総長で、船乗りらしい黒スーツをピシッと着こなしている。

胸元の従軍記念章の数もかなりの数で、その中に勲章の略綬が多数混じっている。

これを見ると歴戦の雄というやつだろう。

「現在、大阪警備府の海防艦が追跡中。」

高知のP3Cが緊急発進しました。

最新の情報が入るのも、時間の問題かと思われま

「高知と言うと、第51飛行隊だな？」

「はい、発進した機体の機長は、高知少佐であります」

「フム、奴なら大丈夫だな。」

報告ご苦労」

「はっ、失礼します」

敬礼をして立ち去っていく。

報告に来た軍令部員が去つたのを見届けて、部屋の固定電話を取り上げて秘話回線に設定して電話を掛ける。

相手は統合参謀本部長そして陸空の参謀総長の3人である。

「緊急事態です。」

至急、国家安全保障会議^Nの開催を要求します。

状況はコード・オレンジ。

放置すれば、大問題となりえます」

『分かった。』

今すぐ首相官邸に向かうぞ。

少なくとも、官房長官が勤務しているはずだ』

「全員の武装を完了しました。」

これより、右舷ハッチにて待機します」

『了解。』

十分、敵には注意するように』

「了解」

ここに居る兵士は、佐竹中尉以外は充分に訓練を受けた精鋭である。

その上で、全員が小銃を携行していた。

『距離、3000。』

停船命令発信、受信された模様』

スピーカーから流れるのは、CIBの様子である。

全艦に伝えておくことで、無用の心配をさせたくないのだろう。

『停船命令への返答。』

”誰が止まるかア、ボケエ”以上です』

『本気で痛い目に遭いたいようだな。』

撃沈警告送れ。

次いで、76mm砲威嚇射撃用意。

沈める前に散々にいたぶってやる』

本気で怒っているようだ。

スピーカー越しに迫力が伝わってくる。

『沈めるのは冗談にしても、少々いたぶらないとこっちの気が済まないいな』

『P3Cが接近中。』

偵察目的だと思われまます。

不審船よりP3Cに向けSAM発射されました。

まあ、回避は簡単でしょうが』

『うむ、そうだな。』

それに、奴らは太平洋の真っ只中に出ない限り、我々の包囲網に捕まるからな』

『距離、1000』

「突撃準備。」

分隊長、ハッチを頼みます」

分隊の唯一の下士官が言う。

しかし、この中での最上位者は佐竹中尉ではある。
しかし、TPO、つまり時と場所と場合によつては、上官に指示を出すことが認められる。

その唯一の例が、戦時もしくはそれに限りなく近い時、最前線さらには敵の襲撃を受ける可能性のある場所、そしてその上官よりの指揮権の委任があつたという3つの条件が満たされた場合である。

①と②までなら、簡単に満たすことができる。

しかし、③の条件を満たすのが難しい。

「分かつた。」

『距離、400』

「外に出ます。」

スリー・カウントを取つたら、開けてください」

スリーで、ハッチの鍵を解く。

ツーで、ハッチのレバーを下ろす。

ワンで、外開きになっているハッチをゆっくりと開く。

ゼロでハッチを外に固定する。

ハッチの裏で待機する。

その時にダダアんと、低く乾いた音が連続して響いた。

その直後にはカーンという金属と金属のぶつかり合う音が聞こえた。

よく見たら、ハッチやその周辺に血が飛び散っている。

「総員、艦内へ退避せよ。」

佐伯兵長、分隊長を頼むぞ。

深川二水（二等水兵の略）、ハッチを閉めろ」

「分隊長、大丈夫ですか？」

佐伯兵長が佐竹中尉を半ば引き摺るようにして艦内に引き込む。

追撃の銃弾は飛んでこない。

「弾が掠めただけだ。」

大丈夫。

島田兵曹、続いての指揮を頼む」

「了解。」

第五分隊よりC I Bへ」

『C I Bより第五分隊へ。』

状況を報告せよ』

「分隊長、負傷。」

意識ははつきりしており、軽傷と思われれます」

インカムを通じて、情報のやり取りが進む。

「使用されたのは、旧ソ連の14.5mm機銃と思われ、ハッチを完全に貫通しています」

『了解。』

佐竹中尉を手当て後、C I Bまで連れてきてくれ』

「了解。」

佐伯兵長、佐竹中尉を手当てしろ」

「あつ、撃った」

窓から覗いていた音探員が言った。

それを機長が嗜める。

「本機は戦闘状態にある。」

報告は明瞭にせよ」

「はっ、不審船が追跡中の海防艦に発砲。」

命中を確認しました」

P3C哨戒機はSAMを回避した後、不審船の上空を低空で旋回していた。

「ハッチ付近に命中したので、死傷者が出ているかもしれません」

「チツ、どれだけ重武装なんだよ?」

戦術航空士^{タク}がぼやくのも仕方がない。

携SAMに、かなり大きな重機関銃、武装漁船が日本にもないわけではないが、それでも猟銃1挺が関の山である。

「市ヶ谷へ連絡。」

不審船に重機関銃が据えられている。

海防艦に対して発砲、海防艦が被弾、損傷は軽微なれども、死傷者の可能性あり」

「作戦に変更はない。」

但し、敵船への制圧攻撃は充分に行う。

距離は2000を取れ。

おーもかじいっばーい。
面舵おーもかじいっばーい。いっばい。

砲雷科、主砲弾を85弾はちじーに換装。」

「不審船との距離、600、700、800、900、1000……
2000です」

「主砲弾換装完了しました」

「照準修正+5。」

第一斉射、テェー」

85弾とは制式名称を85式対人制圧用榴散砲弾と言って、目標周
辺で破裂し、十数センチ単位の破片が周辺に撒き散らされる。

いわば、爆発しないクラスター弾で、飛び散るのが破片なので不発
弾が存在し得ないために、陸空軍にも採用されたという。

日本の海軍は旧軍時代からこの手の砲弾の開発を熱意を持って
行ってきた。

旧軍の零式弾しかり、三式弾しかりである。

「艦長、只今戻りました」

「うむ、無事で何より。」

昔の話だが、アレに腕の1本や2本持ってかれた兵士もいるから
な

「はあ、そうですか」

「敵艦が遠ざかります。」

本船からの距離、700……1000……2000です」

「甲板にいる奴は、全員、船室に入れ。」

榴散弾が降ってくるぞ」

船長である趙が怒鳴る。

韓国海軍大尉として退役するまでは、ミサイル艇艇長として指揮を
執っていた彼は、その経験を買われ中国系多国籍密輸団ハイフイ「黒虎」の実
働部隊の1隻を任されている。

今回の仕事は、人を運ぶことだ。

運ぶ人物に関しては詳しくは知らない。

見たところ、自分と同じ韓国人であると見える。

韓国国家情報院(NIS)もしくは韓国軍情報部の工作員だろうか。日本の紀伊半島沿岸で荷物を拾うと、そのまま太平洋に出るだけだ。

わかりかし、簡単な仕事だと思う。

日本海軍に見つからなければの話だが。

しかし、運の悪いことに、敵の海防艦フリゲートに見つかった。

こちらは特別、エンジンが強力な以外、特に目立つところのない漁船である。

戦闘準備を下命しつつも、ナイフ等は置いておくが、小銃は隠すように伝えた。

だが、人選を間違えたのか、通信担当が停船命令に対し、DQNな返答を返しやがった。

仕方がないので、甲板の銃座に14.5mm重機関銃を据えるように指示を出した。

こうなれば、交戦して撃退するほかない。

RPGを発射可能な状態で、待機させる。

相手は一回の武装漁船が相手取るには、随分と格上の相手だ。

そうしてる内に、重機関銃手が指示も出してないのに撃ちやがった。

選択肢は怒鳴る1択だろう。

「誰だ。」

「撃ちやがったのは？」

「担当は中国人チャンツケの李です」

「後で鉄拳をぶちこんでやる」

そうしたなかで、海防艦は距離を取り、すぐにでも砲撃を開始せんと砲口をこちらに向けている。

「敵艦が遠ざかります。」

本船からの距離、700………1000………2000です」

「甲板にいる奴は、全員、船室に入れ。」

榴散弾が降ってくるぞ」

そこに砲声が聞こえる。

1発、2発、この漁船を襲ったのは、大きな揺れと破片であった。甲板上の備品は、重機関銃含め全滅。

さらに一部の破片は窓を突き破り、船室内を暴れまわった。

「損害を報告しろ」

「死者、3名、チャンツケの李とキムそれにチエです。

負傷者、客と船長以外の全員」

「分かった。

全速で逃亡する」

しかし、この判断は間違っていた。

この漁船の速度は、早いと言っても、36kt、しかし、海防艦は41kt出せるのだ。

はなから、勝負は着いていたのだ。

VOYAGE. 9

「第一斉射、命中を確認。」

敵船に多大な損害と認む」

「撃ち方やめ。」

20mm高性能機関銃には減装弾を装填せよ。

た砲弾換装、音響閃光弾フラッシュバインを装

「了解」

「敵船、速度落ちました。」

距離、1900」

「栗山上水（上等水兵）、CIBより持ち場に戻れ」

「了解」

佐竹中尉と入れ替わりで栗山上等水兵が退出する。

戦闘配置中だろうが、通常航海配置中でも航海科員だけでなく、第二分隊員の3割が、艦橋に詰めているが、それでもほんの数人でしかない。

「ハーブーン、撃つちや駄目かな？」

「駄目です。」

オーバーキル過剰破壊過ぎます。

国防省の立場をどうするつもりですか？」

「いやあないなあ。」

魚雷にしよう」

「駄目ですって」

往生際の悪い不審船に対し、艦長の怒りは爆発していた。

「じゃあ、捕まえたら、O・H A・N A・S H Iしてもいいんだよね」

妥協点を見つけると、そのまま認める

「そこは自由どうぞ。」

命さえあれば、誰も文句を言わないでしょう」

「敵艦近付いてきます」

「取り敢えず、迎撃するぞ。」

小銃準備、距離、300で攻撃開始だ」

趙は怒鳴る。

「30mm榴弾も距離、300まで待機。

無論、RPGもだ。

一斉に浴びせかけて、蜂の巣にしてやる」

銃を構えた乗員達は、船室の壁にへばりつく。

「距離、1000……」

「本艦は日本軍の警戒線を突破し、日本の領海上にいます」

「ふむ、それで副長。

「この辺の担当艦隊はどこになる？」

「呉の第四艦隊だったはずです。

最弱のそしりを受けている」

「それでも、我が海軍の精鋭部隊よりも格上だ。

「この意味がわかるかね」

艦長の威圧に、副長はコクコク頷くだけだ。

韓国海軍潜水艦”安重根”あんじゆんぐんは太平洋側の日本領海に侵入し、悠然

と進んでいた。

それも、ここまでであった。

「前方にソナーの反応あり。

敵駆逐艦です。

音紋照合しました。

「ふぶき型駆逐艦の”みゆき”です」

”みゆき”と言えば、艦長は、山口土門中佐だな。

彼なら、1度、環太平洋共同演習で会ったことがある。」

日本皇国と大韓民国に正式な国交が無くとも、互いの同盟国を通じて軍人間の交流は行われていた。

「狩りの対象と見たら、どんな手を使っても追い詰めにかかる狐のように賢い男だ。

米軍内でも、フォックスと呼ばれるほどの人物だよ。

全艦に音響規制を発令する。

深度、80に着ける。

魚雷戦用意だ」

「全艦に発令する。」

艦内ハッチを全て閉鎖せよ」

「魚雷室、1番2番に^{デコイ}魚雷を、3番4番5番6番に実弾を装填せよ」
「ソナー員は、目標の変化に備えよ」

「機関室、蓄電池の充電状況及び燃料電池の状況を伝えよ」

『こちら機関室、蓄電池の充電は残り79%、燃料電池の調子は良さそうです』

「本艦はこれより命令コード3の2に基づき戦闘状態に入る。」

以上」

「前方に音探の反応あり。」

潜水艦と思われます」

呉鎮守府艦隊駆逐艦”みゆき”は不審船対処の側面支援のため、日向灘を航行していた。

艦長の山口士門中佐は、対潜の鬼として、海軍内でも有名である。

「戦争てえのは、勝者を決めて終わるんだ。」

その勝利が、どんな手段を以て得られたかは関係ない。

要は勝てば官軍、最後に勝てればそれでよし」が口癖な人であるから、かなりの確率で暴走しかねない。

それをくい止めるのが、副長の鈴木宗幸大尉だった。

しかし、鈴木大尉ですら山口中佐の手のひらの上で転がされるのがオチだった。

「状態は？」

「現在、探知状況不良、時化が音探にがぶってきて、使い物になりません」

「数分後には幾分、天候もおさまるだろう。」

その時にやれ」

数分たった。

”みゆき” CIC内は緊迫していた。

全員が、音探員の報告に耳を傾けている。

「探知状況回復、

方位、180、距離、2000、速度、20kt、深度、100、方

位、102に向かって航行しています。

音紋照合、結果、韓国海軍タイプ214型潜水艦”安重根”である可能性87%」

「日本の元勲、伊藤博文を撃ち殺したテロリストの艦か。

となると、上には腹を括ってもらわにやあならん。

戦闘部署発動、対潜戦闘用意」

CIC要員も救命胴衣を含む戦闘服装に着替える。

「んで、副長、今、韓国軍が対馬や竹島に襲来したら、我々は対応できるのか？」

「現地の部隊だけでも、充分に対応できるようです」

現在、対馬や竹島に駐屯する陸海空軍兵士の数は、両方を合わせて、3000人にもなる。

その編制には、幾つもの陸軍の地対艦ミサイル中隊や、野戦砲兵大隊が含まれている。

「紛争だけなら韓国海軍主力は動かないわけね。

だけでも、全面戦争となったら、我が主力艦隊が動くから、結局動けないわけだ

つまり、韓国海軍ご自慢のイージス艦も、第二艦隊水雷馬鹿の牽制で動けない。

日本海方面は第三艦隊航空ヤクザが、第六艦隊トレンが黄海を封鎖できるわけだね。

しかも、その後詰めには、第一艦隊ご公家さん、第四艦隊戦争下手、第五艦隊田舎者が待機して関門海峡や津軽海峡、日本海を塞いでいる。

こりゃあ、韓国海軍は詰んだね」

一頻り笑った後で、山口艦長は命じた。

「対潜制圧行動用意。

その上で、敵を確実に捕捉したい。

SH60準備出来次第、発進させよ。

無論、魚雷の搭載も許可する」

「発光信号弾準備」

「艦内各区分、人員の有無を確認し、ハッチを封鎖せよ」

「CICより航空機格納庫及び発進指揮所へ。

SH60を準備出来次第、発進させよ。

必要と思われる全ての装備品の装備を認める」

「特設臨検部隊を編成せよ」

CICが緊迫のなかに動き始める。

「副長、”安重根”の艦長のチェ中佐は1度、会ったことがある。

韓国軍士官にしては、珍しく冷静だったか。

自分のすべきことを、充分に理解し、その目的のためなら、命すら投げ出せる。

自分には真似のできない男だ」

「と言うことは……」

副長の言いたいことを、山口艦長は言い切る。

「ああ、間違いない。

奴は、この海の下で、てぐすねひいて待ち構えている」

「敵潜に攻撃の兆候あり。

敵潜より、発射管口開閉音を確認。

現在の距離、1900、方位、180、速度、15kt、深度、80」

「総員、魚雷の命中に備えよ」

「制圧射撃忘れるな。

こつちが蜂の巣にされるぞ。

突入するまでに、敵の無力化を行え」

「今日の昼飯？

んなもん、そのままに決まってるだろうが。

昼になったら配布するから、それまで待ちやがれ」

そのままとは、海軍用語で、戦闘糧食I型つまり、缶詰をそのまま配布すると言うことであり、何ら一切の手が加えられていない。

言ってしまうば、冷たい飯を配るので、土気は上がらない。

「距離、1000を切ります。

指示を」

「20mm高性能機銃、ブローニング12.7mm機銃を敵船に照準せよ。
そのまま指示あるまで、待機せよ」

右舷側の20mm機銃と12.7mm機銃は敵船に向かって指向する。いつでも撃てると、言わんばかりにである。

「火器管制室へ。」

射撃モードを水上に切り替えよ。

射撃モードは、水上に切り替えてない？

すぐに切り替えろ。

無理？

弱音は吐くな。

それでも、お前は軍人か？

なんのために、給料もらってんだ？

この××が、何度でも言ってるやろう。

この腐れポンチの××が」

こう罵る佐竹中尉の手には、ハートマン軍曹のアメリカ海兵隊式罵倒術という本があった。

昔のラノベにも、こんなのが出てた気がする。

「言われなくなれば、結果を示せ。」

信頼は実力で勝ち取るものだ。

もう一度言おう、この腐れポンチの××」

『サー・イエスサー』』

「健闘を祈る」

このあと、後部の20mm機銃座にて射撃モードの切り替えに挑んだ馬鹿者がいたとか、いなかったとか。

「距離、600」

「撃ち方用意。」

まだまだ遠い。

距離、300で攻撃開始だ」

「3番4番、撃て」

艦長の号令一下、”安重根”の魚雷発射管より、2本の必殺の魚雷が海中に放たれる。

「魚雷発射を確認。

雷数2、距離、1800。」

本艦には、およそ2分後に接触します」

「取り舵いっぱい。」

距離、500で罟を射ち出せ。

魚雷は食らいつくはずだ」

山口艦長は、指示を出した。

「距離、1500」

「舵戻せ。」

続いて、面舵いっぱい」

「距離、1000を切ります。」

距離、950」

「まだまだ遠い。」

我慢だ、我慢」

山口艦長は自分に言い聞かせるように言う。

「続いて、取り舵。」

1番、発射用意」

「距離、500、450」

「1番、撃てえ」^{テエ}

”みゆき”艦体右舷中部、ハーブーン発射筒が据えられた場所の下にある3連装短魚雷発射管から、^{デコイ}魚雷が撃ち出された。

「1番2番、デコイに食いつきました。」

距離離れていきます」

「舵、そのまま。」

2番4番、発射用意。

次に来る魚雷が本命だ」

「距離、1000です」

「5番6番、撃て」

潜水艦“安重根”は、“みゆき”の油断しているであろう背後に忍び寄り、雷撃した。

「7番8番にUSM天竜を装填、発射準備。」

また3番から6番まで、魚雷の再装填急げ」

「魚雷発射確認。」

距離、1000」

「距離、500まで待て。」

本艦は面舵。

SH60は距離をとってからの対艦^Uミサイル^Sの発射に備えよ。

発射後は迎撃を許可する」

「艦内ダメコン班、魚雷の命中に備え、艦内隔壁を最終確認せよ」

「対魚雷用爆雷投下準備。」

信管及び深度調定急げ」

「そんなにぼく……痛っ」

後ろから、かなりの勢いで振り落とされた拳に、水雷士はコンソールに頭をぶつけた。

「米村ア、戦争でもおっぱじめるつもりかア。」

「こっちは何も許可しとらんぞ」

何か寝言のようなことを口走った水雷士は、副長の鈴木大尉に殴られて正気を取り戻した。

「はっ。」

「一体、ぼくは何を？」

「米村水雷士、アスロックにデータを入力せよ。」

艦長の命令あり次第、発射せよ」

「了解」

「鹿屋のP3Cがスクランブル。」

もうすぐ上空に到達します」

「魚雷、距離、500」

「取り舵。」

2番、発射用意。
撃^{テエ}てえ」

コンソールを操作して、水雷士が魚雷を射出す。

「敵魚雷、デコイに引っ掛かりません。」

距離、300」

「爆雷をバラ撒け」

艦長の指示を受けて、水雷士が爆雷を投下する。

「爆雷投下始め」

”みゆき”の航行する後方、そして魚雷の針路上に爆雷が投下される。

重さ40kgほどのこの爆雷は、魚雷迎撃に特化した構造であり、どちらかと言えば、機雷に近い。

磁気、触発、時限という3つの信管を持ち、確実に爆発するよう工夫されている。

大きな水柱が2本立つと、数秒遅れて連続した水柱が立つ。

その直後、”みゆき”艦内に、アラートが鳴り響いた。

「総員何かにつかまれ」

艦長の声と共に、”みゆき”は上に下に右に左に大きく揺れる。

おおよそ260kgの魚雷の炸薬2発分とおおよそ20kgほどの爆雷の炸薬10発分、合わせて720kgの炸薬の爆発が、基準排水量2950tの”みゆき”を翻弄する。

「艦内各部、損害を報告せよ」

『こちら、舵機室。』

多少の浸水があるものの、被害ありません』

『こちら、機関室。』

特に問題ありません。

現在、要員を艦底各部に派遣、被害状況を調査中です』

「了解。」

詳しい状況が分かり次第、報告せよ」

『こちら、艦橋。』

負傷者2名。

それ以外に被害なし』

『こちら、ダメコン室。』

艦内に異常ありません』

全ての報告を聞き終えて、副長の鈴木大尉は山口艦長に報告の概要を報告する。

「大阪警備府より通信。

不審船を拿捕す。

以上です」

「内容は以上か？」

山口艦長が、通信士に聞き返す。

通信士はそれを肯定する。

「はっ、以上です」

「そうか、ならいいんだ。

九十九少将も中々なお人だな」

山口艦長の顔に、笑みが浮かぶ。

『艦橋からCICへ。』

潜望鏡を確認。

方位、094、距離、1000』

「ふむ。

副長、次は、こちらから仕掛けるぞ」

その頃、不審船の戦闘海域は紀伊半島沖から高知県沖に移っていた。

と同時に、一部の第五分隊員が艦橋脇で何やら準備をしていた。

「距離、300」

「攻撃開始だ。

弾幕を張れ」

艦長の檄と共に、機銃は敵船を穴だらけにしていく。

「敵船より発砲を確認。

幸いにも今のところ、損害はありません」

敵船よりの射撃は、勢いと数だけはあるものの、命中しなかった。

「このまま、強行接舷に持ち込むぞ」

呉鎮守府艦隊の駆逐艦“みゆき”が、潜水艦と交戦している間に、沿岸警備部隊は各地の艦艇を不審船の周辺に配置させることが出来た。

「突撃用意」

「距離、150」

じりじりといじり寄るにつれて、敵が放つ銃弾の精度も上がってきた。

カント、海防艦の装甲を銃弾が叩く音がしても、貫通はしない。

7.62mmの小銃弾は、海防艦といった装甲を持つものには威力不足なのだ。

「距離、100……50……0」

鈍い衝撃が、“ひなぎく”に伝わる。

「かかれ」

艦長の短い号令がかかると、第五分隊員が艦橋脇からラペリング降下を開始する。

接舷したら、そのまま乗り移るだろうという常識を打ち破る奇襲攻撃だった。

その隊員と同時に残りの隊員が、舷側より乗り移る。

『島田より艦長へ。』

制圧を完了、敵さんは死者数名、負傷者多数。

『こちらに被害ありません』

「了解。」

拿捕した漁船は、土佐清水分駐所に曳航する。

準備に入れ」

P3Cは悠然と海防艦の上空を飛行していた。

「すごかったなあ」

呑気に機長が漏らした。

それに応える戦術航空士の顔も笑みが広がっている。

「小銃や榴弾程度で済んで良かったですよ。」

それ以外なら、海防艦が吹き飛んでしまう」

「そうだな。」

「そういや、音探員、ソノブイは積んでたか？」

「6個までなら積んでますが」

「対潜哨戒を開始するのでしょうか？」

「マグロをサメに食わすわけにはいかんから。」

「取り敢えずは、磁気探知機^{M A D}を使うぞ」

「了解。」

「探索を開始します」

機内のディスプレイには、日本皇国海軍水路局が60年の年月をかけて、作り上げた海図が表示されている。

そこにMADの索敵データが重ねられる。

円を描くように飛行を続けると、タコより報告が入る。

「周辺に潜水艦の影はありません。」

「異常の異の字もありません」

「了解。」

「ソノブイ投下用意。」

座標は、海防艦の周辺海域の手前。

「投下のタイミングは、斎藤中尉任せだよ」

「了解。」

「音探員、1番シューターにソノブイを装填」

「了解」

「音探員が、ソノブイを装填する。」

「ソノブイの装填完了しました」

「了解。」

「指示あるまで待機せよ」

窓の外には、いつの間にか青い空が広がっていた。

「ナウドロップ」

コンソールを操作して、ソノブイを落とす。

重力に引かれたソノブイは、直後にパラシュートを開くと、そのまま海面に着水した。

「ソノブイにも、他の反応ありません。」

「この海域に潜水艦はいません」

「了解。

高知航空基地に帰投する。

以上」

「魚雷発射用意。

内火艇は出せるな？」

山口艦長の問いに、鈴木大尉は首肯する。

「よし、拿捕するぞ。

潜航されると、厄介だな。

牽制も含めて、右舷発射管全弾発射用意」

「えっ、全部ですか？

確かに、1番も2番も再装填は完了していますが」

「そうだ。

敵さん、ビビってしっこ漏らすかもな」

山口艦長は笑いを誘うような、言い方をする。

「アスロック発射用意も急げ。

場合によつては、バラ撒きやならん」

「日本海軍の通信を傍受。

目標は狩られた模様……」

「そうか、目標は捕まったか」

韓国潜水艦“安重根”は雷撃したあとに、複雑な機動を織り混ぜ

て、“みゆき”の追跡を振り切ろうとしていた。

通信士の報告を聞き、“安重根”の艦長は言う。

「ならば、長居は無用。

即刻、反転退避する」

しかし、尻に帆をかけて逃げ出すには少し遅かった。

既に、“安重根”は“みゆき”の山口艦長が張った網の中であったからだ。

「後方に音源。

魚雷です。

数、3」

「1番、撃て。

取り舵、15、ダウントリム、30」

艦長の指示で、魚雷が正面に射出され、”安重根”の艦体は左に滑るように旋回し、深度を下げていく。

「敵魚雷引っ掛かりません。」

有線で誘導されているものと思われます。

魚雷は我々より深いところに到達しました。

本艦との距離、500……300」

ソナー員が、努めて冷静に、それでも少し上ずった声で報告する。距離、300を切ったところで、魚雷は全て自爆した。

魚雷は、”安重根”を中心に正三角形を描くように位置していた。先ほど、”みゆき”を襲った以上の衝撃が、”安重根”を襲う。

その衝撃に、艦長は浮上を決断した。

「アップトリム、40。」

急速浮上だ。

艦内各部、被害を報告せよ」

『はっ、艦内各箇所にて、小規模な浸水が発生。』

現在、補修中です」

「分かった」

「本艦は海面に到達。」

敵主砲に照準されています」

「了解。」

相討ちに持ち込めるか………」

艦長がそこまで言ったとき、上の方から轟音が響いた。

「ゲームオーバーだ」

「魚雷1番から3番発射用意。」

誘導は有線で行う。」

ボートダビッドから内火艇を下ろせ。」

「敵潜水艦内を制圧だ」

「了解。」

特設臨検隊員は甲板上に集合せよ」

山口艦長は、鈴木大尉に目線を向ける。

その視線を受けた鈴木大尉は、臨検隊員に命じた。

「武器の使用を許可する。」

抵抗する場合は、容赦なく撃ち殺せ」

『了解』

「1番から3番、撃てえ^{テエ}」

「機関停止。」

内火艇準備」

既に甲板上には乗員が集まり、内火艇の準備を終えていた。

『準備完了しました』

「発進。」

副長」

「対水上砲戦用意。」

目標、浮上してくる潜水艦」

「ハッチを爆破しろ」

駆逐艦“みゆき”の臨検隊長である砲術士が指示を出す。

内部から固く閉められたハッチに、プラスチック爆弾が仕掛けられる。

ハッチの一部に、ロープを括り付けておく。

もう一方は、潜水艦のもうひとつのハッチに取り付けてある。

こうしておけば、爆破してハッチが吹き飛んでも、回収できる可能性が少しでもあるからだ。

「突入」

ハッチを吹き飛ばすと、間髪入れずに隊員が突入する。

ドイツ系の潜水艦の艦内は狭い。

元々のサイズが小さいからだ。

これは韓国海軍タイプ214潜水艦にも、言えることである。

よって、制圧するのに時間を必要としない。

事実、突入後5分もたたずに、臨検部隊は制圧していた。

「艦内、オールクリア」

「了解。」

捕虜は全員、呉に着くまで、ここの食堂に監禁する」

「こちら」みゆき」CIC。

宮島砲術士か？

ふむふむ、そうか。

それで？

了解」

無線のスピーカーに耳を傾けていた鈴木大尉は顔をあげて報告した。

「臨検部隊は潜水艦内に突入、制圧に成功しました。

主だった抵抗はなく、敵味方に死傷者は出ていません」

「そうか。

鎮守府司令部に打電。

”我、敵潜水艦を拿捕す。

これより、呉に曳航せんとす”

以上だ」

土佐清水分駐所

太平洋に面した漁港の一部に所在し、また由良分駐所と同等の戦力を配された基地である。

深夜2時、町を夜の闇が覆い尽くす頃、土佐清水漁港の海軍用埠頭には、海防艦が3隻、穴だらけの漁船が1隻停泊していた。

「この男は我々が引き取ります」

敬礼をした黒スーツの集団の1人が言った。

「よろしくお願いします」

二階堂少佐や佐竹中尉も敬礼を返す。

手に手錠を掛けられた男は、黒スーツに手をとられて、引き摺られるように連れていかれる。

黒いバンに乗せられた男と黒スーツは、土佐清水基地を出ると、そのまま町の中へと消えていった。

「律儀な連中だな」

そう呟く二階堂艦長の手には、名刺が5枚あった。

それぞれには、所属が国防省情報本部情報業務群公安部隊と書かれており、さらにその1枚1枚に又吉、綾部、吉村、徳井、大西と書かれていた。

「この名前は偽名だろうが、本当に律儀な奴らだ。

目的地は呉鎮（呉鎮守府）だろうな。

あそこなら警備もしっかりしてるから、脱走や奪還の心配がない」

「こちららも警備をしっかりとしないと、朝にはマスコミがわんさか来ますよ」

「無論だ。

今、ここは土嚢を積み上げる最中だし、大丈夫だろう。

しかも、県警の機動隊が出動してくる予定だ。

そうなるマスコミは外で騒ぐだけだよ」

そう言つて、二階堂艦長は歩いていった。

国防省発表

「昨日午後3時25分、日本皇国海軍沿岸警備部隊は、紀伊半島沖合にて密輸船、九州沖合にて国籍不明の潜水艦と交戦せり。

なお、これらについては拿捕、現在詳細を調査中である。

以上。」

テレビ報道

「現在、密輸船を含む各船舶が停泊している土佐清水基地に来ています。

正門前を含む外周部には、高知県警の機動隊が警戒しており、敷地内では小銃を携行する兵士の姿も見られています。

特に、警備が厳しい場所は見当たらないため、密輸船の乗員がどこに拘束されているのか分かりません。

満遍なく兵士がいるという印象です」

〔代わりまして、私は今、日本海軍呉鎮守府前にいます。〕

いつもは、かなりの人が行き交うこの通りも、同じように広島県警の機動隊が警戒していることもあって、人影はまばらです。

また、基地正門に立つ憲兵の顔にも緊張の様子が見られています。

今、私たちがいるここからは、高い塀が邪魔でどうなっているのか、窺い知ることはできません。

つい先ほど、高台の方から基地を眺めたのですが、埠頭に見慣れない潜水艦が停泊しており、その周りには武装した兵士や、何かを調べているらしい兵士の姿を見ることができました。

いつもの平和な町はどこへ消えたのでしょうか？

我々は継続して取材を続けたいと思います」

《国防省前に来ています。

こちらには、陸軍の1個歩兵大隊が警備を担当しています。

国防省広報室の発表によると、密輸船の積み荷は既に確保しており、その奪還を目論む勢力によるテロ攻撃の可能性も考えられるとしており、警戒を強めています》

「ここがあの潜水艦の中か。

普通に狭いな」

「艦長。」

そうは言っても、どこの国でも潜水艦は狭いものですよ」
嬉々として、拿捕された艦内を探索するのは、山口艦長と鈴木大尉である。

「そうか、そう言うものか。」

奴らも中々に大変なんだな」

そう言つて、第六艦隊の連中に同情する。

「まあ、うちの艦も狭い方なんですけどね」

鈴木大尉は、そう言つて艦内を見回す。

「一通り見たわけだが、おかしい点がある」

「確かに、そうですね。」

食料が少なすぎる。

日本に来て帰るには、絶対に足りませんよ」

「案外、補給艦が待ってたのかもな。」

あれから二、三日すればやって来たんだろうが、もう逃げとるだろうな」

「あとで鎮守府のシステムで検索しましょう。」

あの辺をどこのなんと言う船が、どのような目的で航行していたのか分かるはずですよ」

「土佐清水分駐所司令、白川です。」

本当ならば、昨日のうちに挨拶するべきところを申し訳ない」

とは言うものの、白川大佐は事後処理の指揮を大阪警備府の九十九司令官と共に執っており、中々会う時間がとれなかったのが真相だ。

また、分駐所司令の場合、大佐で着任し在任中に少将に昇進するのが一般的だ。

「大阪警備府海防艦、ひなぎく、艦長の二階堂であります」

「同じく、ひなぎく、前任将校の佐竹であります」

佐竹中尉は、左腕を三角巾で吊っているため、やや不格好ではあるが、二人は敬礼をした。

「そう固くならんでよろしい。」

それで、戦闘詳報を読んだが、あれは北朝鮮の工作船ではないのか？」

「乗員たちに簡単に尋問したところ、違うとの解答を受けました。おそらくは、中国近辺を根城としている多国籍密輸団だと思われます。」

また、船長以下大多数の乗員が韓国人でした。

その他が中国人が二人、一人はお目付け役、もう一人が通信担当だったそうです」

「お目付け役と言うと、紅軍の政治委員みたいなものか？」

「おそらくは。」

それに船長は、韓国海軍出身でした。

その辺も考えると、工作船ではないと思われます」

「そうか」

「その上で、データベースを検索した結果、三つの組織が密輸団の候補に上がりました。」

まず、上海系の閩鷹、北京系の暮鷲、そして香港系の黒虎です。

最後の黒虎の可能性が最も高いと思われます。

以上で報告を終わります」

「ご苦労だった」

二人は立ち上がると、司令室から退出する。

「失礼しました」

「さっきの条件、さらには必要な船体の大きさに合致するのは、天津海運総会社の貨物船、青島Ⅱ、三住商船の第五祥福丸、皇国郵船の第二蒼龍丸ですね。」

搭載品が、青島が食料品、あとの2隻が、自動車などの機械類となっています」

パソコンのモニターにデータを映す。

「十中八九、その青島って言うのが怪しいな。」

現在地は大体、四国沖を抜けて小笠原の方向に向かっていたので、この辺だな。

となると今から、横須賀やら小笠原に緊急で要請しても、間に合わないだろうな」

山口艦長は海図を見ながら言う。

その顔は、うつすらと憎々しげだ。

「硫黄島から飛行隊を飛ばしましょう。」

「目標の確認ができるはずです」

「したところで何になる？」

それが次日本に来るのはいつだ？

それに証拠もない」

山口艦長は、怒気を孕ませて言う。

「国家安全保障会議大本營より通達。」

デフコンを4から3へ引き上げ。

それにもない、艦隊全艦に待機命令を発動する。

必要に応じて、非常時の武器使用を許可する。

以上です」

「第四艦隊はどうなってる？」

「全艦を即座に出航させられるように待機させておりますが、何か？」

「そうか。」

分かった。

すぐに艦に戻る」

山口艦長と鈴木大尉は歩き出した。

司令室から退出した二人は、雑談をしながら、歩いていた。

「それで宴会はどこでしょうか？」

「居酒屋で十分でしょう。」

「そんなにお金もかかりませんし」

「そうだな」

「艦長、先任。」

警備府司令部より入電。

分駐所警備任務を急行中の陸軍歩兵部隊に引き継ぎ、呉海軍工廠に

入渠、少し早いが定期点検を開始せよ。

とのことであります。

また、大本営より通達。

デフコンを4から3へ引き上げ。

それにもない、艦隊全艦に待機命令を発動する。

必要に応じて、非常時の武器使用を許可する。
以上です」

息を切らして、走ってきた通信科員は、命令を伝えた。
「了解。」

すまないが、機関長以下機関科員を召集してくれ」

「了解」

「何処かと戦争が始まるのですか？」

「分からない。」

ただ、始まるとしても数カ月後のことだろう」

佐竹中尉の問いに二階堂艦長は答えた。

「そうですか。」

何か、嫌な予感がするなあ」

閑話 尋問

これは日本皇国軍情報本部情報業務群公安部隊による韓国工作員尋問の記録である。

「あー、私は又吉とお呼びくださいれば結構です。

後ろにいるのが、綾部、徳井、吉村、大西です。

全て偽名なのは悪しからず。

それですね。

あなたの氏名、国籍、所属を教えてくださいませんか？

及び、日本に不法に滞在していた理由も」

漁船で見つかった男の身柄は、極秘裏に呉に移された。

「……………私は何も答えることはない」

「そうですか。」

我々も時間がないのでねえ、少々手荒なまねをしなくてはならないようだ。

と言っても、あなたの素性に関しては、大体の予想はついています。

要は、あなたの背後関係を読み取ることにあります」

世に言うえびす顔を浮かべた黒服が言う。

「何がしたい？」

ただの下っ端工作員に知っていることなど、何も無いぞ」

しれっと嘘を言うが、黒服は気にした様子はない。

「いやはや、謙遜を言わないでもらいたいものですよ。」

単なる下っ端ごときに、あの国は潜水艦は出しませんで。

その辺はよく分かってらっしゃると、思っていたんですがねえ。

いつもの中国ルートはどうしたんですか？

使わなかったようですが。

おや、少し顔が悪いですね。

軍医でも呼びますか？」

顔の血の気がすうーと引いていき、冷や汗が顔を伝い、心拍数が上がる。

黒服の代表である又吉には、男の様子が手に取るように分かっている。

た。

「大丈夫だ」

「そうですか。」

でははじめますね。

あなたの名前は、朴永根ぼくよんぐん、日本での通名が、桐谷洋二ですよね。

韓国国家情報院の日本における工作活動の最高責任者。

在日2世の一人、小さい頃に日本人に何かしらの恨みを持ち、成人するとそのまま我が国への工作活動に参加。

現在は、対馬、竹島、九州北部、日本海沿岸の防衛態勢の調査に従事。

過去には、要人の暗殺、その辺に燻つてた過激派を刺激しての犯罪幫助、直接のテロ未遂などの犯罪をやったようだね。

我々は公安警察と連携して、ずっとあなたの影を追っていたんですよ。

さすがに近畿地方田舎で撒かれた時には焦りましたけどね。

ここであつても、公安警察チヨダに引き渡すので、あなたに未来はありません。

それでも、あなたは喋らなくてはなくなるんですよ。

我々は、何をしても法で裁かれることがない。

あなた娘さんがいらつしやいましたねえ。

そう言えば、今年で高校2年生になられるとか？

かわいい盛りですよねえ。

そんな彼女が裏路地で嬲られr……」

えびす顔の又吉は表情を変えずに言う。

そんな脅しに慣れているようだ。

「そんなことしてみろ。」

俺がお前らをぶつ殺す。

お前らはなんて汚いんだ」

「汚いってどの面提げて言えるんだア。」

お前らも同じことを何度もやって来たんだろうが。

俺たちはなア。

そんな脅迫に怯えて自ら死んだ奴を、何度も何度も見てきたんだ。今さらお前がそんなこと言える立場か考えやがれ。

今ここでお前を殺しても、真実は闇の中に消える。

俺たちに守るべき法律なんてものはない。

それだけダーティな存在なんだ。

お前がどう叫ぼうと、未来は変わらない。

我々に協力して娘を守るか、それを拒否して娘を見捨てるかの2つに1つなんだ。

分かっているのか？」

又吉は胸倉を掴みながら、まくしたてる。

「そんなの知るか」

「武器つうものはな、使われたときの痛みを知って、はじめて使えるんだ。

それがどれだけの痛みをもたらすかを考えて使うものなんだよ。

さつきも言ったが、俺たちはダーティな存在なんだ。

無駄なあがきはやめて、楽になっちまえよ」

又吉の突き放すような口ぶりを聞いた黒服の一人が近寄ってくる。

「あのプランを実行に移します。

(あくまで形だけですが。)」

「分かった。

証拠は残すなよ」

「部下を信用をしてくださいよ。

全員荒事には慣れてますよ」

えびす顔に戻った又吉は、退出した部下を見送ったあと、男に向きなおる。

「あんたも頑固やね。

やらんでもいいことまでやらにやあならん。

その意味が分かるか？」

言葉の意図を理解して、男の顔が土気色になる。

数刻の逡巡のあと、男は口を開いた。

「……………俺達に与えられた仕事は、あんたらも知っての通りの調査

と、あとは破壊工作員の密入国の幫助だ。

詳しいことは、担当しか知らないが、この国には、既に数百人以上が潜伏しているはずだ」

「それは本当か？」

黒服の顔色が変わる。

軍の情報部門と言えど、国内では大つぴらには動けない。

そのため破壊工作員の監視は、公安警察の仕事のはずなのだ。

1度話し始めると、饒舌になるのが、人の性である。

男は素直に喋り続ける。

「ああ、少なくとも海の警戒は厳しいが、空や降り立ったあとはそうでもないからな」

「協力者は航空会社の中にいるのか？」

「と言うよりも、担当がそのまま就職している。

あんたらが動けば、すぐに分かるはずだ」

「なるほど。」

で、何で潜水艦が出てきたんですか？」

「日中開戦とかの時に、日本上空が交戦空域に認定された場合のルートは確立だそうだ。

まあ、結果としてそれは失敗だったが。

海軍以外は、日本海軍を過小評価しているからな、あの国は。

ぶっちゃけると、なるべくしてなったとも言えるが」

「それは同感だわ。

で、最後に1つだけ」

「何だ？」

「あなた、亡命に興味ってありますか？」

「敵に情けをかけるのか？」

「情けではありませんよ。

あの国への牽制です。

非公式の外交ルートで、五月蠅いそうですよ。

その原因が何しろ我々軍なもので、あの外務省が何とかしろと上から目線で五月蠅いんですよ。

あの予算分の仕事すらもしない、いやできない無能共め。
次に会ったら、冤罪を着せて頭に風穴を開けてやる。
と言うことで、あなたを亡命させます」

「俺の意思は？」

「そんなのありませんよ。」

私がさせると言ったら、それを実行するまでです
えびす顔の又吉はニヤリと笑った。

「我々はあなたのせいでこれから忙しくなりますよ」

日本皇国海軍最大の後方支援拠点である呉鎮守府は、補給艦や病院船、工作艦等からなる後方支援艦隊の司令部も置かれている。

後背には本州の中国地方が、前方には四国地方が鎮座する地理的な構造上、呉鎮守府を攻撃するのは、非常に困難である。

その防衛も、呉に第四艦隊、さらには沿岸警備部隊が鎮守府艦隊のほかにも、東には大阪警備府そして阪神分駐所、由良分駐所が紀伊水道を封鎖し、南には鹿児島警備府や日向分駐所、土佐清水分駐所が日向灘を警戒している。

北は筑前警備府があり、その後ろを守る下関分駐所も存在する。だから、呉の防衛に割ける戦力は、他の鎮守府の数倍にも達する。だからこそ、海軍最大の工廠群を含み、日本皇国海軍の肝とも言われる地域となっているのである。

そんな海軍呉鎮守府の一角にある呉海軍工廠第6船渠に”ひなぎく”は入渠していた。

「ひなぎく”のことをよろしくお願いします」「了解しました。

きつちり点検しますので、安心してください」「そう言つて、二人は握手をする。

その二人と言うのは、”ひなぎく”艦長の二階堂少佐と、海軍工廠の担当者である横山中佐である。

「事前の報告によると、艦尾の方に亀裂があるそうですが？」「はい。

その辺は機関長である徳山少尉に確認してもらった方が早いでしょう」

「分かりました。

徳山少尉に確認します。

それと弾痕がかなりの箇所であり、うち貫通が2ヶ所、貫通していないのが無数ということらしいですが？」

横山中佐は片目でジロリとこちらを見てくる。

「はい。」

「これは艦の乗員が確認しました」

「分かりました。」

工廠長の藤堂中将付きの副官にこれを提出して、承認印をもらってきてください」

必要事項を記した用紙に、サインを入れ、横山中佐はこちらに手渡ししてくる。

「ありがとうございます。」

ほとんどの乗員は残置しますので、こき使ってやってください」

「分かりました」

用紙を受け取り、工廠の事務棟へと向かう。

「久しぶりだな、紀一」

「何ですか？」

私達は急いで、大阪に帰還しなければならぬのですが」

佐竹中尉は、突然現れた男に言った。

その言い方は丁寧だが、口調に棘があった。

「グハッ」

山口艦長は血を吐いた。

「副長、実の息子が私に冷たい」

「気持ち悪いので、こつちに来ないでください」

山口艦長は、鈴木大尉に泣きついた。

しかし、鈴木大尉の口撃に3500のダメージをくらった。

そして、進路を変更する。

そう、立っていた二階堂少佐のところに。

「姉ちゃん、俺を慰めて」

携帯を取り出した佐竹中尉は、憲兵の指示をあおいでいた。

「あつ、呉憲兵隊ですか？」

セクハラ未遂の現行犯がいます。

至急出動を願います

分かりました。

こちらで拘束して、引き渡せばいいんですね。

はい、はい、了解しました」

佐竹中尉は憲兵の指示通りに、山口艦長の両手を手錠で拘束して、鈴木大尉と一緒に取り押さえる。

鈴木大尉が拘束していてくれたおかげで、片手でも簡単に拘束できる。

「何をしてるんだ？」

副長、俺を裏切るんだな？」

「セクハラを黙認することは、”みゆき”乗員としての恥です。

それがトップであるなんて、拘束に協力しないと、我々が白い目で見られるんです。

分かってますか？」

「セクハラじゃない。」

慰めてもらうだけだ」

キリツとか言う擬音がしそうな表情で、山口艦長は言う。

しかし、二人から突っ込みが入る。

「たわごと言いつきは憲兵隊に言ってください」

さらに、鈴木大尉は続ける。

「セクハラかそうでないかは、した本人ではなく、された人もしくは憲兵といった第三者が判断します。

あなたが決めることはありません。

おとなしく、縛についてください。」

「憲兵隊だ。」

セクハラ男はどこだ？」

「憲兵さん、こいつです」

二人は、腕の中に押さえていた山口艦長を突き出す。

憲兵は一瞥して、判決を申し付ける。

憲兵の権限などたかが知れている。

それでも、地方自治体の定めた条例と軽犯罪法の範囲の犯罪なら、その場で処分を申し付けることが認められている。

その程度まで軍法会議にかけていたら、人員が足りないからである。

「ふむ、罰金40万、減俸30%を2ヶ月でいこう。」

では憲兵隊呉支部までいこうか？」

軍憲兵隊は、陸海空軍共同で設置・運用されており、市ヶ谷に本部を置き、陸軍だと旅団司令部等の大規模な駐屯地に、海軍は横須賀・呉・佐世保・舞鶴・大湊の五大鎮守府に、空軍は各飛行隊の所在する基地に、支部が置かれている。

「抵抗すれば、営倉にぶちこむぞ」

おとなしくなった山口艦長は、憲兵に引き摺られて進んでいく。

「きびきび歩け」

憲兵さんの怒号が響く。

その間にも、その姿は小さくなっていく。

「うちの上司がすみませんでした。」

それでは、失礼します」

その姿が見えなくなると、鈴木大尉は佐竹中尉らに謝罪をして、それを追っていった。

「それで、山口羅門中佐とはどんな関係なんだ？」

彼は、良くも悪くも結構有名なんだぞ？」

「そうですね。」

艦長には話しておきます」

そう前置きして、佐竹中尉は話し始めた。

「うちの母は田中海軍予備役大将の娘で、自身も海軍軍人でした。」

それで、お見合いである男と会って、結婚して、2年。

私も生まれて、それなりに幸せに暮らしていました。

あの男がしようもないことを言うまでは……」

「しようもないこと？」

「ええ、何でも寄港先全てに女がいるとか言ったそうですよ。」

これに激怒したのが、祖父の当時は田中中将とその兄の近衛中将らしくて、まあ、彼らを怒らせるに海軍閥を敵にまわすですからね。硫黄島にとばされて、心霊現象に悩まされた挙げ句、出世街道からも落とされ、母とは離婚。

母は今、佐竹海軍予備役大将と再婚して仲睦まじく、定食屋をやっ

てますよ。

まさしく、口は災いの元。

自らの言動には気を付けないといけませんよね。

それに彼は、連れ子である私に愛情を向けてくれました。

私の父親は、佐竹海軍予備役大将だけです」

「つまり、山口中佐は言っていた通り、一応は実の父親と」

「そうですね」

「しかも、近衛中將は霊能力でもお持ちなのででしょうか？」

「母から聞いた話ですけど、田中の一族の先祖は陰陽師だったらしくて、その先祖還りらしいんですね。

近衛の家に養子として入っても、その力は増していくばかり。

今では、2日に1回、心霊現象が”みゆき”艦長を襲うそうです。

これも、数年ぐらいで許すつもりだったらしいんですけど、ちびちび接触してきて、父親面するのでずるずると延びてるんですね。

自業自得というやつですか」

「なんというか、しょうもない」

二階堂少佐も、呆れてものも言えないようだ。

「海軍閥自体が基本的に人畜無害、有名無実、あつてなきが如しなんですけど、構成員の親族が何かされると、全力で叩き潰すんですね。

海軍系の政治家やら、財界人なんかにも顔が利きますからね。

民間人相手にも、一步も引かずに勝ちます。

だからこそ、いろんな筋から恐れられてるんですね。

十数年前には、やくざと海軍で抗争してましたし。

その時の死傷者数は、両陣営あわせて数百人に達するとか」

佐竹中尉は他人事のように話す。

実際に関わっていないのだから、他人事でしかない。

「その原因は？」

二階堂少佐は聞くが、声が震えている。

「やくざの息子が、とある海軍高官の娘に手を出そうとして、ストーリーになったんですね。

それに反応したのが、上層部会と呼ばれる海軍閥総会の保守派以下

全員で、即日の海軍の動員を決定。

特殊部隊、100人、陸戦大隊2個、800人、各地から1000人単位で兵士を動員して、根絶やしにしましたよ。

その組織の上部組織から、下部組織まで全てね。

それが、第五次横浜抗争の結末です。

それからですよ。

横浜にやくざが寄り付かなくなったのは」

佐竹中尉は、遠くをみながら言う。

呉駅から広島駅に向かう道中である。

広島駅からは新幹線に乗って、一路新大阪駅に向かうのだ。

「それに伴って発生したのが、海軍報道弾圧事件です。

過熱しすぎた報道の矛先が、その娘さんに向かってしまったことで、憲兵隊と報道陣が小競り合いになって、憲兵と海軍兵が発砲し、報道陣に死傷者が続出した事件です。

死傷者の大半が無許可で海軍施設敷地内にいたこともあって、発砲した全員が無罪になりました。

新聞やテレビなんかは、報道の自由への挑戦だなんて、息巻いたんですけど、裁判官の言葉が決着をつけたんですよ。

報道の自由は確かに守られるべきだが、だからと言って無責任なマスコミによつて、被害者のプライバシーが侵害されることがあつてはならない。

また、報道の自由は違憲と認められていない国法に背くことを認めていない。

でした。

大騒ぎだった報道や国民世論は、一転して冷静になったんですよ」

「広島駅を15時13分に発車した”のぞみ”36号は少ない停車駅を過ぎて、16時34分に新大阪駅に着いた。

「定期点検が1週間後に終了する。

それまでにやらねばならないことがたくさんある。

覚悟しておけよ」

”ひなぎく”が前倒しで定期修理に入った二日後の大阪警備府駐
車場

「これが我が海軍沿岸警備部隊が誇る覆面車両、トヨタクラウンNモ
デルだ」

トヨタクラウンNモデル、平たく言うと日本警察の採用している覆
面クラウンの海軍、特に沿岸警備部隊仕様だ。

「今日はこれで違法漁業従事者逮捕に向かいます。」

アンダースタンド？

あと、今日はテレビの取材がある。

言動には、注意するように」

「了解」

二人は車に乗り込む。

佐竹中尉は、キーを差し、エンジンをかける。

「今回の取り締まりは、水産庁資源管理部管理課特命係と共同で行う。

相手には十分に敬意を払うようにというのが、警備府司令官の九十
九少将の言葉だが、常識だよな？」

「ええ、分かっています。」

それで特命係ですか？

某警察ドラマのやつみたいですね？」

「そんな感じじゃないが、海軍にも特設部隊ってあるだろ？」

部隊編成基準に」

「ありますね」

日本皇国海軍における特設部隊とは、常設の各艦隊より選抜された
艦艇、人員をもって編成された部隊である。

「それみたいなもので、普段は他部署で働いているんだ。」

彼らは先行して、被疑者宅を監視している。

何かあれば、すぐにこちらへ連絡が入るはずだ」

車の外を流れていく景色を、佐竹中尉は眺めつつ、クラウンを走ら
せていく。

「了解」

「日本警察機構密着24時、次は日本の海の治安を守る海軍沿岸警備部隊。

彼らは常に、緊急事態に備えている。

場所は大阪警備府。

そこには、海に陸に空に活躍する精鋭たちがいる。

海軍沿岸警備部隊の職務は、多岐にわたる。

海洋権益の保護、領海警備、沿岸防衛、そして密漁者の逮捕などである。

そして、今回は密漁者の元締めを逮捕するために、海軍沿岸警備部隊は水産庁と協力し捜査を進めてきた。

証拠固めの段階を過ぎ、今日確保に向かうのだ。

そして、衝撃の結末が待ち受けているとは、その場にいた誰も予想できなかった」

「指定された住所はここみたいですわね。

一旦通り過ぎて、その先で止まりますけど、あのバンが水産庁ですか?」

左に曲がった後ろには、目立たなそうなる3台のバンが止まっていた。

「ああ、執行は09:00を予定しているが、君は車内に待機していてくれ。

男に逃亡の恐れがある」

クラウンを角に紛れるように止めると、水産庁職員からの合図を、そして時間が過ぎるのを待つ。

「じゃあ、バックして門前の右を塞ぎます。

そうすると相手は車で逃げても左しかなくなりますから、追跡は容易です」

「分かった。

9mm拳銃は持つてるな?

必要なら、発砲してでもやつを止めろ」

「了解」

車内の時計が8時53分を回った。

佐竹中尉はゆっくりクラウンを家の前につける。

さっきのところを見るとバンからも、10人ほどの人間が下りてくる。

「我々、取材班は特別な許可を得て、水産庁職員の側にもカメラを置くことができた」

「8時53分か」

時計を見た職員の一人が言う。

「後ろで、海軍さんが動いています。」

容疑者の家の前に、クラウンをつけるつもりでしょうか？」

「奴らはアホか。」

奴さんに気付かれんど」

「仕方ない。」

何人か下りて、出入り口を固める。

私も出る」

バンのスライドドアを開けて、地面に下り立つ。

「もしかしたら、奴さんの退路を絶つつもりなのか？」

「男が何時に家を出るかなどは、数ヶ月にも及ぶ内偵活動によって、確認されている」

×家の玄関から出てきた男が車に乗り込もうとしていた。

×（個人情報保護のため修正）やな？

×密漁対策基本法違反で、裁判所から搜索差押許可状と逮捕状が出る。

おとなしく観念せい」

水産庁の密漁Gメンとも呼ばれる漁業監督官が声をかける。

ボンネットの前には、水産庁職員がいて、発進を阻止する構えだ。

「うっさいんじゃ、ボケエ」

そう怒鳴った男は、車を急発進させて、ボンネットの前の水産庁職員をはねとばす。

「艦長！」

佐竹中尉が叫ぶ。

さらに、数名の水産庁職員が2台目、3台目のバンから下りてくるが、ここでの事態には間に合わない。

佐竹中尉は心の中で、遅い、と叫んでいた。

「二階堂少佐、追跡を頼む」

水産庁職員の言葉に、二階堂少佐はホルスターからピストルを取り出そうとしていたが止めて、車に飛び乗った。

そこでアクセルを踏み込み、急加速する。

「パトランプつけてください。」

強引にでも止めます」

メーターのスピードは、時速180kmを軽く越えた。

目前に、白いセダンが見えた。

「こちら沿警21から各方面」

『こちら大阪警備府、どうぞ』

『こちら大阪府警本部、どうぞ』

「現在、密漁者が車両にて逃走中。

車種は、×の×、色は白、ナンバーは、堺・370、さんなま××。

対象車両は、ときはま線を東進、現在、北条町一丁交差点を右折、泉

北1号線を南進。

応援を要請。

どうぞ

『了解』

『こちら沿警23。』

”ふぶき”の間宮だが、ときはま線を西進中、10分もすれば合流できる。

どうぞ

「了解」

『大阪本部から各局、現在、被疑車両が泉北1号線を南進し、泉ヶ丘方面へ逃走中。』

警戒中の各局にあたっては、追跡中の海軍車両を支援せよ』

『こちら西堺5、深井駅裏おります。』

現場急行します』

『南堺3、泉ヶ丘周辺警戒中、待機します』

『黒山6、岩室東交差点付近おります。』

岩室方面へ移動します』

『南堺1、西陶器小付近おります。』

泉北1号線方面へ移動します』

『機捜20、現場急行します』

『交機31、田園大橋直上おります。』

待機します』

被疑車両を囲む包囲網は、完成し狭まりつつあった。

『了解。』

被疑車両の逃走方向にある、和泉、泉大津の各局にあつては、十分に警戒せよ。

終わり』

「逃走していた車両だったが、完全にその姿を捉えた」

「こちらは沿岸警備部隊だ。」

前方の白いセダンに告げる。

即刻、停車せよ。

繰り返す、こちらは沿岸警備部隊だ。

前方の白いセダンに告げる。

即刻、停車せよ」

サイレンが鳴り響くなか、白いセダンは諦めない。

深井駅前の交差点は片側二車線の道路が交差する形になっている。

「交差点、緊急車両通行します」

「逃走する車両は、交差点にスピードを緩めずに侵入した。」

朝の交通量の多いときでもあり、非常に危険だ」

「止まれ。」

事故るぞ」

二階堂少佐が叫び、停止を求める。

『沿警21へ、こちら沿警23。』

もうすぐ後ろにつく、どうぞ』

『西堺5、合流します』

「了解」

一向に止まらない逃走車に、佐竹中尉の血は騒いでいた。

(上等じゃ)

無理にでも止めたらあ)

「前に出て、無理矢理止めます。」

衝撃に注意してください」

国防大学の運転講習で、扱われる60名のうちの一人が、佐竹中尉である。

これは将来のスキルアップに備え、希望者から選抜されて行われるものである。

これを修了すると、峠でレースしている某漫画真つ青なドライビング・テクニク運転技量を手に入れ、なおかつ車であれば、何でも操縦できるようになるという恐ろしい講習である。

「分かった」

アクセルを全開に噴かして、スピードを上げる。

時速は180kmを越え、200km近くまで上がっている。

そして、徐々に間隔が狭まる。

「間隔は徐々に狭まり、車が大きく見えるようになった。」

そして、横に並んだ。」

「止まれ。」

左に寄って止まれ」

高速以上の速さで走る2台に、何とか追随しているのが、沿警23の覆面パトカーと西堺5、南堺1のパトカー、交機31の白バイであつた。

「現在、泉ヶ丘、JOINパークそば、左折、大阪狭山方面向かっています。」

どうぞ」

『南堺3、合流します。』

どうぞ』

「了解。」

犯人は既に、捨て鉢になっている可能性が高く、非常に危険です。

接触は十分に注意してください。

どうぞ」

唸りをあげるエンジンの音を聞きつつ、佐竹中尉は目の前の逃走車に目を向ける。

前に出ようにも、周りの車が邪魔で上手くいかない。

むしろ、接触事故を起こしていないのが、不思議なくらいではあった。

『大阪本部から各局、マル対は泉ヶ丘のところを左折。

大阪狭山、富田林方向に逃走。

黒山、富田林の各局は警戒せよ。

終わり』

「横に並ぶことはあっても、それ以上に進むことはなかった」

『マル対は岩室方面へ逃走中。』

その方面の各局にあつては、同車両確保のために必要な措置をとれ。

以上、大阪本部』

『富田林2、金剛駅前のロータリーにあります。』

亀の甲方面へ移動します』

『富田林5、国道309号線を移動中。』

亀の甲方面へ向かいます』

大阪府警の各車両は、被疑車両を包囲するように動いていた。

「沿警21より、各方面。』

現在、被疑車両は岩室の交差点を通過し、大阪狭山市に入りました。なお、未だに速度を緩める気配はなく、危険域にある状態ではありません。

しかし、これ以上に今現状で追跡を断念すると、対象が調子に乗る可能性が高く、追跡時以上に危険度が増すものと思われます。

どうぞ」

『大阪警備府、了解』

『大阪本部、了解』

大阪警備府と大阪府警では、対象車両を止めるために、別のオペレーションも考えていた。

それこそが陸軍に対する治安出動要請である。

過去には、西成暴動にも出動要請が出され、信太山と八尾の2個の歩兵連隊が出動し、およそ3000人の将兵が暴徒が沈静化するまでの2週間、街頭に立ち続けた。

このうちの片方の歩兵連隊が保有する装甲車による阻止作戦が基本である。

しかし、待ち構えている場所にどう追い込むかが、鍵となってくるが、そこはまあ、現場に押し付けられるのだろう。

「陸軍が出てきますかね?」

「かもな。」

それでも止まるかどうか。

五分五分だよなあ」

「これ以上の逃走は、周辺に危害を与える可能性が高い。

いち早い確保が必要だ。

しかしこれは、言うが易し行うは難しという言葉の典型例だ」

「岩室東交差点を通過。」

現在、亀の甲跨道橋に進入」

佐竹中尉は、クラウンを右に左に揺らしながら、追跡していた。

両端に寄っている車両を避け、抜いていく。

「スピード落とせ。」

危ない。

止まれ」

スピードカーから呼びかけること、十数回、それでも白いセダンは反応しない。

『大阪本部から富田林署管内、現在逃走中の車両は、危険な走行を繰り返している。』

管内の各局にあつては、民間人保護に全力を尽くせ。

以上、大阪本部』

『富田林3、了解。』

交通規制を発令、民間人保護に移ります』

『富田林8、了解』

相も変わらず、大阪府警察の通信はあれこれうるさいが、致し方ないかもしれない。

「艦長、この先片側一車線になります。」

民間人への危険度は増します」

佐竹中尉は、小声でいった。

金剛駅そばの跨線橋を越えれば、そこは富田林市市内だ。

『大阪本部から各局、周辺道路からの民間車両の退去が完了した。引き続き、マル対の動向を報告せよ。』

以上、大阪本部』

『こちら航空隊』まいしま、から大阪本部へ。

上空に到着しました。

指示願う。

どうぞ』

「大阪本部から」まいしまへ。

上空からの情報収集を行い、地上部隊の行動を支援せよ。

どうぞ」

「沿岸警備部隊と大阪府警察の懸命の追跡は続いていた。

そんな中、大阪府警本部と大阪警備府は、陸軍の出勤を決断した。

信太山駐屯地に駐屯する第51歩兵連隊には、歩兵機動を支える8

9式歩兵戦闘車が配備されている。

これなら、逃走車と真正面から渡り合える」

『大阪警備府より沿警21、23、さらには協力中の大阪府警のパト

カー隊へ。

陸軍の出勤を要請した。

2時間、2時間でいい、奴の目を引き付けろ。

そうすれば、準備は整う。

とにかく、準備が整うまでの2時間を稼げ。

以上、大阪警備府』

「沿警21より大阪警備府。

キルゾーンはどこなんだ？

どうぞ」

『和泉市内を予定している。

周辺道路は既に封鎖、歩兵戦闘車でバリケードを構築中だ。

2時間たったら、府警のパトカー隊と連携して、和泉市内へ追い込

む手筈になっている。

詳しい座標は、あとで送る。

以上、大阪警備府』

「確かに89式歩兵戦闘車であれば、逃走車を止められますが、このスピードじゃあ1台がおじゃんですよ」

数百万で買えるセダンに対して、89式歩兵戦闘車は、1台4億5000万円だ。

壊れました、分かりました新しいの買いましょうと言えない、つまりそう簡単に買える値段ではない。

「それは経験からかな？」

佐竹中尉の物言いに、二階堂少佐は聞いた。

「その通りです。」

操縦を習ったときに、装甲厚を見たんですが、かなり薄いですね。まず、衝突の衝撃に耐えられないでしょう」

『大阪本部から黒山、河内長野管内。

堺市より逃走車が富田林に入った。

富田林から通ずる道路を封鎖し、民間人を保護せよ。

繰り返す、富田林から通ずる道路を封鎖し、民間人を保護せよ。

以上、大阪本部』

「歩兵戦闘車で止めるのは、かなりの無茶が伴いますよ」

「そうなる前に止めるしかないか。」

「こうなれば富田林の中で止めるぞ」

「了解。」

国道309号は片側二車線ですから、楽に抜けると思います」

「沿警21より封鎖任務に当たっている各局へ。」

封鎖線を変更し、逃走車を国道309号へ誘導せよ。

繰り返す、封鎖線を変更し、逃走車を国道309号へ誘導せよ。

どうぞ」

『沿警21、勝手な命令を出すな。

ただいまの命令は無効、無効である。

以上、大阪本部』

「しかし……逃走車を2時間も野放しにできません。

命令の再考を願います。

どうぞ」

『富田林3から各局。

林警部補から命ずる。

即座に移動、沿警21の指定するように封鎖線を変更せよ。
以上』

『林警部補、命令無視は処分の対象だぞ。

戻れ』

「不毛な会話を続けるなら、無線を切ってください。

うるさいので」

「富田林5、了解。

309号方面、向かいます。

どうぞ」

その時、二階堂少佐の仕事用の携帯に着信が入る。

「もしもし、こちらは二階堂ですが、なにか？」

『警備府司令官、九十九莞爾だ。

なにやら、警備府に不穏な動きがあったらしいんだが、外に出ていてな。

今、出張先の横須賀からだが、どこかのアホ参謀が勝手に陸軍の出勤を要請したようだ。

そいつは、あとで吊し上げとくから、府警は気にせず現場の判断で好きにやれ。

以上』

電話の相手は、警備府司令官の九十九莞爾少将だったようだ。

「了解。

直ちに取リかかります」

二階堂少佐はそう言うと言電話を切り、無線を各局に繋いだ。

「沿警21より各局。

逃走車を国道309号に追い込むために、配置を伝える。

309号へのバイパス以東の各局は、エコール・ロゼ前の交差点にパトカーを集結させよ。

なお、309号以西の各局にあつては、対面二車線の交差点にて待機。

逃走車を確認次第、こちらに合流せよ。

以上、沿警21」

二階堂少佐の判断は、常道を衝いていた。

なぜなら、こちらは上空のへりから逐一情報を得られるので、逃走する車両がどのような機動を行おうとも追跡の継続は容易だからだ。

「警備府からの指示を無視する形ではあるが、現場主導での確保作戦が幕を開けた」

「緊急車両、赤信号進入します。」

緊急車両、赤信号進入します」

逃走車は速度を緩めることなく、金剛団地と呼ばれる新興住宅地の一角を走り抜ける。

「高辺台小学校前交差点、直進。」

「片道一車線の細い道の真ん中を縫うように進む逃走車は、かなり危険だ。」

早い確保が望まれる」

唸るエンジン音、軋むタイヤ音、つんざめくようなサイレンが、閑静な町を切り裂いていく。

「止まれ。」

車を左に寄せて止まれ」

「何度目の警告だろうか？」

逃走車はそれを無視して、走り続ける」

「高辺台東、通過。」

なおも停車の気配なし。

各局にあつては、次が正念場です。

よろしくお願いします。

どうぞ

『富田林8、了解』

『富田林3、了解』

『富田林5、了解しました』

『富田林1、了解』

『富田林2、了解。』

あつ、たった今、対象を視認。

指示求む。

どうぞ

「沿警21、了解。

現時点の場所で待機してください。

どうぞ

『富田林2、了解』

「沿警21より各局。

これより、確保作戦を実施する。

最優先は自己の生命の保全である。

無茶や無理はしないでほしい。

以上、沿警21」

『沿警23、了解』

『西塚5、了解』

『南塚3、了解』

『黒山6、了解』

『南塚1、了解』

『交機31、了解』

『機捜20、了解』

『富田林3、了解』

『富田林5、了解』

『富田林8、了解』

『富田林2、了解』

『富田林1、了解』

二階堂少佐の言葉に、各局から応答が入る。

その間にも逃走車は、国道309号へと突き進んでいた。

『富田林1、閉塞作戦実行します』

「沿警21、了解。

くれぐれも無理はしないでください」

『富田林1、了解』

「そして我々は、衝撃の瞬間を目撃することになる。

前方のパトカーから逃げるように、右折した逃走車が見たのは、前方に立ち塞がる1台のパトカーであり、それにスピードを緩めずに突っ込んだのだ」

大きな衝突音に続いて、ガリガリと破碎音が響き、パトカーのバリケードは突破された。

「沿警21より富田林1。

被害状況を知らせ。

繰り返す、被害状況を知らせ」

呼び掛けても雑音ばかりで、応答がなかった。

無線機を片手に握り締めていた二階堂少佐は顔を上げると決断した。

「沿警21より各局。

本車は追跡を継続するが、2台パトカーを残置させ、現場を保存し、富田林1乗員の救助に当たれ。

以上、沿警21」

『『『了解』』』』

全車から応答が入った。

ここからは、警察により一般車両が規制されていない区間である。

「沿警21より各局。」

逃走車は国道309号に入り、川西方面に逃走。

どうぞ」

『大阪本部、了解』

国道309号は、三重県熊野市から大阪府大阪市に至る一般国道である。

特に富田林を通る区間は、片側二車線ではあるが、交通量も多く危険であった。

「さて、陸軍は問題外として、どう捕まえようか？」

「第一作戦が失敗した以上、速やかに二の矢、三の矢を考案し実行する必要がある。」

何故なら、その間にも逃走車は逃げ続けているからだ」

「止めるにしても、スピードを落とさせないといかんよな。」

あのスピードはぶつけたら、返り討ちに遭うし、なんと言うか、入り組んだ狭い路地にも追い込まんとこいつは止まらない」

佐竹中尉の呟きは、正論だった。

「沿警21より、富田林署管内。」

逃走車は、川西南交差点を直進。

奈良方面へ逃走中」

『富田林6より沿警21。』

板持南交差点に向かっており、2分後に到着予定。

どうぞ』

「了解」

板持南交差点は国道309号と府道21号とが交差する場所であり、直進すれば奈良県御所市、河南町方面であり、左折すれば富田林市街、河南町方面、右折すれば富田林市の佐備や東条地区、河内長野市に通じている。

「どうにかして、右に向かわせられませんか？」

佐竹中尉は言う。

「分かん。」

私らにできることは、何も無いからなあ。

まあ、やってみるか。」

二階堂少佐はそう答え、富田林6に指示を出した。

「沿警21より富田林6へ。」

逃走車を板持南交差点を東条方面へ誘導せよ。

手段は問わない。

どうぞ」

『富田林6、了解』

「海軍や警察との追いかけてこも、もう終わりが見えてきた。

そう、車が走るのには、エンジンがガソリンを燃焼させて、エネルギーを産み出し、それをタイヤに伝えて回すからである。

つまり、ガソリンが切れれば自然と止まるのだ」

命令を受けた富田林6はタイミングを計っていた。

そうして、絶妙なタイミングで道路を封鎖した。

煽りを受けて、逃走車は右折するしなくなる。

右折した逃走車を追うように、沿警21のクラウンも右折する。

『富田林6より沿警21。』

これより、309号を進み、その先の中佐備交差点にて合流します。

どうぞ』

「沿警21、了解」

富田林市立第三中学校の横を、猛スピードで走っていく。

校庭からは中学生の歓声が聞こえる。

ここまで来ると、田畑も多くなってきた。

大阪府内ではかなりの規模の穀倉地帯と言えるのが、富田林市含む南河内地域である。

「緊急車両、交差点進入します。

交差点進入します」

閑静で平和な町がサイレンの音に色に染められていく。

「止まれ。

左に寄せて止まれ」

しかもクラウンの燃料計はすでに、emptyの近くまで来てい

る。

「艦長、燃料が……燃料が足りません」

「そうか。」

それは奴も同じはずだ。

これは奴との根比べだと思え。

それで佐竹中尉、銃と車、どちらの腕前の方が上かね？」

「普通に車ですね。」

銃は、なんとか当たるレベルでして。

恥ずかしながら」

「そうか。」

それでも使うときが来るやもしれん。

そのときは躊躇うなよ」

今は中佐備交差点を青信号で通過したところだ。

右折すると彼方おちかたや滝谷不動方面に、左折すると国道309号に抜ける農免道路がある。

ちなみに、農免道路というのはWikipediaによると、通常ガソリン（揮発油）の取引には揮発油税がかかるが、農林漁業用機械に消費されるガソリンについてはそれを免除することになっている。

しかし、取引の際にそのガソリンが何に使われるのかを確かめるのは現実的ではないため、農林漁業用機械に消費される分の揮発油税に相当する額を財源として道路を整備することで、揮発油税の免除に代えている。

この事業を「農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」と言い、その道路を一般に農免農道（農免道路とも）と呼ぶ。

言ってしまうえば、税金の無駄遣いである。

話を戻すと、現在、中佐備を抜け、龍泉と呼ばれる地区に入ろうかと言うところである。

この先には、東条駐在所が置かれ、警官が1人常駐している。

『富田林15より沿警21。』

現在、東条駐在所前にて待機しております』

「了解」

駐在所のそばには、富田林市立東条小学校がある。

そこに逃げ込まれでもしたら、海軍や警察の責任問題に発展する。
「対面二車線の府道21号は、一車線の幅が狭く、運転する人にとつてははみ出ることもある。」

そんな場所でも、逃走車のスピードは大して変わらなかった」

「危ない、スピード落とせ」

逃走車を強制的に止めることは、諦めることにしたようだ。

「緊急車両、交差点進入します」

龍泉を過ぎ、パトカーは勾配の緩い坂に入っていた。

『河内長野8より沿警21へ。現在、東阪三日市線を甘南備方面へ走行中。』

指示求む。

どうぞ」

「沿警21より河内長野8。」

現在、逃走車は蒲と呼ばれる地区を通過した。

もうすぐ、甘南備に到達するはずだ。

現時点の場所で待機せよ」

無線交信の間にも、金剛コロニーと呼ばれる大阪府立富田林支援学校を中心とする障害者支援施設群の前を通過し、甘南備に入った。

とは言え、甘南備も広い。

今いる場所は、バス停で言うところ甘南備口と呼ばれているところの手前である。

「沿警21より各局。」

逃走車は右折。

半分の車両は追跡を継続し、半分は沿警21に追隨せよ。

どうぞ」

『『『『『了解』』』』』』

「そこで我々は、再び衝撃の瞬間を目撃することになる。

右折した先は、細く急な坂でスピードが出しづらい。

先に回り込んだ沿警21に逃走車は衝突した。

そのまま、逃走車は動かなくなる」

「動くな。」

両手を上げて、車から下りろ」

佐竹中尉と二階堂少佐に銃を向けられた男は、ゆっくり車から下りた。

後続していた間宮中佐や運転手だった海軍兵、大阪府警の警官らは銃や盾を片手に待機している。

「道路交通法違反で現行犯逮捕する。」

漁業法違反についても、詳しく聞かせてもらおうか？

いいな?」

両手に手錠をかけられた男を車に乗せてから、二階堂少佐は無線を入れた。

「沿警21より大阪警備府及び大阪本部へ。」

午前9時42分、被疑者を道路交通法違反の容疑で現逮。
どうぞ」

『大阪警備府、了解』

『大阪本部、了解。』

大阪本部より警戒中の各局へ。

西堺管内にて発生した特別事案は解決。

警戒体制を解除、通常勤務へと移行せよ。

以上、大阪本部』

「ありがとうございます。」

迫力の画が撮れましたよ。

放送前に、編集したの送りますね」

大阪警備府庁舎内の応接室にて、二階堂少佐はテレビ局のスタッフと話していた。

「午後の新幹線で帰る予定ですから、もう出ます」

「分かりました」

「佐竹中尉、郵便を預かっております」

長かったようで短い追跡劇が終わり、佐竹中尉は受付にいた。

「ああ、ありがとう。」

差出人は、ああ、あいつか」

封筒を一瞥して、封を切る。

「拝啓 佐竹紀一さまへ」

4月に入り、東京の桜も見頃を過ぎたぐらいです

配属の内示を知らせずに、大阪に行ったこと、私は怒っています

4月の15日に、仕事で大阪に行くので、覚悟していただきますね

ライブするから、暇だったら来てね♥

敬具 2015年4月7日 相良夕子

追伸、近々お母様がそちらに挨拶に向かわれると言っていました
よ」

便箋を投げ捨て、踏みつける。

封筒のなかを見ると、もう2枚紙が入っていた。

「捨てても無駄ダゾ♥

以下同文」

「畜生」

これも投げ捨てて、踏みつける。

最後の紙には、こうも書かれていた。

「これがチケット代わりダゾ♥

忘れるナヨ!

追伸、彼女を連れてきてもいいゾ」

「畜生、畜生」

「佐竹中尉、抑えてください。」

どんな内容でも、踏みつけるのはまずいですって」

「離せえ、離してくれえ。」

「これは、これだけは処分しなくちゃならねえ」

「落ち着いてください」

「こうしてこの夜も過ぎていくのだ。」

4月15日(日)

「今日に限って、なんで仕事じゃないんだ？」

ライブチケット片手に、溜め息をつく。

昨日まで、書類の山に逐われていた佐竹中尉にとって、待ちに待った休日であった。

それでも気が重いのが、今日と言う日である。

「制服で行くか」

ひとりごちりながら、着替える。

冬用の第1種制服である。

黒く糊の利いた制服は、若い佐竹中尉ですらも、一端の海軍軍人に仕立ててくれる。

昨日、手紙と同時に届いたメールによつて、朝から出かける羽目になった。

「大正駅の地下鉄乗り場階段そばに、10時に来いとは、暴君ぶりは変わらないなあ。

うん、これでよし」

白手袋を入れた革のカバンを持ち、警備府をあとにする。

禁足令が発令されているとは言え、定期修理中の艦艇乗員には無意味に近い。

今乗る船がないからだ。

ごく稀に、特設陸戦隊を編制する場合があります、その場合は歴戦の沿岸警備部隊将兵が中心となることが多い。

警備府正門脇の受付で、目的を告げて外に出る。

「佐竹中尉、外出許可あり。

目的は……はい、了解しました。

気を付けて、いってらっしゃい」

「ありがとう」

警備府から少し歩いたところに、八幡町という南海バスの運営するバスの停留所がある。

大阪警備府最寄りのバス停で、南海堺駅西口までのバスがある。

そこからは、南海本線があり、岸里玉出駅のところが高野線が合流し、新今宮駅でJR線、終点なんば駅にて、JR線、近鉄線、阪神線、地下鉄線に連絡している。

大正駅に向かうには、新今宮駅で大阪環状線に乗り換える必要がある。

おおよそ35分もあれば、大正駅に到着できる。

大正駅の地下鉄乗り場階段脇にて、時間がくるのを待つ。

「やつはろー」

誰かに話しかけられたようだ。

見るとコスプレを着た女がいたが、軽く無視する。

「その海軍コスのお兄さん？」

「こんぱっぱー」

「どちら様でしょうか？」

「ひどいなあ、まったく。」

「幼馴染みの顔も忘れたのかね？」

「私には人の仕事着をコスプレ扱いする知り合いはいません」

「ごめんよ。」

「だから無視だけは止めてえ」

「分かりましたよ。」

「で、今から何するんですか？」

「夕子さん？」

あるアニメに登場する高校の制服を着て眼鏡をかけた姿は、そのアニメに登場するモブキャラのようにも見える。

「男と女が二人つきりですることは1つよね？」

腕に抱きつきながら言うが、佐竹中尉には皆目見当がつかない。

「分からないの？」

「デートよ、デート。」

「あんたの朴念仁は昔からねえ」

もしくは、セックスも選択肢としてはあるだろうが、この国の貞操観念は江戸時代から大して変わっていないから、娼婦が相手でもない

限り、付き合ってもいないのに手を出すということとはしないのだ。
「さつきまで、打ち合わせしてたのよ。」

今夜のライブのね」

「そうなんだ?」

「うん。」

でもね、私が決められることなんて、一つもないから。

暇で暇で仕方なかったのよ」

物憂げな様子を浮かべて言う。

「アニソン歌手ってそんな感じなんだ?」

「まあね。」

有名な人なら裁量も多いんだろうけど、私みたいに駆け出しだと
ねえ。

大抵、プロデューサーさんが決めちゃうからね。

それにしても、あんたは役職持ちなんだって?」

「一応はね。」

「それでも、艦のNo. 2ですよ」

「そんなのでも、役職持ちなんだあ。」

いいなあ。

よし、難波行こう、難波。

あんたに一杯、奢らせてやる」

「ほどほどにお願いしますよ。」

お金ないから」

地下鉄大正駅は大阪市営地下鉄長堀鶴見緑地線の駅で、大阪市が市
内を中心に張り巡らした地下鉄道網の構成要素の1つであった。

ホームの上で、電車が到着するのを待つ。

「各停、門真南行きは6両で参ります。」

ホームの白い線の内側でお待ちください」

「最近はどう?」

「ごはん食べてる?」

「一応は。」

「これでも艦のご飯を預かってますから」

「初任給ってどのくらいなの？」

「貰うまで詳しくは分かりませんが、23万円位らしいです」

「ふうん、さすが公務員、民間より高いわね」

一応、軍人にも公務員的な呼び方がある。

例えば、自衛官は特別国家公務員と呼ばれているが、同じように陸海空軍軍人も国家公務特別職員と呼ばれることがある。

「まあ、アニソン歌手も楽じゃないわ」

「次は西長堀、西長堀。」

地下鉄千日前線はお乗り換えです」

「そろそろ、乗り換えだから。」

荷物持った？」

「持ちっぱなしですよ」

車両から下りて、ホームを階段に向けて歩いてみると、発車メロディとともにホームから車両が滑り出ていく。

「次の環太平洋共同演習は来年？」

「そう、来年。」

どこの部隊が派遣されるとかは知らんけどな。

まあ、うちかもしれんけども」

「知り合いがそれを取材に行くんだよ。」

外国系のメディアなんだけど、

もしかしたら、ハワイでそいつと会うかもね」

「まだ決まった訳じゃないって」

「でもねえ、前に会ったとき、C4Iシステムがどうか言ってたんだよ。」

それでC4Iシステムって何？」

「C4Iシステムって言うのは、Combat Communication Command Control Information 戦闘 通信 指揮 統制 情報の頭文字を纏めたものなんだ。」

そして戦場の状況を友軍部隊と共有することで、戦闘の効率化を図るのが目的なんだけど、現在、陸海空軍共通で使用されているのが、LINK16って言うものなんだ。

例えば、これによって、友軍部隊と敵軍部隊の入り乱れる中でも、海

軍は艦砲射撃ができるし、空軍も空爆ができるから、ありがたいシステムだね」

「そいつが何か、新しいC4Iシステムを日本海軍が試験中とか言っていたなあ。」

「何か知らない？」

「御堂筋線ホームに入り、

試験艦 あすか”かもね、それって。」

「まあ、機密の塊だから、取材はできないだろうけど」

「ふうん」

「部隊研修の名目で”あすか”内部を見学したことのある、と言うよりも、皇国軍士官たるもの万能であれの不文律のある国防大学校で教育を受けた佐竹中尉は、電子戦にもそれなりに造詣が深い。」

「だからこそ、ある程度はそのシステムにも想像がついている。」

「しかし、その内容は米軍にすら極秘の機密事項である。」

「もしばれたら、米軍は五月蠅いだろうというのが、本音である。」

「誰も厄介事には、首を突っ込みたくないものなのだ。」

「不用意に民間人に漏らすことは許されない。」

「まあ、いいわ。」

「なんばパークス行きましよ」

「はいはい」

「なんば駅に乗り入れる鉄道会社はかなりの数に上る。」

「JRに南海が2路線、近鉄、阪神、地下鉄が3路線、毎日ここで発着する電車は、数百を越える。」

「そして、1日に数万もの人間が利用しているのだ。」

「人多いわね。」

「この日に来たの間違いだっただかしら？」

「それに関しては、激しく同意します。」

「明日じゃダメだったんですか？」

「明日なら仕事だったのに」

「せっかく誘ったのに。」

「で、今日暇だったら何してたの？」

「古本屋でも廻ってたでしょうね」

「味気ないわね。」

しかも、本の虫なところは変わらないなあ。

紀子さん、怒ってたわよ。

紀一は自分の本も持ってかないんだからって。

置いとける部屋はあるの？」

「ない。」

あくまで、艦艇乗員は艦内で寝泊まりするのがルールだから。

それを知らない母さんじゃないんだけどな」

「そう。」

そう言えば陸軍に知り合いはいないの？」

「いるにはいるけど、そんなに偉いさんじゃないよ。」

俺と同じで、まだ下っ端だし」

「いやねえミュージック・ビデオを録るのに、アニメの内容と被せたいからって」

「なら陸軍の広報と関東方面地方協力本部辺りに、話を持っていけばいいんじゃないか？」

最近じゃよほどぶっ飛んだ内容でもない限り、許可は下りるし。

亡命のイージス艦なんか良い例だよ」

亡命のイージス艦とは、福岡泰敏原作の小説を映画化した作品で、日本海で突如、海軍の指揮下を離脱逃走したイージス艦とそれを巡る日本と中国・北朝鮮との三つ巴の暗闘を描いた作品である。

日本の防諜能力の低さを赤裸々に描いた作品でもあった。

「ああ、あれねえ。」

すごかったよねえ。

最後、中国の核ミサイルでめちやくちやに吹き飛んだのよね」

「そう。」

どういう構図で、どんな映像を撮りたいかを素直に伝えれば、許可は下りるよ」

「プロデューサーさんに言ってみるわ。」

流石、軍のことなら詳しいわね」

「国防大学校卒業者は皆、皇国軍士官は万能であれが信条だからね。辞令1枚で、全然違う仕事に行かされることもあるし、色々な知識が必要になるよ。」

歌手が自分の歌の歌詞と振り付けを全部、覚えてるようにね」「なるほどねえ。」

ちなみに、これがそのミュージック・ビデオのアニメです」

取り出したチラシには、A E G I S 〽鉄壁の楯くと書かれていた。

「これは海軍じゃないんですかね？」

どこに陸軍の要素があるんだよ？」

「あれ？」

そうだっけ、どれどれ。」

確かにそうだね。」

詳しく見てなかったから、知らなかった。」

テヘペロ」

「国防省広報室許可ありか、それに関連する撮影なら、繰り返しだけど普通に許可は下りるよ」

「近畿厚生局麻薬取締部じゃ。」

動くな、全員逮捕や」

駅のホームでは、厳ついおじさんが染髪した若い兄ちゃんを連れて、ヤクザらしき人間を取り囲んでいた。

そんな風景を超え、列車は難波に着こうとしていた。

「次は難波、難波。」

お出口は、左側です。」

千日前線、四つ橋線、JR線、南海線、近鉄線、阪神線はお乗り換えです」

ホームに下り立った二人は改札口の

「アニメイト行こう。」

アニメイト、私の心のふるさと」

「全国に何か所あるんだよ？」

「もともと、腐ってるから大丈夫。」

心配ないわ」

「答えになつてねえよ」

「おつ、鋭い突っ込み。」

流石、大阪勤務！」

「まだ大阪には数日しかいてねえよ」

「だから何？」

「大阪人とはまだ会ったことはねえよ」

半ば引き摺られるように、アニマート難波店に連れていかれる。

「何をやる気だ？」

「大丈夫、今じゃ軍自体が病気じゃないの。」

苦しいのは最初だけ、それを過ぎれば、立派なアニヲタです」

「やめろ、俺は立派な軍人であつて、アニヲタじゃない」

「カモン、カモン、ベイビー。」

立派な軍人？

そんな幻想は私がぶつ壊す」

「いやああああ」

傍目から見て、関わりたくない二人組が歩いていく。

端から見れば、コスプレ×コスプレの二人は、周りから遠巻きにさ

れていた。

「おおー、ここ凄いね」

「この辺の古本屋にでも行ってきます。」

終わったたら、電話してください」

アニマートの入口にて、目を輝かせて感嘆の言葉を漏らす彼女を放

置して、佐竹中尉は戦略的撤退を敢行しようとした。

「行かせると思ったか？」

襟首を掴まれ、店内に引きずり込まれる。

「ここが全て遠き理想郷なのだよ。」

ムスリムにとつてのメッカは聖地、アニヲタにとつての聖地はアニ

マートなのよ！」

ないとも言えないが、大きくもない胸を張って宣言するが、あくま

でも彼女の意見であり、アニヲタの総意ではないのである。

首根っこを掴まれた佐竹中尉は、着ていたワイシャツが頸動脈を絞

めたために、息ができなかった。

そのなかでも、声を絞り出す。

「恥辱にまみれるぐらいなら、舌噛みきって死ぬ」

「それは困るわね」

何かを思案する表情を浮かべ、考え込むその隙に、アニマートから逃走する。

「ああ、待ちなさい。

仕方ないわね」

そう言つて、鞆からスマホを取り出す。

「警察呼ぶわよ。」

「そうやって有ること無いこと吹き込んでやるから」

「すみませんでしたー」

なげやりに、棒読みに謝罪（笑）をしておく。

いつの時代も、男は女に勝てないのだ。

「よし。」

相良探検隊は、アニマート難波店に突入す。

総員、我に続け」

「続きたくありません」

「そう言いながらも、とぼとぼ付いて行く。

気分は、^{督戦隊}味方に狙われるソ連赤軍歩兵だ。

「これなら陸軍の空挺の方がかなりましだ。」

「いや、^{Air Force Foreign Operations Service}空軍対外作戦部隊の訓練の方がましだ」

人の救出活動や、政府専用機における警乗活動、撃墜された戦闘機パイロットの^{Combat Search And Rescue}戦闘搜索救助活動を担う特殊部隊的性格の強い部隊である。

それだけに訓練も苛烈で、この部隊には陸軍の空挺レンジャー持ちが複数いるのだ。

「もしもし」

「そうこうしているうちに、佐竹中尉の携帯に着信が入る。」

『佐竹中尉か？』

今、どこにいる?』

「難波です」

『たった今、非常呼集が発令された。』

点検中の各艦にあっても、対象となっている。

堺駅に迎えをやるから、至急、警備府に戻れ』

「了解。」

すぐに戻ります」

『急いで、呉に向かう。』

準備だけはしておいてくれ』

『分かりました』

電話を切ると、相良夕子に伝える。

「仕事が入った。」

ライブには行けそうにない。

すまない」

簡潔に伝えると、彼女の目には涙が浮かんだ。

数年の付き合いだが、それなりに情もあるということだろう。

「仕事じゃしょうがないね。」

頑張つてきなよ」

「本当にすまない」

佐竹中尉は頭を下げると、踵を返して歩いていく。

南海なんば駅から特急に乗り、南海堺駅を目指す。

堺駅について、西口に出ると、青いパトランプを載せたクラウンが

待機していた。

「警備府警備隊の千葉兵曹であります。」

二階堂少佐が警備府にてお待ちです。

すぐ向かいます」

「分かりました」

非常呼集による出撃の場合、稼働艦艇の乗員よりも、非稼働艦艇の乗員を優先することがある。

今回はその場合だ。

サイレンこそ鳴らしていないが、クラウンはかなりのスピードで警

備府に向かう。

今はそれほど事態なのだ。

大阪警備府の正門を超えると、二階堂少佐の他にも、九十九少将が待っていた。

「遅くなりましたが、佐竹紀一中尉、ただいま戻りました」

「うむ、ご苦労。」

で、状況だが、米国防情報局筋によると、仁川沖合にて韓国海軍艦隊が集結しつつあり。

どこへの攻撃を意図したものは不明だが、日本皇国領域である対馬か竹島のどちらかだろうというのが大本営の結論だ。

よって、先程政府より各領域の警備防衛態勢の強化が命ぜられた。ただいまより、大阪警備府は第一線配備となる。

二階堂少佐と佐竹中尉は呉工廠で点検中の”ひなぎく”を受領し、竹島の警備の応援につけ。

以上だ」

「了解」

「しつかり頼んだぞ」

佐竹中尉は手荷物を持ってくると、二階堂少佐とともに、新幹線に飛び乗った。

そして2日後の朝には二人は、”ひなぎく”にて海の上に出ている。

「合戦準備。」

”ひなぎく”の可燃物は全て下ろしたな？」

「はい、全て確認しました」

「よろしい。」

今後、1週間以内に紛争が勃発する可能性が高い。

艦内各部にあつては、最大限のパフォーマンスを発揮できるように気を付けてほしい。

以上だ」

竹島

行政区分上、島根県隠岐の島町に属するその小島の周辺海域には、漁業資源が豊富で、よく日本の漁船団が操業している。

また戦後には日韓の係争地となり、防衛のために島全体が軍施設の指定を受けており、民間人の立ち入りは厳しく制限されている。

この島の沖合では、幾度となく日韓両軍が衝突し、両軍兵士の夥しい血が流れたのだ。

竹島沖 2017年4月25日午前9時23分

12年前、福知山線で未曾有の脱線事故が起こった日の午前である。

そんな日に事件は起こった。

「艦隊司令部より通報。

海軍機が先程竹島沖合、鬱陵島方面にてイージス艦2隻と揚陸艦数隻を含む12隻の敵性艦隊を確認。

至急、これに対処せよとの緊急電文です」

「戦闘部署発動、対水上戦闘用意、総員戦闘配置につけッ。

これは演習ではない。

繰り返す、これは演習ではない」

イヤホンマイクを片手に告げる。

「竹島防備隊司令部より入電。

”これより竹島防備隊は戦闘状態に入る。”

とのことです」

「分かった。

それで、松江の司令部は何て言ってる?」

「松江の艦隊に、漁船団を警護して帰投するように命令が出ています。

本艦には、竹島海域の警戒任務が与えられています」

「んな、無茶な。

こっちは排水量1000トンほどのフリゲート、たいしてあつちは3000トンから7000トン以上の駆逐艦数隻の艦隊、最初から

「こつちに勝ち目はねえよ」

苦々しげに佐竹中尉は吐き捨てる。

「空軍に上空直掩を要請しろ。」

航空優勢を奴らに渡すな。

「まったく、定期修理の前倒しから、ここに派遣されて数日、もう少しのところまでできたのに、やつらももうちよつと待てなかったのか？」

あと2日で”ひなぎく”は大阪警備府に戻れたのだ。

それに砲雷科要員の長として、一番の懸念は空だ。

「上空直掩は既に到着しています。」

IFFレスポンス、小松、第221²戦闘飛行隊^{1F}のドラグーン・フライトの4機です」

「ならいい。」

それで艦長はどこだ？」

「えっと、艦長は……」

『私ならトイレから離れられない。』

つまり、指揮が取れる状態ではないのだ。

すぐに合流するつもりだが、その間は先任に指揮権を一任する。

あとは頼んだぞ。

やべーな、昨日の胃薬飲みすぎたかな。

便秘になっちゃったものなあ』

インカムが艦橋とトイレで繋がりはなしである。

佐竹中尉は黙って、インカムを切った。

「聞かなかったことにしよう。」

うん」

「私もそれがいいと思います」

二人はなにも聞いていないという建前で押し通すつもりにした。

「あつ、電探にて目標を捕捉。」

イージス艦2隻と揚陸艦数隻を含む艦隊です。

通報通りです」

「周辺の友軍艦艇はどうだ？」

「第三艦隊、舞鶴鎮守府艦隊が南下中、第二艦隊、佐世保鎮守府艦隊が

対馬を固めて、第四艦隊、呉鎮守府艦隊が関門海峡から北上しています」

「現状では、我々は水上艦隊には頼れないわけか。

しかし、ここで我々が戦わねば、陸空軍に笑われますよねえ。

こうなれば、使えるものは全部使いましょ。

陸空軍部隊に追加で要請。

内容は対艦攻撃の実施をだ。」

「言われなくてもやるとは思いますが、打電しておきます」

「その影に紛れて、接近したい。」

砲雷同時戦用意だ」

韓国海軍艦隊イージス艦”栗谷李珥” CIC

「今回の作戦目標は、我が国が独立を奪われた際、そのどさくさで日本に奪われた独島の奪回である。

傲慢な日本人に鉄槌を下すときが来たのだ」

艦隊の指揮を執るのは、最先任将校で第72戦隊司令官である李世宗少将だ。

彼は全艦隊の将兵に告げた。

麾下の艦艇群は、第7機動戦団を構成するうちの2個の戦隊と、各戦団から引き抜かれた艦艇からなり、揚陸艦3隻、補給艦1隻を守るために輪形陣を組んでいた。

「敵空軍の築城基地には、空軍の戦闘機隊が空爆を実施するはずだ。

海軍が空軍よりも、活躍せねばならん。

総員、独島に太極旗を掲げるのだ」

司令官の李世宗の言葉に、反日教育のなかで育ってきた将兵たちから歓声があがる。

韓国海兵隊を中心とした上陸部隊であれば、日本軍竹島駐屯部隊を壊滅させられるはずだと信じていた。

「対潜警戒を厳とせよ」

「しかし、司令部は対空および対水上戦闘を下命していて潜水艦のことなど触れてはいませんが」

「日本軍は潜水艦の運用に関しては、戦前からの蓄積がある。」

それに、独島沖合は敵の海だ。

空や水上、水中からの波状攻撃を受ければ、我が軍に勝ち目はない

よ」

”栗谷李珥”艦長は部下にそつと命じた。

韓国軍の特徴は、対日と知ると火病ファッピョと呼ばれる1種の興奮状態になる将兵が多いことだ。

上は指揮官から下は水兵まで、熱狂して冷静な判断を下す者がいなくなる。

もし、そこで敵の攻撃を受ければ、損害への対処も出来ずに、総崩れになる。

しかし、ごく稀に冷静な者もいる。

そういった者たちによって、韓国軍は動かされている。

「了解」

水雷士はマイクをとり、全艦に放送した。

『艦内各部に通達』

対潜警戒を厳とせよ』

スピーカーから水雷士の声が響いた。

竹島沖合、第六艦隊潜水艦伊ー501／SSー501”しようかく

”

「音探が目標を探知。

音紋照合の結果、駆逐艦”世宗大王”の可能性、99.7%。

方位、305度、距離、23000」

「全艦に音響規制を発令する」

「了解」

潜水艦には、発令所と呼ばれるCICのような場所がある。

そこでは、艦長含む艦内の主要幹部のほとんどが待機している。

また、そこには駆逐艦のCICのように、モニターが設置されていて、そこには音響情報を視覚的情報に変換して表示できる。

「深度100につけ。

敵潜水艦の存在は？」

「音探では確認されておりません」

「目視にて目標を確認する。

潜望鏡深度まで浮上せよ」

潜水艦に搭載される魚雷は、12式長魚雷である。

これは、艦載用の短魚雷である89式／5式魚雷よりも、射程が長い。

大体、12式の射程が3000メートルを上回るため、短魚雷との差は20000メートルを軽く超える。

「ワン・トゥー」

眩きながら、潜望鏡を一回転させる。

潜望鏡のグリップを折り畳み、潜望鏡を収納する。

「副長、奴さん警戒を全くしていないぞ。

奴さんはアホなのか？」

「と言うよりも、過去の戦闘では潜水艦が参戦しなかったので、考慮のうちに入っていないのでは」

艦長の問いに、かけていた眼鏡を押し上げた副長が言う。

「隙を見つければ一撃加えるのが、我々潜水艦乗りの伝統なのだがな。

封緘命令書の内容に従い、本艦は戦闘状態に入る。

戦闘部署発動、総員、配置につけ」

先日の出航時に手渡された封緘命令書を担当海域に到着後、開封したところ、敵性艦隊を発見次第、即座の邀撃の許可が出ていた。

「アイ・サー」

艦内各部に設置されたランプが黄色から赤に変わる。

このランプの緑色は航海中を、黄色は音響規制を、オレンジは教練戦闘つまり訓練を、赤は戦闘中を意味する。

あまり大きな音を出すことができない潜水艦ならではの装備である。

「これはどういうことだ？」

「コマンダー・ニワ」

発令所に怒鳴り込んできたのは、駐日米国大使館駐在海軍武官であるフランクリン・リー大佐であった。

と言うのも、日本皇国の潜水艦技術に目をつけたアメリカ政府は、

駐在武官による見学を強引に要請してきた。

その対象である日本皇国とスウェーデンが共同開発したスターリングエンジンは、低速から中速までカバーできる高性能品である。

財政難により予算削減を求められた米国国防総省では、次期攻撃型潜水艦計画を高価な原子力潜水艦ではなく、比較的安価な通常動力型潜水艦にする方向で動いている。

その第一段階が、海軍武官による潜水艦の見学である。

その見学側の我儘によつて、”しようかく”は無関係な人間を戦地に連れて行く羽目になった。

「リー大佐、落ち着いてください。

たった今、本艦は本国からの命令に従い、戦闘を開始しました」

「戦闘？」

「どこをやつてるんだ？」

「韓国海軍です」

「まさか、ここは竹島なのか？」

「コリアン・ネイヴィーを攻撃するのかね？」

まさかの答えに、リー大佐は口をパクパクさせるほかなかった。

「その通りです。」

本艦の作戦行動を見学するという名目で乗艦されたのですから、我々の行動にけちをつけないで頂きたいものですな」

「しかし、我が国の外交方針は日韓の間でのいかなる紛争にも中立を維持している。

それは変わらない。

そのどちらか一方に荷担したという事実すらあつてはならんのだ」
リー大佐の背後に、前任伍長の姿を認めた丹羽中佐は切り出した。

「前任伍長、リー大佐を自室に軟禁しておくように。」

本艦の行動を妨害されることがあつてはならん」

「了解」

前任伍長と2名の水兵に拘束されたリー大佐は大人しく、自室に向かつて歩き始めた。

「魚雷戦用意。」

目標、駆逐艦”世宗大王”」

艦長の命令に、艦内はにわかに活気づく。

「魚雷は全門装填を確認。」

命令あり次第、いつでも撃てます」

「発射用意」

「発射管扉開け。」

注水始め」

「完了まであと5秒、4、3、2、1。」

完了しました」

「諸元入力完了」

「1番2番、撃てー」^{テエーッ}

前方の発射管から、必殺を誓った魚雷が2本、海中に放たれた。

海中を50ktの高速で進む2本の魚雷は、”世宗大王”の舷側目

掛けて突き進んでいた。

そして、時間はきた。

「命中まであと5秒、4、3、2、1、じかあーん」

ストップウォッチを片手に、水雷長が静かに叫ぶ。

その直後に音探を担当する音測員がヘッドセットを外す。

外からはソナーでなくとも、爆発音が2発聞こえてきた。

「命中音、2。」

魚雷は両方とも命中しました」

「よし、急速潜航。」

深度300につけ。

敵艦をやり過ぎすぞ」

横須賀鎮守府船越地下指揮所

日本皇国海軍の外洋作戦部隊を束ねるのが連合艦隊であり、その司令部である。

戦時中に、軽巡“大淀”から横浜市の日吉に移ってから、戦後、軍備の再編成の際に、横須賀鎮守府の一画である船越地区に移転した。そこから、72年、一貫して陸上に司令部を置き続けている。

「第六艦隊の哨戒線に接触しました。」

あの位置だと、伊ー501”しょうかく”と戦闘に突入したものと考えられます」

モニターを見続ける連合艦隊司令長官に参謀が補足を入れる。

壁に掛けられた大型モニターには、竹島を含む日本全図が表示されていて、敵味方問わず部隊の展開状況が一目で分かるようになってい

る。「儂の見るところでは、対馬防衛に二艦隊は必要ないね。」

鎮守府の艦隊に任せればよろしい。

いま、動ける艦隊はすべて竹島に向かわせた方がいい」

米内光隆連合艦隊司令長官は言う。

「しかし、韓国海軍の3隻目のイージス艦を牽制するためにも、二艦隊は動かせないのでは？」

頭の固い参謀が、意見具申する。

「わざわざ、竹島に2隻も張り付けたんだ。」

残りの1隻は本土防衛に残すのが常識だと思いが。

それに、貴官は沿岸警備部隊がそこまで弱いと思っているのかね？」

「いえ、そのようなことは」

「まあ、練度だけなら、連合艦隊よりも格上な連中だし、イージス艦の1杯や2杯、返り討ちにしそうですな」

もう一人の参謀が、髭をしごきながら言う。

「分かりました。」

対馬沖合の木村提督へ、移動命令を発令します」

昔の大名行列と揶揄されたほどの司令部幕僚団の影はなく、今では数えるほどしかない。

司令長官をはじめ、参謀を束ねる参謀長、そして各2名ずつの作戦と補給兵站、航空の参謀たち、あとは長官付きの副官と、司令部付きの従兵が3名ほどで構成されるのが、現在の連合艦隊司令部である。陸上に司令部を置いていたとは言え、この程度の人数であれば、連合艦隊所属の大抵の艦艇に移乗可能だ。

「現場で踏ん張っているのは、沿岸警備部隊だったな？」
「その通りです。」

また、霞ヶ関の沿岸警備部隊司令部とはホットラインが繋がっております」

「交戦の回避は行われなかったようだな。」

絶対に沈むなよ」

創設期に、英国王立海軍に指導を受けた旧海軍とその組織を受け継いだ日本皇国海軍は、見敵必戦の敢闘精神を持っていた。

だからこそ、自らの戦力差を理由として戦闘を中止して、撤退した事例は少ない。

「空軍無人偵察機隊よりの偵察写真です。」

イージス艦が1隻、足りません。

被雷して沈没したか、損傷したので退避したものと考えられます」
「うん、そのまま沈んだみたいだね」

参謀の示した写真を一瞥しただけで、米内長官は判断を下した。

「しかし、長官。」

軽率な判断は危険では？」

経験不足から判断のつかない参謀と違って、米内長官は大体の状況が掴めたようだ。

「沈んだと言える証拠は2つある。」

まず1隻を除いて、駆逐艦の数が減っていないことだ。

普通、損傷艦を退避させるときには、護衛をつけるものだろう。

それに、駆逐艦群が陣形を崩してまで集結していることだ。

これは、溺者救助を行っているんだ。

だからこそ、照準用電探を使用できず対空戦闘ができなかったんだろう」

照準用レーダーの電波の強力は、警戒用レーダーの比ではない。そんなものを人体に照射するなど、まともな人間のすることではない。

そうになると、有人機クラスの大機ならまだしも、偵察機材しか積んでいない小型機であれば、光学照準で撃墜するのにはかなりの無理がある。

「まあ、そのまま引き返してくれば、御の字なんだけど、それを期待するのは難しいなあ」

付け加えるように、呟いた米内長官の言葉は日本皇国軍将兵すべての気持ちを代弁していた。

「独歩一小隊より中隊本部、送れ」

陸軍竹島防備隊は、2個独立歩兵中隊からなる独立歩兵大隊2個、地対艦誘導弾中隊、団司令部、通信小隊からなる独立混成団である。

通常は1個中隊が交代で駐屯しているが、状況が緊迫すれば、内地の部隊から増強を受ける。

が、基本は中隊規模の部隊である。

『こちら、中隊本部、独歩一小隊、送れ』

「島内のパトロールは完了した。

特に異状はない。

戦闘配備に戻る。

送れ」

『中隊本部、了解。』

既に沖合にて戦闘が始まっている。

地下退避を命ずる。

送れ』

竹島では、既にすべての将兵が、実弾を装填した小銃を片手に地下壕に避難していた。

「独歩一小隊、了解。」

終わり」

艦砲射撃を考慮して構築された地下陣地群は十分な抗堪性を持っている。

「下に向かうぞ」

小隊長である小湊真次少尉が部下たちに声をかけた。

最寄りの入り口から入り、所定の位置につく。

こういった坑道戦は、太平洋戦争中に旧陸軍が経験している。

生存者は少なかったが、その少ない経験者たちによって鍛えられたのが日本皇国陸軍竹島防備隊である。

例えば硫黄島の戦いでは、トン単位の砲弾・爆弾の雨を耐え抜き、およそ20000名の犠牲と引き換えに、およそ24000名のアメリカ兵を死傷させた。

そんな連中の弟子たちが、竹島の地下に掘られた坑道陣地で、6個の小隊が配置にしていた。

一応は、1個中隊基幹ではあるが、総兵力では2個中隊に匹敵する。「休めるのは今だけだ。」

だから、今のうちに休んでおけ。

明日にはお客さんが上陸してくるかもしれないぞ」

増強独立歩兵中隊基幹の中隊戦闘群、計300名が坑道陣地の中で、息を潜めて待ち構えていた。

「乗艦用意。」

竹島の陸さんを援護するぞ。

車両は置いてけよ。

邪魔だからな」

松江に駐屯する海軍特殊作戦部隊群海軍第二陸戦大隊、計400名が輸送艦“あさひ”に乗艦する。

米国の海兵隊に相当するこの部隊は、陸軍レンジャーやら特殊作戦やらの徽章持ちがそこかしこにいる。

もし、竹島防備隊が武運拙く壊滅しても、水上からは海軍の第一、第二陸戦大隊、陸軍の第4水陸機動旅団が、上空からは第6空挺旅団が、各々、竹島に襲来する。

それらの部隊が上陸するまでの間には、海空軍が海域を空域を徹底的に封鎖し、艦砲射撃と空爆を加える。

日本皇国軍による封鎖で、韓国軍上陸部隊は孤立し、士気はかなり落ちるはずだ。

となると、封鎖突破艦隊を編成して、竹島に送り込む他ない。

「大隊長、松江の艦隊を待つんですか？」

「その通りだ。」

今、艦隊は漁船団を護衛して、松江に向かっていているはずだ。

折り返しで、我々が竹島近海に進出する予定だ」

大隊長はそれだけ言うと、「あさひ」のCICへと向かった。

「島野中佐、部隊の乗艦状況は？」

「9割は完了した。」

残りは、今急がせてる」

「別に急ぐ必要はありませんよ。」

松江の艦隊が戻るまで、時間がかかるでしょうし……」

”あさひ”の艦長、桐村剛中佐は言う。

竹島から”あさひ”の待つ松江港までは、200kmほど離れている。

鈍足な漁船を伴っているのなら、かなり時間がかかるはずだ。

「沿警隊の艦艇が残ってるなら、そう簡単には上陸させないでしょうから、時間もありませんし」

「それもそうだ。」

まず、事故を起こさないことが大事だな」

東京都千代田区永田町・首相官邸

「それで、軍は何をやっている？」

「最前線の部隊はすべて、既に防衛作戦令に従い、戦闘に突入したそうです。」

残りの部隊も、数時間以内に戦時態勢に移行するそうです」

総理の問いかけに、国防省から出向してきた国家安全保障担当補佐官が答える。

既に、陸軍部隊には実弾が配られ、海軍は出航し、空軍も移動を開

始めている。

また、日本皇国軍は、指揮権が内閣から半ば独立している。これは、防衛作戦行動への独断専行が認められているからである。戦後より日本皇国軍は海外に展開したことは少ない。

例えば、友好国クウェートがイラクに侵攻された湾岸戦争の際には、陸軍4個旅団、また海軍の各種艦隊、そして空軍2個航空団を派遣したが、それ以外では皆無である。

海外における軍の指揮権は内閣が掌握する。権限が地域により異なる権域分離をはつきりさせているのである。「分かった。」

これからの私の仕事は、外交と臨時予算を通すことだな。

前線の将兵が、心置きなく戦えるように」

「その通りです。」

前線の兵の犠牲を無駄にはしないでもらいたいものですが」

「邪魔な外務省は動かんよ。」

「国交がないからな」

「その点は心配なく。」

うちの駐在武官が、米国で韓国軍高官と接触する予定です。

何かしらの進展は見られるでしょう」

「そうか。」

今、竹島では戦闘に突入しているのか、前線の兵は死力を尽くして戦っているのだな」

総理はそう呟いた。

「牧野国家安全保障担当補佐官、後のことは頼む。」

私は国会に行ってくる」

総理は背広を着込むと、地下の危機管理センターを去っていった。

空軍対馬分屯基地

対馬警戒隊は海栗島にあり、空軍レーダーサイト網を構成するうちの1つである。

「韓国領空内にて、多数の未確認機の反応を確認。

領空侵犯に繋がる可能性大」

「邀撃機を発進させよ。

その他の機体に関しても、空中退避を命じる。

九州航空局に交戦許可求め。

各部に注意を発令」

警戒隊司令、船倉一雄大佐は命じた。

その彼がちょうど、当直に当たっていたのが幸いした。

これが責任逃れに終始する副司令では、対処できなかつたかもしれない。

「韓国領空内にて、多数の未確認機の反応を確認。

領空侵犯に繋がる可能性大。

231FSの全待機機にあつては、直ちに出動。

これを邀撃せよ。

その他の機体に関しても、空中退避を命じる」

レーダーのモニターに映るブリップは、どちらも空軍の主力機であるF-15J改イーグルとF-2Aにそっくりだった。

「機種はF-15KおよびKF-16Cと思われ、目的は対馬もしくは空軍築城基地への攻撃と考えられる。

各基地にあつては、防空態勢を確認し、万全の態勢を整えよ」

モニターの目の前にいる空軍兵たちは、的確な指示を飛ばしている。

「注意を与えよ」

「防空識別圏付近を飛行中の機体に告げる。

貴機の飛行は通告されていない。

所属および飛行目的を明らかにして、針路を変更せよ。

繰り返す、貴機の飛行は通告されていない。

所属および飛行目的を明らかにして、針路を変更せよ」

担当の将兵が必死に呼び掛けるが、応答はない。

「未確認機^{アン}が防空識別圏を越えました」

侵入座標、対馬36A、高度3000」

「警告を与えよ」

「既に貴機は防空識別圏を侵している。

即座に針路を変更し、防空識別圏内より退去せよ。

5分の猶予を与える。

針路を変更し、退去せよ。

繰り返す、即座に針路を変更し、防空識別圏内より退去せよ。

5分の猶予を与える。

針路を変更し、退去せよ。

5分後に退去を確認できない場合、貴機を撃墜する。

以上、日本皇国空軍」

ステルス性を高める改修を受けた日本空軍の戦闘機隊は、存在を秘匿している。

だからこそ、地上の警戒隊が警告を発するのだ。

そうして最後通牒が上空の機体に突きつけられるが、なんの動きも見られない。

「九州航空局より交戦許可下りました」

「民間機を上空から退避させよ」

また、未確認機に攻撃の意図ありと認め、先制攻撃を認める。

指示あり次第、攻撃させよ」

警戒隊司令の権限のうちの1つが、独自に先制攻撃の許可を与えることができることである。

航空局を除き、政府や国会の事前承認は必要とされないが、使用は国防関連六法、航空法などによって、厳しく制限されている。

「上空の各機に告ぐ」

攻撃の意図ありと認め、先制攻撃を認める。

指示あり次第、攻撃せよ。

以上、対馬警戒隊」

空軍の第231戦闘飛行隊は、空軍築城基地に駐屯する地元部隊であった。

だから、周辺空域の状況にはどこよりも詳しい。

「北九州域内の各空港管制へ。」

たった今、北九州全域が交戦区域に指定された。

民間機の離着陸は許可できない。

現在、飛行中の機体に関しても、空域より離脱させよ」

交戦許可が下りた時点で、周辺は交戦区域に指定される。

交戦区域にいる民間機は誤射を含めて、様々な危険に晒される。

「築城基地に命令。」

追加の機体を発進させよ。

データ・リンクで周辺部隊に情報を転送せよ。

対馬、北九州全域に空襲警報を発令だ」

「空軍対馬警戒隊より対馬、北九州域内の陸海空軍地上部隊へ。」

空襲警報を発令する。

駐屯地、基地、分屯基地内への着弾に注意。

一般の市街地への着弾については、自己の安全を確保した上で、救

援活動を開始せよ」

オペレーターが一斉に各部隊へ発信する。

「5分が経過しました。」

いまだ北九州に向け、進行中」

「未確認機を敵機と認定。」

攻撃を許可する。

接近中の敵機を排除せよ」

「上空の各機に告ぐ。」

攻撃を許可する。

接近中の敵機を排除せよ」

通信が終わると、空軍兵はモニターを注視する。

「F-15Jが敵編隊と交差、ミサイルを発射しました。」

敵機の反応8、失探。

残りは50以上」

1回、針路を交差させただけで、4機の戦闘機小隊は各2機ずつ墜としたようだ。

それでも、焼け石に水、大して数は減らせていない。

「第二艦隊より、イージス艦からの遠距離攻撃を行う旨の通報あり。」

今、攻撃を開始しました」

「海軍が敵編隊を攻撃する。」

上空の戦闘機隊は退避せよ」

「SAM発射用意。」

高射隊に指示送れ」

「基地警備隊が配置につきました」

「低空よりの襲撃を警戒せよ。」

陸軍に連絡。

高射砲兵部隊に射撃準備を指示」

方面統合防空司令部を兼ねる警戒隊では、色々なところへ命令を出せる。

「新田原基地の232戦闘飛行隊、飛行教導隊を出勤させよ。」

F-2の第131戦闘飛行隊は対艦兵装のまま退避。

適当なときに、竹島に向かわせよ」

「新田原基地か？」

232戦闘飛行隊および飛行教導隊は、直ちに出勤せよ。

なお、既に231戦闘飛行隊は戦闘に突入している。

今は予備戦力が必要なのだ」

空軍兵士のなかでは、戦闘飛行隊をそのまま呼ぶ兵士と英語でのFighter Squadronを略してFSと呼ぶ兵士に分かれる。

両者の間には、大した差はないので、実際にはどちらでも構わないのだ。

「131戦闘飛行隊へ。」

対艦兵装のまま、戦闘空域から退避。

四国、中国方面に飛行せよ。

……何っ、燃料が足りない？
まで。

どこまでなら足りる？

……分かった」

モニターの前で、F-2飛行隊と交信していた将兵が受話器を下ろす。

「131戦闘飛行隊は燃料補給の途中で、空中退避を行ったため、機体燃料が足りないようです。

何とか、美保に辿り着けそうだと報告を受けています」

「分かった。

全機を美保に降ろせ。

パラを使っても構わん」

船倉大佐は間髪いれず決断する。

日本空軍の航空機には、緊急制動用にパラシュートが備え付けられている。

こうすることによって、着陸距離を減らすことができるのだ。

「了解。

そのように伝えます」

「対馬警戒隊より美保管制へ。

131戦闘飛行隊がそちらに向かっている。

着陸許可を求めろ

……ん、了解。

よろしく頼む」

「海軍の戦果、撃墜13、被弾損傷が8。

その8機は反転退避していきます。

また、第二艦隊より第二次攻撃の可否を求めています」

「大丈夫だ。

残りは我々が片付ける」

船倉大佐は言い切った。

それを見た兵士は頷くと、海軍と通話を始めた。

「はい、大丈夫です。

残りは我々が片付けます。

援護、ありがとうございます」

「対空戦闘。」

地上の各員は、攻撃に備え」

この頃になると、海栗島地下司令部にも、戦闘音が聞こえてくる。

地上の対空陣地に据えられた機関砲から砲弾、また発射機からは近距離対空ミサイルが撃ち上げられ、戦闘機やミサイルに襲いかかる。

その網を抜けた戦闘機が投下した爆弾やミサイルは、地上で爆発する。

「損害を知らせ」

爆発の衝撃による揺れが収まらないうちに船倉大佐は命じる。

「基地警備隊へ。」

損害を報告せよ。

……うん、うん、了解。

司令には伝えておく。

警備隊の報告によると、敷地内に命中弾があるものの、兵員や装備に被害なし」

「残り30機のうち、半数が反転しました。

残りは、いまだ北九州に向け進行中。

目標は、おそらく築城基地です」

地上と通話していた兵士の報告に被さるように、レーダーを担当する兵士が報告する。

「築城基地に追加で警報を送れ。

あとは、国民の生命と財産が脅かされる可能性が高い。

周辺の自治体にも、Jアラートで警報を送れ。

あとは神に祈れ」

「231戦闘飛行隊が第二撃を行う許可を求めています。

交戦区域が市街地上空となる可能性が高く、市街地上空での攻撃許可を求めています」

「許可を与えろ。

敵機を撃退せよ」

司令の言葉を受けて、空軍兵は呼びかける。

「231戦闘飛行隊へ。」

許可を与える。

「直ちに敵機を撃退せよ」

もうこのときには、第231戦闘飛行隊の稼働機全機が空に上がっていたようだ。

20機のF-15Jが一斉に敵機編隊に襲いかかる。

機数にして、およそ3対4、乱戦となったが、築城基地に向かつていた機体は全滅させられた。

対する日本皇国空軍の損害は、被弾機が4機ほどである。

「残りの敵機は全滅」

レーダーを担当する兵士が報告をあげる。

地下司令部に歓声上がるも、船倉大佐は怒鳴る。

「まだ終わった訳やない。」

静かにせい」

船倉大佐の怒声と同時に、レーダーを担当する兵士が声をあげる。

「再び韓国領空内にて、多数の未確認機^{アンノン}の反応を確認。」

敵の第二次攻撃の可能性大」

「予備部隊を出してきたか。」

なにボサツとしとるんじや。

早よう邀撃せい」

いつもの口調ではない船倉大佐の怒声に、呆然としていた司令部も動き始める。

言ってしまうと、日本皇国の竹島方面の基地は、空軍だと美保基地が1番近いが、そこには戦闘飛行隊が置かれているわけではない。

戦闘飛行隊だと北陸にある小松基地、北九州にある築城基地の2つが候補の筆頭である。

また、築城基地は距離的にも竹島にもかなり近い。

だからこそ、狙われるのだろう。

「敵の第二次攻撃隊を確認した。」

在空中の231戦闘飛行隊、232戦闘飛行隊、飛行教導隊の各隊

は邀撃せよ」

「第二次攻撃隊の数はおよそ40」

「第一次と合わせると、およそ100。

韓国北部が空きになってないだろうしな」

兵士からの報告を計算した船倉大佐は、韓国軍の最終攻撃だと判断した。

韓国という国は、南北を仮想敵国に挟まれている。

北は朝鮮民主主義人民共和国、所謂北朝鮮であり、南は日本皇国である。

その順番が、歴代の大統領によってまちまちであり、頻繁に入れ替わる。

李承晩が大統領の時代、朝鮮戦争の真つ最中に竹島を攻撃して敗退。

この際には、日本政府が日米相互防衛条約に基づき、在日米軍の共同有事指揮権を発動したために、中国義勇軍と北朝鮮軍が38度線を突破しても、在日米軍が主体だった国連軍は動けず、再び釜山の近郊にまで追い詰められる結果となった。

この危機に、マッカーサーの後任として国連軍最高司令官として着任したマシュー・リτζウエイ大將が、韓国政府を説得し、何とか韓国に矛を納めさせたものの、そうなるまでがひどかった。

結果、日本政府は韓国政府との冷戦状態を認識し、経済制裁を含むあらゆる嫌がらせを行っている。

だからこそ、米国は休戦後に在日米軍を再編して、在韓米軍を創設したのだ。

話は脱線したが、南北を挟まれているという事実によって、韓国軍の軍事行動は制限されるのだ。

一方にも抑えとなる戦力を配して、牽制しなくてはならないから、韓国軍は戦力を集結させるということができないのだ。

「防空識別圏に侵入しました」

座標は対馬37A、高度2000」

「攻撃を開始せよ」

対馬海峡は、国際海峡として日本の領海内であっても、軍艦等が自由に航行することが認められている。

実際は領海の幅を3海里にしておき、残りを公海とすることで自由航行を保障するのだが、日本政府は領海法の補則令に、指定する海峡等に3海里幅の自由航行帯を敷くと付け加えることで各国と妥協した。

これは、水上および水中のみが有効であり、空中は認められていない。

この措置は明らかな韓国対策で、日本皇国海空軍は、公海域を利用して韓国軍が攻撃を仕掛けてくることを日々警戒していたのだ。

「2331戦闘飛行隊へ。」

攻撃を開始せよ」

被弾機や最初に邀撃した4機を除く12機が襲いかかる。

その12機が、搭載している空対空ミサイルの残りの数は少ない。精々が、一撃を加えることしかできないのだ。

「2332戦闘飛行隊および飛行教導隊へ。」

現在地を報告せよ。

…了解。

座標、築城22Aに進出。

攻撃に備えよ」

「2331戦闘飛行隊、攻撃終了。

残弾なし。

燃料もかなりを消費した模様」

第2331戦闘飛行隊のF-15Jは韓国軍攻撃隊に肉薄攻撃を敢行した。

その際には、ミサイル以外にも搭載機銃を乱射して、合計で十数機を撃墜しようだ。

「第二撃を実行する。

パトリオット発射用意」

船倉大佐は、敵機に波状攻撃を加えるつもりようだ。

地上には、既に地対空ミサイルであるPAC-3が展開していた。

弾道ミサイル対処のための改修を受けても、通常の航空機にも効果は絶大である。

「司令部より高射隊へ。」

パトリオット発射用意」

「発射」

間髪いれず、船倉大佐が命じる。

「発射」

地上にある管制所では、命令と同時にスイッチを押す。

白い煙の尾を引き、ミサイルは上空の編隊に直撃する。

ランチャーの数から全滅させるのは不可能だが、編隊を乱れさせることくらいならできる。

「パトリオットの命中を確認。」

撃墜6、被弾損傷が8」

「232戦闘飛行隊および飛行教導隊へ。」

市街地上空だろうが気にするな。

攻撃せよ。

……抗命は処罰の対象だぞ。

……民間人の頭上でドンパチできない？

分かった。

司令と話せ」

J—アラートにて転送された空襲警報は各市町村に確実に届き、屋内への退避命令が出ていた。

だから、屋外にいる民間人はいないはずなのだ。

指示を出していた兵士は、自分が相手では埒が明かないと思ったよ
うだ。

船倉大佐に無線を持ってくる。

「民間人には既に、退避命令が出ているはずだ。」

だから、それで死傷者が出ようが、軍の責任ではない。

今、我々は出来ることを全力で行っているのだ」

市街地上空での攻撃を浴びる第232戦闘飛行隊に船倉大佐は伝え
た。

無線の向こうからは、一瞬の間を置いて、承諾の返事が返ってきた。レーダーの画面には、刻一刻と九州へ近づく編隊が映る。

F-15Jの主搭載武装である中距離空対空ミサイルであるAA M-5B（制式名称：7式中距離空対空誘導弾）は、ハイブリッドアクティブレーダーホーミングを採用した空対空ミサイルである。

周辺の航空機からの電波、例えば索敵レーダーの反射波や敵自身を使用するレーダーに反応し、それを自動追尾するというごくごく単純なこのミサイルは、旧式のAIM-7Fスパローを上回る性能ながら、同程度の値段で調達することができるのだ。

これは、スパローの後継として開発されたオリジナルのAA M-5（制式名称：5式中距離空対空誘導弾）よりもかなり格安だったのである。

弾体自体が、AA M-5とAA M-5Bは共通なこともあって、量産効果も高い。

しかも、このミサイルは他のミサイルとは違い、対レーダーミサイルとしても使用可能である。

32機の出撃機から、このミサイルが各1発ずつ発射される。

無論、即座に回避行動をとっても、簡単な記憶装置と連動した誘導装置が目標まで誘導する。

実際、ほとんどの機体が躲しきれずに撃墜された。

この地獄を生き延びても、数分後には先に逝った仲間のもとへと送られた。

激しい機動のあとで、レーダーの警報音が聞こえなくなり、体勢を立て直すと、再びロックオンされる。

このときに使用されたのは、運動性に優れた短距離空対空ミサイルで、1度航空機の尻に食らいつくと、なかなか離れない。

フレアーを使って、欺瞞しようにも熱赤外線画像追尾のシーカーは誤魔化せなかった。

「日本人は戦死すれば靖国に行けるが、韓国人はどこにいくのやら。」

まあ、戦場であっても、死ねば敵味方関係ないからなあ」

地下司令部のなかで、この戦闘をレーダーで見っていた兵士がポツリと漏らした。

しーんと静まり返る地下司令部に、レーダー担当の兵士の声が響く。

「敵機の消滅を確認。

状況終了です」

レーダー担当の兵士の報告に、船倉大佐は大きく頷き、言った。

「よくやってくれた」

「一つ聞きたい。

お前らのあそこは垂れ下がっているか？」

全艦放送のかたちで、佐竹中尉は話しかけた。

それから数刻たって、艦内各部より返答が入る。

「こちら航海科、全員、垂れ下がっております」

「機関科も同じく」

「砲雷科も同じく」

あそこというのは、男の大事なところのことではあるが、これにも逸話がある。

日露戦争の趨勢を決めたとされる日本海海戦前、旗艦である戦艦三笠艦内を視察中に、顔面蒼白の水兵を見かけた東郷平八郎は、その水兵にこう問いかけたという。

「おはん。

金玉は下がつちよるか」

後日、部下の秋山真之参謀が東郷に尋ねたところ、東郷は笑いながら語ったという。

「薩摩の侍は、合戦の前に禪に手を入れて、金袋を握る……そのときにダラリとしておつたら、戦は勝ちじゃ。」

じゃどん、金玉が縮み上がって股に張り付いちよつたら、戦は負けじゃ……と西郷どんが鳥羽伏見のときに言われたそうなの」

要は戦場でどれだけ冷静でいられるか、そして冷静な判断を下せるかである。

「了解。

ならば、この戦、我々の勝ちだ」

佐竹中尉は、各部からの返事を聞いて、断言して続けた。

「そして本艦の作戦目標は、敵艦隊を殲滅することではなく、我が陸海軍の増援部隊が駆けつけるまでの時間を稼ぐことにある。

それさえ満たせば、我々の勝ちなのだ。

たとえ、敵の方が優位であっても、我々の後ろには連合艦隊が陸軍

が空軍がいるのだ。

何も恐れる必要はない。

艦内各部、そして各員各自の薫陶と努力、献身そして情熱に期待している」

佐竹中尉は言い切った。

確かに、連合艦隊隷下の艦艇群、特に第一から第五の各艦隊は三々五々移動を開始していた。

この中で一番近いものは、対馬に展開していた第二艦隊もしくは関門海峡を抜けている最中の第四艦隊だろうが、どちらも距離にして250kmほど離れていた。

250kmだと、攻撃できる位置に進出するまでに駆逐艦の最大速度である32ktで3時間から4時間は移動する必要がある。

ただ、ガスタービンの機関を全力運転させることは、かなりの燃料を消費する。

旧式の駆逐艦であるふぶき型は、20ktの高速巡航で5500海里航行できる。

これは、外洋を航行する上では長いとも短いとも言えない微妙な数字ではある。

しかし、戦闘行動を前提とした航行では、燃費を悪化させる最大出力の発揮や急加速を多用する艦隊機動であるため、かなりの燃料を喰うことになるためもっと短くなる。

ただ、排水量の小ささの割に、兵装が充実しているのが、日本皇国海軍艦艇の特徴でもある。

言ってしまうえば、小型艦に過重な兵装を積み込んでしまうのは、日本海軍の伝統ともとれる。

しかし、沿岸防衛を重視する戦略から航続距離が短いのも、また日本皇国海軍艦艇の特徴のひとつである。

そう、日本の海軍艦隊が太平洋で戦闘を行う時代ではないのだ。

そして、日本各地に拠点港を持つ日本皇国海軍は、その方面に所在する艦艇が連携して半日から1日、遅滞戦術などの適切な防御行動をとることで敵の上陸を阻止しつつ、交代の艦船の到着を待ち、戦闘の

後に拠点港に戻ると補給と休養をとり、各艦艇が次の戦闘に備えられると気づいた。

だからこそ、軍艦の性能要求は、速度と兵装の2本で済ませることができたのだ。

つまり、連合艦隊が駆けつけるまでにはまだまだ時間がかかるのだ。

「上空にF-2を確認しました。

方位180、距離12000、高度1000、敵艦隊との距離84000。

竹島、隠岐の島方面、さらには上空よりの対艦ミサイルの発射を確認。

数、100ほど」

「うむ。

竹島防備隊やF-2戦闘飛行隊は攻撃のチャンスと見たんだろうな。

結果はあとのお楽しみなんだな。

それでF-2各機からのミサイルは2発だけだったな？

着弾を確認後、接敵までに第二波を要請せよ。

竹島防備隊に余力は無くても、多分F-2は余力を残してるはずだ」

佐竹中尉の予想通り、F-2飛行隊は、現在、竹島から少し離れた空域の高度2000メートル付近を、小松基地のF-15Jの護衛を受けたKC-767J空中給油機から適宜、給油を受けながら旋回を続けていた。

その左右の主翼の下には、2発の空対艦ミサイルを抱いたままだ。

「はい、その通りです」

「では、我々も行くこうか？

機関出力いっぱい、最大戦速さいだいせんそお。

突撃」

CIBの手すりを掴みながら、佐竹中尉は命令を出す。

彼は戦闘前の作戦会議にて、こう言っていた。

「ミサイルの陰に隠れば、敵艦隊に肉薄して砲雷同時戦を挑める」
実際、佐竹中尉の見立ては正しい。

無論、戦場では想定外の事態が頻発するとはいえ、竹島や隠岐の島には陸軍の地対艦誘導弾部隊が、小隊や中隊単位で展開している。

それだけでも、40発近い地対艦ミサイルが襲来する上に、築城から飛来するF-2や岩国に展開するP-1/P-3Cから空対艦ミサイルによる攻撃を受ける。

F-2であれば4発、P-1/P-3Cであれば倍の8発を発射できる。

仮に20機ずつ存在したとしたら、240発の対艦ミサイルが襲うことになる。

それらを同時に展開する飽和攻撃戦術は、その戦術の本家であるところのソ連海軍ですら恐れたというから驚きだ。

しかも、数が半端ではないから、その対応に忙殺される。

となると”ひなぎく”は、たとえレーダーに映っていても、差し迫った脅威ではないので、放置される可能性が高い。

だが、”ひなぎく”はその弾幕の中を、敵艦隊攻撃のために進むのだ。

そのことへの恐怖感やストレスは計り知れない。

何かしらの事故が起こる確率は跳ねあがる。

「雨か夜だったらなお良かったんだけどなあ」

戦闘部署配置に移行した”ひなぎく”艦橋にて佐竹中尉はポツリと漏らした。

レーダー含む電子機器の発達によって、天候や夜間といった環境の障害を受けなくなったのが、第二次大戦後の戦闘である。

しかし、その機械を扱うのは人間であり、そして人間だからこそ、操作ミスや見落とし等の後々に考えられないと評価されるようなミスを起こす。

特に、今でも悪天候や夜間であれば、その傾向は強い。

その結果が、自機や自艦の喪失である。

「本日の予報ですが、明日未明までは風は強いようですが、晴れが続く

ようです。

これ以上は期待できないんじゃないですかね」

高山軍曹が気を利かせて、天気予報を読み上げる。

「敵戦力の詳細を。」

特に周辺の予備部隊などの情報は？」

「情報収集を行っている情報本部もしくは通信を傍受した海軍佐世保基地隊通信隊または舞鶴基地隊通信隊によると、この周辺の敵艦隊は1隊のみ。」

残りは本国海域防衛に残っているようです。

潜水艦の雷撃後は、交信が増加しており、虎の子のイージス艦を失ったことで、作戦を継続するの中止するのかを、上級司令部と協議しているものと思われます。

また電探によると、かなり陣形の間隔は狭まっているようです」
「間隔はどのくらいまで狭まっているんだ？」
「できるだけ詳しく教えてくれ」

「先ほど、溺者救助を完了して陣形を組み直しました。」

各艦の間隔はおよそ11000メートル、対潜警戒を重視しているものと思われます」

「なるほどなあ。」

こんな詩があつたなあ。

確か、

三千の馬に倍する力が

ただひとつの指揮にしたがい

荒ぶる部隊を束ねるは信義の誓約

誓約を保証するは憎悪の念

運命の稲妻が闇に放たれ

機雷が大海原を切り裂く

白き航跡を熱くたぎらせ、めくるめく速力で疾駆するもの――

それは屠^{チユルザ}る敵^{イズ・オフ・ザ・スレイ}を選ぶ者たち！

なかなか今の状況に似てるなあ」

「何の詩ですか？」

外国の詩みたいですけど」

「高校時代に読んでた小説に出てたんだけどね。」

「キップリングの”駆逐艦隊”っていう詩らしいんだけどね。」

「調べても出てこないから、詳しくは知らないんだよ」

「そうなんですか？」

「んでね。」

今の状況だけでも、電探や音探で探ってた限りだと、うちの潜水艦は鍵の空いてる玄関から入ったみたいだな。

泥棒に入られるとは考えていないその無防備な入口から。

それで今は、玄関の方に人が集まっているわけだが、そこに陸空軍がミサイルをバラ撒いたことで、その集まった人たちに銃を乱射したような形になった訳で、鳩が豆鉄砲食らったような騒ぎになる訳だ。」

「まあ、言っていることはよく分かりません。」

ですが、言いたいことは理解しました。

まあ、敵艦隊はいま上に下への大騒ぎでしょうから。

うまくすれば、斬り込んでも無傷で帰れるんじゃないですかね」

敵艦隊への針路をとった”ひなぎく”は、欺瞞行動をとりつつ、韓

国艦隊に接近しつつあった。

「艦橋より艦内各部へ。」

あと1時間ほどで、敵艦隊と接触する。

艦内各部の要員にあつては、最終チェックを済ませ、ダメコンの準備に当たれ…」

佐竹中尉の訓示を受けた艦内では、防火服や酸素ボンベ、手近の隔壁などを確認し、すぐ使えるように用意しておくなどしていた。

「…以上、海防艦”ひなぎく” 前任将校、佐竹紀一」

改めて、艦内に呼びかける。

こうして、部下を気にかける姿はまさしくオカんだ。

着任して、十数日でそこまでするとは、ある意味末恐ろしい。

「接敵時間を修正、ひとひとふたごー11時25分を予定」

「敵艦隊の右舷前方に出る。」

とおりかーじ
「取り舵15」

「取り舵とおりかじ15。」

「よおそろー」

艦橋内にいる操舵員が佐竹中尉の命令に応答する。艦が軽く右に傾く。

艦橋の窓ガラスの向こうには、F-2から発射された対艦ミサイルの忘れ形見である白煙が見えた。

すぐに、吹き荒ぶ風に掻き消されそうなそれは、真つ直ぐに韓国艦隊に向かっていた。

それは、1発1発が那須与一の放つ矢のごとく、正確に韓国艦隊を狙っていた。

「舵戻す」

「舵戻す。」

「よおそろー」

敵のレーダーに捉えられた”ひなぎく”の航路を欺瞞するために、大きく弧を描くように針路をとった。

第二次攻撃を確認すれば、一直線に進撃する。

「改めて周辺の艦隊の集結状況が知りたい。」

「教えてくれ」

「連合艦隊司令部の命令を受けて、第一艦隊は太平洋を南下中で、対馬防衛に当たるはずだった第二艦隊には先ほど移動命令が発令されてこちらに向かっているようです。」

また、第三艦隊、第五艦隊は、それぞれここから300 kmそして50 kmの地点にあつて、目下日本海を南下中です。

第四艦隊は関門海峡にあつて、竹島に向かつて進行しており、以上の部隊が20 ktの高速巡航で移動しています。

また、潜水艦救難母艦”ちとせ”を旗艦とする特設役務船艇群が呉で編制されました。

それは潜水艦救難母艦、工作艦が1、補給艦、給糧艦、給弾艦が2、曳航にあたる航洋タグボート10で編制され、竹島防衛の支援にあたるようです。

それらは呉鎮守府艦隊に護衛されて第四艦隊の後を追うように、竹

島に急行中です。

第一陸戦大隊と第4水陸機動旅団を載せた輸送艦隊が、対馬海峡を同じように急行中で途中で特設役務船艇群と合予定で、松江からは松江警備府艦隊の護衛のもと、揚陸艦“あさひ”が第二陸戦大隊を連れてきます。

第六艦隊は、各待機点にて海域封鎖に参加する予定です。

基地航空艦隊は、日本海、東シナ海における対潜哨戒を継続して実施中です。

佐世保鎮守府艦隊は、対馬防衛を第二艦隊より委任され、戦闘状態に入っています。

横須賀鎮守府艦隊、舞鶴鎮守府艦隊、大湊鎮守府艦隊はそれぞれ第四艦隊、第三艦隊、第五艦隊の担当区域防衛にあたる予定です。

以上です」

連合艦隊の各艦隊と沿岸警備部隊の大規模部隊である各鎮守府艦隊は互いがペアを組むように配置されている。

が、これはただの偶然である。

なぜなら大規模な海軍施設であるところの鎮守府に戦力を集中させているからで、しかし、平時であっても鎮守府に居留守の艦艇は少ない。

例えば、平時には連合艦隊隷下の艦艇であっても、時折沿岸警備部隊の指揮下にあつて、犯罪対処・海上治安維持任務に当たっているからだ。

また逆に戦時には沿岸警備部隊艦艇は、連合艦隊からの要請に従い、各地での防衛作戦行動に従事する。

日本海軍の位置付けでは、連合艦隊と沿岸警備部隊は自転車の両輪であり、前後揃わなければ動かないのである。

「それで陸空軍の展開は？」

佐竹中尉は海軍艦隊の配置を頭の中に描きながら、次に陸空軍の状況を確認した。

「日本海沿岸に旅団管区を持つすべての部隊が沿岸防衛のために出動命令が出ています。」

また、習志野の第6空挺旅団が輸送機に座乗して、百里基地に待機しているようです。

相馬原の第10空中機動旅団はへりに分乗して、空軍の美保基地に移動している最中です。

残りの部隊にも待機命令が出ており、いつでも出動できる態勢にあるようです」

「そりゃあまだ展開は完了しませんよ。

それにしても、あのキルゴア中佐に取り憑かれた連中も来るんですか？」

ああ、まあ、あれでもへり機動だけなら、陸軍一ですし、表向きは精鋭部隊ですから大丈夫なんでしょう」

怪訝な表情を浮かべながら佐竹中尉は聞き返すが、思い直して納得する。

佐竹中尉の頭の中に、国防大学時代^{変態集団}に体験した苦い思い出が蘇る。

陸軍部隊の見学に行った佐竹中尉の見学先は、精鋭として名高い第10空中機動旅団であった。

旅団司令部のある群馬は相馬原の演習場でUH-60Jブラックホークに乗せられ、大音量でワルキューレの騎行を流しながら、宇宙返りなどの変態機動を体験させられた。

それ以来、佐竹中尉にとってワーグナーのワルキューレの騎行はトラウマなのだ。

胃から胃酸が逆流して文字通り苦い思いをし、さらにそのグループの中には昼食を戻す者もいたぐらいだ。

胃酸が逆流して程度で済んで幸せだったとも思うが、それとこれとは話が別である。

話がそれだが、今は朝の10時頃、戦闘が開始されたのが1時間前だから、陸軍部隊が移動を開始したのは同じく1時間前だろう。

臨時展開する場所である小学校などのグラウンドや公園などの広い平地は、地方自治体が管理しており、軍の権限が及ばない。

だからこそ、弾道ミサイルの迎撃のための事前展開以外はできない

のだ。

平時にそこら辺の権限が弱いのが軍隊である。無論、戦時になれば権限は強化されるので、バランス的にはトントンである。

「高山軍曹、万が一ヘリの音と同時にワーグナーのワルキューレの騎行が聞こえたら、全力で迎撃しろ」

「それは味方への攻撃では？」

「味方への攻撃？」

あれは味方じゃないからな、攻撃しても問題ない」

佐竹中尉の言葉は、明かな友軍攻撃命令であった。

高山軍曹は聞き直すが佐竹中尉は命令を変更しない。

「それに一步でも迎撃が遅れると、引き金馬鹿な連中に滅茶苦茶に撃たれるぞ。」

まあ、それは置いといて、で空軍は？」

佐竹中尉はなにか妄想に近いことを口走ったあと、冷静に聞く。

「空軍は新田原基地の232戦闘飛行隊と飛行教導隊が築城基地に移動。」

作戦配備に就き、九州、中国地域における防空任務に従事しています。既に北九州には攻撃があったようです。

また、131戦闘飛行隊が美保から敵艦隊への攻撃に従事しています。

輸送飛行群は、第6空挺旅団のために百里基地にて待機しているよう
うで、支援飛行群は、ほとんどの機体を美保基地や小松に展開させた
ようです」

「他の任務にC—17をグロープマスターIII

転用できないのは痛いよな。

海軍でもたまにリースさせてもらうらしいんだが、あれの能力はすごいって聞いたことがあるよ」

空軍では、第三次C—X計画において、国内開発か既存機を購入するかで採めた経緯があり、C—17Aをライセンス生産することが決

定したときには、空軍内で血の雨が降る大論争が勃発した。

なんとかそれは、陸海軍が間に入ることで、沈静化した。

ただし、導入に関してのネックだった速度関係は、開発元のボーイング社の許可を得てエンジンを換装するなどして、改善を行った。

その改善型の性能はA型仕様を上回り、日本の採用を後押ししたアメリカ空軍がC-17Bとして採用したほどで、無論、アメリカ空軍の保有するA型仕様機は、すべてB型仕様機への改造が行われた。

また1機で装備込みの人員、数百名を輸送できるその大輸送力は日本各地で必要とされていた。

その話をしている間にも、ミサイルは韓国艦隊に襲来した。

「対艦ミサイルの着弾を確認。」

3発の命中を確認、うち2発が独島に、1発が広開土大王級の1隻に命中しました」

「旧世代型だと最新装備を保有する艦艇群に命中を期待するのは間違いということか。」

「第一撃目の敵防空網が健在な場合、攻撃の効果は低いねえ。」

しかも、クソツヤっぱりだ。

空軍はケチって、初期型のASM-2を撃ちやがったな。

んなもん、数撃つても当たらねえよ」

F-2の放った対艦ミサイルはほとんどが外周部の電波妨害^Eをものともせず掻い潜ったものの、イージス艦の放つスタンダードミサイルやESSMに捕捉され撃墜されるか、着弾寸前にゴールキーパーCWSによって食い止められた。

自分達に被害がなかったとはいえ、自分達だけでも40発近い対艦ミサイルを撃ち込んで、小破以上の損傷を受けた艦が2隻だけというのは、陸海空軍の切り札である対艦ミサイルが通用しないということと同義である。

「現用のASM-2Bもしくは最新のASM-3は今、三沢の弾薬庫に優先的に配備されていて、築城の弾薬庫には在庫がないんじゃないですか？」

オペレーターである高山軍曹の冷静な意見ではあったが、すぐに否

定される。

「今のところ、新型ミサイルが実用試験中で最前線に配備できない陸軍ならともかく、新型のミサイルを北か西か、どちらに配備するかは常識で考えられるはずだ。」

それに冷戦の崩壊後、経済破綻したソ連もといロシアと軍拡を進める中国か韓国どちらが脅威かぐらいはな」

現在の日本政府とロシア政府は、友好的関係にあった。

なぜなら、北方領土のロシア領有を容認する代わりに、北方領土付近、さらにはオホーツク海での年間漁獲量の3割から4割に相当する量の漁業の操業をロシア側が容認する協定を結んだためで、この二つの海域は、漁業監視のため日露両国の沿岸警備当局の艦船が入り混じる形となっている。

その上、冷戦後に経済的な理由から極東ロシア軍は戦力を削減している。

陸軍部隊は減り続け、海軍艦隊は錆びだらけの旧式艦ばかり、空軍部隊は稼働率が下がり続ける一方だ。

だから、今では国境防衛で精一杯で、日本領土への直接侵攻を計画する余力はない。

企図しているのは、中国か韓国だけである。

そのどちらにも対応できる位置にある築城基地のF-2用にASM-3やASM-2Bが用意されていないわけがないはずなのだ。

「ということは武器担当士官が……」

「そう、武器担当士官がケチったんだよ。」

竹島沖合は戦場であって、射撃水域じゃないんだ。

あとで文句つけてやる」

言いかけて、それが友軍批判に繋がると感じた高山軍曹が口を噤むが、佐竹中尉が言い足した。

「明確な友軍批判は軍法会議ですよ」

高山軍曹は言うが、その目には別の真剣さがあった。

友軍批判以前の問題として、勝利のために全力を尽くすのが、軍人としての常識である。

それが守られないと、戦意不足で更迭される。

「よし、いっちょ嵌めてやろうか。」

人事記録にアクセスして、築城の責任者が誰か調べてくれ」

佐竹中尉の言われたことを、なにか思うところがあつた高山軍曹は忠実に実行した。

「築城弾薬庫武器担当士官は安田明大尉、一般幹候にて入隊。

勤務態度は問題ありで、過去に2度の懲戒処分を受けています。

それでも、まだ臍首くびになつていないのは、省内で立場の弱い背広組の引きがあるために空軍が遠慮しているからでは、との噂もありますね」

国防省にも国家公務員試験1級を通過して就職した幹部事務職員はそれなりにいる。

その他の省庁であれば、デカイ顔して威張れたのだろうが、軍人優位の国防省内では、能力がものを言う。

だからこそ、国家公務員試験2級を合格して入省した優秀な一般事務職員は国防省では軍と仲が良い。

それに、キャリアとして幹部職員となつても、無能であればスキヤンダルをでつち上げられて闇の中に葬られる。

それでも彼らは、軍人優位の国防省内で勢力拡大を画策していると
いう。

「典型的な官僚タイプか。」

上に弱く下に強い。

なら手はある」

悪戯を思い付いたように、佐竹中尉はニヤつく。

「海軍の上層部に陳情書を送ってやろうか。」

軍の上層部は仲良いしなあ。

すぐにでも動くだろうよ」

職業軍人である軍上層部は、シビリアン・コントロール 文民統制を口実に、少しでも権限を削ろうとする幹部官僚を忌々しく思っていた。

だからこそ、何かしらの事態が発生すると、長い長い暗闘が始まるのだ。

軍上層部は、軍の情報部門や非公然作戦部隊、憲兵隊を投入して、幹部職員たちは同期職員がいる警察庁公安警察部の協力を受けて、水面下で互いを追い詰めあい、潰しあう。

ある年には、互いに数十人単位で逮捕者が出たぐらいだ。組織を維持するには、清廉潔白なだけでは勤まらないとはいえ、これは異常な事態である。

それで、国防大臣が場を納めるのだが、納まる場合と、納まらない場合がある。

これは国防大臣の力量の問題である。

「じいさんたちには、まだまだ踏ん張ってもらわなくてはならんよな」「雲の上の人すぎて、何て言ったら良いのか。」

「というか、海軍のトップをそんな風に言っているんですか？」
「そこは、そうですよねのことを言っとけば良いんだよ。」

それなら、小さい頃によく遊んでもらったし、その頃にこんごう型のCICにも連れていってもらったし」

こんごう型駆逐艦とはアーレイバーク級イージス駆逐艦の日本仕様であり、呉海軍工廠や三菱重工長崎造船所でライセンス生産されたものである。

日本のイージス艦建艦史の嚆矢となったスタンダードモデルである。

1996年1月1日にアーレイバークの艦名になったアーレイバーク米海軍退役大將がベセスダの海軍病院で没した。

バークが死去した際には哀悼の念を表するため、就役済の全アーレイバーク級駆逐艦が1分間、31ノットで航行した。

これには、日本のこんごう型もアーレイバーク級フライトIAのうち4隻として参加した。

そして就役後の10年間は一切の情報公開が行われなかったほど、機密度の高い艦艇である。

そんな艦に、しかもその10年のうちに子供が出入りしていたなんてことがあれば、ただの不祥事である。

「そうですか」

高山軍曹の声は平坦であった。

驚きの連続すぎて、却って冷静になったようだ。

「俺、陸軍のレンジャー徽章取るんだ」

「そうですか。」

「って、えーと、あのレンジャーですか？」

「思ってるそのレンジャーで間違いないと思うよ。」

「予定でだけど」

きつくない冗談のお陰で高山軍曹は復活した。

「頑張ってくださいね」

「おうよ」

竹島沖合を”ひなぎく”は敵艦隊との接触に向けて、針路をとった。

その先に待つのは、地獄かはたまたそれ以上の恐怖が待つのか、どちらに転がったとしても平坦な道のりではないだろう。

提督の決断

「あー、はい。」

いやしかし、それを当然のように言われるのは困ります。

「斯く戦争というのは金がかかりますので、それは分かっております。」

「はい、はい」

電話を切った海軍軍令部総長である田中覚治海軍大將は、部下である従兵に問いかけられた。

「海軍次官は何と？」

海軍内での文官、つまり幹部官僚トップである海軍次官が、何かしらの無茶をねじ込んできたのだらうと、従兵は見当をつけていた。

文武同格という言葉が、国防省内では一般的になっている。

文官でも武官でも、国防省内では同格に扱われるということである。

そのために、次官職より上の位である各軍の部長は文官でも武官でもなく、国防大臣政務官がそれを兼任している。

しかし、それは名目でしかないのだ。

日本全国で十数万から数万の部下を指揮する軍人と、その10分の1ほどの部下しかいない各軍の次官では、見えない格が違う。

何せ、国防大臣の承認印さえあれば、緊急措置としての予算執行が認められている統合参謀本部会議議長を初め、陸軍の参謀総長、海軍の軍令部総長、空軍の作戦本部長と実力者が揃い、また彼らは、内閣のいや、総理の主催する国家安全保障会議の構成要員でもある。

ここでは内閣の中でも、外交、国防に関連した機関であり、必要に応じて外務省、国防省、警察庁などの現場側の人間が召集される。

「今回の紛争で金が幾ら飛ぶのかっていう叱責だよ。」

それらの兵器を扱う我々だ。

そのくらい分かっている。

ミサイル1発の発射で数千万円が消え、艦船が1隻沈んで何百億が

飛び、兵士1人が戦死して、どれだけのお金が必要になるかぐらいわな

「もちろんです。」

上は将官、下は兵卒に至るまで、その兵器の種類、予算、そして威力に至るまですべてを把握しているはずですが、何か？」

「いや、それでいい。」

痛みを与えるものは、その痛みを理解しなくてはならないからな」
「その通りです。」

連合艦隊隷下の艦隊は既に、竹島に向かって移動を開始しています。

「それでよろしいのですか？」

「構わん。」

それらの艦隊が到着する頃には決着がついているだろうが、韓国政府に対しては、大規模な示威行動が必要だ。

そのためなら、5個艦隊が艦隊機動を披露してもいいんじゃないか？」

「確かに韓国政府の最近の言動には、目に余るものがありましたしね」

慰安婦問題やら歴史認識問題などで、日本を国際的に非難することを繰り返すことで、優位に立とうとする歴代の韓国政府の戦略には、その言葉にどれ程の真実が含まれているようにも、そのやり方を含め世界各国からは嫌悪感や不快感を示されることが多い。

「眠れる獅子よろしく普段は口の中の牙を見ませんが、その獅子を1度起こすとどんな事態を招くのか、韓国大統領府の面々には指咥えて見ているらおうか」

海軍軍令部総長である田中大将はそう言いながら、手元にあった韓国領海封鎖を含む実効的経済封鎖に関する命令書にサインしていた。

この命令は、即座に軍が共同で使用している空軍立川通信所から東シナ海上空を飛行中のEP-3D通信中継機を通して、第六艦隊の各潜水艦に伝わった。

超長波によるVLF通信によって伝えられた電文は、「ツシマ」と言う一言だけだった。

第六艦隊の潜水艦乗りたちは、事前に配布された暗号命令書のツシマの項を確認して、それぞれが作戦行動に移っている。

「立川通信所からの送信完了の通信を確認しました。」

猟犬たちは大海に放たれました」

命令書を立川通信所に転送しに出ていた従兵が、戻ってくるなり報告する。

前大戦の反省として、軍令・作戦指揮系統のスリム化を図っている。こうすることによって、戦前戦中のように、司令官の頭ごなしに直接命令を発するようなバカ参謀を減らす努力をしているのだ。

「それで竹島方面の戦況だが、沿岸警備部隊や連合艦隊とも協議した結果、竹島の防衛は陸空軍を主体とすることに決まった。

当の海軍は主力を含め、対応できそうにない……」

連合艦隊は部隊を横須賀、佐世保、呉、舞鶴、大湊の5個の鎮守府に置いている。

そのほとんどが領土問題の発生している地点より遠い。

竹島で言えば、松江警備府が直近の海軍施設である。

それでも200 km近く離れている。

第一線の艦隊をそんな辺鄙な場所に、長期間も拘束できないし、その余裕は平時の海軍にはない。

「対応できたとして、精々が海防艦が1隻程度だ。」

よって、我々は領海封鎖に全力を注ぐ」

その言葉を受けた従兵が報告する。

「六艦隊は既に各待機点を中心に、通商破壊戦の用意を進めているでしょう。」

また、佐世保鎮守府艦隊のイージス艦“こんごう”が黄海に入り、空軍と協力して領空封鎖の準備を終えました。

あとは、駐在武官がロンドンで接触した北朝鮮軍関係者にも、38度線の封鎖を行うよう依頼しました」

従兵の言葉に、田中大将が大きく頷く。

「うむ」

これは後に、韓国最悪の1週間とも遅すぎた大統領の決断とも言わ

れる長い1週間の始まりだった。

経済的損失は日本円に換算して数百億にも及び、韓国に投資していた各国は軒並み損害を被らされたのだ。

これは警告でもあった。

しかし、その意味を韓国政府いや韓国大統領が理解するまでに長い時間がかかった。

島根県警嘱託沿岸監視隊

竹島問題を抱える島根県警では、退職した警察官や軍人を集めて、海軍とも連携しながら沿岸監視を行っていた。

そして隠岐の島の入り江には小型漁船が見つかった。

この入り江は、出航禁止令が発令されたときの緊急退避場所でもなかった。

「ありやあ、船だ。

だけんど、そんな通報聞いとらんぞ」

軽自動車を足にして、隠岐の島の沿岸部をパトロールしていた壮年の男二人が、海の上に浮かぶ船を見つけた。

一人が双眼鏡で確認すると、漁船のようだった。

「隠岐の島より島根本部」

『……こちら島根…部、隠…の島へ。』

詳細…報告…よ』

警察が使用する無線の周波数帯と軍が使用する周波数帯は、混線や雑音を防ぐために、重ならないようになっていた。

それに距離が開いているとはいえ、雑音が混じるといふことは、どこかで無線に影響が出るほどの強力な電波をやたらめったらに使っているのだろう。

「こちら隠岐の島、不審な船舶を発見。

至急、指示求む。

繰り返す、不審な船舶を発見。

至急、指示求む。

どうぞ」

『…島…本…、了…』

長い沈黙

『現……に留……って、情……収集……よ。』

無……、危険と判……れ……退……てよ……。

繰……す、現場……ま……つて、情報……収……せよ。

…論、危……判断す……ば退避し……よし。

以……、島……部』

さつきよりも無線から聞こえる雑音はさらにひどくなっている。

「隠岐の島、了解。

終わり」

無線をおいた男は、傍らに積んであつたボルトアクション式のライフルを取り出す。

狩猟用として、許可が出ているライフルではあるが、狩る対象が鳥獣とは限らない。

あくまでも自衛用であることから、島根県警も黙認しているのである。

『……島根……部よ……岐の……へ』

「こちら隠岐の島、島根本部へ」

『……軍の出……要請……。』

即……現……よ……避……よ。

……り……、陸……出動……請した。

…座に……場……退……。』

「隠岐の島より島根本部。

何を言っている？

よく聞こえない。

もう1度言ってくれ」

『陸軍の出動を要請した。』

（即座に現場より退避せよ）

何故かこのときの無線の声は、ノイズの混じっていないきれいな声で聞こえてきた。

あとで聞いた話によると、ノイズがひどすぎたために警察の要請を受けて、陸軍がこの通信を中継していたという。

陸軍隠岐駐屯地には、陸軍竹島防備隊の残りの部隊が駐屯している。

その部隊がおつとり刀でこちらに向かっているのだろうか。

そんなことも思いながら、返事を返す。

「了解、隠岐の島は安全地帯まで退避します」

「島根本部、了解。

終わり」

軽自動車は、踵を返すとそのまま去って行く。

それを見ている影が2つあったのを、沿岸監視隊の二人は気づかない。

隠岐の島駐屯地・竹島防備独立混成団司令部

「警察及び隠岐の島町よりの治安出動要請あり。」

現在、隠岐の島にゲリラの潜入の可能性があり、その確認を求めています」

竹島防備独立混成団を団長として指揮するのは、保田道隆少将、国防大学校32期卒業の熱血漢だ。

ちなみに、竹島防備隊と呼ばれるのは、竹島に臨時に駐屯している1個から2個の中隊だけで、隠岐の島駐屯地にて待機している本隊は竹島防備独立混成団と呼ばれるのが慣例となっている。

よほど軍に詳しい人間でないと、この事を知らないのです、一般的に竹島防備独立混成団もひっくりかかすため竹島防備隊と呼ばれている。

「実弾配布は？」

部下からの報告に、保田少将は領きながら逆に聞く。

彼の脳裏に、行かないという選択肢は存在しないようだ。

というよりも、軍人として国民の生命と財産を守る義務がある。

その義務感に突き動かされているのだろう。

「既に完了しています」

「竹島で戦っている間に、後方を乱されるのはまずい。」

第一中隊はただちに出勤し、通報のあった漁船を確認せよ。

第二中隊は山狩りの準備を終え次第、出勤しゲリラを燻りだせ。

第四中隊本部は、指揮中継隊として通信小隊の支援に当たれ」

第四中隊は保有する3個小隊をすべて竹島の第三中隊支援のため、抽出されたために不完全編成として、隠岐の島駐屯地に残置していたのだ。

また、大隊を編制に組み込んでいるものの、幹部不足から先任の中隊長が大隊長を兼任するという形をとっているため、普段から大隊を省略することが多い。

そのため陸軍内には、竹島防備独立混成団を4個中隊基幹の竹島方面歩兵連隊と見る向きがある。

無論、日本皇国軍戦略軍備計画に基づき、団指揮下の大隊を廃止して、連隊として近々再編成が予定されていた。

団から連隊に格下げになっても、戦力的には大して変わらないが、新開発の中距離多目的誘導弾^Mを装備した特科中隊が指揮下に加わる予定であった。

これにより竹島上陸を目指す敵部隊を上陸用機材、例えば韓国海兵隊の上陸部隊をK A A V-7やL C A Cごと洋上で撃破する計画なのだ。

しかも、この特科中隊は他では旅団司令部隷下に大隊規模でしか編成されていない部隊である。

特科中隊を指揮下に置くというこの事実から、竹島防備を担当するこの部隊が対着上陸戦闘に特化しているか理解できるだろう。

「腰をどっしり下ろして戦えば、案外、すぐに終わるやもしれんな。残っている2個中隊を派遣した以上、司令部は丸裸だ。」

司令部の全員に銃器の携帯命令を発令する。

総員かかれ」

保田少将は武器庫に小銃を受け取りに行く。

敵のゲリラが潜入した可能性がある以上、司令部内とはいえ、確実に安全とは言えないからだ。

司令部施設から歩いて2分の場所にある武器庫には駐屯地管理隊の警備要員が常駐している。

その警備要員に会釈して、中に入る。

「武器管理番号、R-105230」

銃に刻印されたアルファベットと数字を読み上げ、手渡しをする。

「弾倉4個、30発ずつ装填済。」

手榴弾4個、発煙手榴弾4個」

「確かに受け取った」

野戦服の左腰のベルトにマガジンポーチを取り付け、弾倉を突っ込んでいく。

もう1つポーチを取り付けると、そこに手榴弾を入れる。

「武器管理番号、P-12548」

制式採用の9mm拳銃とピストルホルスターを右腰に着ける。

「弾倉3個」

69式拳銃携帯囊と制式名称が付けられたホルスターは、米軍供与もしくはライセンス生産のコルトM-1911A1を収納するためのものだ。

この大型の拳銃を収納できる余裕があるために、その30年後にSIG-ZAUER P-220が9mm拳銃として後継銃に選定されても、難なく使用を継続できた

そして、これには2〜3個の弾倉を入れるだけの余裕がある。

しかし左手で弾倉を入れ替えるときに、不便であるとの指摘も多い。

「司令部も野戦を想定しているのですか？」

「その通りだ。」

敵のゲリラが隠岐の島に潜入したようで、第一中隊以下全員が出動した。

ここには司令部の要員しかいないぞ。

無論、海軍さんにも支援を要請した。

負けるわけがない」

隠岐の島駐屯地には、海空軍の竹島防衛連絡部が置かれ、陸軍竹島防備独立混成団や竹島防備隊との事務連絡を担当していた。

そして皇国海軍は帝国海軍以来の伝統からか、海軍の上は将官、下は水兵に至るまで、歩兵としての教育そして訓練を受けている。

場合によっては、陸軍兵士以上の練度を有している場合もあるのだ、即戦力として期待できる。

「どちらにしても、武器庫が敵の手に陥落することはありません。

備蓄弾薬が消えますが」

武器担当士官はちらりと、弾薬の爆破を行うことを滲ませる。

それに保田少将は頷き、こうも言った。

「工兵科出身者に作業させよう」

「ありがとうございます。」

ですが、司令官は大丈夫なのですか？」

心配する武器担当士官に、保田少将は胸の徽章を指して微笑んだ。「それでも、レンジャーと射撃の特級評価は貰ったことがある身だよ。自分の身は自分で守るさ」

89式小銃のスリングを肩にかけて、防弾チョッキを着て、炭素樹脂のヘルメットを被る。

「やつと我々の仕事が来たようだ」

そう呟くと、保田少将は司令部に戻った。

「状況に変化は？」

「偵察に出た分隊が確認したところ、漁船内に人や武器の反応が見られました」

「やはり敵のゲリラコマンドか？」

保田少将の言葉に、報告していた参謀が頷く。

「海の上では戦えないからとはいえ、隠岐の島に仕掛けますか。」

では、現地司令部の権限を松江警備府に委譲せよ。

本司令部は敵との交戦を優先する」

「了解」

保田少将は前線の将兵に対して、訓戒をのべた。

「今、日本は戦禍という国難の中にあつて、通常の国民生活を維持できている。

ひとえにそれは我々軍の活動の成果である。

その国民生活を維持するためにも、各員のより一層の努力を期待する」

日本皇国軍全体の傾向として、現場の最高指揮官の訓示を受けると、現場の兵士の士気が大きくなる。

無論、これが下士官兵から嫌われている上官の場合はこうはならずに、アホの戯言ととして、無視されるのがオチだ。

「竹島の安西少佐に打電。」

竹島防備隊司令部は、これより戦闘に入る。

以後の指示は松江に仰げ。

以上だ」

それを聞いた1人の兵士が自らの通信機に取り付いた。

タッチパネルを操作して、メッセージを送る。やり方は普通のスマホと大して変わらない。

タッチパネルを操作して、通信のシステムアプリを呼び出し、通信相手を指定して、起動するだけだ。

今の日本皇国軍使用の軍用通信機は、民間用スマホの高性能特化型だ

民間のスマホの余計な機能を廃し、軍用としての使いやすさを追求した逸品で、衛星通信網を介して行う通信は、5G回線と呼ばれる特別な回線すらも構築され、LINEに近いメッセージ伝達網をすべての端末で構築している。

部隊毎にグループを作り、さらにそのグループは上級部隊と繋がることによつて、巨大なピラミッドを構成する。

また、部隊通信兵の端末には、各部隊間での通信が可能なように設定されている。

それに、ハードウェアに関しても、アクリル樹脂のカバーがされた液晶ディスプレイなど、新しいが技術の確立されたものを使用している。

また、LINK16などのデータ・リンクシステム、日本皇国軍が使用する天神と呼ばれるスーパーコンピュータとも接続が可能であり、先ほどのピラミッドをこれらのシステムそして装置と連携させることや、さらには追加パーツによつて敵の通信を傍受することが可能である。

さらには、USB端子を多数接続できる端子が備えられている上に、毎日自動更新される乱数暗号表に基づき、通信内容が自動的に暗号化されるという便利機能付きである。

無論、受信先の機器で暗号通信文は自動解読される。

それだけの機能を持ちながら、装置自体はスマホと大きさや重さは大して変わらない。

また本体だけで、通信機は構成されているわけではない。

本体とセットで、外部接続の音声通信用の咽頭マイクと骨伝導スピーカー、ヘルメットに装着する脳波感知装置、行動延長用のポータ

ブルバッテリー、さらに特殊任務用の電波妨害システムやレーザーポインタによる目標指示システムを内蔵したUSBメモリーが用意されている。

これは、日本皇国軍所属の全将兵に陸海空軍問わず支給されている。

部品の大半が民間用のスマホのものを流用しているだけあって、かなり安価に調達できるからだ。

「竹島の安西少佐よりの受信確認であります」

全員の通信機から返事が帰ってきたことを知らせるメロディーが響いた。

「一中隊は準備を終えました」

部下からの報告に、保田少将は直ぐに指示を出す。

「よし、直ちに出動。」

一中隊よりも南側の地帯を搜索させよ」

「了解。」

また、一中隊よりの報告ではありますが、1個小隊を分離、漁船を制圧。

残りは敵兵を搜索中」

「一中隊が暴れしてくれるか。」

「楽しみだ」

そう言う保田少将の顔には笑みが浮かんでいた。

VOYAGE. 23

竹島防備独立混成団第一中隊第一小隊本部

《先行している一小隊は、万難を排した上で、漁船に突入、制圧せよ》
《了解》

中隊本部からの指示を受けて、1個小隊50名は移動を開始している。

音をたてずに移動するそのさまは合同演習に参加したアメリカ海兵隊員よりニンジャと呼ばれたほどのものだ。

部隊は広範囲に散らばるように展開しており、小隊長の持つタブレットの画面に逐一その状況が映し出される。

《ブービートラップがあるやもしれん。

慎重にな?》

《了解》

89式小銃2型、つまりカービンモデルに改造された小銃を肩にかけて指示を聞く。

この銃は第6空挺旅団、第4水陸両用旅団、第10空中機動旅団、そして竹島防備独立混成団の一部にしか配備されていない特別な銃である。

《第一分隊より小隊本部へ

漁船を視認、状況を送る

漁船に銃で武装した人間を確認

所持しているのは、ヘッケラー&コツホ社製のMP-5シリーズと思われる

なお、人数は2名

残りは山中に潜伏の模様

送れ》

小隊長の通信機の画面には、第一分隊からの報告文が映る。

《小隊本部、了解

マイクとスピーカーを装着し、適宜状況を報告せよ

また第一分隊は、第二分隊の到着を待たずに突入、制圧せよ

以上、小隊本部」

『こちら第一分隊、小隊本部へ。

繋がってますか?』

「小隊本部より、繋がってます」

『了解。』

「これより漁船を制圧します」

「小隊本部、了解。

終わり」

通信を終えると、第二と第三、第四分隊に通信を繋ぐ。

「小隊本部より各分隊。

一分隊が突入する。

残りの分隊は、第一分隊の援護に回れ。

送れ」

『二分隊、了解』

『三分隊、了解』

『四分隊、了解。』

山側より接近中の人影あり。

射撃許可求む。

送れ』

「小隊本部、了解。

小隊隷下の全部隊に告げる。

任務遂行に必要な限り、射撃を許可する。

終わり」

「これより第一分隊は漁船に突入し、制圧する。

なお、事前の偵察等の情報から、該船内には爆弾等は仕掛けられていない。

以上だ。

質問はあるか?」

分隊長は、周りに集めた部下たちを見回して、言った。

「無いなら、行くぞ」

分隊長の言葉に、部下たちは一斉に銃を担ぐ。

「柴田、ここから援護してくれ。

斎藤、船内に突入せよ。

無論、私も直ぐに行く」

「了解」

柴田軍曹は射撃で特級評価を数回連続で受けており、来月には富士学校の狙撃兵養成課程への参加が認められていた。

斎藤兵曹は、特殊作戦群からの転属者であり、特殊作戦徽章の保有者である。

近接戦闘なら中隊最強と言えるのだ。

「米田、中嶋、山田は斎藤に続け。

田原、相良、川崎は柴田を援護せよ。

田原は擲弾筒を指示あり次第、撃て。

私と大島、村上、船倉は斎藤隊の後続に位置、斎藤隊を援護する」
分隊長の指示を受け、全員が散開する。

「??ッア！（撃てー）」

こちらに気づいた敵の韓国語の短い号令と共に、MPー5のサブマシンガンにしては、重い銃声が響く。

ヘッケラー&コツホ社製のこのサブマシンガンはフルオート射撃の精度が高いことが特徴で、近接戦闘を重視する軍そして警察の特殊部隊、さらには混雑している施設を警備する警察官などにも採用されている。

後継となる銃も開発されているが、未だに売れ続けているベストセラ製品である。

「第一分隊より小隊本部へ。

我、敵よりの攻撃を受く。

報告終わり」

通信を切ると、分隊長は部下たちに指示を出す。

しかし、分隊長は口を動かしただけで、特別な操作は行っていない。ヘルメットに後付けされた脳波感知システムによる自動回線選択により、部隊間の通信を整理できているのだ。

「各員、射撃せよ」

89式小銃が猛然と火を噴く。

5. 56mm×45 NATO弾を使用する89式小銃はアメリカのM-16シリーズとの互換性を重視しており、89式小銃の見た目は、M-16A2にそっくりである。

ただ、そっくりなのは見た目だけで、M-16のトラブル続きだった作動方式を独自開発したものに変更している。

そういった経緯もあり、89式小銃の開発元である豊和工業とよわとM-16の生産元であるコルト社で特許やその他の権利を巡っての法廷闘争が繰り広げられた。

結果は、日米ともに豊和工業の条件付き勝訴であった。

日米双方の裁判所は、日本政府の性能要求により、十分なM-16との互換性を持たせたために、形状が似てしまっていることは認められたものの、コルト社が保有する商標特許パテントを侵害していないとし、一切の賠償金を認めずに、その代わりに89式小銃の輸出は認めず、それに違約した場合のみに豊和工業側に賠償金支払いの義務が生じるとした痛み分け的な判決が下った。

豊和工業と日本政府としても、輸出は考えていなかったので、大いに喜んだという。

「軍服は着ているか？」

敵からの反撃に、銃撃戦の最中ではあるが、分隊長は聞いた。

軍人であっても、軍服を着ていなくては、ジュネーブ陸戦協定の保護対象外である。

また、過大な火力で民間人を射殺したと見なされると、刑法の戦時下条項にも記載のある過剰防衛が適用される可能性もあるので、軍服の有無は重要なポイントの1つである。

「私服です。」

階級章すら見えません」

部下からの報告に、分隊長は考え込むものの、すぐに指示を出す。

今回は過剰防衛ではないのだと判断した。

「構わん。」

責任は俺がとる。

擲弾筒で撃て」

擲弾筒とは、陸軍が採用している84ミリ無反動砲カールスタッフのことで、用途からして旧軍の擲弾筒とは違うのだが、竹島防備独立混成団の指導教官である旧陸軍兵士が無反動砲を擲弾筒と呼んだので、竹島防備独立混成団の将兵はそれに倣って、擲弾筒と呼んでいるのだ。

『後方安全確認よし。』

発射準備用意よし』

射手に指定された兵士が、後ろに振り返って確認してから言うて来る。

「撃て」

轟音と共に、84ミリ砲弾が飛翔する。

漁船に着弾してから1拍おいて対戦車榴弾が爆発して、漁船が炎上する。

「敵沈黙」

「突入せよ」

部下の報告を聞いた分隊長の指示に兵士たちが船へと侵入する。

少数精鋭をモットーとする日本皇国陸軍は、平の兵士すらもレンジャーに近い能力を発揮する。

そしてその一瞬に、狙撃兵として残した柴田軍曹は必要なかった。

「クリアー」

ものの10秒で漁船を制圧した第一分隊は、敵兵を小隊本部へ連行してくる。

「1つ言っておくが、貴官はジュネーブ陸戦協定の捕虜としての権利はない。

その点は理解しているな？

それで所属部隊は？」

小隊長の質問に、男は答えを返した。

「Republic of Korea Naval Special Warfare Flotilla (大韓民国海軍特殊戦旅団)」

そう言うなり、男は歯を食い縛る。

そのまま男は呻き声をあげながら、体を痙攣させ絶命した。

「病院へ担ぎ込め」

一人の兵士が男を担いだものの、脈をとった兵士が首を横に振る。
「もう遅い。」

手遅れだ」

「敵襲に備えよ」

ざわつく兵士を小隊長が一喝する。

あわてて小銃を構えた将兵が、森の中に逃げ込む。

開けた場所においては、射撃の的になるだけだからだ。

「既に他の分隊は敵兵の搜索に入っている。」

第一分隊もそれに加わってくれ」

「了解」

漁船は既に破壊しており、それを踏まえての判断だ。

「敵兵の数は推定で20名から30名。」

すべての兵士が韓国軍コマンド部隊の所属であろうと推測される」

「海軍は何をやっていたんだ？」

「中国船籍の漁船だったんだ。」

下手に拿捕してみろ。

野党の餌食だ。

だから手を出せなかったんだろう」

「やっぱり中国か？」

度々、竹島の紛争を引き起こす韓国政府の背後の黒幕を日本政府と
しても調べていた。

その度に浮かぶのが、中華人民共和国赤い隣国の存在である。

日本政府と政治的、軍事的に敵対しつつある中国政府にとって、韓
国政府は都合のいい駒であった。

「そうだろうな」

油断なく周囲に視線を送りながら、兵士たちは雑談を交わす。

広い山中を散開して搜索する。

ある兵士の「敵兵！」の叫び声と共に、銃撃戦が開始される。

2、3発の味方の銃声のあとには、シンとした嫌な静寂が耳を襲う。
鬱蒼とした森の中では、何かしらの音がよく通る。

鳥の鳴き声、羽ばたく音、兵士が枝を踏む音、銃とマガジンがぶつかってカチカチ鳴る音、森のなかを進む兵士の耳に届く音はそれだけだ。

そんなとき、兵士たちの腰につけた通信機が振動した。

上空を飛行中のUAVが収集した敵性情報を受信したようだ。

「直近の敵、南南東方面、数10」

通信機を取り出した兵士が言う。

その兵士の周りには、数名の兵士が駆け寄って、援護している。

分隊長のハンドサインは、GOだ。

指示通りに、森の中を進む。

「いたぞ」

「各員、撃てえ」

兵士たちの声と、敵味方両方の数発の銃声がこだまする。

「あつちに逃げたぞ」

「追え」

足音が遠ざかる中、分隊長は足元の死体を検分する。

「胸と頭に1発ずつ、エグいねえ」

足元に倒れている死体は、防弾チョッキといった防護衣を着用していない。

だから、胸を撃たただけで、そのまま致命傷である。

それでも止めに頭を撃っている。

たまに、生きた状態でうめく人物もいるが、そこは分隊長が自衛用のピストルで止めを刺す。

日本皇国陸軍は、捕虜をとる前に敵兵を全滅させる。

なぜなら、旧陸軍の船坂弘軍曹のように捕虜になったあとに、何かしらの破壊活動をされることを警戒しているからだ。

人道云々の議論はあろうが、特に特殊部隊員であれば、回復してしまつたら一般の兵士では太刀打ちできないからだ。

「今で、5人目か。」

比べて味方の死傷者は、少しで済んだか」

『一中隊より一中隊。』

たった今、敵兵を10名ほど掃討中。
支援求む』

『こちらも敵兵数名を追撃中だ。

出来るだけ、支援は寄越す。

奴らを生きて帰すなよ』

『分かっている。

支援感謝する』

『じゃあな』

それだけ言うと、互いの通信は切れた。

『無線で聞いただろうが、第二中隊より支援の要請があった。

手空きの部隊は応援に向かえ』

『三小隊向かいます』

『二小隊も同伴』

敵兵を追撃中の第一小隊を除いた2個小隊が、中隊を離れ第二中隊の支援に回った。

第一小隊は上空からの情報を得ながら、慎重に進む。

待ち伏せがあっても、その事を分かっている将兵たちによって回避される。

その事も韓国兵たちにとっての悪夢であった。

高い目的意識に支えられた士気も、ここまで来るとがた落ちだ。

島の端に追い詰められた韓国兵たちの取る手は1つだった。

「降伏の意思があるなら、ゆっくり両手を頭の後ろにつけて膝をつけ」

小銃を向けたまま、警告する。

追い続けた兵士たちが見たものは、林の中に立っていた武器を捨てた韓国兵たちであった。

ツーマン・セルで近づく将兵に油断の色は見られない。

しかし、油断はしていなくても緊張の糸は緩む。

将兵の指示通りに、ゆっくりと手を後頭部に置く兵士の数が、追っていた人数よりも少ないことに気づくまでは。

そしてその気の緩みは、致命的な隙を生む。

「各員、気を付けろ」

そう叫んだ兵士が、銃声と同時に倒れる。

「銃撃の地点を確認しろ」

銃撃戦の最中、ある兵士は叫ぶ。

武器を捨てたはずの連中すらも銃を手に取り、撃ち返してくる。

1個小隊50人の将兵対6から7人の敵兵という構図であっても、不利なのは十字銃火を浴びる側である将兵たちの方である。

体を撃たれて戦えなくなる将兵は増える一方だ。

「一小隊より中隊本部、二小隊、三小隊へ。」

現在、敵兵と交戦中。

負傷者多数あり。

至急、戻れ」

『中隊本部より二小隊、三小隊へ。』

三小隊戻る。

二小隊は二中隊の支援を継続せよ』

『三小隊、了解』

『二小隊、了解』

分隊長は通信を切れると、正面の敵兵を見つめる。

「田原ア。」

擲弾筒を撃て。

目標は、正面のどこでもいい」

敵の攻撃を受け止めるには、火力が足りない。

少人数同士の軍事衝突の場合は、火力のぎり押しが勝利の常道だ。

「了解。」

後方安全確認よし。

発射準備用意よし」

敵の猛攻のなかを生き延びていた田原上等兵が、84ミリ無反動砲を抱える。

「各員は田原を援護。

擲弾を使って構わん。

撃てえ」

銃を持てる兵士は、銃を構え乱射する。

敵に頭を上げさせない、そのための制圧射撃である。

30発のマガジンを1つ、2つと撃ち尽くす。

その間に、田原上等兵の持つ84ミリ無反動砲は次々に砲弾を撃ち込み、歩兵火力としては絶大な火力で、敵兵を沈黙させる。

さらにそこに小銃擲弾が次々に撃ち込まれる。

それでも、敵兵の銃撃は止まらなかつた。

互いの射撃は、互いに命中しない。

將兵たちの射撃は、銃弾の飛んでくる方向に対して、簡単な照準で行うからであり、敵兵の側は、数に頼った射撃に正確な照準が行えないからであつた。

「負傷兵は、這つてでも後退しろ。」

何人か、動けない者を介助してやれ」

分隊長は指示を出す。

倒れている兵士も、飛び交う銃弾の雨のなかを匍匐前進の要領で下がる。

動かない兵士は無事な兵士が駆け寄って引き摺って後退する。

「一分隊は制圧射撃を継続しつつ、後退せよ」

「二分隊も後退だ」

遠くでは、第二分隊も後退するようだ。

分隊長の声が聞こえてくる。

『三分隊は後退を援護せよ』

『四分隊も同じだ』

通信機越しに第三分隊、第四分隊の指示が聞こえてくる。

日本皇国陸軍歩兵科では、4個小銃分隊と小隊本部からなる1個歩兵小隊を3個集めて、それと中隊本部で1個の歩兵中隊を構成し、1個の歩兵中隊は、2個と大隊本部で大隊を、3個から6個集まって、連隊司令部やその他の直轄部隊を合わせて連隊を構成する。

主に連隊はそれ単体で編成を完結するか、旅団の指揮下にあり、機動防衛力の主力を担うものである。

対して、大隊は旅団の指揮下に編成された支援兵科部隊、もしくはは方面軍麾下に編成された通信団や工兵団などの団で、兵科の専門的な

作戦行動を担う。

話は逸れたが、十数人からなる分隊が、この周辺には4個展開しており、敵兵は一時的に30以上の小銃、軽機関銃、84ミリ無反動砲から狙われる結果となっている。

だから第一分隊の離脱を阻止するものはない。

「負傷兵を後送せよ」

戦線離脱を離脱した第一分隊は、分隊長と分隊付き衛生兵の相良軍曹のトリアージによって重篤な負傷兵を衛生隊に引き渡す。

負傷兵を分離した1個の小銃分隊は定数の6割ほどだ。

それでも、負傷兵以外の撤退は許されないと、軍人が上からの命令もなしに後退するなどあり得ない。

「敵主力は竹島だ。」

後方であるここにそこまでの大戦力をあてがわないだろう」

そう言って、分隊長はミントのタブレットを噛み砕いた。

もともと、ヘビースモーカーである分隊長は、タバコの代用品として、戦闘中はミントのタブレットを使用している。

「タバコの代わりになるんですか？」

「さあな。」

まあ、吸う量は減ったかな。

くつちやつべつてないで、前線に戻るぞ」

第一分隊が前線に戻ると、2個の分隊が苛烈な攻撃を加えていた。

『三分隊、着剣。』

総員突撃』

突然にそう言うなり、第三分隊員は敵兵に突撃していく。

「あんの脳筋共。」

各員、撃てえ」

状況は第一分隊が戻った直後に、変化した。

脳筋の集まりと言える第三分隊が突撃したのだ。

距離をとっての撃ち合いだったこともあり、歯痒かったのだろう。

肉弾戦ともなると、日本皇国陸軍の徹底した格闘訓練と鉄の精神と敵兵の格闘戦技術と鋼の意志のぶつかり合いだ。

「斎藤、行け」

「了解」

分隊長は第三分隊が勝てるとは思っていない。

格闘戦では一人で一般歩兵1個中隊分の戦闘力を持つと評価されるのが特殊部隊員である。

たかだか十数人が束になったところで、勝てるわけもないのだ。

だからこそ、特殊部隊上がりの兵士を支援に回したのだ。

狙撃兵には狙撃兵を、同じく特殊部隊には特殊部隊を送り込む、これは陸戦の基本である。

『一中隊より一中隊へ』

普段の部隊間の交信は、分隊付き通信兵が担当するが、今はスクランブル交信に設定されており、中隊間や小隊間の通信すらも聞こえてくる。

『敵兵全ての掃討を完了。』

残存兵を搜索中』

『一中隊、了解』

「一分隊より小隊本部、中隊本部、二中隊へ

こちらも敵兵に突撃す。

状況が変化し次第、連絡する」

『小隊本部、了解』

『中隊本部、了解』

『二中隊、了解』

一時は膠着状態に陥ったものの、第三分隊の突撃で突破口が開いた。

「敵兵の状況が更新されました。

三分隊と交戦中の敵兵が最後です」

散発的に銃声も聞こえる。

おそらく、中距離から第四分隊が射撃しているのだ。

正確に目標を捉えた、その射撃は敵兵を沈黙させるには十分だった。

その事と合わせて考えると、第三分隊の突撃は考えなしに行われた

ものではないということだろう。

そこでまた一人、反撃のために立ち上がって撃ち倒された。

それを最後に、通信機から特殊なリズムの音楽が流れる。

「射撃やめ」

それを聞いた分隊長は怒鳴る。

「敵兵の完全沈黙を確認。

各隊は戦場掃除を開始しろ」

「了解」

上空を飛行中のUAVの高感度赤外線センサーは、人間の吐息といった少しの温度変化すらも見逃さない。

そこには既に、味方以外の影は存在しなかった。

「第一分隊より小隊本部へ。」

敵兵の殲滅を確認。

戦場掃除を終え次第、帰還します」

携帯式のスコップを片手に地面を掘る兵士や、敵兵や味方の兵士の死体を運搬する兵士、不発弾を捜索・回収する兵士など、やることは各自たくさんある。

『小隊本部、了解。』

『警戒態勢を継続せよ』

「了解」

『第一中隊より団司令部。』

敵兵の殲滅を確認。

戦場掃除を終え次第、帰還します」

「団司令部、了解」

前線に出動した中隊からの報告を聞き、団司令部の兵士は、ほっと一息をついた。

「弾薬庫も、ここも無事ですみましたね」

兵士が言うのへ保田少将も言う。

「各員の薫陶努力があったからだよ。

ここが崩れなかったのはな」

負傷者が多数出たとはいえ、第一中隊・第二中隊の2個中隊は敵兵

を殲滅することができた。

これが第三次竹島紛争の大きな節目になるとは、このときの誰も思わなかった。

隠岐の島で陸軍が奮闘していた頃、竹島沖では苛烈な海戦が勃発するところであった。

竹島に接近しつつある韓国海軍艦隊が、日本皇国海軍沿岸警備部隊の手荒い歓迎を受けないわけがないからである。

たった1隻、孤独の艦隊がその行く手に立ちはだかり、果敢な攻撃で、敵艦隊を押し留めるのである。

「チャフ発射用意。」

チャフの傘に隠れつつ、ミサイルの影から接近すれば、かなりの距離を稼げるはずだ」

”ひなぎく”には、敵水上艦艇や航空機・ミサイルと交戦する場合のために、前後の76mm砲を覆うステルスシールド部に20発を1単位にして装着されている。

しかも、箱形のチャフデイスペンサー自体は、ステルスシールドから独立して発射口を上下方向に動かせる。

これによって、最大3kmのところまで、チャフキヤニスターを飛ばすことができる。

「針路変更の5秒前に初弾を発射せよ。」

射程は3km、方位287、発射の指示あり次第、取り舵10にとれ。以後、15秒おきにチャフを発射せよ。

機関室、機関出力最大。

最大戦速^{せんそく}」

『機関室、了解』

佐竹中尉の指示によって、CIB内の人間は忙しくなった。

ガスタービンの甲高い駆動音がCIBにまで響いてくる。

と同時に”ひなぎく”が加速していくことを、佐竹中尉は自分の身体で感じていた。

「用意よし」

すべての準備を終えたことを、オペレーターである高山軍曹が報告する。

「チャフ発射」

佐竹中尉の命令と共に、チャフディスプレイペンサーからキャニスターが射出される。

シウルシウルと間の抜けた音で飛翔するその物体は、3 kmもの距離を飛ぶと指定された高度で破裂した。

破裂したその物体からは、特定の周波数帯の電波を乱反射させるアルミ箔がばらまかれる。

「取り舵10、アイ・サー」

それとほぼ同時に、操舵手がジョイスティック型の舵輪を左に傾ける。

「面舵5、針路を修正。

舵戻す。

第2射、発射」

間を開けずチャフを発射するのは、照準の猶予を与えないようにするためだ。

大きく揺れる艦内で佐竹中尉は指揮下にある全員の顔を思い浮かべていた。

「1つ間違えば、全員がボカチンを喰らうのだ。

「空軍より通達。

「これより第二次攻撃を行う。

敵艦隊の半径20 kmに近づくなだそうです」

「そんなにすぐに近づけるわけがないだろうが」

間髪入れずに佐竹中尉はツツコミを入れる。

”ひなぎく”の最高速度の41 ktは、km/hに換算すると75.932 km/hである。

そんな快速艦の”ひなぎく”であっても、50 km近い距離を十数分で駆け抜けられる訳がない。

「高速飛行物体がF-2より分離。

敵艦隊に殺到していきます」

「分かっているが。

期待はしないぞ」

佐竹中尉は言い切った。

しかし、佐竹中尉の想像は外れていた。

空軍機の攻撃は、韓国海軍艦艇を撃沈には至らしめなかったが、上陸作戦の実施の遅滞には成功していた。

44発の対艦ミサイルは、半分以上が途中で迎撃されたが、残りは艦隊の輪形陣の外周部を守る駆逐艦群はおろか、中心に配された揚陸艦にも対艦ミサイルは降り注いだ。

『よし。』

これで一矢報いた。

ミサイルを貰いに、美保に戻るぞ』

空中のF-2飛行隊の隊長はこう言うと、翼を翻して一路美保基地を目指して飛んだ。

残されたのは、”ひなぎく”1隻と300名ほどの陸軍竹島防備隊だけだった。

たったこれだけの戦力で、イージス艦を含む艦隊を相手どるのは、普通に無理である。

『よし。』

敵艦隊の足が止まった。

針路を修正、針路286。

取り舵1、舵戻す』

「接敵予想時刻を修正。
ひとふたまるまる
12:00頃を予想」

”ひなぎく”は自身の出しうる最高速度で韓国海軍艦隊に接近していた。

1時間ほどがたって、”ひなぎく”の視界内に韓国海軍艦隊を捉えた。

「距離33000」

高山軍曹の報告で、佐竹中尉は水平線の向こうの艦隊を肉眼で確認できる距離まで、近づいたことを知った。

貸与品の双眼鏡で敵艦隊を覗く。

限られた視野のなかに、盛大に炎と煙を噴き上げる艦艇の姿をとら

えることができた。

先ほど、空軍のF-2戦闘機隊による第2波の対艦ミサイル攻撃が行われ、韓国海軍艦隊の数隻に命中したが、撃沈には至らなかった。

だが、韓国海軍艦隊を構成する艦艇群のうち命中した艦は、いまだに炎を吹き上げている。

対艦ミサイルの命中による火災は、日本海軍の常識であれば、命中後すぐにでも鎮火される。

遅くとも30分ほどで完全に消し止められる。

それが出来ていないということは、すなわち練度が低いということの証明である。

「距離23000」

「合戦準備。」

距離15000で砲撃開始だ」

高山軍曹の報告を受けて、改めて指示を下す。

「特別臨検部署発動。」

艦内各所の乗員は、銃器の所持を命ずる。

場合によっては、敵艦内で戦闘が勃発する恐れがある。

各分隊先任下士官は指揮権を掌握して、敵兵と交戦せよ」

艦内の武器庫は鍵を含めて、分隊先任下士官によって管理されている。

国防監察本部武器管理課程を履修した分隊先任下士官の指紋、虹彩、身分証のICチップによって厳重にロックされている。

指揮官の判断とはいえ、下士官の合意なしに武器を取り出すことはできないのだ。

そこまでして軍が警戒するのは、戦前に頻発した青年下級将校らによる反乱である。

陸海空軍幹部の順法教育は十分に行われているとはいえ、万が一の場合がある。

そして海軍皆歩兵とも言われるレベルで海軍将兵たちは野戦訓練を受けていたから、配られた小銃や機関短銃を肩にかけ、拳銃を腰のホルスターに差し込み、その立ち姿は陸軍歩兵科の将兵のようで、肩

にかかる銃の重みなど、まるで気にした様子もなく配置に戻っている。

”ひなぎく”には、口の悪いものはいないが、後に新聞記者が「沈んだときのフカ避けだった」と嫌味たらしく言うものが、世間には広がっていた。

しかし、真実は小説より奇なりとはよく言ったもので、血気盛んな日本皇国海軍士官が、艦を一杯生け捕りにするつもりだったと言うのが正解だ。

そのリストの筆頭が、揚陸艦^{ドクト}“独島”と世宗大王^{セジョンテワン}級の2隻で、そのうちの1隻である”世宗大王”が六艦隊の攻撃で沈没した今となつては、”独島”と”栗谷李珥^{ユルゴク・イ・イ}”が残るのみである。

そのどちらかを拿捕できれば賠償金をたんまりもらえて、海軍としてはウハウハなのだ。

その準備段階である今は、CIBでも担当下士官である高山軍曹が、全員に銃を配る。

別で保管されている弾倉には、きつちりと銃弾が詰められていて、ずつしりと重い。

「敵艦隊と接触する前に、対艦用兵装の残弾を確認したい」「そうですね。」

VLS内にはミニ・ハーブーンが2発、07式垂直^V発射式^L対潜^Aロケットが4発、それと両舷の68式3連装魚雷発射管に5式魚雷が6発、前後の砲に予備も含めて、76mm砲弾は300発。

あとは、武装した兵員44名
「ミニ・ハーブーンは使えないから、10隻までなら喰えるか…」

残りは相討ちに持ち込めば勝てるな」

帝国海軍から皇国海軍に再編成される過程では、旧海軍の水雷戦隊関係者が上級幹部として採用されていた。

彼らは3年8ヶ月にも及ぶ太平洋戦争の激闘を最前線で戦い、生き残ってきた猛者たちだからだ。

また戦後の戦力の再編の際、政府の策定した国防方針は、戦艦や空

母といった大型軍艦よりも、巡洋艦や駆逐艦を主体とした艦隊編成を以て沿岸防衛海軍としての能力を得ると明記されるに留まっていた。そこで必要とされたのが、”肉を切らせて骨を断つ”という水雷戦隊の戦い方であった。

1951年のサンフランシスコ講和条約に基づき、日本と連合国側の大半の国との講和が成立した時点で、日本皇国海軍連合艦隊の指揮下には、4個の水雷戦隊が存在するのみだった。

そこから外洋艦隊としての形を整えていった日本海軍は、1972年に大湊警備府を鎮守府に格上げして、連合艦隊麾下に新編した第五艦隊を置くに至って、東西南北そして日本海の各方面艦隊を有するこ
ととなった。

話は脱線してしまったが、彼ら水雷戦隊の上は指揮官、下は水兵に至るまで、戦艦だろうが駆逐艦だろうが、戦力や大きさに関係なく見敵必戦の不文律を持っており、そんな彼らから指導を受けた日本皇国海軍のなかでも、それは受け継がれている。

「距離20000」

高山軍曹の報告と同時に、遠くから砲声が聞こえてくる。

ほぼ同時に、”ひなぎく”のかなり前方に水柱がたつ。

狙って撃つたとは思えないほどの距離の誤差だ。

「奴さんたち、砲撃は下手だな。」

日本皇国軍なら合格点は出ないぞ」

国防大学校江田島分校に設置されていた砲撃シミュレータによる仮想砲撃訓練では、最低のE判定をとったことのある佐竹中尉でも、ここまでひどくなかった。

しかも日本皇国軍の砲術学校でそんな砲撃をすれば怒られるだろう。

日本最大の演習場である矢白別演習場内に所在するその砲術学校では、陸海空軍選りすぐりの教官たちによって、砲撃の指導が行われており、東郷平八郎元帥海軍大将の言葉をもじった「百発百中の砲百門は、百発百中の砲一門にも一発一中の砲百門にも勝る」という当たり前のことを合言葉に百発百中の砲兵の育成が目指されている。

またそのために、演習場の広大な敷地内では、射程30 kmの155 mm榴弾砲や射程24 kmの5インチ艦載砲を使用した砲撃演習は年がら年中行われ、軍の平時の使用弾薬量の1/5がここで消費されていると言われている。

「それにしても艦長遅いな。」

何かあったのか？」

思い出したように、佐竹中尉が言う。

「まだトイレに籠っているんじゃないでしょうか？」

今度は船酔いで」

「まさか。」

そんなわけないだろう」

高山軍曹の言葉に佐竹中尉は否定を返す。

潮気の利いた海軍軍人でも船酔いすることはある。

しかも、激しい艦隊機動を行えば、尚更である。

「いまは、各員、やることがあるので、船酔いの報告はありませんが、この機動を行ったとすると、いつもなら半分は船酔いになってるでしょう」

「船酔いか。」

昔からそれには出会ったことがないなあ。

よく海には出てたんだけど」

その頃、よく揺れる艦内のトイレの個室では、艦長が便器の前で蹲っていた。

艦長が戻ってこない真実とは、そのまさかであった。

その少し前、痛む腹との激闘を制し、さあCIBまで行こうと言うそのときに、艦の揺れがひどくなった。

元々、船酔いしやすい体質の彼女は、もの見事に船酔いになり、トイレに逆戻りとなったのだ。

「うぶ、ヴェー。」

帰ったら、陸上勤務にしておおう。

うおぶ。

「……お※○△□@#☆●▽○△☆◇」

何を言っているのか聞き取れないが、生々しく棘々しい音と共に、便器のなかに吐瀉物が落ちる。

「気持ち悪い……………うぶ……………」

戦闘中たつて、揺れすぎだ」

そして、場面はCIBに戻る。

「敵との距離19000……………18000……………17000……………」

「まだだ。」

落ち着け。

面舵10、続いて取り舵25、続いて面舵25」

”ひなぎく”は単調な回避機動を取り続ける。

照準用レーダーの電波はチャフによって混乱している上に、最大射程に近いところでの砲撃である。

一般に、照準用レーダーではなく、光学照準の砲撃の場合、測距儀を使用しても命中が期待できるのは、最大射程の6割だと言われている。

これでは当たるものも当たらない。

「目標、前部主砲、正面の敵駆逐艦。

艦橋部を狙え」

「距離15000……………」

(敵艦隊の足を止めるのならば、沈めなくとも足を乱させるだけで十分だ)

とは思いつつも、敵艦を殲滅することを考えている海防艦”ひなぎく”の先任将校の佐竹中尉は命令を下す。

独島^{ドクト}を中心とする艦船群が描く円と、”ひなぎく”が描く航跡が交錯する。

その刹那に、砲撃を集中させる。

「撃^{テエー}て。」

続いて、面舵^{おもかじ}10」

海防艦”ひなぎく”は砲撃しながら敵艦隊の輪形陣の中心を走り抜ける。

その周囲に5インチ砲弾の水柱がたつが、そのすべてを際どい操艦

術で、回避する。

その間にも狙われた駆逐艦の艦橋に76mm砲弾が数発命中する。断続的に命中して爆発した砲弾は、艦橋にいた要員全員を薙ぎ払った。

操舵関係の指揮系統の壊滅した駆逐艦は立ち往生するしかない。立ち直るには、戦隊司令や艦長、副長なりの上位階級者が状況を掌握し、適切な指示を出さねばならないが、それにはかなりの時間がかかる。

しかも、砲手はかなりの技量を持つようだ。

電探を使わず、光学照準で初弾から命中させている。

惜しむらくは、76mm砲弾の威力が低すぎるかどうか、そんなことを感じさせない砲撃だった。

後に聞いたところ、砲手担当は砲術学校で教育を受けたという。実地の砲撃演習以外にも、図上での演習など叩き込まれることは多い。

たとえば、陸軍で言うところの行進間射撃のための数値を計算で割り出したり、その発射のタイミングすらも指示できる熟練兵の存在は、日本皇国軍にとっては大きなプラスである。

「雷撃戦用意。

目標、前方のフリゲート。

右舷発射管、一番攻撃用意。
「^{テュー}撃て」

艦橋が炎上している駆逐艦のそばを通りすぎると、さらには直近の敵に雷撃すらも敢行する。

短魚雷であっても、水線下の防御のない現代の艦船には致命傷だった。

左舷に被雷したそのフリゲートは左に大きく傾きつつあった。

1隻が沈むと、そこには穴ができる。

たった1隻の脱落で、輪形陣は崩壊するのだ。

「目標、前方のへり駆逐艦。

左舷発射管、4番攻撃用意。

取り舵いっぱい」

最高速度での急旋回を行ったことで、”ひなぎく”の艦体は大きく傾く。

「傾斜、現在32度」

高山軍曹が、モニターの警告表示と共に表示された傾斜計の数値を読み上げる。

「舵戻す。

4番、撃てえ^{テェー}」

急激に角度が変わり、大きく揺れる艦上の発射管より魚雷が発射される。

元々が小型の対潜艦から発達した海防艦は、対水上戦闘用の兵装が長らく貧弱であった。

第一線の駆逐艦群には、対艦ミサイルの搭載が主流になっている現代でも、2007年に”ひなぎく”が就役するまでは、対水上戦闘用の兵装は対潜兼用の魚雷1択であった。

そんななかで、国境を接する各国の海軍とにらみ合い、時には戦ってきた日本皇国海軍沿岸警備部隊の戦死者数はかなりの人数にのぼる。

それこそ、過去数回にわたって戦火を交えてきた韓国は仇敵であるとも言える。

取りあえずは、”ひなぎく”を離れた魚雷は、狙いをつけた駆逐艦に突き進む。

水中を50ktで進む魚雷を、水上艦艇は避けることができない。正確には、避ける術を持たないといった方が正解だろうか。

特に輪形陣を構成する各艦は、規定の航行位置を指定されている。そして今の場合、距離が詰まっているところに位置の乱れた

味方艦艇が存在することが、回避行動をより難しくしていた。

右にも左にも動けず、加速も減速も出来なかった駆逐艦の中央部、大体、機関室のある辺りに大きな火柱がたつ。

水柱ではないのは、5式魚雷の得意技であるポップアップがあるからである。

海防艦の主要対水上兵器である短魚雷1発で、敵艦を屠るための機能であり、標的艦の艦底をすり抜けた魚雷は、船の要である竜骨のあきりを直撃して爆発する。

この爆発は、大気圧よりもやや強い程度とはいえ、強い水圧を受けて上方にやや強く出るので、熱風や火炎が機関室の燃料系統に直撃する可能性は高くなる。

燃料系統に引火したら、魚雷自体の爆発によって損傷した竜骨の傷を広げることとなり、もうその船が2度と海上を走れなくなる。

炎上している駆逐艦を放置して、砲撃と雷撃を繰り返した”ひなぎく”がVLAや魚雷を撃ち尽くしたときには、韓国海軍艦隊はイージス艦”栗谷李珥”を残して壊滅していた。

そんな状況では、撤退する他ないのだが、それを許すほど日本皇国海軍は甘くない。

溺者を救助するわけでもなく、敵におめおめと背中を見せる連中である。

情け容赦など必要がない。

「主砲、レーダーを狙え。」

照準用のあれだ」

砲手に指で指して示したのは、射撃指揮用のAN／SPGー62レーダーであった。

前任将校の言うことを理解した砲手は、主砲をそれに向ける。

主砲は最後の1隻である”栗谷李珥”を、舐めるように撃つように撃つていく。

短時間の砲撃で、イージスシステムの要であるAN／SPYー1Dレーダーを残して、”栗谷李珥”の戦闘システムは使い物にならなくなっていた。

敵の接近は分かっても、それに対処する術はない。

そこには、恐怖しかないだろう。

映画のジョーズで考えてほしい。

サメに気づかずに食い殺されると、サメに気づいて食い殺されるのでは、後者の方がかなりの恐怖を味わう羽目になる。

それが人間の心理と言うものである。

「CIBより通信室」

『こちら通信室。』

どうしました?』

「近隣の友軍航空部隊に通報。」

” 敵艦は対空目標に対処はできず、航空機の安全は確保された。

本艦はこれより強行接舷して、敵艦を拿捕せんとす。

その間に、周辺に点在する溺者救助を強く要請する”

以上だ」

『了解。』

内容を復唱します。

” 敵艦は対空目標に対処はできず、安全は確保された。

本艦はこれより強行接舷して、敵艦を拿捕せんとす。

その間に、周辺に点在する溺者救助を強く要請する”

でよろしいですね?』

「頼む」

佐竹中尉は通信室との会話を終えると、前に向き直り言った。

「取り舵10」

舵手にそう伝ええると、インカムを取り上げる。

「本艦はこれより敵艦に強行接舷し、敵艦を拿捕する。

接舷の際に衝撃があるはずだ。

総員、耐衝撃体勢をとれ」

言い終わると、少ししてから艦に大きな衝撃が伝わってくる。

縦に横に大きく揺れるなかで、金属同士がぶつかる音が聞こえてくる。

そして、ガリガリという金属の削れる嫌な音もする。

揺れが収まった瞬間に、佐竹中尉は言う。

「各員の半分は、事前の指示に従い、敵艦内を制圧するために集結せよ」

出航後、” ひなぎく” 幹部たちは色々な戦況を想定して、指示を出していた。

「砲撃用意。」

大穴を開けてやれ」

佐竹中尉の言わんとすることを理解した砲手は前部の76mm砲を左に90度回した。

照準が定まった瞬間に、引き金を引く。

砲撃を受けて”栗谷李珥”^{ユルゴク・イニ}の外板が凹む。

砲手はさらに引き金を引き続ける。

命中した砲弾によって”栗谷李珥”^{ユルゴク・イニ}の外板が歪み、凹み、悲鳴をあげる。

それでもまだ零距离から叩きつけられる砲弾の嵐に、ついに外板は音を上げた。

「各員、陸戦準備。」

かかれ」

大穴が開いたことで、”ひなぎく”を出た突入部隊は、イージス艦に突入する。

「私も向かう。」

艦長を呼び出しておいでくれ」

こうした陸戦の場合、指揮権は第五分隊長を務める者が有している。

この場合は、佐竹中尉である。

「了解」

高山軍曹の言葉は明快だった。

彼女のことだから、艦長の尻を叩いても連れ出してくるだろう。

「前任将校より各員へ。」

第五分隊長としての命令だ。

頭を潰せ」

携帯通信機を通して、乗員たちにそう命令する。

ここでの頭とは、”栗谷李珥”^{ユルゴク・イニ}のCICのことである。

優秀な部下たちのことだから、十分にその仕事をこなすだろう。

『了解』

その声を聞きながら、傍らの小銃に手を伸ばす。

ずつしりとした、それでいてどこか安心するその重さを感じながら、階段を下りていく。

突入路を確保して侵入した”ひなぎく”乗員たちと、ユルゴク・イ・イ栗谷李珥”の乗員は激しく戦っていた。

しかも、構造をよく知っているので、時折迂回して背後から襲撃を仕掛ける。

そこには、敵味方の生か死しかない。

日本皇国は世界第2位のイージス艦保有国であり、最初の1隻である”こんごう”が就役して今年で25年を越える。

それだけの期間があれば、大半の乗員が内部の構造に詳しくなっていてても可笑しくはない。

そんな彼らを相手にするのは、銃は撃てても、陸戦は知らない海軍兵士なのだ。

「島田兵曹、状況は？」

「佐竹中尉ですか？」

ただいま、突入口を制圧。

各隊は第五分隊員の指揮のもと、艦内を掃討しつつ、C I Cを目指しております」

「ブービートラップには気を付けさせろよ」

未だ銃声はやまず、硝煙の臭いが鼻につく。

『佐伯兵長より報告します。』

C I Cの前通路にて、戦闘が勃発。

支援を要請します』

「五分隊、佐竹だ。

分かった。

すぐに向かう」

突入路から突入した乗員は、20名ほどでその大半が3人から4人の小部隊で行動していた。

その小部隊は艦内を縦横無尽に動き、艦内各部の乗員の連携を分断していた。

急報を受けて、島田兵曹に案内されて向かった先では、激戦が続い

ていた。

「撃て、撃て」

佐竹中尉は檄を飛ばしながら、銃を乱射する。

射撃の腕は良くもなければ悪くもない。

可もなければ、不可でもない。

なんとも言えない結果ではあるが、韓国海軍兵は頭を下げながら、遮蔽物の後ろに後退するしかなかった。

その遮蔽物というのが、C I Cの内部であった。

「そのままC I Cに押し込め」

銃撃がC I Cルームの扉に集中する。

薬莖の転がる音が連続して響く。

「撃ち方やめ。」

1発、1発の値段は安いとはいえ、無駄に撃つな代わりにこれを使おう」

佐竹中尉が指差したのは、艦内通話用の電話だった。

日本皇国海軍ではインカムと呼ばれているそれは艦内各部から全艦に繋ぐことが可能な機械だった。

操作方法がハングルで書かれているため、読めなかった佐竹中尉が、それをいじっていると、通信が入る。

「佐竹中尉へ。」

こちらは小川一水。
ブリッジ
艦橋を制圧しました。

我が方に死傷者なし』

艦橋を押さえれば、艦は基本的に動かせなくなる。

人力操舵で操艦するという手もあるが、そこまでの技量を韓国海軍が保持しているかは疑問の余地が残る。

『こちらは土浦兵長。

機関室を制圧。

こちらにも死傷者はありません』

機関室を押さえたことは、かなり大きな意義を持つ。

自沈措置をとるのであれば、艦底部にあるキングストンバルブを開

いて、海水を流入させればいいが、もつと簡単に行う術もある。

機関室にあるガスタービンエンジンを爆破して、燃料系統を誘爆させればいいのだ。

そういった破壊工作の余地をなくしたという点で、大きく評価できるだろう。

「了解、2隊ともよくやった。

なお、捕虜に関しては、警備の要員を置いた食堂にでも、放り込んで軟禁しておけ。

では、どちらかでダメコン室を押さえろ。

また、捕虜への暴行などは、断じて認められない。

決して日本皇国海軍の体面を汚してくれるなよ」

『了解。』

すぐに行きます』

通信を切ると、艦内通話用の電話を適当にいじるのを再開する。

ボタンを押したり、ダイヤルを回したりしているうちに、うんとかすんとか言うようになった。

「動いたか。

では……マイクテスト、マイクテスト。

全艦に…聞こえています?」

電話機片手に呼びかける。

片手と耳で通信機を抑えて持ち、片手で電話を持って呼びかける。数秒してから、続々と報告が入る。

『機関室、聞こえています』

『艦橋も聞こえています』

報告を聞き終わると、舌舐めずりを佐竹中尉はしていた。

全艦に聞こえているのを確認できたからだ。

そして胸ポケットから取り出したメモを見ながら、たどたどしい朝鮮語で話し始める。

「我々は、日本皇国海軍沿岸警備部隊だ。

CICに籠城中の韓国海軍兵士に告げる。

既に、我々はこの艦の主要区画の大半を制圧した。

これ以上、無駄な血が流れるのは見たくない。
降伏を要求する。

返答までには、10分の猶予を与える。
徹底抗戦か降伏か、好きな方を選んでいただきたい。

降伏する場合には、扉を開けて両手をあげて出てくるよう要請する」

そういったあとに、迷ったものこう付け加えた。

「……日韓両国は不幸な哀しいすれ違いのもと、ここに交戦状態に至ったが、近い将来の両国の関係が改善されることを望む。

貴官らは、十分によく戦われた。

その勇気と献身を、我々はよく知っている。

そして、最後にここで失われた人命いのちと、もしかしたらこれからここで失われるかもしれない人命いのちそのすべてに祝福があることを祈る」

そう言つて、佐竹中尉はマイクを置いた。

返答の有無と、その先に待つ未来をこのときの佐竹中尉は知らない。

数分がたって、応答はない。

期限を区切った時刻まで、あと2〜3分となった。

扉の向こうから、朝鮮語で罵声が聞こえ、殴打の音が聞こえてくる。

そして、1発の銃声が響いた。

周辺の海軍兵士は、身を硬くして周りを見回す。

異状はない。

それからすぐ、CICの扉が開く音が聞こえる。

そこから続々と現れる人影に、銃を向けたものの、武装の有無を確認した佐竹中尉は銃を下ろす。

そして、周りの部下たちにも武器を下ろさせる。

最初に出てきた人間の制服には、大領の階級章が見える。

韓国軍の大領、日本皇国軍における大佐である。

日本皇国海軍においては、イージス艦の艦長職や連合艦隊麾下の一部護衛隊司令、沿岸警備部隊各分駐所司令などに就任する重要な階級である。

つまり、目の前の人物はこの艦の艦長であると判断できる。

そしてその人間が前に出て、名乗り出た。

「韓国海軍イージス艦 ユルコク・イーイ 栗谷李珥 ノ・デジョン 艦長、盧大中大領です」

一歩前に出てきた士官が、敬礼をしながら言う。

そのかおには疲れが、悔しさが、そして敵との差に心が折れたようなそんな感じが滲み出ていた。

You had fought bravely.

「諸官は勇敢に戦われた。」

Now you are the guests of the Imperial Japanese Navy.
今や諸官は、日本皇国海軍の名誉あるゲストである。
I respect the Korean Navy, but your government is foolish to make war on Japan.
私は韓国海軍を尊敬している。ところが、今回、貴国政府が日本に戦争をしかけたことは愚かなことである」

佐竹中尉は慰めるように、駆逐艦“雷”艦長の工藤俊作艦長の名言を、ほぼそのままの英語で伝えた。

この台詞は工藤俊作艦長が、第二次世界大戦・太平洋戦争での美談の1つとも言われる英軍水兵救助を行った際の台詞である。

また、佐竹中尉は世界に追い付け追い越せと言う感じで、海軍の近代化を急ピッチで進めるさまを見て、そのことに尊敬すら感じていた。

世界三大海軍国として、広く名を知られている日本皇国海軍にとって、海上通商の安定化に寄与する海軍力の強化は、韓国の戦力拡大は不安要素でもあり、歓迎されるべきことでもあるのだ。

「貴国海軍の心遣いに感謝を表したい。」

確かにそれは、私も思っていました」

幾分晴れた顔をするようになった盧大領は、佐竹中尉の英語に答えた。

「一旦、乗員たちは食堂に軟禁しております。」

島根に戻り次第、何らかの指示があるかと思われませんが、それまでは食堂内にて過ごすことになることをご理解ください」

佐竹中尉の言葉に、盧大領は領きを返し、佐竹中尉の先導のもと歩き始めた。

「やはり、我が軍は弱い。」

戦車を開発した、イージス艦を持った、スラムイーグル F-15Kを買った等と騒い

ではいても運用する能力を持たないのだからな。

思いついたまま、戦争を仕掛けてこの様だ。

貴官が、そんな我が軍の……海軍のことを尊敬してくれるなど、もったいない話だ」

食堂に着いてから、盧大領は改めて、佐竹中尉らに敬礼すると扉の奥に消えていった。

盧大領が見えなくなったのを確認した佐竹中尉は、部下にこう伝えた。

「松江に連絡。

敵艦隊を殲滅す。

なお、1隻の拿捕に成功す。

以後の指示を求む。

以上だ。

あとは、警戒態勢を維持しつつ、海上の溺者救助に全力を注げ」

「了解」

そう言うなり、部下たちは隔壁の向こうへ消える。

「戦争は終わりかな。

また、起こるのか起こらないのか、神のみぞ知るところか」

そう言いながらも、佐竹中尉は”ひなぎく”へ歩いていった。

後に、誰かがこのときのことを歌に詠んだ。

その歌がこれである。

若草の 夢見しままに 嵐ふく

外患こそは 消えんとぞ思う

(訳:まだ夢を持っている若者たちが、その夢を見たままに、戦争と言う嵐は吹き荒れ、夢は破れていく

血を流してまで勝利したその敵は、いつまでも消えることはなく、また多くの若い命が消えたただだった)

新聞の歌壇に掲載されたこの歌に、日本皇国軍将兵は涙を隠せなかつた。

竹島から遠く離れた関東地方の3カ所に、“ひなぎく”の報告は松江警備府を経由して届いていた。

その3カ所とは、東京は市ヶ谷の国防省庁舎内に所在する海軍軍令部と統合^I作戦^O指揮所^P、同じく東京の霞が関にある沿岸警備部隊オペレーション・ルーム^Rそして、神奈川の横須賀市船越にある連合艦隊^F司令部である。

「松江より報告。」

敵艦隊を殲滅し、我が軍に損害はなし。

なお、敵艦を1隻拿捕した模様」

通信用紙を覗き込んでいた軍令部員の報告に、統合^I作戦^O指揮所^Pでは、そこに詰めていた統合参謀本部長、陸軍参謀総長、海軍軍令部総長、空軍作戦部長の4人が、安堵の息をついていた。

「そうか勝ったか。」

沿警隊に、竹島方面に発令されていた避難指示を解除、危険注意喚起を改めて発令させよ」

海軍軍令部総長である田中大将は戦闘が勃発したため、東シナ海の一部、対馬海峡、日本海に発令していた避難指示を、戦闘終了と共に解除するよう指示を出した。

「勝てたのはいいが……そう簡単に諦めるとは思えん」

というのは、この4人の一致した見解であり、意見でもある。

「取り敢えず、海軍の現場指揮官たち全員が松江に戻り次第、市ヶ谷の国防省に出頭するように伝えよ」

「了解」

海軍軍令部総長の指示を聞いた軍令部員は退出する。

「大使以外の外務省の横やりは邪魔だ。」

ワシントンの駐在武官の尻を叩いて、先に韓国と接触せねばなるまい」

日本皇国海軍の戦略を担う海軍軍令部総長は頭のなかで、次の展開を練り始めた。

「全くですな。」

自ら血を流すことなく、かといって我々の流した血を無駄にばかりする。

やつらを無視しても文句は出ますまい」

海軍軍令部総長の発言に、同調する意見空軍作戦部長が言ったのへ陸軍参謀総長が繋げる。

「ではワシントンの駐在武官に指示を出しましょう。」

今なら、能天気な書記官連中は寝ている頃合いかと」

さつき退出した軍令部員に代わって、中央機動憲兵隊員が入室してくる。

彼らは、日本皇国軍将兵や在日米兵の犯罪を調査する軍事警察 ミリタリーポリス MPとしての性格もあるが、他にも、情報部隊の軍人もしくは公安警察と協力して、反国家的思想や活動の監視摘発を行う国家警備隊 ナショナルガード NGとしての性格を保持している。

無論、日本皇国は民主的な憲法に基づく立憲君主国家であり、各人の政治的な主張は自由に認められているが、あくまでも犯罪にならない範囲である。

例えば、戦前から変わらず暴力による革命を主張する非合法政党の日本共産党は監視対象として、リストのトップにいる。

何時の時代も、公安警察や憲兵隊は日本共産党への監視摘発の手を緩めることはなかった。

よって、政府の反対政党としての役割は、社会民主党が担っていた。

「今後の我々の仕事は、前線の将兵の苦勞に報いることだ。」

外務省の害畜共を黙らせろ」

その3人の発言を受けて、統合参謀本部長が指示を出した。

「至急、報告があります」

「話せ」

そんな4人に近づいた憲兵は、4人の許可を得て口を開いた。

「本部長と隊長からの伝言です。」

各地にて、左翼が煽動していると思われる反軍、反戦、反政府、親韓国のデモが発生しており、うち一部は暴動と化しているようです。

その後には、日本共産党^アが存在するらしく、公安警察や情報本部と共同で調査中です」

割愛された内容を、憲兵が伝えると、統合参謀本部長は指示を出した。

「国内の騒乱に関しては、憲兵隊と警察を投入して食い止める。

銃器は使うな。

総員、かかれ」

中央機動憲兵隊員が退出すると、田中大将が口を開いた。

「背後関係は明らかですな」

「確かに。」

このタイミングといい、主張といい、紛争に大敗した韓国以外に考えられませんよ」

「国家情報院の手先がなぜ日本にいるのか。」

情報本部長に確認せねばな」

ちなみに、韓国国家情報院の英略は”N I S”、略さず言うと、”

N a t i o n a l I n t e l l i g e n c e S e r v i c e

”である。

しかしなぜ、”K C I A”と呼ぶのかと言うと、日本で起こった金大中拉致未遂事件で、日本の軍人のなかに、韓国の情報機関と言えば、

”K C I A”という意識が刷り込まれたのだ。

そしてその一連の会話を聞いていた軍令部員は近くの参謀本部員に言った。

「昔は銃後の守りには国民が協力してくれていたのに、今ではそれすらも軍単体でやらねばならない。

しんどい時代だよ」

軍令部員の言葉に参謀本部員は同意を返した。

「全くだ」

そして時を同じくして、霞が関にある沿岸警備部隊オペレーション・ルーム^Rでは、沿岸警備部隊隊長が報告を受けていた。

「松江より報告。」

敵艦隊を殲滅し、我が軍に損害はなし。

「なお、敵艦を1隻拿捕した模様」

諸外国の海軍軍人、沿岸警備隊関係者が来日した際、必ずと言っていいほど面会するのが、今の沿岸警備部隊隊長である及川仁一海軍大将である。

片手で杖をつき、左目に刀傷を負い、それを隠すように眼帯を着けている姿は、どこぞのヤクザである。

「所属は大阪警備府やったね？」

詳細を言わずとも沿岸警備部隊司令部警備救難参謀は理解している。

「はい。」

「第五管区の大坂警備府艦隊麾下の”ひなぎく”であります」

及川大将の問いに、警備救難参謀が答える。

このヤクザ顔に、泣かされる初任幹部は多いが、日常を共に過ごしている参謀たちには慣れたものである。

「田中の甥っ子かいな。」

どうせ、彼奴が呼んどるわ。

ついでに、こつちにも顔を出すように言っといてくれや」

霞が関のドンとして名高い及川大将は、15年前の尖閣沖騒乱事件の際、駆逐艦艦長の職にあつて、中国軍の偽装漁船と大立ち回りを演じ、魚釣島に上陸した中国海軍兵士数人を一掃して追撃していたところを、数十人に囲まれ、こんななりになったのだ。

彼曰く、調子に乗り過ぎたという。

今度あんなことになったら、機関銃を持ち出すつもりらしい、と言うのが周囲の評判だ。

「そういうと思って、その旨連絡してあります」

「仕事早いとう。」

エエこつちや。

「じゃあ、避難指示も解除しとけ。」

「どうせ覚爺からも、指示は来るけえなあ」

「そう言いながら、及川大将はソファの上でのびをする。」

この危機クライシスが発生してから1ヶ月、2〜3時間の仮眠しかとれないことは、退役年齢間近の及川大将の身体には、正直いつてきつかった。「これで、家に帰ってゆつくりできるのう。

非常当直は解除、各員は家で嫁さんとゆつくりしいや」

そう言つて、及川大将は自分でコーヒを注いだ。

そのコーヒを飲みながら、事後処理に移る。

「市ヶ谷の軍司令部より、避難指示を解除するよう指示が届いております」

「やり終わったわい。

他は？」

「特にはありません」

「そうか。

それじゃあ、大阪警備府艦隊”ひなぎく”に部隊褒賞、艦長と先任、機関長に海軍勲功章、その他の乗員に部隊勲功章の授与を行うように、私から強く推薦しておいてくれ」

「了解。

人事に連絡しておきます」

部下の1人は、卓上の電話を取り上げ、海軍部の人事課にかけ、2〜3言話すと、電話を置く。

「戦時の連合艦隊G、平時の沿警ちゆうけどなあ。

なんで、今回はおらんかったんや？」

沿警隊は対潜は強いけど、艦隊戦はまるつきりやて、わかっとるはずや」

そう呟いて、及川大将はコーヒを飲み干した。

横須賀市船越にある連合艦隊司令部Fでは、緊急命令を発令していた。

「横須賀警備隊いや全基地の警備隊に緊急命令だ。

今後数時間以内の、暴徒いや破壊工作員の侵入を警戒せよ」

特殊警備班を擁する鎮守府警備隊の他にも、各地の陸軍歩兵科部隊と共同訓練で練度を高めているのが、海軍基地警備隊である。

「戦争か終わったあとに、各地で騒乱とはねえ。

それに戦時のGF、平時の沿警という区分けが、またしても役に立たないなあ。

短期戦になると、沿警隊だけで方がつくから、連合艦隊解散論も再燃しかねんな」

連合艦隊解散論と言うのは、竹島で何かあっても連合艦隊は対処したわけじゃない。

ならば、連合艦隊は不要じゃないか、と言う論理であり、沿岸警備部隊だけでも日本の海は守れるはずだという希望的観測も含んでいる主張で、現場の軍人が困ってしまう。

2つの部隊が日本の海を守る理由を、理解していない国会議員が何かある度に主張してしまうのだ。

特に沿岸警備部隊の各部隊は、基盤的防衛力整備戦略に基づき配置されている。

また、装備品の多くは、拠点港から近い距離で運用されることを主眼において、開発されている。

何かしらの事態が発生した際の、初動対応を行うのが、沿岸警備部隊なのだ。

そして、それ以降を対処するのが、最寄りの鎮守府から駆けつけてきた連合艦隊なのだ。

沿岸警備部隊と言うのは、所詮、沿岸海軍軍でしかなく、本格的な外洋海軍は連合艦隊であり、その装備や能力はアジア地域随一である。

被派遣国の要請を受けて派遣される日本皇国海軍軍事顧問団の存在は、その国が海軍を最重要に据えているというサインにすらなっている。

「結局のところ、面白い人材を見つけることしかできないのよな」

沿岸警備部隊の使える人材を無理矢理、連合艦隊に引き抜くのは、各方面から恨みを買うことになる。

それが分かっているから、米内光隆大將は人材を見つけても、にやつくだけである。

「この“ひなぎく”の先任の子、面白いねえ。

唾つけとこうかなあ」

支給品のノートパソコンで、人事記録を眺めていたものの、すぐに止める。

嫌な予感がしたからだ。

何か霊的なものが、周りを飛んでいるような、嫌な予感が。

(まさか、近衛海軍予備役大将が……)

どちらにしても止めておこう。

寒気がする)

それから少し時間がたって、ワシントン・D・Cのアメリカ国務省の会議室に3カ国の代表がいた。

紛争当事国である日本皇国の駐米大使と駐在武官、大韓民国の駐米大使と駐在武官、そして講話に向けた仲介者のアメリカ合衆国国務長官である。

「我が国が、この場所を両国の講和会議の会場として貸与しているのは、両国間の緊張状態を非常に憂慮しているからであり、また両国間の緊張状態が他のアジア地域に波及することを、我が国は望みません。」

また、両国間の対立の激化を、基本的に我々は容認できません」
仲介者を務める米国の国務長官は、努めて冷静に告げる。

国務長官は元外交官であり、駐日米国大使を務めたあとに退職している。

韓国のことも知っているが、それ以上に日本に、詳しく親しみを持っていた。

彼の心は大きく荒れており、韓国側に怒鳴り散らしたい気持ちはあったが、米国の国益を守るといふその一心であった。

韓国側に散々警告を与えて、軽率な行動を慎むように、米^彼国^ら国務省は韓国に働きかけていた。

それが、最終的に東アジアの安定、ひいては米国の国益に叶うからだ。

もし、ここで米国が韓国の行動を容認すれば、南シナ海の南沙諸島などを中国に占拠されているベトナムやフィリピンが無謀な軍事行

動をとりかねない。

それは米国防務省や米国防総省が望むシナリオではない。

そんな米国の思惑を知ってか知らずか、やってしまった韓国側からは、とんでもない言葉が、いや要求が飛び出した。

「今回の紛争に関し、我が国に非はない。」

よって、貴国に独島の返還と、拿捕した艦船、捕虜全員の返還、今回の不法的行為によって生じた損害の賠償、さらには懲罰的金額の賠償金を要求します」

誇らしげに自国の要求を語る韓国外交官の向かいに座る日本の外交官を見る。

顔は赤面し、青筋が浮かんでいる。

韓国側の対応は、国際常識を激しく逸脱しているのだった。

韓国が竹島で敗北したのは、日本皇国海軍が発表した事実の通りであり、敗戦国は韓国の方であるはずだからだ。

そして、中立であるはずの米国から見ても、明らかほど状況は悪化しつつあった。

日本皇国は朝鮮半島に利権を持っていない。

当たり前の話で、国交もないのに交流が大規模になるはずがない。

だから、対韓宣戦布告や武力による経済封鎖を行っても、日本皇国政府や経済に痛みがあるはずがない。

実行を躊躇う理由がないのだ。

また、この交渉にあっても、日本はその海軍力や空軍力のあるかぎり、韓国側の優位になることはないのだ。

米国防総省から依頼されたシンクタンクが国防長官に提出したレポートによると、日韓の全面戦争が発生した場合、海軍は数時間とかららずに全滅し、数日で陸空軍が日本方面に配置した部隊は壊滅するとの予測が述べられていた。

それは、ワンサイドゲーム 一方的な戦いとなるだろう。

韓国軍はいたずらに兵力を損耗するだけで、何も得るものがない。

そうなる**と**亡国の危機だ。

そういう危機感という点において、外交官と軍人は違う。

軍人は冷静に戦力差を見つめることができるが、1人の文官にすぎない外交官はそれが理解できない。

「そんな条件、我が国が呑めるわきゃねえだろ。」

お前らは戦争でもしたいのか？

人のこと、舐めくさすのもええ加減にせえや」

数刻の後、顔を赤面させて怒鳴ったのは、駐在武官である日本皇国陸軍の大佐であった。

彼は元部下を今回の紛争で亡くしている。

仲間を奪ったのに、それを謝罪しないどころか、人を舐めた態度をとる。

正直いって、この態度には仲介者であるはずの国務長官ですらも、腹を据えかねていた。

「やっぱりですわ。」

「こんなことにはしたくなかったんやけども、大使、よろしいか？」
「よろしいよ。」

「ここは引いてもダメなら、押してみよつてとこですな」

えびす顔の大使は、大佐の問いかけに答えた。

「貴国の度重なる失礼な態度、我が国はこれ以上、我慢はできそうにありません。」

我が国は、貴国に宣戦布告いたします」

大使は言い切った。

「日本皇国軍は、今後数時間以内に韓国に対する懲罰的軍事行動に出るでしょう。」

以上、終わり。

加藤大佐、帰ろう」

早口に捲し立てた大使が、席を立つ。

頷いた加藤大佐は、席を立ち後に続く。

後に残されたのは、心のなかでニンマリしている国務長官と、唾然としている韓国側の人間だけだった。

「通商封鎖準備命令、そして、通商封鎖開始命令と来て、通商封鎖中止命令の通信はまだ来ないのか」

焦る艦長のを尻目に、副長は冷静に、しかし残念そうに、

「まだ来てませんよ。」

少なくとも、今は」

と返した。

本気で戦争を望む軍人など、ほとんど存在しない。

それは、世界史を覗いてみれば理解できる。

侵略者として名高い人物は大抵が文官だ。

ナチスドイツのヒトラーないし、ソ連のスターリン、これらの人物は最前線で銃弾が飛び交うなかを、戦った経験はない。

ヒトラーは第一次世界大戦に従軍していたことは知られているが、前線と後方との伝令兵としてであって、塹壕のなかで激しく戦った歩兵や砲兵としてではない。

また、軍人であれば、士官学校や兵学校といった場所で古今東西の戦争を学び、戦場の悲惨さを知る。

21世紀にはその傾向に拍車がかかっている。

だからこそ、部下をそんな死地へと送ることに躊躇いが出る。

「音探員、警戒を厳となせ。」

すぐにお客さんが来るぞ。

音響規制を発令する」

数瞬の逡巡の後、艦長は命じた。

”ずいかく”の艦内を黄色い光が包む。

艦長の言う通り、お客さんはすぐに来た。

「音探が目標を捕捉

海軍のデータベースに、該当なし。

韓国船籍の船舶の可能性大。

さらに2隻、韓国海洋警察……間違えました。

国民安全処海洋警備安全本部の警備救難艦がいます」

音探員の言う通り、音探から漏れ聞こえてくるのは、複数のスクリー音と、それに紛れて船が水を押し退ける音であった。

そして、その音の正体は韓国船籍のマンモスタンカー”李舜臣Ⅱ”と国民安全処海洋警備安全本部の警備救難艦”太平洋3号”と”太平洋9号”の3隻である。

特に、タンカーである”李舜臣Ⅱ”には、サウジアラビアから輸入した原油30万トン、バーレルに直すとおよそ2220000バーレルが積まれていた。

産業の近代化と共に、戦略物資とまでなっている原油は、それがなければ国が回らないと言うレベルにまで到達している。

今、”李舜臣Ⅱ”に積まれている原油は、韓国経済を数日は回せるだけの量でもある。

戦略的には、最重要な攻撃目標の1つとしてリストの最上位にあるのだ。

”ずいかく”が攻撃しないわけがない。

そして、その3隻がこのまま来れば”ずいかく”の正面を横切る形となる。

「雷撃戦用意。」

目標は、タンカーと外国公船のうちの1隻だ」

「しかし、艦長。」

外国公船に攻撃することは、国際法に違反する可能性があります。

攻撃はタンカーに限定しましょう」

副長の指摘に対し、

「無駄だ。」

有線は使いたくない。

となると魚雷のセンサーしかないが、それは、そこまで賢くないから、流れ弾は出る。

その流れ弾に当たる場所にいたのが運の尽きだ。

それに、戦場に軽武装の警備救難艦を繰り出すこと自体が間違いなのだ。

文句は出まいよ」

艦長はこう断言した。

「タンカーが一撃で沈むはずがない。

次弾装填準備も急げよ」

艦長の言葉に従って乗員たちは行動を始めた。

発射管室では、発射管付き先任兵曹長が、

「魚雷を持ってこい。

ハーブーンもだ」

と部下の下士官兵に指示を出し、兵士たちは動き始めた。

特に、戦いのなかで、兵士たちは成長を見せていた。

緊張と緊迫の間に立った乗員たちは、ストレスとも戦いながら、自らの仕事をこなしていた。

「再装填準備完了」

そして、発射管室から連絡を受けた発令所では、誘導のための諸元を入力していた。

「よし。

全門、発射管扉開け」

という艦長の言葉と共に、発射管の扉が開放され、発射管のなかが海水で満たされる。

「魚雷が発射し次第、排水。

再装填を急げ」

艦長の命令は、発射管室に伝わった。

準備は万端であった。

「全門、撃てー」

しようにかく型潜水艦には六門もの発射管が据えられている。

その一門一門に、一撃必殺の魚雷が装填されている。

それが海に放たれた。

すべての魚雷にタンカーの諸元が入力されていたのだが、やっぱりというべきか、手前を航行していた警備救難艦“太平洋3号”を追ってしまいうものもあった。

「左舷より雷跡4、本船への直撃コース」

船橋で見張り員の報告を受けた”李舜臣Ⅱ”船長は、

「取り舵いっばいだ。

回避航行急げ」

と指示、命中回避に全力を尽くしたものの、左舷から迫る魚雷を躲せなかった。

片舷で4発の魚雷が爆発することは、”李舜臣Ⅱ”の設計当時には考えられていなかったことである。

つまり、想定外というやつである。

また、魚雷のほとんどが、”李舜臣Ⅱ”の構造上の弱点である船尾に命中していた。

なぜなら”李舜臣Ⅱ”の船体は、工期縮小、予算削減のために船尾の強度を減らして設計されており、それは通常の航海だけなら十分に使用できる強度ではあるが、魚雷が1発命中しただけで致命傷になりかねない。

無論、通常の民間船舶も被雷することを考慮した設計ではない。

しかし、魚雷が1発命中したぐらいでは沈まないものである。

そしてその弱点とも言える箇所には4発の魚雷が直撃した。

4回の爆音と衝撃から立ち直り、船内の被害状況を確認する。

しかし、状況はかなり悪化していた。

『機関室に浸水あり。』

機関停止、出力喪失』

「本船はまだ沈まない。

損害対処を急げ。

浸水を食い止める」

機関室からの報告を受けつつ、船橋から指示を出す。

惰性で動いていた船の行き足が完全に止まった。

「船底部より浸水が拡大。

隔壁を破壊、救命艇甲板に迫っています」

制御盤を見つめていた一等航海士が告げた。

環境を汚染する物質の流出を防ぐための、ダブルハウ構造によって、浮力は十分に確保できているから、すぐに沈むと言うことはないはずだ。

そのはずなのだが、救命艇甲板が水没すれば、逃げる手段を失う。
「船長より船内の全員へ。」

本船は沈没するわけではないが、退避できなくなる可能性が高い。
「よって、総員は退船せよ」

その言葉を聞いた一等航海士は、ライフジャケットを持ち出した。
そして救命艇の据えられている甲板に集合する。

「全員、集まったな？」

周りを見渡して確認する。

自分も含めて甲板部10名、機関部9名、司厨部3名の全員の顔が揃っていた。

「乗り込め。」

「時間がない」

腕時計を見た船長が言う。

全員が乗り込んだのを見届けた船長が最後に乗り込む。

滑走した救命艇は、海面に着水して自走する。

少しでも距離を稼ぐためである。

その間にも、タンカーの船尾は沈んでいく。

船尾が沈んでいくにつれ、船首の特徴的なバルバス・ハウが少しずつ露になる。

「ここからは、ゆっくり沈むだろうな。」

だが、抜け出した我々にできることはない。

「警備救難艦に救助を要請」

周辺を遊弋している警備救難艦に救助要請を出すものの、船長が見渡したその周りには、炎上中の警備救難艦しか見えない。

仁川に向かう途中だった”李舜臣Ⅱ”は韓国領海に入ったところで、日韓開戦の連絡を受けた。

返す刀で、海軍の護衛艦の派遣を要請したが、到着したのは国民安全処全処海洋警備安全本部の警備救難艦が、2隻だけだった。

海軍とは違い、対水上対潜対空作戦用の装備を持たない国民安全処海洋警備安全本部の警備救難艦では、日本皇国海軍の執拗な攻撃から、タンカーを守りきれない。

そのことは分かりきっていたのだ。

それを振り返った船長の、

「やはり無駄だったな」

という呟きは、強い風に消えていった。

「やはりか」

ソナーの探知情報を映像化したものを見ていた“ずいかく”艦長は呟いた。

六門の魚雷発射管を全門、タンカーに向けて発射したのに、うち2発は目標のタンカーを逸れ、警備救難艦に向かっている。

「タンカーに命中は4、警備救難艦に2か。

再装填を急がせろ」

発射管室では、兵曹長以下の兵士たちが奮闘していた。

「排水を確認」

兵士が叫ぶ。

「発射管の尾栓を開放。

魚雷を押し込め」

兵曹長の指示で、尾栓が開いたところに1本ずつ魚雷を装填していく。

魚雷を入れ終わると、尾栓を閉じる。

2分もかからずに、すべての魚雷が再装填された。

「再装填完了」

発射管室の責任者である兵曹長が、艦内電話で発令所に報告する。

その報告を受けた発令所の艦長は、

「1番、2番発射用意」

と部下に指示を出した。

発射用意の意味を理解している部下たちは、準備を着々と進めていた。

「発射用意よし」

「第2射を有線で発射する。

必ず舷側に命中させろ」

「第2射、撃てー」

” ずいかく” から発射された魚雷は、まっすぐ進み、舷側に大きな水柱を立てた。

舷側の隔壁を破られたタンカーは、左舷からの浸水が増大していき、横倒しになりつつあった。

船内に侵入した大量の海水は、その強大な水圧を武器に、次々と隔壁を破壊、浸水を広げていた。

船尾からの浸水は、薄い隔壁を破壊しながら、怒濤の勢いで浸水域を拡大しており、船が沈むのは時間の問題だった。

ソナーからは、隔壁が悲鳴をあげているのが、良く聞き取れた。

決断した艦長は、全艦に発令した。

「状況は終了。」

音響規制を継続、次の標的を待て」

今やもうすでに、事態は紛争の域を越え、戦争に突入していた。

紛争開始当初の韓国政府の予想、日本皇国軍は一撃を加えれば、それ以上反撃してこないだろうという自分勝手なものではあったが、しかも一撃を加える前に韓国軍は敗退している。

そしてその予想をはるかに越えたところまで、事態は進展していた。

朝鮮半島を南北に分断している線である38度線を、朝鮮人民軍は封鎖、臨戦態勢に移行した。

黄海で接する中国政府は、中国の沿岸警備隊である中国海警局と人民解放軍海軍北海艦隊と東海艦隊に、禁足令と緊急出航命令が発令された。

紛争の段階であれば、韓国を支援する中国ですらも、この事態は予想外だったのだ。

黄海を、日本海を、対馬海峡を封鎖された韓国は白旗をあげるしかなかった。

2週間近く続いた封鎖作戦で、日本皇国海軍は100万トンを超える船舶を、積み荷ごと撃沈した。

そのなかには、原油が、米独両国から輸入した先端工作機械が、鉄鉱石などの資源が、そのまま海の藻屑と消えた。

また積み荷によつては、重大な環境汚染を引き起こすものもあり、早急な回収が望まれるが、経済が破綻する寸前の韓国に期待するのは酷というものである。

2週間後、ワシントンD・C.の国務省の会議室で、再会したえびす顔の大使が、

「2週間前とは顔色が違いますな」

そう小声で言ったのへ、駐在武官も小声で返した。

「そうですな。」

国の顔とも言える外交官がこの様では、国自体がいつまで持つか、分かりませんな」

そう駐在武官が感じ取れるほどに、韓国側は疲弊していた。

今回の軍事行動にかかった費用、戦費は韓国の場合、他国の資金に頼っていた。

勝てていれば、状況も変わっていただろうが、結果は敗北である。

巨額の無駄金を使っただけで終わってしまった。

その上、海外の物流を日本政府が握ってしまったがために、経済が止まり、外交部を含むほとんどの政府機関が、国の内外、各方面への謝罪や折衝に駆り出されていた。

「先日の非礼を謝罪したい。」

申し訳なかった」

開口一番に、韓国の駐米大使は謝罪した。

「はて、何のことでつしやるか？」

えびす顔の大使は空惚けながらも、続ける。

「それはさておき、我が日本皇国からの要求は、3つ。」

竹島・対馬が日本領であることを確認し、またこれに違約した際には、追加で賠償金を支払うこと。

第一次、第二次竹島紛争の未払いの賠償金の支払い、無論、これはすぐには言いませんが、早めに願います。

賠償金として、5億3000万ドル、そして我が方で鹵獲したイージス艦及び捕虜と交換で、20億ドル、合わせて25億3000万ドルの支払い。

日本領域直近の領域の非武装地帯化、の以上になりますな」
日本側からの要求は非常識な要求ではない。

例えば、19世紀も終わりの頃に起こった北清事変、他にも義和団の乱、義和団戦争、義和団事変など呼び方は多数あるが、その際には、日本と欧米列強各国から清朝に対して4億5000万両テールもの賠償金と首都：北平（現在の北京）への軍隊駐留権が要求され、清朝は泣く泣く、それを認める羽目になった。

特に4億5000万両テールというのは、清朝の歳入の5年分に相当する金額である。

利息を含めば、その倍にまで膨れ上がるのだから恐ろしい。

要求した金額が、年間の国家予算の範囲内なのだから、本当に優しくないら이다。

「今、本国の財務担当者から連絡が来ましたわ」

駐在武官である陸軍大佐は、ノートパソコンを開きながら言った。

「踏み倒すつもりで、払ってなかった賠償金を含めると、概算で利息込みで300億ドルに届くか届かないかだそうですわ。

詳しい見積もりは……29・890・200・500ドル。

もちろん、USDで払ってもらいますよ」

伝えられた金額の大きさに、韓国大使は困惑の表情を隠しきれなかった。

「我々は、全権を委任されておらず、判断ができない。

本国に問い合わせ、後日連絡する。

それでよろしいか？」

「それでも構わないが、一括で払ってもらえるとありがたい」

翌日には、日本大使館に要求を認めるといふ旨の返答があった。

この返答が、駐米日本大使館より本国の外務省本省に転送され、海軍軍令部総長を通じて統合参謀本部長から、通商封鎖中止命令マとの命令が全艦隊に届いた。

こうして、日韓の交渉は纏まった。

しかし、この程度の敗北で、韓国が諦めるわけがない。

だが、300億ドルもの賠償金、一説によると2000から300

0億ドルといわれる経済的損失、撃沈された船舶の積み荷によって起こった重大な環境汚染を防止するための早急な回収のための予算、またそれが間に合わず積み荷によって起こった重大な環境汚染から自然を回復するための予算など、すべてを鑑みて、韓国が折られた牙を研究し直すまでには、数年間の猶予があると、国防省情報本部はそう判断していた。

結局のところ、韓国軍の無謀で冒険的な軍事行動は、国民の血税を数千億ウォン以上という大金をかけて、育成した海軍戦力を壊滅させただけではなく、数千億ドルとも言われる損失を生んだだけだった。

しかし、韓国の野望は消えたわけではないのだった。

第三次竹島紛争戦闘報告書

第三次竹島紛争戦闘報告書

宛：日本皇国軍統合参謀本部長

日本皇国陸軍参謀総長

日本皇国海軍軍令部総長

日本皇国空軍作戦部長

日本皇国軍情報本部長

発：対外情報局専務参事官

国家機密（17―41）（67. 5. 25）

年月日：2017年4月25日から2017年4月26日

場所：竹島

結果：日本皇国の勝利。朴・韓国大統領の失脚。

交戦勢力

日本皇国 大韓民国

自軍戦力

陸軍 46,000

海軍 13,500

空軍 6,025

艦艇 80隻

航空機 150機

敵軍戦力

陸軍 0

海軍 30,000

空軍 6,000

民間人 24,000→26,000

艦艇 25隻

船舶 120隻

航空機 135機

損害

日本側

死者 52
 負傷者 156
 捕虜 0
 被撃沈 なし
 航空機 3機
 韓国側
 死者 19,973
 負傷者 10520
 捕虜 11313
 被撃沈 駆逐艦 5隻
 フリゲート 19隻
 揚陸艦 1隻
 コンテナ船 156隻
 タンカー 44隻
 鹵獲 駆逐艦 1隻
 航空機 121機

概要

2016年4月25日に韓国海軍艦隊が竹島沖合いに接近し、日本側の航空機から発せられた転針要請を無視して、日本の経済水域に侵入したために、竹島海域防衛を任務として警戒中の日本皇国海軍沿岸警備部隊艦艇と韓国海軍艦隊との間で、海戦が勃発した。

日本皇国防省は直ちに首相官邸や天皇に対し戦闘の勃発を報告、4月25日には、両国は米国の支援を要請したが、米国は回答を保留とし、中立を宣言した。

また、同じ頃に韓国空軍部隊による空爆が行われたものの、航空優勢の掌握に失敗して、手痛い反撃を喰らい撤退し、隠岐の島でも韓国軍コマンド部隊と駐屯部隊との戦闘が行われた。

4月26日には日本皇国海軍が竹島における海上優勢を確保。

同日に首相官邸より宣戦布告の命令、と同時に天皇からの開戦の詔勅を賜る。

その一方で、日韓両国は米国ワシントン D. C. で停戦交渉を行うも決裂し、日本皇国政府は韓国政府に対し宣戦布告を行った。

既に竹島海域における海上優勢を日本側が確保していたこともあり、主戦場は韓国本土海域となった。

となると、豊富な海軍戦力を保有する日本皇国の独壇場であり、連合艦隊隷下の艦隊が縦横無尽に通商破壊戦を展開したために、韓国の経済活動はストップした。

およそ1週間後の5月2日には韓国大統領府が降伏を宣言、5月4日には韓国軍が正式に降伏。戦闘は終結した。

歴史的経緯

1905年、時の日本帝国政府が島根県に、無主地として編入した。明治、大正のさらに前、江戸時代より松島と呼ばれ、日本人に利用されてきた。

しかし、1952年に竹島の領有権を韓国も主張し始め、1952年と1999年に武力衝突が起こった。

詳細は「竹島報告書」の該当欄を参照。

開戦までの経緯

4月の初め、日本皇国海軍沿岸警備部隊によって、不審船と国籍不明の潜水艦が拿捕される。

拿捕した乗員等の証言から、韓国軍が関係していることが判明した。

それから、情報本部が開戦準備の情報を入手。

4月18日、釜山を含む各地の基地から韓国海軍艦艇の出港を確認。

4月21日 日本皇国軍の戦闘警戒レベルを4に引き上げ、修理艦艇のうち稼働可能艦艇を戦線に復帰させる。

以下は「戦闘経過」の欄を参照

戦闘経過

4月22日 韓国海軍艦隊の集結を確認。

日本皇国海軍全部隊に出師準備が下令される。

4月23日 沿岸警備部隊が竹島海域への航行警報及び漁船への退避命令を発令。

同時に竹島海域を戦闘海域に指定した。

接近中の韓国海軍艦隊に対し、監視中の日本皇国海軍第4航空群所属機が変針要請を送信、これを黙殺される。

4月25日0800i 韓国海軍艦艇の竹島海域への領海侵犯を確認。

警戒中の沿岸警備部隊艦艇「ひなぎく」が変針要請を送信するも黙殺される。

4月25日0815i 「ひなぎく」が撃沈警告を送信。

韓国海軍艦隊が黙殺したことにより、交戦状態に移行。

4月25日0845i 韓国空軍戦闘機部隊が、日本皇国領空に接近。

警戒中の無人偵察機を撃墜。

日本皇国空軍対馬警戒隊は、領空侵犯及び攻撃の恐れありとして、戦闘機部隊の出動を要請した。

4月25日0901i 出動した第232飛行隊が韓国空軍部隊の対し、攻撃開始。

4月25日0915i 築城基地所在の第131飛行隊所属機が韓国海軍艦隊に対し、ミサイル攻撃を実施。

4月25日0940i 九州北部に襲来した韓国空軍部隊を撃退。

4月25日1030i 「ひなぎく」が韓国海軍艦隊と接触、戦闘を開始。

4月25日1130i 韓国海軍艦隊の壊滅を以て、竹島海域における戦闘が終結。

4月26日 日韓停戦交渉が決裂。

日本皇国政府が宣戦布告を、韓国政府に対し通知。

また、日本皇国軍による無制限通商破壊戦開始を国際社会に通知。

国際民間航空機関（ICAO）及び国際海事機関（IMO）から韓

国周辺海空域の飛行及び航行に関する警報が発令される。

連合艦隊第2艦隊所属の「こんごう」及び「あきづき」が黄海に進出、航空機の接近阻止任務を開始。

中華人民共和国が黄海封鎖を宣言、また朝鮮民主主義人民共和国が38度線の封鎖を宣言。

4月27日 連合艦隊出師準備完成。

4月28日 連合艦隊が作戦海域に展開開始。

5月2日 戦闘終結。

4月26日から5月2日間の潜水艦による戦闘経過については、「第6艦隊戦闘報告」を参照されたい。

戦後・影響

影響としては次の通り。

米政府による韓国政府への武器禁輸措置。

市民運動により、朴政権の崩壊が崩壊し、さらなる反日主義的政権の誕生。

軍の影響力の低下。

韓国経済の崩壊及びそれに伴う不法入国者の増加。

韓国海軍士官の回顧録編 ある韓国海軍退役士官の回顧録

私は、韓国海軍に奉職していた。

そこで経験した事件を語ろうと思う。

その最後、退官するまで私は海軍虎の子のイージス艦の艦長として、韓国の敵に対して、抑止力の一角を担っていた。

独島の奪還のための作戦は、当時は東海作戦と呼称され、いつでも奪還作戦が発令できるように、海軍には常に第一線配備が敷かれていた。

仮想敵国海軍だった日本皇国海軍は、世界三大海軍として名高い日本帝国海軍の末裔であり、今でも日本皇国海軍は世界三大海軍の1つに数えられている。

韓国が敵対している国家は、これほどまでに巨大なのか、そう考えさせられることが人生のなかで、数度あった。

まず1回目が、1990年に環太平洋共同演習に初参加したときの話です。

我々、韓国海軍の参加艦艇はフリゲートが2隻、当時の我々、韓国の海軍力からすれば、これが限界だった。

当の日本海軍は、5個の外洋作戦艦隊のうちの1個艦隊を構成する12隻全てを、さらには潜水艦3隻、後方支援艦艇2隻、揚陸艦艇3隻とそれに乗る陸軍部隊、6000名を、航空部隊としてP-3C哨戒機を3機、他にも駆逐艦や海防艦十数隻を派遣してきていたのです。

到底、国自身の地力では叶わない。

そう思わされたのです。

その数年後に、韓国海軍は絶望的な戦いを日本海軍に挑むことになるとは、そのときの私は予想だにもしていませんでした。

(中略)

丁度その頃、まだ中尉だった私はフリゲートの“ソウル”に砲雷士

として、乗り込んでいました。

今では退役したフリゲートですが、その当時では主力艦として、大切に扱われていました。

竹島奪還の命令を受けた我々は、駆逐艦数隻とフリゲート数隻の艦隊で、独島に接近しました。

砲雷士として、CICに詰めていた私は、レーダーの画面越しに信じられない光景を目にしたのです。

「旗艦、被弾。」

「反応、消失」

レーダー員の報告は、驚きだった。

旗艦だった広開土大王級駆逐艦は、ブリキ缶のような、軽装甲ではありましたが、新造艦で簡単に沈むような船ではありません。

そのはずだったのですが、それが一瞬で消失したことが、私たちにもたらした衝撃は大きかったのです。

「敵艦よりの再度の通告。」

「転針せよ、さもなければ撃沈する」

その報告を持ってきた通信士の顔が青褪めていた。

あとからわかった話でしたが、そのときには艦隊司令官は戦死していました。

そんな状況では、誰も動けません。

軍人というものは、命令がなければ動けません。

部隊の最高指揮官である艦隊司令官は、海軍の軍令機関である海軍本部からの命令を海軍作戦司令部を通じて受領しています。

その命令の範囲内において、艦隊司令官は自由な裁量を認められているのです。

それは私たちも同じでした。

命令が下されることもなく、屠殺されるのを待つ家畜のように、誰も静かだったのです。

そういつもは、反日、反日と五月蠅い砲雷長が、黙ってしまっていました。

それでも誰かが命令を出さずとも、艦は進み続けていました。

しかし、そんな隙も見逃してくれるほど、甘い敵ではありませんでした。

次の瞬間、左舷側を航行していた僚艦が、消滅したのです。

「蔚山^{ウルサン}」、蒸発。

本艦にミサイル接近」

報告と同時に、3回の衝撃が、「ソウル」の船体を襲いました。驚く間もありませんでした。

艦橋直下に据えられたCICにも、容赦なく爆風は吹き寄せてきました。

高温に熱せられたその風は、CICのなかにいた全員の身を焦がし、吹き飛ばしました。

斯く言う私も、その1人でした。

「朴中尉、朴中尉。

しっかりとして下さい」

爆風に吹き飛ばされた私は、頭をどこかに打ち付けたのでしよう。気を失っていました。

微睡みのなかで、誰かの声が聞こえ、頭の痛みを認識した私は目を覚ましました。

そばには、CIC付きの砲雷員だった李上士（一等軍曹）がいました。

「艦長以下、ほとんど全員の幹部が戦死しました。

幹部は朴中尉しか生き残っておりません」

そばにいた李上士から告げられた事実は、非情とも言うべきものでした。

ということは、この艦は戦闘能力を喪失したと、そう判定できるのです。

「今、指揮を執っているのは？」

「ダメコン室にいる先任伍長の指揮のもと、応急運転を開始しています。」

朴中尉、指揮をお願いします」

李上士の言葉に、私は頭に残る鈍痛に、顔をしかめながら、頷いた

記憶があります。

立ち上がって周りを見渡しても、使えるものはありません。

電話機もコードが焼き切れたのか、繋がりませんでした。

こんな状態では、C I Cでは指揮の執りようがない。

そう判断しました。

「C I Cは、もう使えない。

ダメコン室に移る。

いいな？」

李上士に、そう伝えようと、C I Cを出て、ダメコン室に向かいました。

途中の廊下には、焼け焦げた死体、腕や足などが欠損した死体、首のない死体、肉片と血塊だけが残っているような、これは死体なのかさえ疑いたくなる死体など、見るに耐えない死体ばかりが並んでいました。

そんな凄惨な死体の並ぶなかを、私は駆け足で駆け抜けたのです。吐き気がしました。

胃から昼食が逆流して、口のなか酸っぱくなりました。

足元に並んでいたのは、昨日まで、いや今日の朝まで、互いに冗談なんかを言い合っていた仲間だったんです。

確かに、気の合わない奴もいました。

それでも、一緒に艦に暮らしていた家族同然の存在だったんです。

このときに死んだ仲間には、同じ場所に産まれた幼馴染みもいました。

軍の士官学校の同期、先輩、後輩、さらには、私の教官だった人もいました。

誰にでも死ぬときは来る。

それを私は強く感じましたし、次は自分の番かもしれないとも、感じました。

「艦隊の指揮は、どこの艦が？」

ダメコン室に辿り着いた、その瞬間に出た最初の台詞でした。「不明です。」

指揮権の委譲等は明言されておりませんので」
ダメコン室にいた前任伍長は、そう答えました。
私としても、予想していた通りでした。

「仕方がない。」

前任伍長、浮いている艦すべてに打電。

”我、損傷甚大なり。”

これより後退せんとす”

これを繰り返せ”

「了解」

ダメコン室の計器類、さらには機関室や水線下に異常は認められなかったこと、それが幸いでした。

「取り舵いっぱい」

上部構造物は焼け落ち、艦橋に据えられていた自動操舵システムは使用不能になっていました。

それによって必然的に、艦尾にある舵機室では、人力舵による操舵が行われていました。

艦内の各所においても、指揮系統の崩壊によって、大なり小なり混乱は発生していました。

「舵機室、取り舵いっぱい」

電話機越しに、舵機室に命令を下しました。

そのときに、返事は返ってきたのですが、中々実行される気配がありませんでした。

仕方なく、李上士を伝令として向かわせたところ、舵機室の乗員は皆、死んでいました。

李上士からの報告によると、数人は頭を強く打ち付けて死に、残り頭を撃ち抜いて死んでいたのです。

そのなかのある死体の傍らには、拳銃が落ちていたそうです。

後に、大宇DP-51だと判明しましたが、そんなことはどうでもよかったです。

新たに操舵室に人を配置する必要が出た。

そのことだけが、私の頭を支配していたからです。

「朴中尉、指揮権を掌握した金中領（中佐）より電話です」

金正成中領、骨董品の忠武級駆逐艦の艦長。

どちらかと言うと地縁や縁故で出世したとも思える、その幼稚な人間性。

下には強く、上には弱い、そんな彼を私は嫌っていました。

『誰が“ソウル”の指揮を執ってるんだ？』

「はっ、自分であります」

『即座に艦隊に合流せよ。』

本艦隊は、当初の指示通り、独島奪還を目指す』

「申し訳ありませんが、それは不可能であります」

軍隊において抗命、つまり命令を無視することは、重大な軍規違反として処理され、即座に指揮権は剥奪されて、軍刑務所に送られることになる。

しかし、合理的な理由があれば、命令違反は問われることはありません。

『なぜだ？』

「自動操舵システムが破壊され、人力舵による応急運転を開始しようとしています。」

ですが、今現在は漂流中なのです。

よって、即座の合流は不可能であります」

そう言いながら、金泳三大統領もとんだ見込み違いをしたものだと思っていました。

この攻撃で韓国は、駆逐艦を、フリゲートを失いました。

国民の税金をつぎ込んだ艦艇を失ったのです。

これは大きな損失でした。

守るべきは、最前線である38度線であり、海は二の次であるべきでした。

陸軍の予算はギリギリであり、国の防衛も危うくなっていると聞いていたからです。

『そうか…』

その声も途中で途切れ、雑音ばかりとなり、それもすぐに消えまし

た。

静寂が艦を包みました。

遠くでは爆発音が聞こえ、そして消えました。

幸運だと思いました。

彼らの目に、我々が入っていない。

退避するチャンスだと、そう考えました。

攻撃が来ないなら、ちようどいいと。

その頃には、舵機室に人員を割り振り終わり、改めて人力舵機による応急運転を開始できるようになった。

その報告を受けて、私は撤退することを決意しました。

「機関始動、出力絞れ。

取り舵いっぱい」

それが私の精一杯の指示です。

下級士官に過ぎない当時の私には、戦略何てものは分かりません。生き残った部下を、生きて田舎に帰すこと、それが私の仕事でした。そこに伝令が走ってきました。

甲板から上には、敵の対艦ミサイルがもたらした破壊の痕跡しか残っておらず、電話すらも不可能だったのです。

仕方なく、見張り員には一人ずつ伝令をつけさせました。

そこからダメコン室に、報告を持ってこさせるのです。

「見張り員より、周辺海域に友軍水兵の漂流者多数。

どうしますか？

との問い合わせです」

「救助せよ。

生存者はできる限り、救助するのだ」

そう命令すると同時に、機関を止めさせました。

艦が完全に停止した時点で、艦内に置いてあったゴムボートを下ろして、出来る限りの水兵を救助しました。

けれども、それをしている最中に、敵艦からの攻撃は、不思議とありませんでした。

「全員の救助完了。

「重傷者はありません」

「分かった。」

救助した者から、機関科か航海科に応援をまわしてやれ」

”ソウル”艦内には、敵から加えられた攻撃によって、戦死者が続出していました。

だからこそ、生存者の加入は艦の運航上、問題がないだろうと判断しました。

「針路284、鬱陵島に戻る。

取り舵15」

数日かけて鬱陵島に戻った”ソウル”は、数日の応急修理のあと、数日かけて本国の造船所まで曳航され、ドックに入渠しました。

やっと私は、肩の荷が下りた気がしました。

緊張の糸が解れ、その場に尻餅をついた覚えがあります。

そのときに聞いた話ですが、失脚したのは大統領ではなく、海軍首脳部だったようです。

そんなことは私にとっては、どちらでもよかったです。

なぜなら、部下たちは全員、親日と見られかねなかったからです。

ただでさえ、何かしらの理由をつけて、罰せられる可能性もありました。

だから私は、上層部が何か言ってくるのを待っていました。

部下に責任を押し付けるつもりは、毛頭ありませんでした。

数日が過ぎ、私は軍法会議に呼び出されました。

「君と君の部下たちを罪に問うつもりはない。」

これはあくまでも、状況を把握するための審問会なのだ」

その言葉を聞いて、安堵しました。

2日間続いた審問会のなかで、私はこの十数日の状況を、洗いざらい話しました。

無罪放免となったことで、私は軍歴に終止符を打つことなく、海軍勤めを再開しました。

その20年後に、あのような事態になるとは思いもしませんでした
が……

ある韓国海軍退役士官の回顧録 その2

竹島から逃げ帰った私は、売国奴と罵られました。それから今まで、蔑まれながら生きてきました。

それでも、命令に固執せずに撤退することを決断できるその冷静さを買われて、大尉に昇進すると同時に、海軍内で戦力の立て直しに尽力することになりました。

海軍再建計画は急務であるとされました。

南北融和が進むにつれて、軍内部では仮想敵国を練り直す必要があり、北朝鮮に代わる仮想敵国となったのが、竹島やらなんやらで揉めていた日本皇国でした。

陸戦に持ち込めれば、韓国軍は勝てるなどと豪語する陸軍幹部の存在もあり、与し易い相手だと国民は考えていたのです。

ただ、日本皇国軍の情報は、軍の機密とされ、実態を知る国民はいなかった。

その上、韓国軍の誰もが、その陸戦に持ち込む方法を考えていなかったのです。

「チョッパリの軍に負けることなど、韓国軍にとってはあり得ない。

なのになぜ負けたのか？」

日に日にそんな声が大きく、そして多くなっていきます。

その声に対する反論など、できるはずがありません。

名ばかりの法治国家でしかない韓国という国は、何十年の法律よりも一時の国民感情が優先される国です。

海軍の設置した対策本部の会議は、紛糾しました。

「なぜ負けたのか？」

そんな声ばかりでした。

「今度やったら勝てるかですか。

無理です」

海軍本部の将官でしょうか。

顔は見たことがありますし、言ってることはめっちゃくちゃです。

「地力が違いすぎます。

一回勝てても、日本が本腰を入れたら、韓国は駆逐されます。それに戦力もありませんし」

私の答えに、場は静まり返りました。

「ではどれだけの戦力があれば、勝てるかと断言できますか？」

そんな無茶な話があるか。

最初は、自分の耳が信じられませんでした。

この男は韓国軍が勝てると思っっているのでしょうか。

そう思ったとき、私は自分のなかの牙を折られていることに気付きました。

彼らを敵に回すということが、何を意味するのかを強烈に印象付けられていたのです。

「うちの兵士の練度からすれば、イージス艦が20隻、通常の駆逐艦が80隻、潜水艦が100隻は要るんじゃないですか」

「え？」

答えるのが馬鹿馬鹿しくなって、適当な数字を並べていました。

それほど絶望的なまでに、日本皇国海軍との差は大きかったのです。

そこに私は、付け加えなければならないことがありました。

「その9割を磨り潰せば、勝てるんじゃないですか？」

「9割も？」

それを聞いて、海軍将官は青ざめていました。

そりゃあそうでしょう。

国家予算を破綻させる覚悟で建造した艦隊を、全滅レベルまで失わなければ、勝てないと言われているのですから。

場は完全に沈黙し、議論は停滞していました。

「本来の議題である戦力の再建については、意見はあるかね？」

重苦しい空気に耐えかねたのか、海軍本部長が話題を変えました。

海軍本部長の言葉に、空気が少し明るくなった気がしました。

「我々、現場の要望からすれば損耗補充分の新型駆逐艦計画で導入するのは、日本皇国海軍の保有する駆逐艦と同等の性能を誇る駆逐艦であってほしいのが実情です」

それは出席者の皆が思っていたのか、全員が頷いています。

「ジェーン海軍年鑑によりますと、日本皇国海軍の保有する最新駆逐艦、むらさめ型は、排水量4500トン、Mk41とMk48のVL Sを16セルずつ装備しています。」

同時期に就役した我が軍の広開土大王型駆逐艦の倍以上です。

また、そのバランスのとれた戦闘能力は、我々には対抗できる船舶はありません」

陰鬱とした空気が、再び場を覆っていきました。

それでも、止めるわけにはいきません。

この国が牙を納めなければ、未曾有の危機に襲われる。

日本皇国にとっては、我々は体のいいサンドバッグ程度の認識でしょう。

殴りかかっても、蚊を叩き潰すかのようにあしらわれる。

何度、牙を剥こうと同じ。

「しかし、そのような駆逐艦を与えられても、我が海軍の将兵では扱いきれないのが、現状でもあります」

海軍の建艦計画は、パルリ、パルリ（早く、早く）が中心で、それを扱いきれる要員の育成が間に合っていないなかつたのです。

私はそのことを認識しました。

「アメリカに改めて、軍事顧問団の派遣を要請されることを望みます。」

近代の日本海軍が、大国だった清に、さらにはロシアに勝ち、第二次世界大戦ではアメリカやイギリスを苦しめることができたのは、明治時代の海軍創成期に、当時の英国海軍軍事顧問団の団員たちの熱意ある指導により、偏に優秀な人員が育っていたからであります。

技術職としての優秀な海軍軍人、組織を末端に至るまで、日本の旧海軍から受け継いでいたからこそ、竹島における我々の敗北に繋がったものと思われれます。

人員育成の面において、我々が頼れる外洋海軍を保持している国、そのような国は、同盟国であるアメリカのみであります」

「この話を聞いていて、このような質問は聞きにくいですが、イージス艦を

持とうが、同じだと思っかね？」

海軍本部長はため息をつきながら、躊躇いがちにそう聞いてきました。

「恐らくは。」

イージス艦を持っているのは、あちらも同じですし、運用実績もあちらの方があります」

日本皇国海軍の脅威は、ヘリ空母、イージス艦、汎用駆逐艦、哨戒機といった装備で編制されたバランスのとれた連合艦隊であり、死してもなお、我々の前に立ちはだからんとする沿岸警備部隊の高い士気にあると考えていました。

日本に来て、当時を思い返すと、その考えは確信に変わりました。

「我が国は弱い。」

米軍がなければ、領土防衛もおぼつかない」

誰かが呟きました。

全くもって、その通りだと思いました。

しかし、それはただの自己保身に過ぎないと気付いたのです。

自国の防衛そっちのけで、戦争をする国など聞いたことがありません。

信頼のおける同盟国とはいえ、戦争中に外国の軍隊に自国の防衛を委ねるバカがいるのかと聞きたいレベルです。

陸軍こそ本土にいましたが、日本への対処に忙しく、海空軍は日本攻撃に出払い、北朝鮮に銃口を向けていたのは、米軍だけだったのですから。

「くそっ、チョッパリのくせに」

第二次竹島海戦、日本ではそう呼ばれている第二次独島海戦は、我々の大敗北でした。

その戦訓は、我々の得たものは大きかったと思います。

まずは戦勝国気分の崩壊、第二次世界大戦が終わり、なし崩し的に独立が認められたとはいえ、それがすなわち私たちの勝利ではなかったからです。

勝利は勝利だったのかもしれませんが。

それでも、自分たちが自分たちの力で得た勝利ではありません。それが慢心でした。

近代の、彼らの言う開国から明治、大正、昭和、平成という時代、長い年月のなか、日本人たちは国際社会という荒波のなかを生き抜いてきました。

その経験を生かし、日本人は牙を磨いてきたのでしよう。

世界のなかで、日本人は愚直なほどに勤勉であると言われる。

我々、朝鮮人が外国を拒絶し、国内だけで右往左往していた頃に、彼ら日本人は血の滲むような努力で、日本を世界の欧米列強に並び立つような国に育て上げました。

その結果が、第二次世界大戦での善戦だったのでしよう。

会議のなかで、そのことを感じ取りました。

「我々は部下というたくさんの方の命を預かる立場であり、なおかつその命一つ一つに責任をとらねばならない立場なのです。

そのことを忘れてはなりません」

あの戦闘は、私にとって衝撃でした。

前にいた僚艦が一瞬にして消え、次には自分の艦が撃たれ、部下は死にました。

その光景だけは、一生忘れられない。

いえ、忘れてはいけない、それらは私が背負うべき十字架なのですから。

「ああ、そうだな。

この先ずっと、戦争は避けねばならん。

我々に対して、敵は大きすぎます」

ああ、やはり海軍本部長は聡明な方でした。

今回も戦争回避のため、全力をあげていたと聞いていました。

この方がトップである限り、日本との戦争はないでしょう。

「今回失敗したから、奇襲も不可能。

どうすれば、やつらに勝てるんだ」

戦争推進派は、そう言います。

ですが、それは不可能です。

日本皇国海軍は宣戦布告前であっても、無許可で領海内に入れば、無警告で攻撃してきます。

国内法にそう定めてあるからです。

国内法より上位に位置する国連海洋法条約に、一応は無害通航権は明記されています。

しかし、日本皇国の領海における無害通航権の行使は、軍艦を通航させたい国が日本皇国政府に対して、事前の通告を必要とするのです。

これは1952年の竹島海戦のときの反省と言われています。

どのような意図があらうと、事前の通告なき通航は無害通航とは見なさない。

これは日本皇国海軍のスポークスマンが述べた言葉であり、あの国におけるスタンダードです。

日本独自の衛星監視網含め、日本の情報網には、韓国軍の行動は筒抜けです。

無害通航権の行使についても、対外的なカウンターパートが存在しないため、行使することは難しい状態です。

「我々の奇襲は、奇襲ではなくなるか」

戦争推進派の面々は、今回の行動において、情報の秘匿、行動の秘匿の観念はあるのでしょうか。

そう言いたくなるような発言でした。

奇襲というものは、数カ月前から準備しなければ成立しません。

日本皇国海軍の前身、日本帝国海軍も真珠湾攻撃の際には情報秘匿には気をかけていました。

米軍の無策もあってか、攻撃は成功しました。

それでも数年単位の時間が、準備段階で必要とされたのです。

思い付きで行動するこの国に、奇襲は不可能であったとそう思いました。

「多くの将兵の血が流れてもなお、一矢すら報いずに負けることなど許されません」

今回の冒険的行動をとらなければ、日本皇国政府は韓国政府に対し

て、国交正常化交渉を開始する予定でした。

そのために外交部の人間が、

そのことを思っていると、つい口が滑りました。

今の私からしたら、若いってすごいことだと思います。

「あんたらがバカなまねさえしなければ、こんなに血が流れることはなかったんだ。

日本の世論も、諸外国の世論も敵に回ることなどなかったんだ。

あんたらがバカなまねさえしなければ」

ただでさえ、漢江の奇跡といわれる経済成長は、竹島紛争の勃発で急ブレーキがかかっており、後にアジア通貨危機と呼ばれるウオン安に陥っていました。

投資家たちは、機を見るに敏いです。

これまでも韓国におけるカントリーリスクの大きさは、群を抜いて高いとされてきました。

というのも、日本皇国との対立や紛争によって、いつ経済活動が制限されるかわからない状況にあり、韓国軍が日本皇国軍に太刀打ちできないことが明らかであるからです。

それが国内問題だけでなく、それらも踏まえた外的な要因によって経済が疲弊しているのです。

戦争推進派はその現実が見えていないのでしょうか？

経済といった備えが磐石でなければ、近代の軍隊は戦争を続けられませんか。

感情論だけで戦争ができるのならば、日韓は数十年と戦争を続けていたでしょう。

それだけの国力もなく、子供の癩癩のように時おり突っかかる。

そんなことでは、政治家同士が信頼関係を結ぶことすら難しい。

「ほっ。」

今なんつった。

上等だ、出てこい、ぼこぼこにしてやる」

頭に血が上りやすい連中は、子供のようです。

「こっちは議論をする場だ。」

ギャーギャー騒ぐのなら、出ていってくれないか？」

「本部長、本部長はそんなやつの味方なのですか？」

愛国心もないそんなやつ」

愛国心で戦争に勝てるのなら、日本はアメリカと太平洋戦争で引き分けに持ち込めたでしょう。

そして、その言葉は我々にブーメランとなって、返ってきます。

朝鮮戦争のとき韓国軍は総崩れとなり、国連軍がいなければ、

「愛国心で戦争できるのならば、とうの昔に竹島を奪還できているだろう。

我々に欠けているのは、いや欲しているのは、状況を冷静に見る力だ。

感情論だけの意見しかない君たちに、その力があるとは思えん」

本部長の言葉に、戦争推進派は項垂れていました。

戦争はしない。

海軍本部長のその言葉に、韓国の今後が決定付けられました。

第二章

VOYAGE. 27

早朝のJR広島駅、そこに”ひなぎく”乗員たちの姿はあった。

竹島の海戦から、早くも2週間が過ぎ去り、この頃には各地で頻発した暴動も終息し、国民の生活は平穏そのものに戻りつつあった。

しかしまだ、停戦協定が結ばれたばかりであるということもあり、日本皇国軍の警戒態勢はほとんど解除されていない。

そして竹島で勝利の凱歌をあげた”ひなぎく”は、松江警備府に寄港して、簡単な休息と修理を行い、呉の海軍工廠に再入渠したあと、海軍司令部総長から発せられた出頭命令に従って、東京に向かっていくのだ。

「出頭命令か……面倒だな」

二階堂少佐は呟いたあとに、思い直したように聞く。

「先任は東京育ちだったな？」

「はい。」

山口は下関の生まれではありませんが、物心つく前に母が離婚したので、それを機に、市ヶ谷に引越しました」

「そうか……」

空気がどんよりとする。

しかし、行きも帰りも新幹線のグリーン車という特別待遇に、乗員たちも自分も心が躍っていたのも、また事実だ。

「新幹線で東京駅に到着した後、海軍がチャーターしたバスに乗り込むらしいですね。」

およそ4時間の鉄道の旅です。

ゆっくり行きましょう」

駅の構内には、広島県警察鉄道警察隊の警察官が、巡邏を行っていた。

如何せん、国鉄時代から日本の公権の象徴と見做され、暴動で設備が破壊されることも多かったからだ。

「国防省海軍部からの通達だが、今回の新幹線は貸し切りではない。周囲のお客さんの迷惑にならないように、注意するように。以上だ」

佐竹中尉が、国防省から届いた通達文の内容を、読み上げた。全員がうなずくのを見てから、3階の新幹線ホームに上がる。

『8時57分発、東京行き』のぞみ10号”は、14番線ホームに参ります。

2列に並んで、お待ちください』

ちようと、14番線ホームに白く長いノーズが特徴で、カモノハシとも表されるN700系が滑り込んでくる。

時刻は、8時55分、しかも後10秒で56分になろうか、という具合である。

きっかり定時での運航だ。

「乗車用意だ」

艦長の指示と共に、乗員たちは2列縦隊になると待機列に並ぶ。

ドアが開くと、列を保って、秩序をもって、乗車する。

「全員の乗車を確認しました」

最後列にいた佐竹中尉が、二階堂少佐に報告する頃には、時計の針が8時57分をまわって、ホームドアと新幹線の扉が閉まっていく。

『14番線ホームの新幹線は、のぞみ10号、東京行きです。

まもなく発車します。

柵に手を触れないようご協力願います』

大音量の発車ベルが鳴り響くなかを、N700系はJR広島駅を発った。

8時57分に広島駅を出発した”のぞみ10号”は、一路東京駅を目指している。

途中、”のぞみ10号”は岡山駅の23番ホームに9時32分に到着し、1分間の停車の後、9時33分に発車し、その次の新神戸駅には10時4分に着し、そして10時5分発、広島駅から大阪警備府最寄りの新大阪駅に10時18分に到着した。

「二階堂少佐、佐竹中尉、現地で活躍だったようだな？」

「九十九少将!？」

25番ホームに停車していた”のぞみ10号”には、大阪警備府司令官である九十九莞爾少将が乗り込んできていた。

『25番線ホームの新幹線は、”のぞみ10号”東京行きです。まもなく発車します。』

柵に手を触れないようご協力願います』

駅のアナウンスが響くなかを、車窓のホームが小さくなる。

新大阪駅を10時20分に出発した”のぞみ10号”は、京都駅に10時34分に到着した。

それまでに聞いた九十九少将の話を要約すると、九十九少将も市ヶ谷に呼び出されたらしい。

2分間の停車の後、京都駅から名古屋駅の手前、まで来たところで、佐竹中尉に電話がかかってくる。

佐竹中尉が席をたって、ラウンジで電話を受ける。

海軍公用の携帯なので、すべての端末が盗聴防止仕様であり、情報秘匿の観点から常時使用を監視されるうえに、通話やメールの内容に關しても、市ヶ谷にある情報本部や人事監察本部及び通称：マルグンと呼ばれる警察庁公安警察部担当者に傍受されている。

「もしもし」

『……………佐竹紀一海軍中尉だな?』

ボイスチェンジャーで変えられた男の声で、低くなんというか籠ったような声だ。

そして、間髪入れずに、

『……………私は天皇を暗殺する。』

阻止できるのは、君だけだ』

と述べ、電話を切った。

この会話は、情報本部と警察庁公安警察部で傍受されており、捜査が開始されようとしていた。

電話が切れて、まもなく”のぞみ10号”は名古屋駅に到着した。

11時11分に到着し”のぞみ”は、1分間の停車の後、15番ホームを11時12分の定刻通りに出発した。

しかし、通信を傍受していた警察庁は、愛知県警警備部公安第一課の公安警察官を乗り込ませた。

電話を受けた佐竹中尉の事情聴取のためだ。

事態は急転していくなかを、”のぞみ10号”は新横浜に停車、そこを出発し、品川駅に到着する。

品川駅から東京駅までは、6〜7分ほどで定刻通りの12時53分、”のぞみ10号”は東京駅18番ホームに到着した。

佐竹中尉が電話を受けてから1時間の間に、首相官邸には対策本部がたてられていた。

また、テロ対策を担当する内閣情報調査室、警察庁、国防省、公安調査庁、また、皇室関連事案を担当する宮内庁と言った政府機関と連絡用の回線が繋がった。

特に御上の身辺の警衛を担う皇宮警察本部と御所足る皇居の警備を担当する陸軍の近衛第1歩兵連隊を管轄する警察庁と国防省は、その感じている危機感も他の官庁よりも一入だ。

「この予告が政府や天皇家宛ではなく……海軍の1軍人に告げられたのか、その意味が重要だろうな」

「逆探知と電話番号の割り出しには成功しましたが、犯人の発見に失敗しました。」

また、使用されたのは、不正に転売されたと見られる携帯で、憲兵と現地の公安関係者を動員して、捜査中です」

警察庁の特別捜査本部長の呟きの後に、警察庁公安警察部からの報告が入る。

「日本共産党関係か、はたまた強硬派の右翼か。」

冷戦は終わり、日本皇国は国際紛争解決のための、必要以上の武力の行使は認めておらんというのに「

と情報本部長が呟く。

既に、日本政府はできるだけの人員を動員して、事件を捜査していた。

「皇宮警察、近衛第1歩兵連隊には、非常呼集が既に発令されており、蟻の這い出る隙間ありません。」

また、那須と葉山、京都を守る2個の近衛歩兵連隊にも召集をかけた。また、

2日後には、皇居は要塞となるでしょう」

宮内庁の警備計画者は断言した。

「では、宮内庁と海軍に聞きたいのだが。」

この佐竹海軍中尉は、陛下と面会する予定でもあったのか？」

特別捜査本部長の質問に、

「陛下の強い希望によって、面会が予定されていました」

宮内庁と海軍を代表して、御上の世話役である侍従長が答える。

「まさか、それは何人でも知り得る情報なのか？」

「いえ、そんなことはありません。」

知っていたのは、私を含めて宮内庁と皇宮警察、陸海軍の一部だけです。

また、その全員は信頼できる人物です」

その解答から、導かれる答えは1つだ。

「と言っていることはだ。」

関係者に対して、何らかの脅迫行為等を使ったのかもしれない。

情報本部軍の方で調査できますか？」

特別捜査本部長からの要請を受け、情報本部長は部下を見回して、部下が頷くのを見て、

「憲兵の他にも、保全隊を投入します。」

公安部隊、テロ対策局もです。

それだけの人員があれば、すぐにでも取りかかれるかと思われ「ます」

と頷きながら、発言した。

「憲兵と公安警察は全力で、犯人の追跡を継続します。」

また、事態は発生したわけではない。

関係者全員に事態の秘匿を要請します」

「海防艦 ひなぎく」御一行様は、東京駅のバスターミナルに海軍のチャーターしたバスが到着しています。

一旦、海軍市ヶ谷地区にある国防省庁舎に向かい、明日からの

フリーフィンゲ
説 明がある予定です。

海軍ホテルには、ふたひとまるまる21時00分到着予定です」

東京駅バスターミナルには、桜のマークの入ったバスが止まっていた。

桜のマークは、日本皇国軍の象徴でもある。

「日本皇国陸軍特殊輸送大隊所属、安倍野軍曹であります。

本日は運転手を命ぜられております。

よろしくお願いします」

国防予算が削られ、平成29年に軍備再編を余儀なくされた際、多くの軍部隊が廃止されたが、直後の1年の間に、軍の象徴である桜に関連する企業が多く誕生している。

無論、その企業の大半が、軍と関係が深いことは言うまでもない。

例えば、このバス会社は“桜エキスプレス”という名前で、都市間輸送に従事しているが、社員全員が陸軍予備役である。

ゆえに、現役復帰後の原隊名を各会社で持つことも多く、軍関係者にはそれと階級を述べてしまうのだ。

また、おなじような会社に、桜警備保障だとか桜海運、桜陸運、桜空輸、さらには変わり種で言えば、ヘリコプターで都市を飛ぶ桜遊覧があり、すべてが陸海空軍の予備役兵員で構成された会社である。

だから、互いに仕事を融通し合える関係だ。

軍からの仕事もあるので、これらの会社の経営は順調だ。

「奥から順に座れよ。

階級順にな」

佐竹中尉が声をかけつつ、ときばきと乗車していく。

「私から基本的な説明をしておく。

これから向かう海軍で言うところの市ヶ谷地区は、総面積は23万㎡、haに直すと、23haもの広大な敷地の南側に正門があり、その正面、儀仗広場のその先に地上7階地下6階の国防省本館があり、ここの地上部分に、陸軍部、海軍部、空軍部などの内局と呼ばれる部門や情報本部隷下の地理測量局、陸海空軍の基地施設の建設管理を担当する国防施設本部、軍人の素行を監視する国防監察本部と隷下の中

央機動憲兵隊、そして軍法会議を開催する第1部、戦地や後方での補給を担当する補給兵站本部、兵器類の開発と調達を行う国防装備庁、軍に対する地元の理解協力のための広報活動を行う地方協力局、軍人教育と文化振興を担当する教育部の事務オフィスがあり、地下には情報本部と統合¹。戦²指揮所³、統合参謀本部以下の陸軍参謀本部、海軍軍令部、空軍作戦部があります。

ほかに地上3階地下9階の北館には、蔵書数800万冊を誇る国防省立図書館があり、国防省所管ということもあって、軍事、国家安全保障、国際関係に関する書籍が多数揃っています。

また、国防省の広報施設、記念館などを管理しているのもここです。その北館の3階には防衛研究所、日本皇国軍の公式非公式両方の戦史を編纂するのが仕事です。

南館と呼ばれる建物は、地上3階地下2階という小振りの建物ですが、陸海空軍の統合システム通信群、統合システム通信支援群が管理しており、地上220mの高さの通信用鉄塔が特徴ではありますが、通常、使用するのは朝霞や札幌、伊丹等にある陸軍の方面軍司令部か、海軍の連合艦隊、沿岸警備部隊の司令部、空軍の立川の航空総隊司令部との通信だけとなっています。

また、航空機との通信は、日本皇国空軍の立川通信所を介して行われています。

また、本館のとなりには、西館と呼ばれる病院棟があります。

これは、各部署の移駐によって、手狭になった三宿駐屯地から日本皇国軍中央病院を移設したもので、内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、神経内科、代謝内科、感染症内科、外科、呼吸器外科、心臓血管外科、脳神経外科、整形外科、形成外科、精神科、リウマチ科、小児科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、リハビリテーション科、放射線科、麻酔科、歯科そして救急診療科が開設され、病床数は650床あり、そのうち一般病床が520床、精神病床が50床、生物兵器等対応病床が50床、感染症病床が10床、結核病床が20床という感じです。

生物兵器等対応病床、感染症病床、結核病床は地下2階のlevel

14 対応病棟におかれています。

以上が、市ヶ谷地区国防省の説明ですが、質問はありますか？」

佐竹中尉は合間に息継ぎをしつつ、この長い説明を終えた。

「ないですね。」

続けます。

ちなみに統合参謀本部長の河野作造陸軍大将は、防大25期卒業の最古参の将校です。

また、陸軍参謀総長は前田利光陸軍大将。

武家の名門加賀前田家の現当主で、主に諜報・謀略畑を進んできたようです。

海軍トップの海軍軍令部総長は、田中覚治海軍大将。

近衛予備役海軍大将の弟であり、私の伯父に当たる人です。

空軍作戦部長は、武藤安名空軍大将。

優秀なイーグルパイロットだったらしいですよ。

しかも空軍の勇猛果敢、支離滅裂という気質を体現した人だとか。

小さい頃にお世話になって、お中元とお歳暮、年賀状は書かさず送るようにしてますね」

佐竹中尉の説明に、全員ポカンとしている。

今、挙げた人物たちは、平の日本皇国軍将兵が人生のなかで、1度会えばその軍歴に箔がつくとも言われている重鎮たちである。

そのうちの1人と親戚で、もう1人とは年賀状をやり取りする仲と
いうことに驚きを隠せないのだ。

つまり、雲の上の人である。

そうして、全員が思っていた。

こいつは出世すると。

その予想は、当たらずも遠からずというところで、佐竹中尉は出世
になど興味はなかった。

元々、佐竹中尉は軍人よりも図書館司書になりたかったのだ。

無類の本好きである佐竹中尉は、両親の言葉に従って国防大学校に
入学したのだが、夢は諦められなかった。

国防大学校の勉強の合間に、図書館司書資格を通信口座で勉強し

て、資格を取得していたのだ。

そして、配置希望には国防省立図書館と書いたはずなのだが、なんの因果か海上勤務に配置になった。

「市ヶ谷に近づいたようです。」

あと少して到着です」

外の標識看板を見ていた佐竹中尉は、そうアナウンスした。

バスは順調に走行し、5分もしないうちに国防省の正門前に到着する。

「桜エキスプレスの阿倍野ですが。」

通行許可をお願いします」

運転手が正門の警備隊員に、写真入りの身分証と通行許可申請書の控えと共に提示する。

元々からの知り合いなのか、身分証を一瞥しただけで返却する。

正門から少し入ったところに、駐車場があり、そこでバスを下りる。

「整列、4列縦隊」

バスから下車すると、警備隊員2名と海軍中佐の階級章をつけた人間とその副官らしき男がいた。

「全員、気をつけ。」

敬礼」

目敏く気づいた佐竹中尉が、号令をかけて、敬礼させる。

答礼を返されるのを待ってから、号令をかけ直す。

「やめ」

全員が手を下ろす。

「海軍軍令部付きの宮原護中佐だ。」

総長の指示により迎えに来た」

チタンと思われる細いフレームの眼鏡を押し上げた男は名乗った。

「同じく諏訪部議一大尉です」

その後ろにいた男も名乗る。

「大阪警備府司令官、九十九莞爾少将だ。」

出迎え感謝する」

「総長たちは、迎賓室でお待ちです」

国防省迎賓室というのは、一種の多目的室である。

部屋はかなりの広さを誇り、武骨な印象の強い国防省庁舎のなかで、唯一といってもいいほど、気品のある調度品で揃えられたそこは、記者会見場として使用されたり、国防省を訪れた国賓の休憩室、国防省日本皇国軍主催の安全保障セミナーの会場もしくは何かしらのパーティーの会場として使われている。

「今日は内輪だけでの非公式な祝勝会だ。

飲め、叫べ」

迎賓室の前の扉で、宮原中佐はそつと佐竹中尉に耳打ちした。

はつと振り返った佐竹中尉に、宮原中佐は部屋のなかを指さした。

背筋を伸ばし、ネクタイを締め直した佐竹中尉は室内に入った。

佐竹中尉は迎賓室のなかで、歓談している4人組の元へと歩いていく。

「佐竹中尉、報告をしてくれ」

佐竹中尉に気づいた田中大将が、なにかを言いたげな佐竹中尉に頷きながら聞いた。

佐竹中尉が、全員の顔を見回す。

河野大将が、前田大将が、武藤大将が頷き、再び田中大将が頷くのを見て、佐竹中尉は口を開いた。

「日本皇国海軍沿岸警備部隊大阪警備府艦隊海防艦”ひなぎく” 前任将校、佐竹紀一中尉。

竹島沖にて、敵艦隊と交戦。

揚陸艦1隻と駆逐艦数隻を陸空軍と共同で撃沈し、駆逐艦3隻以上を単独で撃沈、駆逐艦1隻を鹵獲しました。

それにより、敵艦隊を殲滅。

ただいま戻りました。

報告を終わります」

「よし。」

よく戻った」

佐竹中尉の報告を受けて、田中大将が言った。

会場がシンとして、会場中の視線がこちらに集まっているのが分かる。

静かな会場は、内緒話をするには向かない。

だから、それを見つめていた周りの将兵たちに、こうも付け加えた。

「今夜は無礼講だ。

今日のうちはな、飲め、騒げ。

今日は見逃すが、明日から大騒ぎすれば上官不敬で、憲兵がしょっぴくぞ」

田中大将の喝が飛び、その言葉を待っていましたとばかりに、会場は盛り上がる。

騒がしくなる会場を横目に、田中大将は切り出した。

「報告書は読んだ。」

その件について、紀一はどう考えているんだ？」

その騒がしきのなかで、5人は話しながら、隅の方にあるソファのところに移動していた。

首相官邸の特別応接室に置かれているものと、全く同じものだというそのソファは国賓クラスの来客にも対応可能だ。

そのソファに田中大将たちは座る。

「座らないと話もできん」

立ちっぱなしの佐竹中尉に、言外に座れと言っているようなものだ。

「では、飲み物をもらってきます」

1人だけ飲み物をもらっていなかった佐竹中尉は、バーカウンターの方に向かった。

数分くらいたった頃、佐竹中尉はウイスキーのロックを片手に戻ってきた。

そつと一礼して、席に座る。

「竹島の件ですか？」

それとも……陛下の件ですか？」

席に着きながら、佐竹中尉は用件を聞いた。

「あとの方で頼む。」

竹島の方は、戦況報告書で読ませてもらった。

どうやら空軍に阿呆がいたようだが、我々の方で内々に問題なく処分した。

外への情報の漏洩はない」

ここでいう処分とは、秘密裏に闇へと葬り去ることである。

軍法会議にもかけられず、密かに拉致された対象者は、北海道や静岡の演習場で、日本皇国軍特殊作戦部隊の実弾射撃の仮想標的に利用され、大概が射殺される。

淡々と述べる田中大将と、悔しさからか爪が食い込み、血が滲むほど拳を握る武藤大將が目の前にいた。

愚かなまでに実直な武藤大将のことだから、部下が仕出かした不始末がさぞかし悔しかったのだろう。

「それで陛下の件だが、なぜか確度の高い情報が、情本にもないらしくてな。

情本在籍の専門の分析官も推測がたてられんそうだ」

それを聞いて、苦り切った顔をしているのは、前田大将だ。

諜報・謀略畑出身の前田大将は、情報が集まっているのに、簡単な推論もたてられない後輩たちに失望の感を隠し得なかった。

なぜなら、前田大将は状況説明を受けたあとに、独自に情報を精査して、簡単な推論を組み上げたからだ。

そして実際、情報本部の担当者から最初にそれを聞いたとき、前田大将は顔を真っ赤にして、こう怒鳴り散らしたという。

「日本皇国軍の活動を支える情報軍人がなんたる様か。

前線で戦う将兵に安全と安心を提供するのが、銃後を守る補給科と情報科の軍人のはずだ。

こんな体たらくで、前線の将兵と国民、果ては大元帥閣下に、いや陛下に顔向けできるのか？

将兵や国民のいい笑いだぞ」

これは、ある意味で反論できない常套句である。

日本皇国軍部隊の練度不足は、直接の部隊長だけの責任では済まされない。

それを指揮監督する上級司令部の長つまり連隊長や旅団長、そしてそれをさらに指揮監督する最高指揮機関たる統合参謀本部長、陸軍参謀総長、海軍軍令部総長、空軍作戦部部長の責任であり、軍備計画や人事を担当する内閣の長たる内閣総理大臣ひいては日本皇国軍を名目上統帥する天皇陛下までもが責任を問われかねない。

だから、日本皇国陸海空軍将兵は各自が高い練度を誇るのだ。

すべては天皇陛下の体面を、名誉を守るためである。

入隊直後から、その旨を頭に叩き込まれた日本皇国軍軍人に、手を抜くという意識はない。

そして、その意識の欠落した情報本部の軍人は、少ない情報から推

論を組み立てて、それを骨格にして、情報を収集するという情報収集の基本ができなかった。

第一線で活躍する情報軍人が偽ディスインフォメーション情報や間違いを恐れてはならないのだ。

前田大将の叱責を受けた情報本部は、いまさら状況の分析を行い、先ほど仮説を報告してきたのだ。

その報告は読まれずに、まだ前田大将の机の上に残されたままだ。「そうですか。」

まず、考えられる犯行グループの候補としては、ひめゆり事件を起こしたような左翼系の過激派組織とその間連団体、アルカイダやオウム真理教などのテロリスト、仮想敵国の国家機関の職員だと思われませんが、それら単体だけではないと思います。

今回の件は、どのグループにもバラバラに必要なものが不足しており、単体ではそれを行う力はないと言えます」

そして、佐竹中尉は状況を分析し考えながら、言葉を選び、説明していく。

その説明に、全員が頷いている。

「そして、先日の不審船騒ぎの際、密輸団が運んでいた荷物の証言工員は、情報本部の公安部隊から報告されていると思いますが、今回の件は恐らく潜入している韓国の職員が、何らかのグループと連動しているものと感じています。」

特に官庁関係では抜群の情報収集力を持つ左翼系の過激派組織、武力という点において実行力を持つ韓国職員、この二つが組んだ場合、治安維持に携わる機関にとって、非常に厄介だと言えます。

例えば、知識層が中心の左翼系の過激派組織であれば、中央官庁にも知己は多く、情報収集は容易であると考えられますが、とくに国防省や宮内庁にも左翼系の過激派組織に入った同級生を持つ人間はいらるでしょう?」

その手口を研究して対策を講じる立場である情報将校ほど詳しくはないが、ソ連赤軍参謀本部情報総局ウの息のかかった人物が如何にして、英米の中央省庁に潜入・潜伏していたかについての記事をまとめ

た本を読む機会のあった佐竹中尉は、その工作の巧みさに舌を巻いたものだった。

何故ならば、就職した官僚を標的とするのではなく、就職する前の優秀な学生を標的とした上で勧誘するのだ。

無論、その学生たちは共産主義に共鳴するように仕向けていたから、通常の協力者に比べて、見返りはほぼなくて済むという副次的効果まであった。

こうして、潜入していたスパイたちのことを、欧米のメディアは便宜的に”赤色細胞”と呼んでおり、彼らは外交、経済、財務などに関連する、その国の政策がソ連に利する形になるように、情報流出や情報操作などの活動を行っていたとされる。

それらの人物の活動の一部は、連邦捜査局のエドガー・フーバー長官の直接の指揮下で、公安活動に従事していた特別捜査官に監視されていたと言われ、第2次世界大戦後にアメリカでマッカーシズムの嵐が吹き荒れた際には、その監視記録に基づく名簿が利用されたものと思われる。

そして、その赤色細胞の最大の成果が、第2次世界大戦での日米開戦だったと言われている。

とくに、当時の日ソ関係は緊迫度を増しており、日米開戦がなければ数年以内に日ソ間で戦争が勃発したとも言われている。

そして今回の情報流出の場合は、その変則的な応用例だと言える。

東側諸国の盟主であるソ連が健在だった冷戦期とは違い、21世紀まで生き残った左翼系の過激派組織の親玉は、海を越えた先にある大陸の支配者、中国共産党である。

中国と韓国は政治体制や対外政策では、いまのところ一致する点は少ないものの、仇敵である日本皇国の打倒という一点において、中韓の目的と意見は一致していた。

だからこそ、米国の与り知らぬ韓国政府の対日作戦を陰に陽に中国は支援してきたのだ。

今回の場合は、配下に置いている左翼系の過激派組織以外にも、I

S（イスラム国）などのイスラム系の過激派組織とも密かに接触して、資金提供と同時に日本皇国でのテロを要請していたらしい。

フランス、パリで起こった無差別テロのような事件が起これば、日本皇国の首都、東京は大混乱となり、中国はその手を汚さずして、日本皇国に政治的、軍事的な揺さぶりをかけることができるだろう。

しかし、ここに中国政府の単純な誤算があった。

イスラム教はもちろんキリスト教や仏教を含む世界の宗教には、宗派や個人によっては厳格に適用されうる教義が存在し、宗教上、禁忌とされる行為が多数存在する。

例えば、イスラム教徒の場合は豚を食べてはいけないというものや飲酒の禁止などである。

それを、同じアジア人である日本人や韓国人がそれを犯しても、キリスト教徒や仏教徒と申告する限りは、見逃してもらえするという。

しかし、大多数の中国人は違う。

中国は共産党の支配する共産主義国家である。

第2次世界大戦前夜のバチカンの教皇いわく、宗教を否定する宗教であるのが共産主義だという。

また、共産主義を信奉する者は、大雑把にまとめると無神論者といえる。

しかし、信心深い何らかの宗教の信者たちにとって、どうしたって無神論者は敵に近い。

つまり、無神論者たる共産主義者^{コミュニスト}が、どのような意図があろうと、宗教上の禁忌を犯せば、悪意ある行為、つまり宗教の冒瀆と見なされる。

その上、中国共産党は同じイスラム教徒であるウイグル族を迫害、弾圧している。

イスラム世界が宗派間宗教戦争に明け暮れていたこの半世紀であつても、宗教と同胞を弾圧し、なおかつ経済力もある中華人民共和国は欧米列強と日本に並びうる標的的国家である。

今回、イスラム原理主義過激派組織は、中国から受け取ったその資金を中国国内の同胞の救援のために使用することにしたらしい。

この辺の説得は、同じイスラム国家であるヨルダン政府が行ったと

言われている。

日本皇国とヨルダン王国は立憲君主制という共通点もあり、日本皇国はヨルダン王国と友好国である。

そして、ヨルダン政府は、IS（イスラム国）とも交戦状態にありながら、情報収集と交渉のためのチャンネルを維持していた。

そのチャンネルを総動員して、テロ情報を得たヨルダン政府は独断ではあったが、IS（イスラム国）の説得に当たると同時に日本皇国政府に詳細を通報した。

結果、憲兵や公安警察を動員して、秘密裏に取り締まりが行われ、IS（イスラム国）の日本における拠点は壊滅した。

無論、これらは世界の裏の話であり、IS（イスラム国）による中国での連続テロ事件と、日本皇国で起きていた天皇暗殺予告事件は、表向きは何ら繋がりはないように見えた。

だが、裏では中国の動きで繋がっていた。

佐竹中尉の話を聞いていた田中大将たちは、ただ頷くばかりであった。

「なるほどな。」

そのルートであれば、情報が漏れてもおかしくはないが、それでもこんな短期間に、ここまでの的確な情報を得られる可能性は低いと、わしは思うが?」

「正確な情報のすべてであれば、難しいと思います。」

しかし、陛下が功績のあった海軍将校と個人的に面会するらしいという情報があつたとします。

そんな断片的な情報を色々なところからいくつも集めれば、真実に限りなく近い推論にたどり着けるはずです」

田中大将の疑問に、佐竹中尉は丁寧に回答した。

「確かに、それは諜報の基本だな」

そして佐竹中尉のその推測に口を挟んだのは、前田大将である。

情報将校である前田大将は、何度もそれを行ってきた経験を持つ。

その活動は世界各地に及んでおり、英国秘密情報部と英国保安局では前田大将に偽デイスインフォメーション情報情報を掴まされるなど、煮え湯を飲まされてきた。

だからこそ、この2つの組織、英国秘密情報部と英国保安局は前田大将に、ミスター・M・ジュニアとコードネームを付け、警戒していた。

そのレベルは、前田大将が一度英国に入国すると、英国保安局の所属と思われる数台のセダンに露骨に追尾され、訪問先には黒服で目で監視と分かるような人間がこれでもかと配置されて、滞在先のホテルの部屋には盗聴器と隠しカメラが数十台据えられるほどだという。ちなみにジュニアだけにシニアの方もいて、そちらは、前田大将の祖父である前田利為陸軍大将だったと言われている。

そんな経験豊富な情報将校である前田大将が断言したのだ。

田中大将たち、4人に緊張が走る。

そう気づかされるようなことを、言った本人ですらだ。

憲兵や情報軍人が定期的に行う軍人と国防省職員の素行等の監視だけでは、情報を守りきれないことに気づいてしまったからだ。

友人間の接触を制限することは、どの人間であつても無理だからだ。

「特にこんな状況ですから、その……陛下と会う予定の海軍将校の特定は容易ですし、情報の確度が数日の誤差であれば、錨マークの入った公用車が入るのを確認してから、行動を起こしても十分に間に合います。」

相手の武装にもよりますが、最悪の場合は、近衛連隊と皇宮警察は磨り潰されかねません」

そこまで言うとは、佐竹中尉はバーカウンターで受け取ったウイスキーの水割りを一口飲む。

「今のところ、我々と警察の捜査網には、未だに犯人の影すら映っていない。」

いや目星はついていないが、法令上、そのグループを片っ端から逮捕することなどできないからな。

それに違法ではあるが、市ヶ谷の情本の電腦作戦部と三沢と那覇、富士山頂に日本が独自に設置した通信傍受施設^艦、朝霞、百里、横須賀、厚木、習志野、練馬、立川の通信部隊を総動員して、通信の傍受と逆探知、ハッキングによる捜査を行っているが、尻尾は捕まえられず無駄だったようだ。

こうなつてくると、そういうのに疎い左翼だけではないというのは、わかるさ……」

いくら電子工学の講義を受け、博士号や学士、学位を取得して、電波に詳しくなつたからといって、電波や電脳空間で日本皇国軍及び日本の公安警察が独自に構築してきた通信情報傍受網^艦の全貌を理解するものはいない。

とくに富士山頂にある特号機材^{犬の耳}は表向き、気象庁の天候観測用施設として運用されている。

ここでは、最新鋭の通信傍受装置に常に更新が続けられており、今

では電腦空間上の情報T w i t t e rやLINEといったものすら、公然と傍受できるようになっている。

しかし、それを知るのには一部の軍人と公安警察官とそれを調査したスパイのいる国だけだ。

監視と警戒を担当した情報保全隊によると、米国、中国、ロシア、韓国といった各国のスパイが確認されたというが、これの詳細を知る者は日本ですら一部なのだ。

彼らがどこを突こうと、埃はでない。

本来は否定的な意味でとらえられるが、まさしく文字通りの火のなるところに煙はたたない状態にあった。

だから大抵のスパイが諦めて、本国に帰還するか、別の任務に降り向けられている。

それでも諦めない人間は、情報本部の公安部隊によって、口封じされた。

しかも、過去に起こった左翼系の過激派組織の事件は、大半が未然に阻止されている。

無線封鎖という概念のない左翼系の過激派組織は、通信のなかで計画をペラペラと喋ってくれるから、決行直前のアジトを公安警察が急襲することで、リーダーから実行者、爆弾等の危険物を一網打尽にできたからだ。

「だが、もし国家単位の支援があるのなら、相手にするのはとてつもなく厄介だ」

苦渋の表情を浮かべているのは、田中大将をはじめ、4人全員だ。

「陸空軍の常識から言えば、航空機を使えば、歩兵用の武器はすべて輸送できる。

人員の輸送ですら、税関で見逃されているのだ。

相当量の武器弾薬が搬入されていると見て、間違いないだろう。

遠距離から、迫撃砲や対戦車擲弾^R^P^Gを撃ち込まれたら、小銃しか持たない近衛連隊は手を出せない。

重装備の一撃で近衛連隊に大打撃を与え、皇居内に侵入、圧倒的な火力で皇宮護衛官ごと、陛下を暗殺するつもりなのか？」

5人の話は深刻さを増していた。

「そうだったら、まさしく近衛連隊も、皇宮警察も磨り潰される。

そうになると、我々は陛下に合わす顔がない」

武藤大将の一言が、空気を重くする。

5人の周りには、陰鬱な空気が漂っていた。

「そして、最後に犯人の目的ですが。

竹島で活躍した軍人つまり私と陛下の暗殺だと思われれます。

わざと私に予告することで、私を誘い出しやすくするつもりなのでしょう」

「なるほど、佐竹中尉と陛下を暗殺することで、我々の動揺を誘う作戦ですか。

やることがせこいですね」

佐竹中尉の話した敵の目的には、田中大将たちもうなずく他ない。

今回の場合の陛下や日本皇国軍人を狙ったテロは、東京を壊滅には追いやらないだろうが、日本皇国民には戦略核兵器が使用された以上の動揺をもたらすだろう。

それを阻止できうるのは、当日皇居にいるはずの佐竹中尉以外にはいない。

「となると、最後の砦は佐竹中尉しかいないわけだ。

明後日の午後に佐竹中尉、君は陛下と面会するという予定が入っている。

予告から察するに、このときが一番危ないだろうな。

拳銃を持っていけよ」

4人の物騒な会話の背景では、兵士たちが歌えや踊れのどんちゃん騒ぎを起こしていた。

しかし事前に人払いを申し付けていたお陰で、こちらに近寄ろうとする人間はいないし、もし近寄ってきてても、ウェイター役の兵士によって、さりげなくそこから遠ざけられる。

「了解」

「第1旅団と第6空挺旅団、第10空中機動旅団の3個旅団を待機させる。」

さらには特殊作戦群、空挺教育隊を派遣し、警察とも連携して、1度緩急があれば、東京都心部の環七を完全に封鎖し、その内部にて掃討作戦を実施する。

我が国はテロリストを断じて許さないし、完全に撃滅する。

「こうなれば、総力戦だ」

前田大將は覚悟を見せた。

3個旅団合わせて16000人にも及ぶ将兵が、首都のなかで戦闘行為を行うという前代未聞の事態だ。

特に、第6空挺旅団内には空挺教育隊が設置されており、特殊部隊たる特殊作戦群ほどではないが、精鋭といわれる第6空挺旅団のなかでも最強と呼ばれる部隊である。

戦闘単位としては170人規模の空挺兵中隊を1個と空挺訓練兵中隊いわゆる学生隊1個を基幹に編成された大隊戦闘群である。

通常は、空挺レンジャー課程の降下課程の教育を担当しており、最終課目の模擬戦では訓練兵を追い詰める勢子としての役目を担い、数多くの訓練兵を脱落させてきたのである。

「増援部隊が駆けつけるまで、陛下の御身を頼む」

いつの間にか、空になったグラスのなかで、氷の弾ける音がした。

カランという高い音を聞いて、佐竹中尉は現実に戻った。

「この命尽きようとも、陛下をお守りいたします」

そう言って、頭を下げた。

「頼んだぞ」

何も出来ない田中大將たちは、そう口にするこゝろしかできなかった。

「辛気臭いなあ。」

堅苦しくて、暗い話はここまでにして、宴会を楽しもうや」

田中大将の提案で、あとは宴会を満喫することになった。

それに天皇陛下暗殺予告に関しては、政府内でも箝口令が敷かれ、犯人が逮捕されるまでは、公式に発表されることもないから、外部への流出はあり得ない。

もちろん、犯人がマスコミに漏らさなければという条件付きではあるが。

だから、ここで話せる内容には限りがあった。

ということ、話は雑談の方へと移行する。

「国防省七不思議って知ってるか？」

田中大将は改めて口を開くなり、そんな話をし始めた。

国防省庁舎のある陸軍市ヶ谷駐屯地／海軍市ヶ谷地区／空軍市ヶ谷基地、軍ごと呼び方は色々あれど、元々ここには日本皇国陸軍の前身である日本帝国陸軍の軍政機関である陸軍省が所在しており、心霊話とかそういう話題には事欠かない。

「昔、お客さんに聞いた話だと、夜中に聞こえる”歩兵の本領”とかのやつですか？」

”歩兵の本領”とは日本帝国陸軍の軍歌の1つで、”万朶の桜か襟の色”の歌い出しから始まるその歌は、いまでも日本皇国陸軍歩兵の魂とまで豪語され、歌い継がれている歌である。

ちなみに、日本皇国陸軍の兵科識別は平時であれば旗で行われていて、戦時もしくは演習時は戦闘服の肩章で行われ、断じて襟章で行われているわけではないが、帝国陸軍の伝統として、歩兵科には軍歌の通りの万朶の桜と称される緋色が採用されている。

そして、再編以来使用し続けていた部隊旗を新調する際に、国防省陸軍部の官僚たちが、なにも考えずに単純な赤色に変更したが、前線部隊からは赤は血を連想するので不吉だとの意見が続出し、陸軍参謀総長を始めとする陸軍の上層部の判断で使用中止となり、旧来の緋色

に戻った経緯がある。

という感じで日本中にある多種多様な仕事のなかで、軍人ほどジーンクスに気を使うものはいないだろう。

軍人ほど危険でまさしく命あつての稼業であるものはない。

死んだら日本皇国軍軍人の場合は靖国に行くだけで、元も子もないのである。

だからこそ、日本各地の駐屯地や基地では、朝のテレビの占いに一喜一憂する姿が見られている。

広がりすぎた話はそのままにして、七不思議に戻ることにする。
「それだ、それ。」

ひとつ、大臣執務室にある歴代国防大臣の肖像。

その目玉が夜中に動くらしいよ。

ふたつ、夜中に仕事をしていると、何故か聞こえてくる”歩兵の本領”。

歌声に混じって、腰に着けた銃剣の音や地面を踏み鳴らす軍靴の音も聞こえてくるらしいね。

みーつつ、記念館に響く大空襲の際に亡くなった方の”熱い熱い”という無念の叫び声。

何故か記念館だけに響くらしいんだよ。

よーつつ、なぜか聞こえる銃声と負傷者の呻き声。

部下だった耳のいい兵士が1回だけ接触したんだが、それによると、99式歩兵銃系統の小銃の銃声だそうだ。

小銃関係の事件と言えば、二・二六事件だけど、このときは制式の歩兵銃は38式歩兵銃だったから、眉唾な話だ」

「いや、終戦直後の反乱によるものかもしれないでしょう」

自分の結論を断言した田中大将の言葉に対する佐竹中尉の考察による反論は的確だった。

あくまで、そんな七不思議が実在するとしたらではあるが。

「いや、まあ確かにそうなんだが、それならば陸軍省では死者か負傷者が出たという報告があつて、然るべきだ。

しかし、そんな報告は出ていない。

だから、眉唾な話だと断言できるわけだ。

眉唾な4番目は置いておいて、次が5番目だ。

いつーつ、突然電話に入るノイズ。

しかも、これ単純なノイズじゃなくて、人の呻き声らしいとか、陸軍の部隊間の通信だとか、部署によって諸説あるんだ。

むーつつ、突然張られる軍に対して、決起を呼び掛けるビラ。

そして、その翌日には原隊復帰を命じるビラが同じところに張られるらしい。

しかも、内容が二・二六事件の時の感じらしい。

ななーつ、旗竿の下に佇む旧軍の軍装の兵士。

頭に包帯を巻いていたり、腕を吊っていたり、目撃される度に違うところを怪我しているらしい。

市ヶ谷という場所の都合上、そういう話には事欠かないだろうが、七不思議の候補としてはそれぐらいだろうな。

部署によつては、マイナーチェンジがあるみたいだ」

「七不思議といえは、何故か心霊じゃないバージョンもありますよね。

周辺住民曰く、赤く染まる国防省庁舎やら、奇声の聞こえる病院棟やら、」

「そういえば、三島由紀夫の霊が出るらしいってのも、心霊界限なんかじゃ有名な話ですよ。

それも、国防省立図書館の第2号棟となっている旧陸軍省庁舎でね。

そこは、今では市ヶ谷記念館として旧陸軍に関連する展示を行っているが、あそこに移設される前には、第1方面軍司令部と方面軍直轄部隊が駐屯していたんだが、1970年のある日、第1方面軍司令官と面会していた三島由紀夫が、司令官執務室にあった日本刀を手に取つて、司令官を人質にとり日本皇国軍に決起を呼び掛けるという事件が起こったんだが、呼応する将兵はおらず。

それを見た三島由紀夫が、日本刀で割腹自殺を行ったのが、あの第2号棟だからな。

無念の霊が出てもおかしくないだろうと、巷では話題だな」

田中大将の話に釣られて、前田大将が語り出す。
前田大将の話は、1970年の三島事件の話だ。

発生から鎮圧まで数時間、その間にも動員された一般部隊が完全に
包囲するなか、三島は日本皇国軍に決起を呼び掛け続けた。

しかし、昔の陸軍とは違い、日本皇国軍全体に、沈黙する軍隊といサイレントフォースイグ
う概念が定着していた。

その概念とは、現役軍人は政治に参加せず、国防という本義に努めることを美徳とするというもので、さらには現役軍人が公的の場で、政治思想を語ることはタブーである。

たとえ、国民に感謝されなくとも、罵倒や叱責ばかりの勤務期間であつても、現役として国防の最前線にある限り、彼らは国を守り続けるのだ。

「いやはやそんなこともありましたな。」

大の大人が自殺をして、社会から同情される。

公人であつても、私人であつても、大の大人がああだと、情けない限りだと思いますよ。

ああいうのが政治を語るのは、片腹痛いと思いますわ」

河野大将はその時、14歳で中学生だった。

多感なその時期に、過激思想に染まった右翼、左翼の団体による犯罪は、河野大将の思想に大きな影響を与えた。

どちらの思想にも、嫌悪感を抱かせたのだ。

だからこそ、政治的にどちらにも偏らない日本皇国軍に志願したのだ。

「ちなみに、それは情報本部が仕掛けた情報工作だったんですわ。」

機密指定は切れてるし、ぶっちゃけると、当時いや今もか、軍や公安警察部は協力して、軍内外の極右や極左の思想を持つ人物の監視に努めていましたな。

当然、三島由紀夫もその対象に被っていたんですが、彼の場合よく目立つので早々に事故死することは決まっていたんですわ……」

前田大将は、ポツポツと語り始めた。

「この場合の事故死って言うのは、農ら情報関係者の間で、対象者を秘

密裏に暗殺することなんですが、まだまだあの頃には、ソ連共産党系の左翼政党がそれなりの勢力を誇っていて、まだまだ日本皇国軍のクーデターはまことしやかに語られていた時代で、イメージ改善のために、三島由紀夫を利用することにしました。

情報本部の対人工作部と特定工作部の要員が、三島由紀夫や彼が率いていた楯の会に秘密裏に接触して、偽のクーデター計画を練って、実行に移しました。

話の着いていない一般部隊の兵士たちはうんともすんとも言わない。

にっちもさっちもいなくなった三島由紀夫は、仲間とともに割腹自殺。

あのととき、彼の自殺が行われなければ、情報本部隷下の対テロ特殊作戦部隊が突入して、彼を射殺する手筈になっていました。

こうして、日本皇国軍は国家の忠臣としての立場を得ました。

それで…」

そこで、一旦話を切った前田大將は、手持ちの日本酒を飲み干すと、また話し始めた。

「結局は三島由紀夫が自殺したことで、事態は終息、工作は成功したと工作責任者は判断しました。」

そのときに出動していた特殊部隊の創設は1949年で、創設以来一度も廃止されていない特殊部隊としては、世界最古となっています。

目的は、帝国陸軍が中国戦線で経験したゲリラ戦対処の戦術研究とその実践、さらには市街地等の近距離間制圧戦闘の研究でありました。

それがベトナム戦争で、その方針に間違いはないというのが確認されて、対テロそして敵ゲリラコマンド部隊の対処を行ってきました。

陸軍の指定緊急展開部隊である第6空挺旅団隷下の特殊作戦群、第4水陸機動旅団隷下の特殊武装偵察大隊、海軍の特殊作戦部隊群隷下の海軍第一陸戦大隊、海軍第二陸戦大隊、特別偵察中隊、特殊制圧部隊^{SAG}、特殊警備隊^{SG}、空軍の対外作戦部隊^{FO}、警察の特殊急襲部隊^{SAT}や銃器対策部隊と共同訓練を行い、互いの技術を研鑽しています。

現在ではこの特殊部隊は、陸海空軍将兵混合の常設統合部隊で、この部隊の最小単位である12名編成のアルファ作戦分遣隊、特にOperation Detachment Alpha、略してODAもしくは日本語でAチームと呼ばれていたりもしますが、ここでは単純に小隊としておきます。

この小隊の規定の内訳は、陸海空軍問わない日本皇国軍大尉の階級にある指揮官1名、同じく皇国軍少尉または准尉たる兵曹長の階級にある副官1名、皇国軍兵曹長の階級にあるチーム／作戦下士官1名、皇国軍兵曹の階級にある情報／作戦補佐下士官1名、皇国軍兵曹と軍曹の階級にある兵器専門家2名、皇国軍兵曹と軍曹の階級にある工兵専門家2名、皇国軍兵曹と軍曹の階級にある通信専門家2名、皇国軍兵曹と軍曹の階級にある医療衛生専門家2名となっています」

ちなみに、准尉たる兵曹長というのは、准尉と言う階級の無い日本皇国軍において、准尉相当官として前任の兵曹長を昇任させるとい

システムである。

自衛隊でいうところの幕僚長たる将という大将に相当する階級と同じシステムではあるが、准尉たる兵曹長には階級章が存在しない。

あくまで、便宜上の措置である。

「この小隊を6個集め、これに中隊本部の役割を果たす11名編成のブラヴォー作戦分遣隊、同じようにOperation Detachment Bravoを略してODBもしくはBチームを併せて1個中隊が作られます。

特殊部隊中隊の本部として編成される規定の内訳は、皇国軍少佐の階級にある中隊長1名、皇国軍大尉の階級にある中隊副官1名、皇国軍准尉たる兵曹長の階級にある中隊付き最上位下士官1名、皇国軍兵曹長の階級にある中隊付き先任曹長1名、皇国軍兵曹長の階級にあるチーム／作戦下士官1名、皇国軍兵曹の階級にある情報／作戦補佐下士官1名、皇国軍兵曹と軍曹の階級にある通信専門家2名、皇国軍兵曹の階級にある医療衛生専門家1名、皇国軍軍曹の階級にある補給下士官1名、皇国軍軍曹の階級にある核^N・生物^B・化学兵器対策^C下士官1名となっている。

これを3個、第一・第二・第三の3個中隊とそこに大隊本部の役割を果たす37名編成のチャーリー作戦分遣隊、これまた同じようにOperation Detachment Charlieを略してODCもしくはCチームと97名編成の大隊支援中隊を併せると1個大隊が編成されます。

特殊部隊大隊の本部として機能し、人員構成は、日本皇国軍大佐もしくは中佐の階級にある大隊長、皇国軍少佐の階級にある大隊副官、皇国軍准尉たる兵曹長の階級にある大隊付き最上位下士官、皇国軍兵曹長の階級にある大隊付き先任曹長を中心とし、情報、作戦、兵站、通信、工兵、医療衛生、民事等多様なスタッフが揃っていて、以上の部隊、大隊長以下383名を以て対テロ特殊作戦部隊は編成を完結しております。

1970年のよど号事件や瀬戸内シージャック事件の際も、1977年のダッカでの事件の際も、彼らが警察側からの要請を受けて、突

入作戦を実施し、犯人全員を射殺、人質全員を救出しました。

あさま山荘事件のときも出動していたら、犯人の命と引き換えに優秀な警察官の命が散ることはなかったでしょう。

警察曰く、赤軍派を生きて逮捕することで、殉教者とか受難者というのに仕立てあげられないようにとか言う理由でしたか。

そんなものクソ喰らえだとも思っています。

テロリストには、死あるのみ。

奴らが生きようが、死のうが、テロは起こるのだ」

前田大将の言いたいことはこうだ。

テロリストが死んでしまったら、殉教者だ吊いだと燃え上がってしまいが、逆に生きて捕らえても、解放を要求する人質事件が起こってしまう。

ならば、さっさと殺してしまうに限る。

この考えは、長年テロリズムに対処してきたイギリス陸軍特殊空挺部隊隊員が、自身の著書のなかで述べたものとはほぼ同じであるが、イギリス陸軍と同じようにテロリズムに対処してきた日本皇国軍将兵も同じ考えだ。

「えげつない考えですな。

まあ、同意見ですが。

それにしても、三島事件ですか？

その頃は、僕はまだまだ子供で世間とかいうのを、まだよく知らなかったんですな」

その話を聞いた田中大将が言うと、

「それは私もですね。

今も昔も小中学生の世界は、如何せん狭すぎる」

前田大将も同意する。

「私が小中学生の頃と言うと、”あたご”が漁船に衝突した事件ですかね」

と佐竹中尉は言う。

「あれか？

あのときは、第二艦隊に”あたご”は所属してたんだが、そのとき

の第二艦隊長官が俺だ」

田中大将がサムズアップして言った。

笑顔の中から見える白い歯が何かむかつくと思ったのは、佐竹中尉だけの：いや、この場にいる全員の秘密である。

「所属長だから、強制的な引責辞任で予備役編入になるかと思っただが、そうはならなくて良かったよ」

この事件では、ときの国防大臣と海軍部部长、海軍軍令部総長が引責辞任し、連合艦隊はもちろん沿岸警備部隊のお偉方に至るまで、将校と呼べる階級の全員が全員に懲戒処分が下されている。

だから、田中大将にも減俸と所属長訓告が申し渡されたはずだが、まあ強制的な引責辞任よりはましだろう。

処分を食らった直後の、その様たるや葬式のごとき、陰鬱さだったという。

「海軍と言えば、横浜代理戦争は、ねえ。

外せないくらい有名すぎるでしょ」

「海軍との仁義なき戦いですか？」

河野大将の呟きに、武藤大将が茶々を入れる。

「仁義云々より、率直に海軍が怖い。

周りにはそ知らぬ顔を見せておきながら、裏では全力で、やくざを潰したあとに、マスコミにまで喧嘩を売りやがったからな」

「日本皇国軍が引き起こした不祥事の7割は海軍が関係しているのだからな」

「それはないでしょ」

前田大将の言葉に、河野大将が付け足した。

それを田中大将が否定するが、河野大将、前田大将、武藤大将の突っ込みが入る。

「いやいや、スウェーデンに嫉妬して、ウイスキー・オン・ザ・ロック事件をもう1回引き起こしたのは、お前らだろうが。

冬の津軽海峡で、連合艦隊と沿岸警備部隊、松江と相浦にいた陸戦大隊まで動員して、陸海で包囲しやがって」

スウェーデン王国のカールスクルーナという世界遺産に認定され

ている軍港がある町のそばで、起こったその事件は、岩礁の上のウイスキー級潜水艦と呼ばれ、ソ連海軍の練度の低さを世界の海軍関係者から嘲笑されたという。

それに嫉妬したというよりも、国防予算が削られて、ほとんど困り果てた海軍関係者が思いきって行ってしまった金策が、他国から集ろうだった。

その絶好の鴨が、ウイスキー・オン・ザ・ロックを起こしたソ連海軍であり、日本の場合は太平洋艦隊だったわけだ。

冬の津軽海峡という厳しい気象条件のなかで、訓練の名目で展開していた第六艦隊と当時の大湊鎮守府艦隊に、的確に追い回されたウイスキー級潜水艦は、暗礁に乗り上げた。

そこに間髪入れず、陸上では北方転地演習の名目で動員された陸戦大隊が、海上および海中を大湊鎮守府艦隊が包囲し、補給を絶たれた乗員たちの数日の抵抗もむなしく、最終的には船体は拿捕され乗員たちは抑留された。

艦内弾薬庫からは核弾頭魚雷すらも発見されたから、事態は大きく混乱した。

この事態は強硬姿勢を崩さない日本皇国海軍とソ連海軍、両者の意地の張り合いだった。

「それは違う。」

当時の大蔵省の役人が、国防予算をけちったらしくてな。
金がないのは首がないのと同じ
金がないのは国を守れないだからな。

我々は行動したわけだ。」

佐竹中尉には、副音声で聞こえてきたが、その気持ちがよく分かる。「だから、ソ連に集ったわけだ。」

んで、結局は数十億ドルの賠償金を貰って、手打ちにしたがね」とは、海軍の利益代表の田中大将の言葉だ。

「それに味をしめて、対馬海峡で戦略原潜のデルタ級潜水艦を、津軽海峡で今度はこれまた戦略原潜のタイフーン級を、しかも沿岸警備部隊単独で捕獲しやがって。」

割り食わされた陸空軍が事態解決のために、どれだけの労力をかけ

たと思ってるんだ?」

「おかげで、予算にゆとりがあるんだろうが」

河野大将のぼやきに、田中大将の反論が入る。

日本の歴史、特に冷戦期において、日本皇国がソ連に攻撃される可能性は、大いにあった。

特にその危険度が高まった時が、十数回ほどあり、軍艦鹵獲が2回、潜水艦鹵獲が4回、軍艦への攻撃が1回、潜水艦への攻撃が2回、航空機の亡命が1回、ソ連軍コマンド部隊や国境警備隊との交戦が数回、特に最後の場合は、互いが互いの領域に測量部隊を送り込んだのが原因だ。

衛星による地図データが手に入ることになったとはいえ、実際の地形はそこに進まなければ分からない。

だから、日本皇国軍とソ連軍は互いに部隊を送り込んだのだ。

とは言うものの、回数的には圧倒的に海軍が多い。

「俺個人としては、陸軍と大して変わらないと思うが?」

「いや全然違うわ」

田中大将の呟きに、前田大将がツツコミを入れる。

「空軍は何もしてない。

良かった」

陸海軍のトップの言い合いの最中に、武藤大将は自分の身を心配していた。

余計な火の粉が飛んでくることを、誰も望まないからだ。

「高みの見物と行きましようか?」

武藤大将は傍らの佐竹中尉を見ながら、言った。

「はい」

と答えた佐竹中尉の目の前では、陸海空軍トップと陸軍のトップとそれと睨み合う形で海軍のトップが幼稚な言い合いを続けていた。

終いには、お前の母ちゃん出べそとか言い出しそうだ。

「人間って醜い生き物ですよね」

ウイスキーの入ったコップを片手に、佐竹中尉が言った。

「ああ、そうだな」

佐竹中尉の眩きに、武藤大将は答える。

2人のその目は、どこか遠いところを見ていた。

「必要なら憲兵を呼びましようか？」

「無理だな。」

「憲兵は来れないよ」

天皇陛下への暗殺予告によって、首都近辺の憲兵は根刮ぎ、その捜査の応援に回されており、市ヶ谷の国防監察本部憲兵事務所に駐在する中央機動憲兵隊や立川憲兵隊、練馬憲兵隊、習志野憲兵隊、大宮憲兵隊、横須賀憲兵隊、相馬原憲兵隊、百里憲兵隊、朝霞憲兵隊、入間憲兵隊、今挙げた憲兵隊は、近隣の駐屯地や基地に派遣していた分遣隊にまで、動員をかけて首都圏に派遣していた。

「統合参謀本部長、統合参謀本部長。」

「河野大将!?!」

田中大将と言いつ合っている河野大将に、必死に呼び掛けているのは、国防省大臣官房内に設置された統合広報室の室員だった。

「今は熱くなってるから、無駄だと思うが」

唯一、冷静な武藤大将が、室員に声をかける。

「武藤大将、ちょうど良かった。」

今回の件について、マスコミが公式発表を欲しがってます」

「天皇陛下暗殺予告事件^{事案}か？」

武藤大将の問いかけのなかにあった I 事案とは、皇室関連事案、つまりは皇室を意味する Imperial の頭文字 I を付与された、略号である。

武藤大将の問いかけの内容に、室員は頷いた。

それを見た武藤大将は考え込む。

「ふむ。」

「憲兵隊が露骨に動きすぎたかな？」

頭のなかで構図が組み上がったのか、武藤大将は眩いた。

「そのようです」

「室員はそう答えた。」

「非常事態発生につき、対策本部を設置する。」

本部長代理として、命じる。

すぐに、マスコミに対する欺瞞情報カバーストーリーを考えろ」

武藤大將が指示を出すと、

「佐竹中尉、君に I 事案対策本部付きを命ずる。

取り急ぎ、会議室に向かうんだ」

「これより天皇陛下暗殺予告事件報道等対策本部の第一回会議を開始する。

私は本部長代理の空軍作戦部部长、武藤だ。
よろしく頼む。

隣にしているのが、この件の当事者であり、副本部長代理の大阪警備府海防艦”ひなぎく”先任将校、佐竹中尉だ。

それで情本の藤木少佐、概要を説明してくれ」

国防省本館地下1階に造られた大会議場、ここは大講堂としても使用可能な500人規模で収容できる部屋である。

ここに、天皇陛下暗殺予告事件報道等対策本部が立てられた。

捜査を行っている情報本部や憲兵隊のほかにも、マスクミ等の対応に当たる広報室や各軍部の広報課の兵士たちが集まっている。

「本件認知は、11:01頃、場所は京都名古屋間の新幹線、のぞみ10号のなか、状況は当該車両に乗車の海軍尉官の携帯への着信。

ほぼ同時に、内容を傍受していた警察庁公安警察部と国防省情報本部により捜査が開始されました。

犯人との通話時間は12秒、発信地点は携帯基地局の範囲から東京渋谷区内と断定、特に録音データを解析した結果、さら渋谷109の店内からだと判明しました」

「渋谷109とは何か？」

「武藤大将。

渋谷109というのは、若い女性向けのファッションのお店が集まったショッピングモールです。

こんな感じの」

若者の行く店であるから、生粋の老人である武藤大将には、分からなくて当然である。

見かねた佐竹中尉が、簡単な説明と共に外観の画像を見せる。

渋谷の街で、これほど特徴のある建物はない。

「ああ、ここか。」

「ここなら、昼のニュースのお天気カメラで見たことがある。では、続けてくれ」

武藤大將は納得したようで、藤木少佐に説明を続けるよう求めた。「発信地点周辺では、憲兵隊を動員しての、ローラー作戦を実施し、不審者等の割り出しを進めており、また改めて宮内庁と海軍の関係者の内偵を進めております」

情報本部から派遣されてきた藤木少佐が説明した。

「そのどちらかが、情報を漏洩したと、特捜本部はそう考えているんだな？」

武藤大將の冷ややかな視線を浴びた藤木少佐は、たじろいだ。

その藤木少佐に、目線で助けを求められた公安警察官は、言い訳を述べた。

「いえ、ただ単の確認作業です」

「では、捜査対象を宮内庁や海軍の関係者本人ではなく、接触した人物に絞って見たらどうかね？」

公安警察部には、左翼系過激派メンバーのリストがあるはずだ」

そのリストは通称：L ファイルと呼ばれ、公安警察部が特別高等警察と呼ばれていた時代より収集してきた共産党・左翼系過激派の構成員、協力者の情報が詳細に記載されている。

これは、盗聴や盗撮、ハッキングなどの非合法的な手段で収集され、千葉の柏にある警察庁科学警察研究所の庁舎内に存在する数基の数十テラバイト記憶可能なハードディスクに集積され、いつでも使用可能なように待機している。

同様に、右翼系の過激派に関しても、R ファイルとして情報が集められており、この L や R の文字は、左(left)、右(right)の頭文字である。

「しかし、そうなると膨大な人数になってしまいます。

人手が足りません」

武藤大將からの提案を、その公安警察官はバツサリと切り捨てた。

それを見た武藤大將は、前にも増して冷ややかな視線を、目の前にいる公安警察官に浴びせかける。

「過激派のリストに名前のある人物と、同じゼミ、同じ下宿、同じ授業、同じ高校、共通点のある人物をピックアップすればいい。」

阿呆揃いの外務省とは違って、宮内庁の彼らとて、伊達に国防省主催の情報管理講習を受けていないわけではないだろう?」

武藤大将は、自信をもって告げた。

前田大将に話を聞いたただだが、少なくとも金や家族の命がかかっている程度では、情報を漏洩する人間が出るような内容ではないと、武藤大将は確信していた。

しかし、公安警察官はそうは思っていないようだ。

「しかし、思想に共鳴しているという可能性も……」

「まあ、確かに否定はできん」

この台詞を聞いた公安警察官は、大きく頷いた。

だが、すぐにその顔が歪むことになる。

「だが、君たち公安警察部は御上の身边に、危険人物をおいたことになる。」

これは明確な責任問題だぞ。

とりあえず海軍関係者は、情報本部が身边調査を徹底的に行っている。

じゃあ宮内庁はというと、公安警察部の担当じゃなかったかね?」

そこまで言うと、公安警察部の官僚主義的ところが発動する。

この官僚主義とは、誰も責任をとりたくないという心理である。

戦後警察を率いた後藤田正晴や佐々淳行といった傑物は、今の警察にはいない。

その点で、究極のジャイアニズムを持つのが、今の官僚組織である。

言ってしまうえば、下の手柄は上のもの、上の責任は下のものである。

そこを突かれた公安警察官は、顔色を変えた。

「すぐに手配します」

この捜査方法だと、後々に公安警察部の責任が問われることになるからだ。

身を以て、この責任を取らされるのは、公安警察部を監督する警察庁警備局長ではない。

公安警察部の、いやさらに実務を担う警視庁公安部や道府県警備部の公安課員、さらには所轄署警備課公安係の警察官たちである。

「この件については、政府部内に箝口令が敷かれていて、まだ詳細は外部に漏れていないはずだ」

武藤大将は断言した。

「この範囲であれば、十分に情報操作可能だと判断できる。

問題は、いつ国民に真相を開示するかだ。

真相自体はねじ曲げても構わん。

真相の着地点として、陛下が狙われたとなると、国民の間に動揺が生まれかねん。

ここにいる全員の知恵を結集して、マスコミに対するカバーストリーを考えるんだ」

武藤大将の指示に、マスコミ対応に関しては歴戦のはずの広報室員は、前代未聞のこの事態に頭を抱えていた。

確かに、陛下の御身を狙った過激派は、ゲリラ的に襲撃を繰り返してきた。

日本皇国軍や公安警察部が先手を打って、事前に一斉摘発に持ち込めたこともあったし、襲撃を許してしまったこともあった。

その度に、近衛連隊や皇宮警察が奮戦して、文字通り体を張って、守りきった。

過激派はゲリラ的に襲撃を繰り返す以上、事前に予告などしないが、今回はいや、今回の犯行グループは、天皇陛下暗殺を明言した。

過去の例がない以上、これはマスコミ対応を一から練る必要がある。

「仕事の時間だ。

総員、かかれ」

こう言つて、武藤大将は集合した全員を叱咤した。

「まだ言うか？」

「このくそ野郎」

「なんだと？」

お前の母親は、出べそなんだろうが」

「畜生、この野郎。」

表へ出る。

叩きのめしてやる」

「それはごっちの台詞じゃ、ボケ」

武藤大将たちが頭を捻りあっている間に、貴賓室では田中大将が前田大将と河野大将に無謀な戦いを挑んでいた。

前田大将と田中大将の拳と拳が互いの顔に当たる。

その互いの頬から、嫌な音が聞こえる。

そして、互いの口許の血管が切れ、血が流れ出す。

背後からは河野大将が近づき、腰を蹴り飛ばそうとするが、先手をとった田中大将に蹴り飛ばされる。

周りでは、”ひなぎく”乗員と国防省勤めの軍人が、遠巻きに見ていた。

「何をやってるんですか」

そこにやって来たのは、日本皇国軍統合市ヶ谷基地施設警備隊である。

憲兵隊の出払っている今では、軍の犯罪取り締まりも、彼らの仕事である。

「武藤大将は？」

状況を一瞥した警備隊員は、武藤大将がいないことに気づき、手近の兵士に聞く。

「統合広報室の室員に呼ばれて、別室に出ていかれましたけど」

その兵士は、そう答えた。

「そうですか」

その頃、”ひなぎく”乗員たちは、佐竹中尉がいないことに、気づいた。

「天皇陛下への暗殺予告ではなく、海軍軍人個人に対する暗殺予告だと発表するのは、どうでしょうか？」

頭を抱えて、うんうん唸っていた統合広報室員の1人が言った。

「つまりは、事実を一部すり替えるということか？」

「はい。」

これでしかも、天皇陛下と面会の予定があった。

この事実だけで、憲兵隊が露骨に動き回る理由付けになります」
統合広報室員の説明に納得した武藤大將は、すぐに指示を出す。

「分かった。」

これを軸にマスクミ対応に当たれ。

以上、各自の持ち場にもどれ。

解散」

国防省貴賓室のとなりにあるプレスルーム、そこに国内外のマスクミが集結していた。

そこに、報道担当となった武藤大將が入室すると、報道のカメラのフラッシュが多数焚かれた。

「日本皇国軍と警察庁より、今回の件に関して、国民の皆様にご説明させていただきます」

国防省のロゴマーク、地球のモチーフを囲むように国防省の英訳 (Ministry of Defense) の文字が躍っているそんなロゴマークだ。

「説明の前に、国民の皆様にご謝罪したいと思います。」

今回の件では、憲兵隊の動員によって、国民の皆様にご迷惑をお掛けしまして、申し訳ありません」

そう言うなり、武藤大將はカメラの前で頭を下げた。

「今回の件についての説明を担当する空軍作戦部長の武藤安名です。」

今回の事件は、竹島紛争で活躍した軍人を標的としたテロ予告でありました。

ですので、警察庁と憲兵隊、情報本部の要員すらも、動員しての捜査を行っている最中であります。

したがって、捜査の結果等、詳細な情報の報告に関しては、また後日とさせていただきます。

以上で、説明を終わります。

では、失礼させていただきます」

早口で概要を述べた武藤大將は、席を立つ。

そこにある記者が、質問を発した。

腕に旭日の腕章を着けている。

朝日新聞の国防省付きの記者だろう。

そして、腕の腕章はその記者の身分を証明するものであると、同時に機密接触禁止者の証明である。

スーツを着ている国防省官僚や情報本部関係者の多い市ヶ谷には、スーツを着込んでしまえば、正体がばれることはない。

それを見分けるために、腕章装着を要求しているのだ。

未装着で国防省庁舎内を彷徨っていた場合、国防省情報保護に関する省令の3項、国防省関連施設に立ち入る民間人は事前に配布される身分を証明するものを身に付けなければならぬに違反することになり、その人物は永久的に国防省関連施設に出入り禁止になる。

「武藤大将。」

「質問よろしいですか？」

「朝日の記者さん？」

「何か？」

武藤大将の返答を、よいと判断したのか、記者は聞いた。

「憲兵隊が動員されたのと、ほぼ同時に皇居の警戒警備が強化されたようですが、何か関係はあるのですか？」

「その海軍軍人と陛下が謁見することが決まっております、いつ襲撃を受けるか分からない以上、皇居への襲撃も想定されうると、我々は判断している。」

また、彼らの考えひとつで、我々の対策が意味をなさない場合もある。

「以上だ」

「今回の件に関して、テロ対処のイニシアチブをとるのは、警察庁ですか？」

「日本皇国軍ですか？」

「民間人に対する司法警察権や行政警察権を我々は有していない。」

よって、要請が入るまでは事件対処の初動に関しては、警察庁に委任する形になっています。

ただし今、憲兵隊が活動しているのも、数時間前に入った警察庁か

らの要請によるものであります」

こうして、説明と質疑応答を終え、カメラが止まったあとで、武藤大将は付け加えた。

「オフレコでお願いするが、竹島紛争で活躍した軍人を標的としている以上、最悪の事態を想定して動くのが軍人だ。

陽動作戦として、別動部隊が同時多発的にテロを起こす可能性もありうる。

その場合の死傷者は、計り知れない」

それだけ言うと、マスコミの反応も見ずに、武藤大将は退室した。

そして、世更けすぎの会見が終わり、陽が昇って翌朝の7時。

国防省の本館前にある儀仗広場では、海軍主催の式典が行われていた。

音楽隊の演奏と共に、海軍市ヶ谷地区で勤務する海軍兵士らで編成された特設儀仗隊が行進し、その後ろを”ひなぎく”乗員たちが続く。

全員の入場が終わると、司会の兵士は言った。

「総員、回れ右」

各自が右足を1歩後ろにずらし、全身を右向きに回転させる。

真正面に、国旗用の旗竿が見える。

「国旗及び軍艦旗が掲揚されます。

各員、敬礼」

挙手礼を全員が行う。

国歌である”君が代”が演奏されるなかを、旗竿を国旗が、軍艦旗が昇っていく。

最上位に到達したらそのまま折り返し、少ししたところに固定された。

戦死者への哀悼の意を表した半旗の掲揚である。

「なおれ。

回れ右」

全員が再び前に向き直る。

「ただ今より、海軍栄典授与式典を行いたいと思います。

今回は竹島紛争の勲功者たちを表敬します」

司会を担当する兵士が、口上を述べる。

「まず最初に、国歌を斉唱します」

音楽隊の演奏とともに、この場にいる全員が国歌である”君が代”を口ずさむ。

式典の進行役である司会者の背後には、海軍軍令部総長の田中大将が、海軍部部長の山本助六海軍名誉元帥が、文官である海軍次官の古

賀峰温大將待遇といった海軍上層部のお歴々がいた。

そのとなりには、椅子にお座りになった陛下の姿が見える。

「ここで、天皇陛下からの御言葉を賜ります」

司会の兵士が　そう言うと、椅子から立ち上がった天皇陛下が、壇上に登壇した。

「朕はここに在る貴殿ら、ひいては最前線にて戦っている陸海空軍將兵に深く感謝している。

皇族が皇族と呼ばれていなかった時代も含め、日本と呼ばれていなかった頃から、独立国家として確立されて、早くも2000年以上が経とうとしています。

時代によって、領域の大きさに差はあれど、先祖である神武天皇の代から脈々と受け継いできたこの国を……この国を守ることができたのは、貴官らのお陰です。

朕は、世界が平和で溢れることを祈ってはいるが、その願いを情勢が許さないことも理解しています」

天皇陛下の御言葉に、息を飲む。

「そして現実を知らない身勝手な者の、身勝手な主張もあるかもしれない。

そして、君達は軍人として軍に在職中であつても、これから決して国民から感謝されたり、歓迎されることなく日本皇国軍を退役するかもしれない。

きつと非難とか叱咤ばかりの一生かもしれない。

御苦労なことだと思います。

しかし、武力の象徴である軍隊が国民から歓迎されちやほやされる事態とは

外国から攻撃されて国家存亡の時とか災害派遣の時とか、国民が困窮し国家が混乱に直面している時だけなのです。

言葉を換えれば、貴官達が日陰者である時のほうが、国民や日本は幸せなのです。

どうか、耐えてもらいたい。

そして、これからも皇国の盾として、日本の平和のために力を尽く

してほしい」

そう言うのと壇上の上から、眼下のすべての兵士に頭を下げた。

この様子を見た兵士たちは、面食らった。

天皇陛下は国家統合の象徴たる国家元首である。

そのような人物が無闇に頭を下げることなどないからだ。

それが、自分達のような武芸にしか取り柄のない蛮人に頭を下げた、その一点が軍人たちの頭を真っ白にさせた。

「天皇陛下に敬礼」

あまりの事態に、呆然とする将兵たちに、司会の兵士が号令をかけた。

頭は働いていなくても、体に染み付いた癖は、抜けないものだ。

すぐに全員が、挙手礼を行った。

「なおれ。」

この戦いで倒れた陸海空軍戦死者に哀悼の意を込め、弔銃を行う。

各員、左向け左」

全員が左足を後ろにずらし、左に向く。

「安全装置を外せ。」

儀仗隊、構え」

その目線の先の儀仗隊の儀仗兵が、89式小銃を上空に向ける。

その指先が、引き金にかかる。

ふうつと、息を吐く。

「この戦いで散った仲間の御霊に捧ぐ。」

撃ち方用意。

撃てー」

号令がかかり、順繰りに儀仗兵3名が引き金を引く。

1発が1分の間隔で、小銃の銃声が周囲に響いた。

そして2発目、3発目、4発目、5発目、6発目、7発目、8発目、9発目、10発目、11発目、12発目、12発の連続した銃声のなかには、重厚な静寂があった。

上空に向けた89式小銃の銃口からは、うっすらと白煙が立ち上っている。

「撃ち方やめ。」

「提げ銃、休め」

その号令を待っていたかのように、儀仗兵3名は89式小銃の構えを解いた。

「各員、右向け右」

全員が元に戻ると、今日最大のイベントに入る。

「ただ今より戦功表彰に入ります。」

呼ばれたものは、壇上に登壇するように」

音楽隊の演奏をBGMに、司会の兵士が言った。

「部隊表彰。」

海軍部部長表彰、大阪警備府艦隊海防艦“ひなぎく”。

代表して、艦長の二階堂雪少佐。

前へ」

呼ばれた二階堂少佐は、登壇する。

緊張しているのか、階段で躓きかけたのはご愛嬌だ。

壇上上がり、山本助六予備役名誉元帥の前に出て、一礼する。

それを見届けてから、山本助六予備役名誉元帥は、賞詞を読み上げる。

「大阪警備府艦隊海防艦“ひなぎく”は竹島において、他に並ぶことのない戦果を挙げた。」

この功により、海軍部部長表彰を授与する。

平成29年5月、海軍部部長、山本助六。

よくやってくれた」

その声をかけられた二階堂少佐は、涙でグシャグシャの顔をハンカチで拭き、

「ありがたく頂戴します」

賞詞を右手で掴み、遅れて左手でも掴む。

1歩下がりがりながら、間合いをとり、適度な距離で一礼する。

「これからも頑張ってください」

「ありがとうございます」

壇上から下りてくる二階堂少佐を拍手が包む。

そのあと、何個かの部隊に表彰が授与されるが、さすがに全員は来ていない。

彼らは”ひなぎく”乗員と違って、未だに最前線で戦っているからだ。

「個人表彰に移ります。

海軍部部长表彰は該当者はありませんでした。

続きまして海軍軍令部総長表彰、大阪警備府艦隊海防艦”ひなぎく

”前任将校、佐竹紀一中尉。

前へ」

「はっ」

佐竹中尉は、心のなかでリラックス、リラックスと唱えながら、壇上にかかる。

途中の階段の1段、1段に、ずっしりとした重みを感じる。

喉の奥が乾き、足が重い。

自然と呼吸が浅く速くなる。

田中大将の前に出て、一礼する。

それを見て、頷いた田中大将は賞詞を読み上げる。

「大阪警備府艦隊海防艦”ひなぎく”前任将校、佐竹紀一中尉は先の戦いにおいて、体調不良の艦長の代理として指揮を執り、未熟な身ながらも勇猛果敢な指揮にて敵艦隊を殲滅せしめた。

その功により、海軍軍令部総長表彰を授与する。

合わせて、海軍特殊権益者に任命する。

また、今回の戦功を鑑みて、功五級金鷄勲章を合わせて授与する。

平成29年5月、海軍軍令部総長、田中覚治。

おめでとう」

この「金鷄」という名前の由来は、初代天皇であるときされる神武天皇の東征の際に、神武の弓の弭にとまった黄金色のトビ（鷄）が光り輝き、長髓彦の軍を眩ませたという日本神話の伝説に基づいて、日本皇国軍の軍人もしくは軍属にあつて、戦闘や災害派遣等でたたえた武勲の象徴としてこれを授与されるのだ。

「ありがたく頂戴します」

賞詞を受けとると、もらったばかりの勲章を、右胸に佩用金具を取り付け、勲章を装着してもらおう。

民間人であれば左胸につけるのがマナーではあるが、軍人はそこに徽章と従軍記念章を装着するので、スペースがない。

よって、右胸に装着することを特例で認めている。

「よしできましたぞ」

「ありがとうございます」

1歩下がったあとに一礼する。

そして、ゆつくりと壇上から下りる。

そのときの心中は、安堵の2文字であった。

次々に”ひなぎく”乗員が呼ばれ、表彰される。

沿岸警備部隊隊長表彰に、徳山少尉と下士官全員が選ばれ、所属長表彰に、残りの兵たちが選ばれる。

「全員もらったな？」

佐竹中尉の問いかけに、全員が頷くが、

「体調不良だった艦長の分はないものな」

と、肩を落としているのは二階堂少佐である。

それを慰める言葉を、佐竹中尉は持っていなかった。

だから、スルーした。

そのことで起こる影響を計算した上ではあるが。

「以上で、海軍栄典授与式典を終了します。

一同、礼」

最後の司会の締め言葉で、全員が敬礼すると、音楽隊の演奏のなか、退場する。

退場したそのあとは自由解散となる。

「よし、今晚は飲み会だ。

知り合いの店を予約してある」

退場したあとに、佐竹中尉は全員に向かって、そう言った。

式典の終了後、宴会の開催場所である呑み処”佐竹”、佐竹中尉の実家に”ひなぎく”乗員は集まっていた。

「今日は美味しい地酒を用意してるから、楽しんでくれ」

佐竹予備役中将与、佐竹、旧姓田中予備役少佐は、海軍軍人として日本各地に知己が多かった。

その伝を辿れば、各地の旬が、地酒が一堂に会する。

そんなお店は、東京中を探してもここしかない。

その味に魅せられた某有名芸能人もお忍びで通っているとかいふ噂もたっているほどである。

「今日は堺市に馴染みのある地酒を用意しました。

”千利休”と”金の鳩”ですよ」

とは、佐竹中尉の言葉である。

”千利休”は堺市北区にある酒造会社が製造している日本酒であり、”金の鳩”は、70年前まで堺市にある百舌鳥八幡宮に奉納されてきた由緒あるお酒だ。

戦争による空襲で、製造拠点が焼失。

70年もの長い間、日の目を見ることがなかった。

それが、昨年に復活したとの話を聞いて、伝を総動員して入手したのだ。

「津軽の狩りは楽しかったな。

またしてみたいよ」

壁に掛けられた駆逐艦”つなみが左回頭する様子”の”写真を見て、前任伍長が呟く。

この写真は、まさしく津軽の狩りで撮られたものだ。

津軽の狩りとは、日本皇国海軍大湊鎮守府が津軽海峡周辺海域で、主催する多国間対潜掃討演習の異称で、過去には数々の伝説を産み出してきた。

「この写真を一瞬で見抜くとは、確かにこの写真は、私が一介の中佐だった頃、この駆逐艦の艦長をしていた頃の写真ですよ。」

まさか前任伍長さんは、こういうのいける口ですか？」
前任伍長の呟きを聞いた佐竹予備役中將は聞いた。

演習の内容は苛烈を極め、日本皇国海軍の精鋭たちが、沿岸警備部隊、連合艦隊の水上部隊と、第六艦隊のさらには練習艦隊隷下の練習潜水隊を含む一大勢力が、殺し殺されの殲滅戦を繰り広げ、ある年には参加戦力の9割が撃沈判定を喰らったという地獄である。

これを好む人間は、早々いないのだが。

「ええ」

「珍しい人もいたものですな。」

私も人のことは、言えませんが。

大湊に知り合いがいるんで、参加できるか聞いてみましょうか？」

佐竹予備役中將の言葉に、前任伍長である

「お願いします」

「と言っても、鎮守府の長官なんでね。」

その実務に参与していないから、いい返事が聞けるか、分かりませんが」

大湊鎮守府、日本皇国海軍の北部海域防衛を担う最大の基地である。

日本皇国海軍内での愛称は、”北鎮” または”大鎮” である。

併設されている大湊海軍工廠といった後方支援設備群の規模は小さいものの、その分熟練した技術者の多い基地である。

むつ市にある鎮守府は陸奥湾内にあり、陸奥湾を出ると、すぐに津軽海峡が存在するという要衝の地であり、冷戦の最中、ウラジオストクに所在するただの日本海艦隊にすぎないソ連海軍太平洋艦隊が文字通りの太平洋艦隊となるためには、宗谷海峡から千島海峡を抜けるルートか、津軽海峡を通るか、対馬海峡と大隅海峡か宮古海峡を通過するルートかを選択しなければなかった。

しかし、宗谷海峡を通るルートは時期によっては流水により使用できない上、対馬海峡のルートは太平洋に出るまでに日数がかかるために、安定して太平洋に進出できるのは、津軽海峡という選択肢しか存在しない。

だから、津軽海峡に一定の戦力を配置することは、日本列島が存在することによって、自由に太平洋に進出できないソ連海軍太平洋艦隊を牽制する意味合いが強い。

さらに言うところ第二次大戦後、この日本列島が東西で分割されることになかったのは、言い方は悪いが原爆のお陰だ。

強欲なスターリンは、千島列島を占領するだけでは飽き足らず、北海道や東北地方までも、占領することを目論んでいたという。

それを断念せざるを得なかったのは、ソ連がアメリカの保有する原爆に対抗できる兵器を保有していなかったというその一点があげられる。

無論、原爆を含む核兵器、生物兵器、化学兵器などの大量破壊兵器を使用すること、さらに言ってしまうえば、それに関する個人や国家単位で保有すること自体が、批判されるべきだ。

人を人ならざるように扱う大量破壊兵器は、できるならば即座に全廃されるべきだ。

そして冷戦期に日本列島が磐石で日本皇国海軍の活動が活発だったからこそ、ソ連海軍太平洋艦隊は日本海に封じ込められ、アメリカの太平洋支配が磐石のものとなったのだ。

だが、最近のアメリカ大統領候補は、日本はアメリカに対し、貢献していないなどと発言している。

しかし、それは間違いだ。

アメリカの太平洋支配が磐石なのは、日本列島がそこにあるからだ。

冷戦期から現在にかけて、中ソ両国はアメリカに対し、太平洋の覇権を争ってきた。

けれども、日本列島という巨大な防波堤が存在することによって、その野望を押し止めてきたのだ。

アメリカ海軍は、西太平洋に第七艦隊を、東太平洋に第三艦隊を置いているが、米国の同盟国として日本列島が存在しなければ、アメリカ海軍はハワイ近海に押し止められていてもおかしくはないのだ。

話は脱線したが、大湊鎮守府は冷戦中、日本皇国の戦略上、最も重

要な鎮守府であり、要求される技量を錬成するための訓練の質も高い水準となるのは当然のことだ。

「全員、グラスやジョッキは持ったな？」

「全員の無事な帰還を祝して、乾杯」

「乾杯」

佐竹中尉の音頭とともに、グラスの当たる音が響く。

机の上には、タラの芽の天ぷら、菜の花の天ぷら、淡路産のフグのてっさとふぐちり、信州牛のすき焼きと焼肉、日本各地の地鶏の焼き鳥や蒸し鶏、棒々鶏など多彩な料理が並んでいる。

「フグはあるのに、豚は無いんですね」

「生憎と言うべきかな。」

義父に、豚を卸しての知り合いがいなくてね。

鹿児島にも、那覇にも知り合いはいるらしいんだけど」

独自の人脈をフルに活用して、店の料理の原材料は仕入れている。

この独自の人脈に引掛からない限り、新しい食材は仕入れられない。

「チキン南蛮ありますか？」

乾杯の音頭をとったあと、佐竹中尉は板場に立った。

40人を越える団体の客の注文を捌ききることは、2人だけでは無理だからだ。

「鯛の駆逐盛り1つ」

「もつ煮込み、ホルモン焼き、唐揚げ盛り合わせ、焼き鳥は追加お願いします」

「生2つ」

「チキン南蛮、ホルモン焼き、焼き鳥上がり」

2人は40人から受ける注文を、息ぴったりに捌いていく。

「仕事の方はどうだ？」

まあ、聞かなくても分かるが」

聞かなくても分かると言っても、可愛い息子である。

息子の口から聞きたいのが、親の情というものだろう。

「死にそうなくらい働いてるよ」

そのことは、胸に輝く金鷄勲章が証明していた。
黒い制服に金色の勲章は、日本皇国軍将兵が死地を潜ってきた証だ。

勤続20数年の将兵でも、持っていることは少ない勲章である。

それが言外に、佐竹中尉の仕事ぶりを主張していた。

「飯は食ってるのか？」

「基本的には、自分で作って食べてるよ」

佐竹中尉は、手元で唐揚げを揚げている。

今は、2度揚げの2回目だ。

外はこんがり、中はジューシーに仕上げるために、もう1度揚げるのだ。

網で掬って、バットの上に一旦上げる。

それを、さらに盛り付ける。

手に取れるぐらいに冷えるまでの間に、生簀から鯛を引き出し、1匹丸々捌く。

それを、専用の皿に盛り付ける。

捌くまでにかかる時間は、ものの数分だ。

「鯛の駆逐盛り、唐揚げ揚がりしました」

佐竹中尉の母である佐竹予備役少佐は、

「ウイスキー・オン・ザ・ロックください」

ウイスキー・オン・ザ・ロック、呑み処”佐竹”唯一の変わり種の料理である。

岩に見立てた信州牛のカツの上に、潜水艦を象ったハンバーグを載せ、ウイスキーベースの特製ソースをかけて完成という品だ。

ワインにはない独特の甘みが、味に深みを出しているとかいないとか、とりあえず常連客には好評だ。

ちなみに、潜水艦のハンバーグには、ソ連らしい赤い旗が刺さっている。

冷蔵庫から牛カツとハンバーグを取り出し、牛カツは油で揚げつつ、ハンバーグはきつちりと火を通す。

大皿にキャベツとレタスを盛り付け、その上に牛カツを並べる。

焼き上がったハンバーグを、さらにその上に載せる。

余りの油に、砂糖、醤油、ウイスキーを入れ、それを一煮立ちさせたところに、隠し味のウスターソース、ケチャップを少し入れ、塩コショウで味を調える。

「第四分隊はお前一人か？」

ウイスキー・オン・ザ・ロックを作っている最中の、佐竹中尉に佐竹予備役中將は話しかけた。

「まあ、うん」

「そうか、そんな気はしてた。

全員、料理し慣れてるって感じじゃねえからなあ。

まあ、防大出のお前はこの程度のことと逃げ出すようなタマじゃねえしな」

その間にも先程作ったソース、これを盛り付けたハンバーグの上から掛けていく。

「戦争ばっか上手くても、世の中やっていけないのにな。

残りの全員、鬼松婆さんの料理教室補給学校烹炊課程に突っ込んでやろうか？」

「義父さんが言うのと、洒落になんない。

っと、ウイスキー・オン・ザ・ロック上がり」

補給学校烹炊課程、舞鶴鎮守府内に設置された日本皇国海軍の烹炊担当第四分隊所属将兵の教育を担当し、各課程の厳しさは砲術もしくは水雷学校に勝るとも劣らない。

特に厳しいのが、烹炊幹部部門である。

その烹炊幹部部門の首席教官は、御年87歳の岩松花子少将待遇である。

元々、日本皇国海軍軍令部直轄の迎賓艦”はしだて”烹炊長だった彼女は、海軍特務大尉として72歳で退官後、少将待遇で補給学校烹炊課程の烹炊幹部担当教官として再雇用され、世界一とも言われる日本皇国海軍烹炊部の伝統を背負う後身を育成している。

その厳しさは、鬼松婆さんの異名を生徒からつけられたことから読み取れるのである。

「ハイボールください」

「すみません。」

ハイボールは置いてないんですよ」

「そうですか。」

じゃあ、オン・ザ・ロックください」

「分かりました。」

はい、どうぞ」

グラスを食器棚から取り出し、氷を入れ、ウイスキーを注ぐ。琥珀色の液体が、グラスを満たしていく。

その頃の宴会場のなかは、戦場と化していた。

「えんまのゑの字はこう書きます」

そしてへべれけ状態の将兵たちは、セクハラ紛いのことを始めていた。

これでは、日本皇国海軍の威信が、将兵としての矜持が崩れかねない。

そうなる前に、佐竹中尉はホテルに戻すべきだと判断した。

「義父さん、強制排除しようと思います。」

いいですかね?」

「お前さんの部下だ。」

好きにすればいい」

その言葉を聞いた佐竹中尉は、即座に行動を起こした。

「阿倍野軍曹ですか?」

国防省の駐車場に待機しているはずの阿倍野軍曹に、佐竹中尉は電話を掛けた。

「今から指定する住所というか、場所に来てください。」

はい、はい、場所は市ヶ谷駐屯地国防省正門前にある呑み処”佐竹

”です。

はい、はい、お願いします」

電話を切った佐竹中尉は、腕捲りをした。

「じゃあ、1人ずつ摘まみ出しますか」

腕を掴んだ佐竹中尉は、正面の入り口の方に運んでいく。

「佐竹中尉、お手伝いします」

電話からすぐに、出入口の前にバスが来る。すぐに止まったバスのドアが開き、運転席から阿倍野軍曹が姿を見せる。

「お願いします」

酔っぱらいのを両肩に担ぎ、バスの座席に座らせていく。

背後にパトカーのサイレンの音が聞こえてくる。

赤いパトランプが、近寄ってくるのが分かる。

バスの後ろでパトカーが止まり、警察官が下りてきた。

「警察ですけど。」

「ここで、ぐでんぐでんに酔った人をバスに連れ込んでいるとか言う通報があったんで、駆けつけてきたんですが」

「お疲れ様です。」

日本皇国海軍大阪警備府の佐竹中尉です。

宴会が終わって、これからホテルに帰るところなのですが、見ての通り、全員酔い潰れちゃって」

「なるほどね。」

では警視212より警視庁」

佐竹中尉の説明に納得した警察官は、左胸の無線機を取り上げ、警視庁本部に報告する。

『こちら警視庁、どうぞ』

「先程の110番事案は誤報と確認。」

これより警らに戻る。

どうぞ」

『警視庁、了解』

無線の通信が終わると、警察官は佐竹中尉に軽く会釈をして、パトカーに戻った。

そして、そのバスのなかに全員が座っていた。

「全員が乗りましたね。」

明日は私を除く全員が非番、つまりは休みな訳です。

対して私は、明日は戦場に向かわねばならないですよ。

その差はなんですか？

「私も休みたいんですよ」

そばにいる安倍野軍曹に話しかける。

「もしかしたら、その休暇たんまり貰えるかもしれないよ」

そして、ミラーを使って後ろを見ていた。

「公安警察部に露骨に守られているんですからね」

バスの後ろには、黒のクラウンが数台止まっている。

「ほしいのは、明日からですけどね」

2人で笑い合っていると、バスはゆっくりと、ホテルに向かって進んでいった。

皇居・正殿竹の間。

そのソファの上で、佐竹中尉はガチガチに緊張していた。

腰のベルトには、情報関係者用に調達されたグロック17がホルスターに納められて装着されていた。

しかし通常、皇居内に武器は持ち込むことはできない。

唯一の例外が、陛下の警衛を担う皇宮警察と近衛連隊であるが、今回は非常事態ということで見逃されている。

その事が佐竹中尉の緊張を増長させていることを、本人以外は誰も知らなかった。

「私みたいな人には、場違いなんだよ」

周りを見渡しながら、独りごちる。

それというのも、朝起きて滅多に着る機会のない第5種制服を来た瞬間に、これじゃない感が佐竹中尉を襲ったのだ。

そして、一生乗ることのないであろう皇室仕様のトヨタ・センチュリアルは、佐竹中尉にとって気が休まる車でも、緊張が解きほぐされるような車でもなかった。

早朝5時に国防省に出頭した佐竹中尉は、国防省地下情報本部フロアにある武器庫にて、グロック17と予備弾倉を受領した。

ちなみに、そこを守る警衛官は憲兵補佐職員として、軍司法警察権を保持していて、無許可の侵入者であれば、軍人であっても手荒く歓迎するのだ。

国防省儀仗広場に停められた宮内庁からの迎えの車に乗り込み、皇居に入った。

そして、案内された皇居正殿・竹の間にて待機していた。

「これには、セーフティが付いてない。

トリガーを引けば、撃てる。

弾倉は17発入り、7個」

腰のピストルとマガジンポーチを触りながら、情報本部職員からの説明を反芻する。

「交戦規約はデフコン1の許可。」

銃器の所持を確認し次第、撃て」

今度は予備弾倉の入ったポーチを確認しながら、統合参謀本部長の命令を反芻する。

「日本皇国軍軍人としての道を歩む君たちは、国民が幸せに笑うときに泥にまみれ、国民が悲しみの涙を流すような危機には血にまみれ、国民にその仕事を責められるときには、涙を吞んで堪え忍ぶことになるでしょう。」

本当にご苦労なことだと思います。

そして主権者たる国民の選んだ国家の命令に従い、国内外で活躍されることになると思います。

また、万が一非常事態、いや国家存亡のそのときには自らの命を省みず任務を達成し、国家の存続という形を通じて国民に奉仕せねばならない。

我が国は先の大戦を反省し、2度と非道な侵略の片棒を担がされてはならない」

とは、国防大学校第1期卒業生にときの宰相、吉田茂が語った言葉だ。

そして、国防大学校に入校し、日本皇国軍軍人としての道を歩み始めた学生たちは、まずこのことを頭に叩き込まれる。

矢継ぎ早に言葉を紡ぐことで、佐竹中尉は緊張した頭のなかをスッキリとさせる。

「万が一、国家存亡のそのときには自らの命を省みず任務を達成し、国家の存続という形を通じて国民に奉仕せねばならない」

その1文節を繰り返す。

年季の入った言葉だが、今でも日本皇国軍軍人の精神の拠り所だ。

「陛下がお見えになります」

侍従長が、先に姿を見せた。

彼の名は鈴木万次郎、宮内庁のトップに近いとの評価を誇るのだ。

閉まっていたドアが開く音がして、天皇陛下が姿を見せた。

大元帥閣下である陛下に対して、佐竹中尉は立ち上がって、敬礼を

する。

「そう硬くならなくても、良いですよ。

私があなたに会いたくて、無理を言っただけでも良かったのですからね」

「はっ」

敬礼をやめても、佐竹中尉は直立不動のままだ。

「と言っただけでも無理な話ですね。

申し訳ありません」

そう言うと、天皇陛下は頭を下げた。

「私の空いている時間が今日しかなくて、あなたには無理を言いました。

大変申し訳ない」

「いえ、そのようなことは」

「それなら良いのですが。

どうぞ、楽に座ってください」

そう言われて、佐竹中尉はソファに座る。

「竹島では、ご苦労様でした。

佐竹中尉の見るところでは、今回の状況はどうですか？」

「沿岸警備部隊の精鋭が警備に当たっており、周辺国の海軍では手を出せないでしょう。

ただ、此度の戦い、些か勝ちすぎてしまったような。

そんな気がします」

自分の素直な気持ちをも、丁寧な言い回しで伝える。

「勝ちすぎてしまったとは？」

面白いことを聞いたとばかりに、陛下が聞いてくる。

「韓国の海空軍の戦力が壊滅したことで、韓国の中国への依存度は急激に上昇します。

そうなってしまうえば、アメリカの技術は中国へと流出してしまう危険性が高まります」

佐竹中尉の言う技術というのは、ハードウェアやソフトウェアだけではない。

それらの連結や運用に関する長年の実績も含むのである。

例えばイージスシステムの初期、ベースライン0から最新鋭のベースライン8、さらにはズムウォルト級に搭載されたイージスIIシステムまで、40年あまりのその間の数度の改修作業を挟み、蓄積された運用実績がイージスシステムを世界最強の艦隊防空システムに育て上げたのだ。

「しかし、そういう類いのシステムはブラックボックス化されていたはずで、簡単には手が出せないはずですが？」

日本皇国の民意を結集し、召集された国会の決定した法案を、そして国会の選んだ内閣の実行する政策を、天皇が最後に審査するのが、日本皇国憲法下での政治体制である。

これは、戦前の体制と何ら変わらないようにも見える。

しかし、陛下は1人の国民として厳しい目線で、政策を見つめてきた。

過去には、公共事業に関する予算をバツサリと切り捨てるなど、その指摘は容赦がない。

ただ、軍の技術研究本部で開発された新型万能バイオ燃料の利潤で、予算のゆとりを持った日本皇国軍は大規模な装備改編計画を実行している。

その件については、源泉が国民の税金ではないし、また急激な軍備拡張ではなかったので、中止にはしていない。

だからこそ、官僚から説明を受けるために各方面に知識を持っている陛下は、ブラックボックスのことを知っていた。

そして、それが簡単に手を出せる代物ではないことも。

「さあ、切羽詰まれば、迷いなく手を出しますよ。

彼の国は」

実際、切羽詰まってもないのに韓国軍は、F-15Kのシステムや潜水艦のブラックボックスを無断で開けて、米国を激怒させたり、ドイツを呆れさせている。

これがさらに、切羽詰まれば手を出さないわけがない。

「アメリカも韓国を見捨てますかね？」

「それは分かりません。

しかし、可能性はあります。

今も昔もアメリカの世論は、不正義な戦いにおけるアメリカ兵の犠牲を嫌います。

しかし、アメリカの正義を確信すると、粘り強く勝つまで戦います。けれども、ベトナムやイラクにおける軍事作戦は大統領が正義を証明できませんでした。

だからアメリカの世論が、大統領にNOを突きつけました。ただ、戦争にどのような形であれ、正義は存在し得ません。

そのことは、第二次大戦が証明しています」

第二次大戦では、リメンバー・パールハーバーを掛け声に、中国を侵略している、そしてパールハーバーを騙し討ちで攻撃した日本を攻撃することは正義だと、アメリカの当時のルーズベルト大統領は言った。

しかし、アメリカは他国の領域を蚕食してできた国家である上に、都市における無差別爆撃や原爆投下などの非人道的なレベルで、一般民衆を標的とする攻撃を繰り返した。

これらは、戦時であれ非難されるべき事象である。

「もう1つ言うと、自国の防衛を韓国軍は放棄して、日本に戦力を送りました。

そのことに、米国防総省の担当者は失望を通り越して呆れたと公式にプレスリリースを通してコメントを発表しました。

そのことも考慮すると、朝鮮半島に戦火が及べば、在韓米軍は撤退に追い込まれるかもしれません」

長つたらしい佐竹中尉の考えだが、その言葉の1つ1つに、陛下は領きを見せた。

「外務省の資料には、そんなことは書いてませんでしたね」

1年前の大統領選挙において、ある候補が韓国からの米軍撤退を明言した。

その候補は、当選こそしなかったものの、自国の防衛を放り出して、外国領土に侵攻する韓国に苦言を呈した形になる。

そして、自国の防衛を真剣に考慮しない韓国で、多くの米国兵の命が散ることを国民は容認しないだろう。

在米日本大使館駐在武官部はそう結論付けて、国防省本省にレポートを提出している。

外務省の職員は、その頃ワシントンD・C.のゴルフ場でコンペに精を出していた。

「彼らは在外公館、言ってしまうえば海外にある日本領内では活動しないですからね。」

アメリカ中央情報局^Aの該当国内での動き、さらにはアメリカ国内での活動すらも、ウオッチしてる情報要員のいるらしい駐在武官部にすら劣ると言われますね」

「CIAですか？」

佐竹中尉の言葉に、陛下は首をかしげた。

「確か、彼らはアメリカ国内で活動することは認められていなかったはずですが？」

「それは憲法上の建前で、連邦捜査局^B局員に扮したCIA職員を確認しているそうです」

国内でCIAが活動する目的は、防諜業務ではない。

それはFBIの領分だ。

テロ対策、麻薬対策、そのどれでもない。

今、彼らが躍起になっているのが、共産主義の亡霊退治である。

30年前に、共産主義の首魁、ソビエト連邦は崩壊した。

「ソビエトが崩壊する際、かなりの量の政府資産が消失したと云われています。」

その大半は、政府関係者が横領したのですが、一部は将来のソビエト復活のためにソ連国家保安委員会^Bによって隠匿されたそうです。

金額に関しては、諸説あるので割愛するにしてもかなりの大金が、ロシアの裏社会に隠されているとか。

そんな噂話をCIAは全力で追っているようです」

「なるほど。」

共産主義の亡霊ですね。

確かに、外務省の能力は低いと見なさざるを得ないようです」
陛下が納得したところで、侍従長が紅茶を持ってくる。

「そして、今回の件ですが。
その前に侍従長、君は皇居に現在も残っている宮内庁職員を連れて、退避しなさい。

日本の未来は、私のような老害ではなく、君たち若い世代が作るものです」

「私も大概、年ですが。

分かりました。

陛下、次にまた五体満足な状態で出会えることを、宮内庁職員一同祈っております」

天皇陛下の有無を言わさない口調に、侍従長は従って、残る職員を連れて皇居から退去する。

それを確認した陛下は、佐竹中尉に言った。

「あなたも若いのに、申し訳ない」

「いえ、あなたを守るのが我々、日本皇国軍軍人の本分です。

あなたには、指一本触れさせません」

第1近衛連隊は既に、皇居外周部に展開を完了していた。

同じ頃に、近隣の駐屯地では、治安[↑]出動のために非常呼集が発令され、事件発生後数分以内に出動可能なレベルにまで、警戒度が上がっていた。

「美智子は赤坂に避難させました。

事件のことは知りません」

「皇后陛下のいる東宮御所は、近衛連隊が2個、警備に就いています。
遊撃戦力として、1個近衛連隊が待機しています。

皇后陛下の安全は確実です。

しかし、陛下は危険な状況が続いています。

その辺はどうお考えですか？」

佐竹中尉の質問に、陛下はあっけらかんと答えた。

「私の命は、君たちが守ってくれるのだろうか？」

頼りにしているし、君たちのことは第一に信頼している」

「長くて使いにくいな」

とあるビルの屋上に射座を確保した狙撃兵は、今持っている銃器、SVDドラグノフについて、そう漏らした。

旧ソ連軍制式銃器の特徴である堅牢さは、これまで扱ってきた狙撃銃を凌駕しているのは間違いない。

彼の覗く狙撃銃のスコープには、皇居正門前にある近衛連隊詰所を捉えていた。

観測手の話によると、ここから標的までの距離は、200メートルと少しくらいで、十分な精度を持って、狙撃できそうだ。

韓国軍の狙撃兵^{スナイパー}として数年、警察の特殊部隊の狙撃手^{シューター}としてさらに数年務め、遠近どちらの狙撃であっても、対応できるという自信があった。

そして、正門前にある詰所には、日本皇国陸軍の分隊、12名がいた。

9人が外に出て、周りに目を光らせている。

いつまでたっても彼らは油断なく、周囲に視線を走らせていた。

しかし、その視線は200メートルほど離れているビルの屋上には届かなかった。

「アルファ、ブラボー、チャーリー、デルタ、エコー、フォックスロット、ゴルフ、ホテルの各チームは配置に着いたそうだ。

狙撃担当のインディアチームは、このペアも含めて、配置に着いたのは確認できた。

12時になれば、攻撃開始だ」

そして、短くない時間が流れて、時間が来た。

「12時まで5秒」

大きく息を吸って、引き金に指をかける。

「詰所のなかにいるやつを狙え。

正面、距離は225メートル」

指示通りにスコープのなかに、敵兵を捉えた。

大きく息を吐きながら、引き金を引く。

1人が倒れる。

再起の隙を与えずに、2人、3人と狙撃する。

「スナイパー・グッド」

相棒の賛辞を聞き流しながら、眼下で繰り広げられている戦闘を眺める。

戦闘の大勢は我々が押さえているようだ。

既にトラックから下車した味方が正門前を制圧している。

見た限りでは、味方に被害は出ていないようだ。

味方の損害がゼロのまま、事態が進めばいいと、楽観的には考えていたが、その一方で早々上手くはいかないとも思っていた。

「味方の攻撃は苛烈だな。

まあ、先祖の数百年に及ぶ恨み、ここでしか晴らせないから、当然だ。

まあ、日本の警視庁が来たところで、狙撃してやれば、尻尾巻いて逃げ出すだろう」

日本皇国陸軍狙撃兵のモットーである”沈黙こそ最大の美德”は万国の狙撃兵共通の認識である。

だから、このおしやべりな相棒を疎ましく思っていた。

それを忘れるために、正門に爆弾に仕掛けた味方をスコープ越しに見ていると、味方が仕掛けた爆弾が爆発し正門に突破口が開かれた。

煙のなかで、大穴が空いたのが確認できた。

今回は同じ規模の敵とはいえ、不意討ちは通用しないだろう。

その穴から味方の部隊が突入しようとする、敵の弾幕が激しいのか、次々に味方が倒れていく。

先程の爆発の煙が晴れてくると、状況が理解できた。

防弾盾を遮蔽物代わりに、敵兵が射撃していたのだ。

「正面、射撃中の敵、距離は240メートル」

それを脅威と判定した観測手は射撃を指示した。

その指示通りに、敵兵を射撃する。

防弾盾を遮蔽物代わりに、射撃していた敵兵を盾ごとズタズタにする

る。

ドラグノフから発射された7・62×54R弾は、十分な威力をそこに刻んでいた。

セミ・オートによる自動装填によって、毎回射撃するためのボルトを動かす煩わしさから、解放された狙撃兵は敵兵の連携を寸断していく。

複数の敵兵が倒されて、敵兵が怯んだ隙に、味方が怒濤の勢いで侵入していく。

それはまさしく、虐殺と言わんばかりの勢いだった。

同じ頃、国防省地下にある統合^I作戦指揮所^C^P

「皇居に敵兵の攻撃を確認。

多摩に避難中の警視庁からの出動要請です」

陸軍参謀本部作戦1課第2部^G²の参謀が告げた。

「先の命令に従い、直ちに第1^首旅団^兵、第6^空空挺旅団^兵、第10^乙空中機動旅団^兵は出動。

その他の部隊は、非常呼集を発令し、如何様にも動けるように待機させておけ」

前田大将は声を張り上げる。

ちなみに、首兵団とは第1旅団のことであるが、このように日本皇国陸軍隷下の旅団には、その旅団にちなんだ漢字一文字が与えられる。

首都東京に旅団管区を持つ第1旅団は、首都から首を取って、首兵団と呼称されているし、第6空挺旅団は空挺だけに空兵団、第10空中機動旅団は”地獄の黙示録”という映画のなかのキルゴア中佐率いるヘリボーン部隊が流していた”ワルキューレ”の騎行”という曲にちなみ、ワルキューレを日本語に訳して戦乙女から乙兵団、日本皇国海兵隊を自認する第4水陸機動旅団は自身の活動場所である海浜から浜兵団といった具合である。

「神奈川の第14^防旅団^兵、朝霞の第18^即応旅団司令部^兵より出動の是非についての問い合わせです」

第14旅団は旅団管区内に、国防大学校が存在し、そこから防の文

字を拝借している。

また、第18即応旅団は緊急展開指定部隊ではないが、野戦、市街地戦、空中機動、水陸両用戦、空挺作戦何でもござれのプロフェツショナルな集団でもあり、北から南からすべてへの増援としての動員を予定しており、”命令があれば、どこにでも”をモットーとしている。だから、どこにでも動くから動兵团である。

「できるのなら、やらせろ。」

環七包囲線は兵力が必要だからな」

「了解」

「陸海空軍の次席指揮権は、先に策定された命令通りに、円滑に進めよ」

前田大将の指示と同時に、河野大将の指示が飛ぶ。

「沿岸警備部隊司令部を通して、横須賀鎮守府艦隊に出動命令。」

東京湾を海上から封鎖せよ」

田中大将は上の空ながらも、指示を出した。

何となく、なにも手につかないのだ。

親類縁者のことが心配なのは、人間として当然だろう。

「統合参謀本部長、河野だ。」

今回の事件に出動する全部隊に告げる。

状況の詳細が不明であり、相手の武装も人数も布陣も不明のままだ。

これでは、諸君らの命をどぶに捨てるようなものだが、情報を送ってくれるはずの、いや情報を送らねばならないはずの近衛旅団の精鋭(笑)と評される第1近衛連隊のボンボンたちとは、連絡が取れないためである。

彼らに野武士だと、血統もない雑種だと嘲られてきた諸君らが、彼らより精強であること証明するチャンスが来たのだ」

近衛旅団は、旧陸軍の頃から武家筋や公家筋の人間の巣窟だった。

名門出身の彼らはプライドだけは高いが、選民思想というものに取り憑かれていた。

しかも、武家筋や公家筋であつても本当に優秀な人間は、配属希望

に近衛連隊を避けるので、穀潰しの集まりが近衛連隊の正体なのだ。例えば、今代の陸軍参謀総長である前田利光大将は、近衛連隊勤務を嫌って情報本部勤務に進んだのだ。

皇居は後方地帯であるとの認識から、この状態でも放置されていたのだ。

ぬるま湯に浸かっていた彼らは、危機管理云々以前に銃を持たせるのすら不安であった。

しかし、国内外で戦闘を戦うことになる軍の一般部隊や特殊部隊に数年勤めていたら、気温が40度近い南の熱帯、零下40度にも迫る北の雪山、標高3000メートルの山岳地帯、海中や川辺などの水際地帯、ビルが乱立する市街地や広大な砂漠などの日本皇国陸軍の想定する戦場すべてを経験させられる。

そこで自然と戦い、そしてそれに打ち勝つ術を学ばされる。

また、一般部隊ではなくとも、情報本部勤務の情報要員となった場合、権謀術数の世界にどっぷりと浸かることになる。

それには、庶民も武家も公家も関係ない。

その強大で偉大な自然のなかや自分以外は全員敵とも言える状況で、訓練を受ける一般部隊の将兵、戦ってきた情報要員は、エアコンの効いた場所で仕事をする近衛連隊のぼんくらとは、一味も二味も違う癖のある人間に育つ。

しかも、練度も士気も一般部隊に劣る近衛連隊は、過去の演習でも一般部隊に皇居の守りを破られている。

純粋に小銃と小銃で、撃ち合ったという想定のもとである。

しかし、彼らは嘯く。

奴らは、ルールを無視して戦うと。

だが、実戦に身を置く一般部隊の将兵は、正々堂々と戦うなどという単語は頭がない。

なぜなら、杓子定規な作戦では敵に見破られ、味方の部隊が損害を被ることになるからだ。

よって、そんなことも分からない近衛連隊は最弱のレッテルを張られた集団なのだ。

「第1近衛連隊は全滅するだろう。」

そうならば、陛下の御身は我々一般部隊が護ることになる。

総員、戦闘開始だ」

「紀坊、無事でいてくれよ」

基本的にこの事件に出る幕がなく、さらには佐竹中尉と親交のある海空軍首脳は、佐竹中尉の無事を天に祈っていた。

六本木駐屯地、第1歩兵連隊第1中隊本部

『参謀本部より出動命令が発せられた。』

場所は……皇居、皇居だ。

連隊隷下の各部隊は、陛下の御身を保護するために進出せよ。

これは未曾有の事態だ。

日本皇国軍創設以来初めてのタイプの、そして最大の危機だ。

各員は緊張感をもって、この危機に対処するように要請する。

以上だ』

本部幕僚車として使用されている高機動車の座席の上で、中隊長は呟いた。

「面子ばかりを気にする近衛連隊は当てにならない」

腰に着けた無線機から延びるコードを伝って、咽頭マイクを取り上げ、通信を開始する。

「11中隊から連隊本部。」

11中隊は直ちに出勤し、皇居周辺での状況の掌握、避難誘導に当たる。

送れ」

士魂中隊とは、第1歩兵連隊第1中隊の無線呼称である11中隊をもじったもので、旧陸軍の戦車第11連隊の愛称である士魂部隊はこの十一を「土」と読ませたことに由来する。

つまり、武運長久の験担ぎとして、この愛称がついているのだ。

「連隊本部、了解。

終わり」

通信を終えた中隊長は、回線を中隊隷下部隊に切り替えた。

「11中隊長より隷下の各部隊。

本部隊は、皇居周辺での状況の掌握と避難誘導に当たる。

敵の人数や武装など、不明な点も多いが、各員の薫陶努力を期待する。

以上」

通信を切ると、中隊長は運転席にいる部下に発進を命じた。

「では、行くこうか？」

「イエーガー・ゼロワンより各機。

オペレーション・ゼロ首都防衛作戦計画の第3項に基づき、我が隊にも出動命令が来た。

我が隊は直ちに離陸する」

『イエーガー・ゼロツー。』

ラジャー』

『イエーガー・ゼロスリー。』

ラジャー』

イエーガー・フライト小隊は他の対戦車ヘリ小隊と同じように、3機で編制されている。

「事前に指示があつた通り、待機していたが。

まさか、本当のこととはな」

木更津駐屯地のヘリポートには、4個小隊、12機のAH-64D Jアパッチ・ロングボウが待機していた。

その機体には、木更津4姉妹と呼ばれるキャラクターが描かれている。

各編隊長機には、木更津茜中尉が、二番機には、木更津葵少尉が、三番機には木更津若菜軍曹がそれぞれ描かれている。

ちなみに、四番機の位置に相当する観測ヘリであるOH-1Aに描かれているのは、木更津柚子兵長である。

『木更津タワーよりイエーガー、ハンターの各編隊へ。』

離陸を許可する。

南関東空域における民間機の飛行は許可されていない。

飛行の障害となる物体はない。

各機にあつては、自由な飛行が許可されている。

以上』

「イエーガー・フライト、ラジャー」

『ハンター・フライト、ラジャー』

『プレデター・フライト、ラジャー』

『レンジャー・フライト、ラジャー』

無線機からは僚機の編隊長の声が聞こえてくる。

「イエーガー・ゼロワンより各機。

エンジン始動、離陸準備に入るぞ」

『ゼロスリーよりゼロワン。』

状況はどうなってるんですか？』

「詳細な状況は不明。

私にも一切分からない」

イエーガー・ゼロワンに乗る小隊長も、なにも聞かされていなかった。

『土魂中隊は、正門に向けて進行中の第一、第二小隊の各隊は、正門近辺を制圧し、皇居内に突入せよ。』

レンジャー小隊は周辺を警戒しつつ、突入を援護せよ。

中隊本部も続くぞ。

いけつ、突撃』

89式歩兵戦闘車を先頭に、土魂中隊隷下の部隊は攻撃を開始した。

「目標、正門前にいる敵兵。

効力射、撃て」

レンジャー小隊からの指示に従い、89式歩兵戦闘車の35mm機関砲が火を噴いた。

その1発、1発が人体を四散させる威力を持つ砲弾だ。

そんな砲弾を、軽やかな発砲音と共に、遮蔽物の後ろにいるテロリストに叩きつける。

89式歩兵戦闘車の車体を盾にして、歩兵部隊が正門に近接している。

皇居正門前にて抵抗を続けるテロリストを、銃撃していた兵士が倒れる。

「狙撃兵！」

どの兵士か分からなかったが、誰かの声が聞こえた。

進行が停滞した土魂中隊目掛けて、斜め上方から7.62mm狙撃銃が火を噴くたび、兵士が倒れていく。

「選拔射手、撃て。」

敵狙撃兵を排除しろ」

89式歩兵戦闘車の車体の影に、身を隠した分隊長が大声で指示を出す。

未だ治安出動の範囲での対処があり、分隊の全火力を投射することは、政治的な都合で憚られたのだ。

89式小銃に、狙撃用スコープを取り付けたマークスマン・ライフルを片手に持った将兵が、射撃位置に着こうとする。

すると、猛烈な射撃を喰らって、位置に着けないでいる。

それに業を煮やした分隊長は、無線機から小隊本部に支援を要請する。

『士魂ヒトヒトより士魂ヒトマル。』

敵狙撃兵を確認。

至急、支援を要請』

「士魂ヒトマルより士魂ヒトヒト。」

了解、付近の部隊に問い合わせてみる」

環状7号線、第14旅団第14歩兵連隊第3中隊

「全隊、前へえ、進めえ」

皇居含む都心を囲むように、環状7号線は敷かれている。

そこに横1列に並んだ将兵たちは、少しの裏道にも入り込み、包囲線を圧縮していく。

出動前に、統合戦術ネットワークを通した旅団長の訓示に、中隊内でも大きな歓声が沸いたものだ。

機動戦闘車から派生した機動装甲車を装備した第3中隊は、そのフレキシブルな火器運用能力を生かして、大通りを慎重に北進していた。

「第1旅団の背後は、我々が守るぞ」

偵察部隊用に設計された機動戦闘車から、これまた派生した指揮通信車の車内、これは元々、戦時に編成される師団司令部用に調達された物だが、それを拝借している。

その車内に設置されている50インチモニターと部隊間通信シス

テムのスピーカーからは、前線の状況が伝わってくる。

「第1^首兵^団旅団の背後を、固めろ。

敵味方の識別に注意。

環状7号を最終阻止線とし、第1^首兵^団旅団との連絡を絶やすな。

小隊いや分隊単位で、部隊間隙を突いてくる敵兵の攻撃には要警戒。

以上」

無線機に情報を流しつつ、状況を整理する。

日本皇国陸軍参謀本部内では、対遊撃戦やら、対浸透作戦行動やら、対ゲリラコマンド作戦やらと呼称される一連の作戦行動の戦術の常道を行く作戦を実施している最中だ。

基本的には包囲と圧縮、ある地域内にいる敵性勢力を完全に封じ込めるのが作戦の第一段階だ。

「第1^乙空^兵中機動旅団、第6^空兵^団空挺旅団、第1^動兵^団8即応旅団との連携を密となせ。

繰り返すが、第1^首兵^団旅団とも連絡を絶やすな」

指揮通信車の車内で、中隊長はそう指示を出した。

「イエーガー・ゼロワン、応答せよ。

こちらは、ワルキューレ・ゼロワン。

上空統制任務を受け、管制業務に就いている」

木更津駐屯地のヘリポートを発進したAH-64DJアパッチ・ロングボウは、東京の上空に差し掛かっていた。

「こちらはイエーガー・ゼロワン。

第1対戦車ヘリコプター隊の先任小隊長機である。

詳細な情報と、次の指示を乞う」

さらに言うと、ワルキューレのコールサインは第10空中機動旅団隷下の第10ヘリコプター飛行隊が運用する旅団司令部幕僚乗務のヘリコプターに与えられるものである。

『ワルキューレ・ゼロワンよりイエーガー・ゼロワン。

司令部よりのオーダーを伝える。

門前で、戦闘中の各中隊を援護せよ。

最前線で活動する兵士の生命の保全が、今作戦の最優先事項である。

そのための必要な措置を取ることを認める。

以上だ』

首都東京上空を飛行するUV-22Cオスプレイには、旅団航空幕僚が乗り込み、上空監視を行っていた。

「イエーガー・ゼロワン、ラジャー。

すぐに向かう」

上空数百メートルの高度を、アパッチはかなりのスピードで飛行していく。

しかも、徐々にスロットルを開いて、エンジンの出力をあげている。

「30mm機関砲チエーンガンを用意しとけ」

パイロットが、前席に座るガナーに告げる。

「ガンですか？」

「そうだ。」

どうせ、すぐに救援要請が来る。

今のうちに、準備しておけ」

「我らここに励みて国安らかなり……か」

皇居内の松の間にいた佐竹中尉は呟いた。

その言葉は日本皇国陸軍第7機甲旅団が駐屯する東千歳駐屯地の正門に、掲げられたスローガンである。

日本皇国軍の全部隊が、目標とすることもある。

先程から周囲で銃声が、散発的に響いていた。

既に皇居は、戦場だった。

「陛下、退避しましょう」

冷静な思考を持つ佐竹中尉は、そう陛下に提案した。

「朕は、このような事態から逃げるわけにはいかぬのです。」

それが、特権階級である皇族に産まれた者の責務です」

全ての生活費を国費で賄われる皇族は、名誉役職としてしか現存していない貴族よりも、国民一般に尊ばれる存在として認知されている。

「あなたは、いえ陛下はご自分が、軍にとって、いえ国民にとって、どのような存在か分かっておられるのですか？」

佐竹中尉は、高貴なる者の責務を遂行しようとする陛下を説教する。

「あなたが思う以上に、あなたの存在は我々には大きいのです。」

例えば、陸海空軍観閲式を観閲されるだけで、我が軍の将兵は大きく勇気付けられているのです。

あなたが特権階級であるからといって、あなたのその命、軽々しく扱わないでいただきたい」

佐竹中尉の説教に、ハツと頭をあげた陛下は、言葉を綴り出した。「私のような老人に、そのような価値があるとでも？」

「人命とは、老若男女等しく価値のあるものです。」

だから、日本皇国陸軍は既に救出のために兵を出しているでしょうし、派遣されている将兵も、全員が身命を賭して、ここに向かってきているでしょう。

あなたが命を救うために、命を賭けて、ここに向かっている。

あなたは、その兵士たちが持つその純粋な気持ちをも、そして今回失われるであろう若い命たちを踏みにじるおつもりなのですか？」

佐竹中尉は、日本皇国海軍中尉として、そんな陛下の態度が許せなかった。

「ほら、行きますよ」

とは言ったものの、佐竹中尉の耳は目敏く、いやこの場合は、耳敏くと言うべきか、廊下の前に4人の人間が立っていることに、気付いていた。

「ここに伏せていてください。」

あと、顔を上げずに、耳を塞いでください」

腰に着けていたグロック17を取り出した佐竹中尉は、壁際に陛下を伏せさせていた。

それを庇うように、姿勢を低くして、侵入者を待つ。

編上靴独特の音は、ゆっくりと室内に侵入してくる。

まずは、1人目。

グロック17を2発、どちらも頭部に命中し、周囲に脳漿をばら撒いた。

その後ろにいる3人に対し、残りの拳銃弾を乱射する。

何となくではあったが、手応えはあった。

「AK^{カラスニコフ}74か」

AK74、東側の小口径突撃銃の代表格であり、今でもロシア軍が参戦した紛争で、使用されているのを確認できる突撃銃だ。

特に、使用する5.45mm弾は、人体に命中した際、比較的、転倒弾が発生しやすいことで知られている。

転倒弾とは、人体に着弾した際に貫通せず、体内のなかで回転してしまった弾丸のことを言う。

それは人間の臓器をズタズタに切り裂くので、致命傷を与えやすくなる。

一応は国際条約で禁止されているが、意図的ではなくとも発生する場合があるので、それを狙って設計されていることも多い。

死体が落としたそれを拾い上げた佐竹中尉は、廊下に向け乱射する。

このときの自分は、自分でも驚くくらいに冷静だった。

廊下に向けて、1つの弾倉を撃ち尽くすと、慎重に死体に近づき、使用できるものを剥ぎ取っていく。

「陛下、一応は大丈夫です。

顔を上げて、立ち上がってください」

特徴的な紅い弾倉を交換しつつ、廊下方面を警戒する。

A K―74の使用する5・45mm弾は、A K―47が使用する7.62mm弾よりも反動が弱い。

最初から力を込めて、抑え込めば、少なくとも、右手と右肩の2点で支えただけでも撃てるのだ。

その状態で廊下に出ると、妙に静かだった。

「出てこないで」

直感的に佐竹中尉はそう怒鳴ると、横つ飛びに飛び、竹の間のなかに退避する。

さつきまで立っていたところに、銃撃が集中する。

佐竹中尉も応戦するが、火力の差は如何ともし難かった。

「ちっ」

舌打ちをしながら、弾倉を交換する。

セミオートでは、A K―74の火力を活かしきれない。

互いが互いを撃ち合って、膠着状態に入った。

そんなときに、ゴロンという何かが転がる音がした。

見ると、パイナップルと呼ばれる球形の手榴弾だった。

もう既にカラシニコフの間合いではない。

仕方なく、グロック17を抜いて、撃ち抜く。

その刹那、佐竹中尉の頭のなかで、何かが弾けた。

グロック17の弾速が350メートル毎秒で、弾頭部の重さは8g、それだけの威力を纏った弾丸が手榴弾を襲い、それを押し退けさせた。

その刹那に、手榴弾は起爆し、周囲に熱風と破片を撒き散らす。

「○☆×○●△◇#」

それをまともに浴びる形となったその2人は、何かしらの言葉を口にする。

早口で捲し立てるその言葉は、佐竹中尉の耳に聞き馴染みのある言葉だった。

それは国防大学の講義ではなく、鹵獲したイージス艦”ユルゴクニイ栗谷李珣”の艦長の朴大佐に教わったものだ。

たったの2日間という短い期間だったが、有意義な時間だったと思っても、すぐに現実に戻る。

戻らざるをえないのだ。

彼らは手榴弾をまともに浴びたとはいえ、爆心地から距離が離れているが故に、死にはしない。

「韓国人か？」

さっきの叫び声から確信した佐竹中尉が大声で叫ぶと、明らかな動揺が見られた。

なぜか、知られてはいけないことを知られたかのように、動揺が見られたのだ。

その隙を見逃すほど、佐竹中尉はお人好しでもない。

一瞬の動揺に、一気に勝負をつける。

銃を乱射して、相手の行動を釘付けにしつつ、手榴弾を投擲する。

奴らに手榴弾に対応させないために、牽制の射撃も忘れない。

手榴弾は、1拍おいて爆発する。

爆発の勢いに乗った佐竹中尉が、一気に蹂躪する。

そうなると抵抗もできずに、総崩れになる。

廊下の安全を確認した佐竹中尉が、陛下を呼ぶ。

竹の間から廊下に出てきた陛下は、佐竹中尉にこう言った。

「私にも銃を貸していただけますか？」

それでも陸軍の射撃場で、小銃射撃と拳銃射撃なら経験しています」

ヘツケラー&コツホ社製の傑作サブマシンガンであるMP-5A2を拾い上げる。

この銃は世界で最も入手が容易で、世界で最も優秀なサブマシンガンで、後継銃の普及もあり、テロリストの手に渡る確率の高いサブマシンガンである。

取得を誤魔化したい場合、小国の調達関係の職員を抱き込んで、調達させるだけさせて、理由をつけて廃棄処分にしたものを横流しさせてしまえばいい。

そうすれば、最終使用証明はその国止まりの銃器が生まれる。

そんなMP―5と30発入りの予備弾倉を数個、死体から奪う。

それらを一纏めにして、陛下に渡す。

「無理には撃たないでください。

あくまでも自衛手段の一つだということを忘れないでください」

「分かりました。

肝に銘じます」

建物のなかには、これ以上の敵はいないようだ。

逆に味方もいないが。

それを確認した佐竹中尉は陛下を連れて、廊下を慎重に進む。

AK―74の長い銃身突き出しながら、廊下を進む。

周辺を警戒する佐竹中尉の視線と同じように、AK―74の銃口は前後左右至る方向に向いている。

竹の間から脱出した佐竹中尉らは、皇居正殿の正面玄関脇の警衛所に辿り着いていた。

「これから正門に向かいます」

『ワルキューレ・ゼロワンよりイエーガー・ゼロワン。

司令部よりのオーダーを伝える。

貴隊は皇居周辺に展開し、友軍地上部隊の進撃を阻害する敵狙撃兵を排除せよ。

そのために必要な武器の使用を許可する』

「イエーガー・ゼロワン、ラジャー」

上空統制機であるワルキューレ・ゼロワンより命令を伝えられたイエーガー・ゼロワンは、今は東京に東から進入しつつあった。

命令が告げられてから、1拍おいてイエーガー・ゼロワンは命令を部下に告げた。

「イエーガー・ゼロワンより各機。

スナイパー狩りだ。

^{エレメント}2機編隊に隊形を組み直す。

準備にかかれ」

小隊単位に分離した第4対戦車ヘリコプター隊のAH—64DJアパッチ・ロングボウは東京上空で集合した。

「イエーガー・ゼロワンとハンター・ゼロワンは単機、残りは小隊ごとに編隊を組み、余りは余りで組め。

以上、イエーガー・ゼロワン」

『『ラジャー』』

第4対戦車ヘリコプター隊は指示があつてから5分も経たないうちに、隊形の変換を完了した。

『ハンター・ゼロワンよりイエーガー・ゼロワン。

隊形の変換を完了した』

「イエーガー・ゼロワン、ラジャー。

カウント・スリーで散開。^{ブレイク}

スリー、トゥー、ワン、ブレイク」

先任小隊長機であるイエーガー・ゼロワンの指示に従い、12機のAH—64DJがバラバラに散る。

「ガナー、ガン・システム、フルオン」

一斉に散開したAH―64DJは、M230と呼ばれる30mm
単装機関砲チェイン・ガンを装備している。

これはたったの1発命中しただけでも、人間の四肢を吹き飛ばせるほどの威力を誇る代物だ。

「ラジャー」

「目標、探索始め。」

あー、屋上だな。

タンクの下で厄介ではあるが、殺れない相手ではないな」

グラスコックピット化されたAH―64DJアパッチ・ロングボウのcockピットの正面にある画面に、熱画像が映る。

そこから導き出されるのは、敵狙撃兵の慢心だった。

「アパッチ・ロングボウのモノアイ・システムからすれば楽勝です」

ガナーの視線に連動して、自動で機関砲を指向するモノアイ・システムは、ガナーの視線の届く範囲と機関砲の砲口の直線上しか照準できない。

そこでそのモノアイ・システムは日本の独自仕様で改造され未来位置での照準と射撃が可能となった。

そこまでの改造を施した陸軍技術部と富士重工担当官によると、弄ったのは目標指示システムのプログラムだけらしい。

従来のシステム以外にも目標の方位、直線距離、高さを計測し、即座に高校数学で習うサインやコサイン、タンジェントのような三角関数の計算式に当てはめ計算するプログラムを組み込み、自動で計算させることでそれを割り出すのだ。

その結果に、自機の数、相手の数を割り当て、計算することによって未来位置に対する照準を可能としたらしい。

「二気に横合いを通過する。」

一撃で仕留めろ」

AH―64DJアパッチ・ロングボウのガナーは、それを行えるようになるといふ、それだけの訓練を受けている。

データをリンクさせたモノアイ・システムに、補助を受けたガナー

は照準を行う。

3次元画像捕捉による目標の選定は、既に終了し、既に未来位置における射撃の準備に入っていた。

「準備完了」

「行くぞ。」

発射は2発だ」

パイロットの指示に、ガナーが頷く。

アパッチ・ロングボウの出しうる最高速度で、射撃ポイントと思われるビルの横を通過する。

「撃て」

機体前部に搭載された30mmチエーション・ガン単装機関砲が火を吹く。

ずしりと重い発射音が2発続けて響き、あとには静寂が残る。

一息ついたガナーが、報告する。

「目標の沈黙を確認。」

敵性の反応はありません」

「敵の制圧を開始する。」

正門前、カウント・スリーで射撃だ」

もののついでという感じで、正門前の制圧に入る。

「目標、マーク追尾、撃て」

30mmチエーション・ガン単装機関砲の火力が、皇居の正門ごと敵兵をズタズタにしていく。

そんなときに、ゼロワンに通信が入る。

『イエーガー・ゼロワンへ。』

こちら、ゼロツー。

メイデー、メイデー。

我、敵の攻撃を受く。

繰り返す、我、敵の攻撃を受く。

墜落中、墜落中』

正門前の敵兵を掃討していたイエーガー・ゼロワンに緊急の無線が入った。

イエーガー・ゼロツーとゼロスリーには坂下門の掃討任務が与えら

れていたはずだ。

急いで坂下門の方を見ると、煙を吹き上げて墜ちていくイエーガー・ゼロツターの姿が見えた。

「ゼロワン、ラジャー。」

すぐに向かう。

ゼロスリー、ゼロツターを援護しとけ」

『ゼロスリー、ラジャー』

無線を切ったゼロワンのパイロットは、前席に座るガナーに声をかけた。

「ゼロツターを援護しに向かうぞ」

「ラジャー」

大きく機首を旋回させたAH-64Dは、取り付けていたスピーカーをオンにした。

「ふんふんふん、ふっふっふっふん、ふっふっふん、ふっふっふん」

スピーカーから流れる“ワルキューレの騎行”を口ずさみながら、操縦桿を振る。

右に左に大きく揺れる機体は、敵に気付かれやすい。

「さっさと俺らに喰らいつきやがれ」

パイロットは、アパッチ・ロングボウを砲として使うつもりなのだ。

「早く喰らいつきやがれ」

目立つように飛ぶイエーガー・ゼロワンは、格好の的であるはずだ。

それでも喰いつかれないために、パイロットは付近の反応すべてを攻撃するつもりであった。

坂下門上空で大きく弧を描くように、旋回したアパッチ・ロングボウは、ついに攻撃を受けた。

無誘導なそれを、アパッチ・ロングボウは難なく躲す。

機体と弾体が交錯するその一瞬に、使われた兵器に当たりを付ける。

それは恐らく旧ソ連製の携帯式対戦車ロケット弾発射筒だ。

米ソ両大国の軍隊を苦しめたムジャヒディン・ゲリラが対空火器と

して多用していることで有名な兵器だ。

(狙いは粗い。)

ならば、どの兵器を使おうと同じだな)

狙いが正確であれば、機関砲のような即応性のある火器を使う。

しかし、その携帯式対戦車ロケット弾発射筒の照準が粗い場合、ロケット弾を使う方が手っ取り早い。

「奴がゼロツターの仇だ。」

「ガナー、ロケットを使い」

通常のヘルファイアミサイルの搭載位置にスピーカーを搭載しているとはいえ、イエーガー・ゼロワンはその内側にハイドラ70ロケット弾ポッドを搭載している。

「目標、携帯式対戦車ロケット弾発射筒を持った敵兵、及び、その周囲のAK-74とMP-5を持った敵兵、距離は700〜1000、撃て」

パイロットの指示を受けたガナーが操作すると、ロケット弾が連続して発射され、地上で爆発する。

最初の爆発は、携帯式対戦車ロケット弾発射筒を持った敵兵を吹き飛ばした。

続いての爆発は、墜落したイエーガー・ゼロツターを包囲していた将兵たちを巻き込んでいく。

『ゼロツターよりゼロワン。』

二人とも骨折等の怪我はありますが、命に別状はありません』

「ゼロワン、ラジャー。」

友軍地上部隊に救助を要請する。

暫しの辛抱だ。

耐えてくれ、頼む」

『ゼロツター、ラジャー』

そこまで聞いて、無線が切れた。

「イエーガー・ゼロワンよりワルキューレ・ゼロワン。」

イエーガー・ゼロツターが撃墜された。

友軍地上部隊による早期の救出を要請する」

『ワルキューレ・ゼロワン、ラジャー。』

先程からの交信は、こちらでも傍受^{モニター}していた。

安心しろ、既に要請してある。

で、改めて命令を与える。

友軍地上部隊、まあ救出部隊と呼んで差し支えないが、それが到着するまで、ゼロツー乗員を援護せよ。

以上』

「イエーガー・ゼロワン、ラジャー」

そう言うのと大きく左右に機体を揺らす。

「ガナー、高度を一気に落として、30^Mmm²単装³機関砲⁰を一気にバラ撒く。

行くぞ」

そう言ったパイロットは、そのまま一気に高度を落とす。

それに追隨するのが、小隊三番機の位置を任されているゼロスリーだ。

二番機をとばした状態でのコンビネーション訓練も行っていることから、その動きに澱みがない。

「全火力を投射する。

敵兵の頭を上げさせるな」

低空に占位した2機のアパッチ・ロングボウから、死をもたらす嵐が吹き荒れた。

それは無慈悲に、人も物も吹き飛ばしていく。

「撃ち方やめ。

味方の到着だ」

イエーガー・ゼロツーの無惨にも破壊された機体の転がる地上には、友軍地上部隊が取り巻いていた。

「くそつたれ。」

反撃する。

第一分隊、援護」

そう叫んだ堀北少尉は、89式小銃を構えて射撃する。

「友軍の狙撃兵は？」

旅団司令部直轄部隊には狙撃兵分隊が編制されていて、狙撃兵に関する講習を受け、さらには試験を突破した将兵にのみ、狙撃兵徽章は与えられる。

徽章が日本語で呼ばれること多い日本皇国陸軍において、なぜかこの徽章だけは英語で狙撃兵徽章スナイパーズ・マークと、こう呼ばれている。

それを所持した将兵が、狙撃兵スナイパーと観測手スポッターと呼ばれる役割を割り当てられ、二人組ツーマン・セルを組んで、対狙撃兵戦闘に従事する。

それが6組、12名で狙撃兵分隊の編制が完結する。

大まかな照準で射撃するしかない地上の歩兵たちは、幾度となく反撃に転じては追い散らされた。

「他の部隊の支援です。」

他の門に回った部隊の方にも、狙撃兵がいるみたいで、そっちの支援にまわっています」

小隊のなかで唯一他部隊との通信を行えるプログラムを内蔵したUSBを所持する小隊通信兵の話聞きながら、胸のマガジンポーチを探る。

続いて、腰に着けたマガジンポーチを探るが、そこにもなにも入っていない。

「ちっ、弾切れだ。」

補給処の野戦補給隊はまだなのか？」

太もものホルスターから、SIG-ZAUER P-220を取り出して発砲できるように準備しておく。

「要請を出しました。」

すぐに来るそうです」

ブローニングM2重機関銃が銃弾をバラ撒いている。

「後方に補給隊です。」

友軍の74式特大型トラック、3台、接近中」

「よっしゃ。」

もう一仕事いくぞ。

撃てえ」

事案の始まる前に、首都直下型地震の備えた緊急物資展開演習の名目で、新宿御苑に展開した関東補給処隷下の野戦補給隊は、数トンもの各種補給品を持ち込んでいた。

その物資の一部を運んできた74式特大型トラックを見て、その到着まで持ちこたえるために、堀北少尉はピストルを構えた。

「第四分隊、補給隊を支援せよ。」

最前線まで来てくれたんだ。

守りきれ」

小隊長の檄が飛ぶ。

「小隊長以下、第一分隊、第二分隊、第三分隊、突撃」

ピストルを構えた堀北少尉が、狙撃兵への射撃を開始する。

しかし、敵狙撃兵の攻撃の続く、この現状のままでは、満身に補給もできないと観念した堀北少尉が決断を下す。

「一時後退。」

84mm無反動砲で煙幕を展開せよ」

堀北少尉の命令を受けて、84mm無反動砲の砲手が、発煙弾を投射して煙幕を展開する。

「第一分隊、第二分隊、第三分隊は弾薬を受領せよ」

小隊長は指示を出しつつ、89式小銃のマガジンを受け取り、ポーチや88式鉄帽のカモフラージュの樹木を挟むための紐に挟んでいく。

戦闘服Ⅱ型と呼ばれる防弾チョッキのポケットにもありつただけのマガジンを詰め込んでいく。

空になった89式小銃のマガジンを外して、新しいマガジンに交換する。

「第四分隊は補給品を受領せよ。

残りは前線に戻るぞ」

結果として、尻すぼみとなった反撃のあとは、敵狙撃兵の攻撃に遮蔽物の後ろに隠れるしかなかった。

「友軍の対戦車ヘリコプターが対地攻撃を実施します」

「分かった。

第二小隊各員に告げる。

友軍航空部隊による援護攻撃が実施される。

頭を上げるな」

そんな第二小隊の上空を、AH-64D Jが単機で一航過していった。

その最中には、30mm単装機関砲が火を噴き、敵狙撃兵を沈黙させる。

「敵狙撃兵が排除された模様」

周りを双眼鏡で見回していた小隊最先任曹長が報告する。

「目標、正門前の敵兵。

射撃用意、撃て」

遮蔽物の後ろにいた堀北少尉は89式小銃を撃ちまくる。

「正門前の敵兵も掃討されたようです」

周りを双眼鏡で見回していた小隊最先任曹長が報告する。

「いけ、突入せよ。

これ以上、上空のへりに情けない姿を見せるな。

皇国陸軍歩兵の本領を見せろ」

高機動車の陰で、88式鉄帽を手で押さえていた堀北少尉が指示を出す。

それを聞いた兵士たちが、高機動車の陰から飛び出して、正門前から突入する。

「クリアー」

「よし、第一分隊、皇居内に突入、制圧せよ。

殿を四分隊に任せる。

第二小隊全隊脱出まで、門を確保し続ける。

二、三分隊も俺に続け」

89式小銃を片手に、堀北少尉が正門に走る。

その前方をM2ブローニング12・7mm重機関銃を載せた高機動車が進んでいく。

「近接格闘の生起に注意。」

何があっても武器は落とすなよ。

そうなるかと撃たれて終わりだからな」

上空を飛ぶAH-64Dの攻撃で、敵の出鼻が挫かれたことから、敵狙撃兵の攻撃により損害が続出した第一歩兵連隊第一中隊の第一小隊から戦闘を引き継いだ、同じく第一歩兵連隊第一中隊の第二小隊は攻勢を強めた。

その矢面に立った将兵たちは、陛下の保護という目的のために結束していた。

その頃、正殿から正門までの短くて遠い距離を、敵の攻撃を退けながら進んでいた佐竹中尉は、正門近くの木の上に潜んでいた。

その下には、勿論、陛下がいる。

先程まで正門前では、激しい銃声が響いており、そのまま出ることは憚られたのだ。

正門から皇居内に侵入してくる人影を確認した佐竹中尉は、侵入してくる人影の識別を急いでいた。

見えた緑色の軍装は、日本皇国陸軍のものだった。

「88式の鉄帽テツパチを被っていますから、友軍の地上部隊だと思われま

木の陰からそれを見つめていた佐竹中尉は、周囲を見つめる。

そこには敵兵の集団がいた。

「私がここで食い止めます。」

陛下はあそこまで走ってください」

「ダメです」

止めようとする陛下に、行動を起こしていた佐竹中尉は、顔を振り返らせて言った。

「国家の命令であつても、戦争で人を殺すのは、我々軍人の仕事です。それは命令であれ、自らの判断であれ、その行為にやむを得ない事

情があろうと、それは私たちに課せられた罪です。

文民であるあなたが、それを行う必要はありません。

あなたは、私が守るべき市民であり、市民であるあなたを守るためならば、私はこの命ですら捨てられる。

そう考えています。

短い間でしたが、陛下を護衛することができたことを、光栄にそして嬉しく思います。

また、会える日が来ることを願っています」

そう言うのと佐竹中尉は銃を構えて走った。

それを見送った陛下は、振り返らずに反対側に走った。

佐竹中尉の進言を無視すれば、彼の意味が無駄になる。

背後で爆発音や銃声が響く。

それでも振り返らない。

それは佐竹中尉の望むことではないからだ。

数刻の逡巡のあと、息を切らしながらも、さつき見えた陸軍歩兵のところに向き着いた。

「へっ、陛下ー！」

道の向こうから走ってきた人影に、歩兵たちは銃を構えたが、その正体に気付いて銃を下ろす。

「第一歩兵連隊第一中隊所属、木下兵曹であります。

すぐに後方に向かわせますので」

「それよりも、あちらに向かってください」

そう言つて、陛下は佐竹中尉のいるであろう方角を指差す。

後続の部隊の到着がまだで、兵力には限りがある第一分隊には、継続的な攻撃の継続は無理であった。

周辺を警戒しつつ、後退していく。

数百メートル後退した後方にて、第二分隊、第三分隊を率いた堀北少尉が来た。

「この数百メートル先のところに待ってるのは、友軍というか俺の知り合いだ。

そこの手前、30メートルを第一線、二分隊、三分隊は直ちにここ

まで進出する。

その30メートル先が第二線、ここに友軍がいると思われる。さらに30メートル先、第三線、そのまた30メートル先、第四線、同じように第五線、第六線、第七線を展開する。

第二小隊の各員は、第七線を躍進限界とし、追撃するな。

敵兵を第七線から駆逐することを、考えろ」

陛下の話を聞き、堀北少尉が地図で現場を確認すると、第二小隊が待機している場所から、数百メートルのところに、佐竹中尉がテロリストと交戦していると思われる場所があった。

「第一分隊長、木下兵曹。

陛下を後続の第一小隊に引き渡すまで、護衛せよ。

残りは俺に続け」

そう言うと、第二分隊、第三分隊を率いた堀北少尉がそちらの方に急行する。

「陛下は行ってくれたか。」

よし、やるか」

走って去り行く陛下の背中を見つめつつ、佐竹中尉はそう言うと、敵の追撃に備えて陛下と移動している最中に、仕掛けておいたC-4爆薬数kgに繋いだロープを取り出した。

その先のには、触発の雷管と手榴弾が繋がっていた。

また、佐竹中尉の小さい頃に伯父である田中大将の知り合いの、陸軍工兵科将校である人に教わったのは爆弾の作り方だった。

終いには、知り合いの化学者を連れてきての爆薬作りである。

その他、人脈を駆使した英才教育を受けた佐竹中尉は、どの分野でも本職以上の能力を発揮していた。

そして、この爆弾の起爆方法は応急措置としての起爆方法であり、時限式の信管やリモコン式の信管が見当たらなかったために、仕方なく行うもので、起爆する可能性はファイファイ・ファイファイ、爆発するかもしれないし、しないかもしれないというレベルの話である。

佐竹中尉が見たこの敵兵たちは、危険なことに、迫撃砲を除く大抵の歩兵装備をこのテロリスト集団は所持していた。

「こんなもん持つてるなんて、こりゃあテロリストじゃねえぜ」

言いながら、手榴弾の安全把からロープを引っ張り、爆薬を起爆させる。

起爆した爆薬の爆発に、隊列の大半が巻き込まれる。

爆発のなかで、佐竹中尉はAK-74を構えて、未だに立っている人物を射撃する。

しかし、続々と後続の部隊が合流してきている。

集結した人影の濃さから、爆煙の拡散具合を推測する。

「煙が晴れてきたか」

先程より幾分煙の薄くなったからか佐竹中尉のいる場所に、銃撃が集まり始める。

そんな場所からは、逃げるが勝ちであると思っていたのだが、状況

がかなり悪い。

後退以外の選択肢はなさそうだが、佐竹中尉に言わせれば、その選択肢は論外であった。

「ッ」

未だ経験したことのない身体への着弾の痛み、佐竹中尉は小さく呻く。

その1発を皮切りに、銃撃が集中し始める。

照準が甘いのか、外れるものも多いが、それでも佐竹中尉の肩に、腹に、腕に、足に、銃弾が命中する。

外れたものもあるとはいえ、数十発の銃弾を撃ち込んで、敵は沈黙したと感じたのか、正門の方へ向かおうとする。

「俺は……」

体を引き摺りながら、一步前に躍り出る。

右手のAK-74を持ち上げ、狙いを定める。

「俺はここにいて」

そう言ったとき、佐竹中尉は無言で引き金を引く。

傷ついた佐竹中尉の、曖昧な照準で放たれた銃弾は、地面を穿ち、敵兵の体を穿ち、木々を穿ち、至るところに弾痕を残していく。

マガジンの30発を撃ち尽くすまでに、敵の第一梯団の生き残り数名を射殺し、マガジンを交換する間に、第二梯団数十名とピストルで交戦していく。

それも撃ち尽くすと、第一梯団を構成していた敵兵の落としたAK-74やMP-5を拾い上げて、攻撃を継続する。

敵に立ち直る暇を与えない。

そうなってしまうては、多勢に無勢、佐竹中尉に勝利はあり得ない。その勝利のための銃撃だ。

そして、その勝利の最低条件が、第一歩兵連隊という援軍の参戦である。

その軍靴の音が、佐竹中尉の耳に届く。

「やっと来たか」

全身を銃弾でズタズタにされた佐竹中尉は、そう眩くなり力尽きた

ように倒れ込んだ。

「第二、第三分隊、2列で射撃体勢を整えよ。

各員、小銃を構え。

手前にいるのは、海軍さんだ。

つまり、俺たちの味方だから、絶対に当てるなよ。

1列目、撃て」

進出してきた24人の陸軍歩兵たちは、89式小銃や無反動砲、分隊支援火器であるMINIMI機関銃、ここに来た小隊各員の持つほぼすべてに近い火力を敵兵に向けた。

引き金を引き絞り、ありつたけの銃弾を敵兵にお見舞いしていく。

「2列目、射撃用意。

撃て」

小隊長の短い号令のもと、2列目の兵士が射撃準備を整える。

「佐竹中尉を回収する。

無反動砲は煙幕を展開せよ。

1列目の何人かは、ついてこい。

第二分隊長に、指揮権を委譲する。

機を見て、敵を撃退せよ」

そう叫んだ堀北少尉が、匍匐前進で進む。

後ろからは、無反動砲手が煙幕弾を発射して、煙幕を展開する。

「撃ち方やめ。

小銃、着剣。

白兵戦用意、突撃」

煙幕で攪乱されたところを、第二分隊長の命令で一気に歩兵たちが斬り込んでいく。

大声で”歩兵の本領”を歌いながら、第二小隊隷下の歩兵たちは、突撃していく。

恐怖心を投げ捨てるように、大声をあげている。

銃剣を着けた89式小銃を片手に、走り出す。

歩兵たちは近くの敵兵の身体に、銃剣を突き刺し、銃剣の届かない敵兵に小銃を乱射していく。

さらには、陸海空軍共通の日本皇国軍格闘術と呼ばれる近接格闘術を使い、敵兵を締め上げる兵士も見受けられる。

佐竹中尉の身柄を確保した堀北少尉を追い抜いた歩兵たちは、一気に第三線に雪崩れ込む。

89式小銃を乱射し、集団の最後の一兵すらも撃ち殺す勢いに、耐えきれなくなかった敵兵が後退を始める。

後退する敵兵を追撃する歩兵たちが第三線を越え、第四線に踏み込んだところに、増援の戦力が到着する。

同じ第一歩兵連隊第一中隊所属の第三レンジャー小隊である。

小隊長以下50名全員がレンジャー徽章持ちの精鋭部隊である。

レンジャーであることに誇りを持つ彼らは、第二小隊が戦闘中と野性的な第六感で感じとり、一気に突撃してきたのだ。

「三レン小隊、突撃」

第二小隊のあとに続くように、小隊隷下の4個分隊は突撃を開始する。

連戦で疲労の溜まっている第二小隊とは違い、第三レンジャー小隊の兵士は緒戦での疲労が回復していた。

それに押されるように、第二小隊は以前以上の勢いで、第五線付近の敵兵を蹂躪する。

第五線を突破した歩兵の群れは、一気に第六線の敵兵の群れを撃破し、敗走に追い込んだ。

事前に設定していた第七線には、連絡を受けたと思われる敵の第三梯団が集結しており、これとまともに激突した。

後方からのMINIMI機関銃の火線が、敵兵の群れを群れごと薙ぎ払う。

無反動砲手は、榴弾を後方の敵兵に対して、撃ち込んでいく
歩兵たちは文字通りの肉弾となって、敵兵を粉砕した。

見事なまでの歌詞との連携に、最初から最後の部分までをじっくり聴いていた佐竹中尉は、つい堀北少尉に確認した。

「歩兵の本領、茲にありって感じだけでも、これって……訓練してんの？」

「他は知らんが、俺としてはこんなアホな訓練するわけなからう。少なくとも、小隊以上の単位ではやらんよ」

重傷を負い、虫の息であっても、最初に聞くことが、それである。

この二人の背景では、敵兵の群れを駆逐した兵士たちが、周辺を警戒しつつ、勝鬨をあげている。

「そうか、陛下の身柄は？」

「既に安全な場所に向かっている。

道中はどうかは知らんが」

横たわる佐竹中尉の問いに、堀北少尉は前を見据えながら答えた。

「陛下の身柄は頼んだぞ」

「ああ、分かっている。

俺たち、陸軍はそのために、ここに来たんだ」

「防大の落ちこぼれがでかい口を叩く。

お前の福岡での武勇伝は、叔父を通して聞いてるよ。

前川原駐屯地にある分校での、今の陸軍参謀総長への蛮行はな」

というのも、視察に訪れた前田大将、当時はまだ国防省陸軍部会計監査隊隊長を務めていたはずだが、予算関連の視察に出向いた際に、不審者と間違われ、追いかけて回されるはめになった。

一応、公式には何もなかったことにされてはいるが、若さと体力の絶頂期である青年期の過ぎた前田大将の足腰は、この負いかけてっことで完全に破壊されたという。

その間違えた当事者が、当時の少尉候補生兵曹長の堀北少尉だったという。

「それは言わんでくれよ」

2個の歩兵小隊、定数から言う和小隊長以下100名のそこそこ大きい部隊である。

だが、第二小隊は2個分隊を分離しているから、80人にも満たないはずだ。

そんな部隊が2倍近い敵兵の群れを蹂躪しているのは、さしずめ魔王軍が降臨したかのようだ。

「矢島少尉、陛下の護衛は？」

そんな惨状も一段落し、戻ってきた第三レンジャー小隊の小隊長である矢島少尉に、魔王軍もとい日本皇国軍のボスである魔王もとい陛下の所在を堀北少尉が尋ねる。

「お前らのところの第一分隊と第一小隊が守ってる。ちよつとやそつとじゃ、奴らが目的を達成することは不可能だろうな」

矢島少尉がそう言うと、堀北少尉は安心したようだ。

「佐竹中尉を後方へ、搬送する。」

小隊各員は、撤収準備には入れ」

既に、中隊本部の衛生兵が到着して、重傷を負った佐竹中尉の容態を確認している。

「担架はどうした?」

その様子を見ていた堀北少尉が尋ねる。

「第一小隊の負傷者搬送に使われています。」

他の方面でも、応援要請が出てるんです。

恐らくは、というか絶対数が足りてないんです」

「そうか、仕方ないか」

佐竹中尉の身柄は、後で一応連隊付き衛生小隊に引き渡され、旅団野戦看護隊のトリアージを受けずに、最寄りの中央病院に搬送させられる。

『こちらは第一作戦軍司令部第三幕僚部。』

皇居内に突入中の各隊に告げる。

直ちに、皇居外周部100メートル以内から撤収せよ。

繰り返す、皇居内に突入中の各隊に告げる。

直ちに、皇居外周部100メートル以内から撤収せよ』

指揮隷下にある部隊の、司令部が把握しうる全チャンネルに、流されたその無線は、事態が最終局面を迎えつつあることを、理解させるには十分だった。

「俺が負ぶう。」

第二小隊、周辺を警戒しつつ、撤退せよ」

「第三レンジャー小隊が、殿を務める。」

撤退だ」

無線を聞いた二人の小隊長は指示を出した。

そのまま堀北少尉が、佐竹中尉に肩を貸しながら、歩いていく。

首都近郊に駐屯する日本皇国陸軍歩兵部隊の皇居突入の13時間前、千葉県は房総半島の南端に近いところに所在する日本皇国海軍館山航空基地。

この基地には、連合艦隊や沿岸警備部隊のヘリコプター部隊が、所在しており、第31航空群第2飛行隊、沿岸警備部隊横須賀鎮守府艦隊のヘリ搭載駆逐艦に搭載するヘリコプターの運用や周辺の近隣海域における警戒飛行を実施するための部隊である。

日本皇国海軍沿岸警備部隊航空部隊隷下のヘリコプターと固定翼哨戒機の混成により構成される航空群は、館山航空基地に司令部を置く第31航空群、大村航空基地に司令部を置く第32航空群、舞鶴航空基地に司令部を置く第33航空群、徳島航空基地に司令部を置く第34航空群、八戸航空基地に司令部を置く第35航空群の5個があり、連合艦隊隷下の航空艦隊も同じような編成であり、合計では保有機だけでも数百とも言われ、海軍全体としての稼働機だけでも300機以上と言われている。

「点呼をとる」

その第31航空群第2飛行隊司令、樋渡中佐に召集されたのが、即応飛行要員として、今日のスクランブル待機に当たっているシーバルカン・ゼロワンの飛行要員だった。

「第2飛行隊飛行長、兼任シーバルカン・ゼロワン、機長、新高少佐」

「シーバルカン・ゼロワン、コ・パイ、赤石中尉」

「シーバルカン・ゼロワン、戦術航空士、二上中尉」

「シーバルカン・ゼロワン、ソナー員、足立兵曹」

以上、欠なし」

飛行服とも呼ばれる航空要員用の作業服を着た4人が整列する。

「集まってもらったのは、他でもない。」

市ヶ谷の統合参謀本部よりの封緘命令書が届いた。

X時アワーは、05:00+X。

第31航空群第2飛行隊最先任の飛行班宛。

発、統合参謀本部。

シーバルカン隊最先任機は、指定座標まで飛行した後、技術研究本部^本の開発試験隊より受領の特号機材を投下し、友軍地上部隊の完全制圧を支援せよ、とのことだ」

「特号機材ですか？」

「そんな装備品ありませんよ」

沿岸警備部隊が採用した哨戒ヘリコプターであるSH-60Mシーカイトは、連合艦隊で採用されていたSH-60Jの再生品に近い。

初期のスペック自体は、連合艦隊現用のSH-60Kに劣るものの、沿岸警備部隊での使用効率向上のためのアップデートを繰り返したために、こと汎用性に関しては、連合艦隊現用のSH-60Kを上回るのだ。

そんなSH-60Mであっても、搭載する装備品の種類は少ない。乗員が記憶できるほどには、日本皇国軍装備規格に適合してはいても、制式採用や部隊使用承認の形で使用されているものは少ない。

「安心しろ。」

今朝方、技術研究本部^技から、特号機材が搬入された。

実戦環境評価の名目で使用されるこれは、詳しくはこのマニュアルを読んでくれだそうだ」

そう言って、各自に手渡されたのは、一般的な辞書と見間違えるほどに分厚い本だった。

「えーと、この装備品は暴徒鎮圧用装備であり、斯々然々。

概要は分かった」

目次を飛ばして、次のページから読み進めていた新高少佐が言った。

いくら分厚いと言っても、各自に関係のあるページは少ないらなかった。

「うわー、半分以上が整備マニュアルだよ」

ページをパラパラと捲っていた足立兵曹が呟く。

足立兵曹は整備を担当するであろう第31航空群整備補給大隊第

2整備中隊隷下の2個の武器小隊に同情を隠し得なかった。

武器小隊は、第2飛行隊に所属する全航空機に搭載する装備品の点検整備を担当する部隊である。

そんな人数の少ない武器小隊は、短魚雷や空対艦ミサイルを横須賀鎮守府海軍工廠の水雷部の水雷調整所に委ねるといふ押しつけを行ったとしても、搭載される定数分のソノブイやドアガンとして採用されている74式車載7・62mm機関銃、その弾薬、自衛用火器としての小銃や拳銃、サブマシンガンの整備などやることなどたくさんあるのだ。

「武器小隊がよく最優先でやってくれたな」

足立兵曹と同じ感想に至ったらしい二上中尉も言う。

「これはまだ、採用品じゃないからな。」

武器小隊じゃなくて、技本の要員が整備を担当している。

今も格納庫でやってんじゃないかな?」

「まさか、担当しているのは笠原さんじゃないでしょうね?」

新高少佐の質問に、ニヤリとした樋渡中佐は答えた。

「そのまさかだよ」

技術^技研究本部^本、いや日本皇国陸海空軍の技術開発部門で一番の問題児として名高い技術者、笠原力中尉待遇は、現場の兵士から好評を得るものを作る時もあれば、箸とも棒ともつかない駄作をも平気で作り出す。

「今度、爆発するような代物を、送りつけてみる。」

基地隊の陸警隊に連絡して、この基地を出禁にしてやる」

一回、笠原中尉待遇の持ち込んだ試験装備を使用したSH-60Jが爆発した。

正確には機体の一部が爆発し、墜落した。

奇跡的に乗員は全員助かったが、機体は大破、全損し、日本皇国軍航空部隊に死神笠原の名を轟かせた。

「「異議なし」」

そんな笠原中尉待遇への新高少佐の物言いを諫めるどころか、その場の全員が首肯した。

それだけ、死神笠原の名は印象強いものなのだろう。

「館山・コントロール。」

こちらはシーバルカン・ゼロワン。

我々に付与された任務^{ミッション}について、最終確認する。

よろしいか？」

基地^{フリーファイティング・ルーム}の作戦室から、SH-60Mの駐機してある格納庫に入り、

SH-60Mのコックピットに座った新高少佐が、管制塔に通信を開いた。

『コントロール、了解』

「えー、統合参謀本部よりの命令書によると、シーバルカン隊最先任機は、指定座標まで飛行した後、技術^技研究本部^本の開発試験隊より受領の特号機材を投下し、友軍地上部隊の完全制圧を支援するで、よろしかったですか？」

『はい、間違いはありません。』

大丈夫です』

管制塔からの返答を聞いて、新高少佐は、ホッと息を吐いた。

「了解、ありがとう」

通信を切ると、新高少佐は後ろへ振り返った。

「ドアガンは？」

「準備OKです」

ソナー員の足立兵曹の返答を聞いて、大きく頷いた新高少佐は告げる。

「敵兵を見つけ次第、撃つてよし。」

逡巡すれば、死ぬのは俺たちだからな」

「了解」

『館山・コントロールよりシーバルカン・ゼロワン。』

滑走路へ進入を許可する』

管制塔からのその通信を聞いた新高少佐は、被っていたヘルメットのバイザーを下ろす。

「シーバルカン・ゼロワン、ラジャー」

地上誘導員の誘導のもと、整備員の運転する牽引車により滑走路へ

進入する。

滑走路の中央、離陸位置のひとつについた。

牽引車が切り離され、地上誘導員の指示のもと、発動機を始動する。

「エンジン、起動」

整備されたばかりでピカピカなSH—60MのT—700ターボシャフト・エンジンのタービンが吸気を始め、甲高い音をたて始めた。

小気味のいいその音につられるように、操縦桿を握る指がリズムを刻み始める。

ゆつくりとローターが、回り始める。

『館山・コントロールよりシーバルカン・ゼロワン。』

離陸を許可する。

離陸後は、方位348、高度50をとれ』

「シーバルカン・ゼロワン、ラジャー。」

離陸後は、方位348、高度50をとる」

その音が最高潮に達したときに、管制塔からの離陸許可が下りた。

「館山・コントロール、ラジャー。」

グッドラック」

管制塔からの最後の指示を聞いた直後に、一気に最高出力にまで差し掛かる。

「テイクオフ」

機体が地面を蹴ると同時に、前のめりになって一気に加速する。

速度が上がって機体を安定させると、高度を徐々に上げていく。

「羽田の管制空域を抜ける形になりますけど、大丈夫でしょうか？」

「今は東京全体が非常事態だ。」

羽田も成田も、いや東京近郊の空港はもれなく飛行禁止の措置がとられているはずだ」

陛下を救出するために出動した第1歩兵旅団以下の4個旅団、24000人を中心とした陸軍、東京湾における治安維持のために出動した横須賀鎮守府艦隊を中心とした海軍、百里に駐屯する1個航空群を中心とした空軍、各自が自らの仕事を進めているのだ。

「いくぞ」

佐竹中尉に肩を貸しながら、堀北少尉は走り続けている。あと少少で、正門が見える。

背後では、殿を務める部下たちが応戦している。

「すぐに味方も来る。」

四分隊は援護しろ」

堀北少尉が叫び、その後ろには第二分隊、第三分隊に、続くように第三レンジャー小隊が来る。

その後ろには、敵兵の追撃付きだ。

「四分隊、擲弾装填。」

構え、撃て」

分隊長の指揮のもと、第四分隊員が擲弾を装填する。

ポンポンという間の抜けた音と、ヒュルヒュルという迫撃砲弾を連想させる飛翔音を残して、擲弾は着弾した。

同時に爆発した擲弾の爆発音の響くなかを、続く第2波、第3波、第4波の擲弾が着弾する。

個人が各自で、戦闘服の布地から製作して調達してきた弾薬囊に詰めてきたすべての擲弾を、このときに撃ち尽くす勢いだ。

「四分隊、退避」

敵兵の追撃を撃滅した第四分隊は、逃げていく敵兵の姿を見送ることなく、皇居外へと退去していく。

「小隊長、何で退去なんですか？」

その先の皇居正門外側で、高機動車に佐竹中尉を乗せていた堀北少尉を見つけた、第四分隊長が詰め寄る。

「俺にも分からん。」

出動前に、技術研究本部^本にいる先輩から伝え聞いたところによると、作戦の最終段階で、技術研究本部^本の開発試験隊で試験中だった試製装備を投入するつもりらしい。

なんでも、殺傷性の低い暴徒鎮圧用の武器らしいが」

唐辛子エキスの含んだ水をバラ撒くつもりとは、この堀北少尉たちも知らなかった。

「そうですね」

そう言う第四分隊長は、堀北少尉の説明に納得はしていないようだ。

そこに堀北少尉が、指示を出した。

「第三レンジャー小隊に前線任務を委譲した。

第二小隊は、直ちに佐竹中尉の身柄を、中央病院に移送する。

分隊衛生員はこちらに来い。

直ちに、かかれ」

堀北少尉の出した指示を聞いた、現状で指揮下にある3個分隊の将兵は、車両に搭乘する。

「数分後には、何かが降ってくると思う。

窓を閉めろ」

高機動車の運転席に座った堀北少尉が、助手席の通信兵に窓のガラスを閉めるように告げた。

後ろに寝かした佐竹中尉の様子を見てから、ギアをバックに変え、アクセルを踏み込む。

勢いよく、高機動車は車道に飛び出していく。

それに反応した第二分隊が先導につき、反応が遅れた第三分隊、第四分隊が後続する。

予算が潤沢になったからか、小隊本部車両には高機動車が配備されるようになった。

1／2トントラックと高機動車の組み合わせで配備されている分隊とは違い、たった二人だけの小隊本部には、高機動車が割り当てられる。

「ピーー、ピーー」

戦闘装備としてではなく、駐屯地警備用装備として配布されたホイッスルを鳴らし続ける。

それは、スピーカー代わりだ。

歩いていたり、走っていたりする人影は皆、陸軍の歩兵だが、先程

の命令を受けて、背後を気にしながら慌ただしく逃げている。

その光景を見ながら、新宿の市ヶ谷駐屯地内にある日本皇国軍中央病院に搬送するために、第二小隊の1/2トントラックと高機動車は交通法規を無視して走り続けた。

「千鳥ヶ淵戦没者墓苑ね」

右側に見えた樹林を、頭のなかの地図に当てはめて考える。

第二小隊の車両群は、内堀通りを左折し、靖国通りに入った。

この辺りには、戦闘状態でピリピリしている将兵ではなく、通常の戦闘服の腕の部分の上に白と黒の腕章を着けた将兵が立っていた。

戦闘状態ではない

日本皇国軍の設定した交戦区域である環状7号以内の要となる随所随所に配置された第1歩兵旅団司令部第6幕僚部（民事作戦担当）の指揮隷下に属する特別憲兵部隊である。

この部隊は、一般市民と戦場とを隔離するための部隊であり、この部隊の隊員の交通誘導のもと、高機動車は高速で進行する。

この憲兵部隊にのみ、非常事態に伴う軍事行動に関しての犯罪行為、詳しく言うと、許可を得ずに日本皇国軍の設定した交戦区域内に立ち入ることや移動する日本皇国軍部隊への妨害等を行った一般市民に対する限定的な司法警察権の行使を容認されている。

この措置に関して、戦場における民間人の被害を、そしてその救援を行うことになる現場部隊の負担を局限化することを目的としている。

「今度は靖国神社か。」

まだ死ぬんじやねえぞ。

にしても、やけに不吉な場所ばかり通るじゃねえか」

戦争の英霊を祀る靖国神社は、A級戦犯と呼ばれる人物を合祀したことで、国際問題となった。

仕方なく、政教分離を原則としているものの、日本政府が神社に対して介入して、A級戦犯とされている人物以外の英霊を分祀し、新たな靖国神社を建立せざるを得なくなった。

それで、表向きの炎上するような問題は解決したはずだ。

一応、両方の靖國神社の管轄は、一連のゴタゴタの混乱のうちに、国防省に移管されている。

神社の名を名乗るものの、国防省所管の公式の慰霊施設なのが、現在の靖國神社の正体だ。

個人葬が中心の欧米とは違い、家族もしくは一族で葬られることの多い日本人にとっては、靖國神社こそが日本におけるアメリカのアーリントン国立墓地に相当する場所だと言える。

「こうも連続して、不吉な場所の前を通るんだよ」

高機動車のハンドルを握る堀北少尉がぼやく。

先導する1／2トントラックを見てから、ルームミラーでうしろで横になっている佐竹中尉を見る。

「死ぬんじゃないぞで。」

あんときの借り、まだ返してないんだからな」

市ヶ谷駐屯地内の中央病院に、佐竹中尉が担ぎ込まれたとき、病院棟正面エントランスには、緊急外来の医官や看護官が待機していた。

「第二小隊であります。」

佐竹中尉をよろしくお願いします」

その中央病院のエントランスに人の姿はあまり見られない。

「はい、了解しました」

そう会釈した医官は、看護官と共にストレッチャーに佐竹中尉を乗せると、地下にある手術室に向かう。

ストレッチャーが手術室のなかに入ると、青い手術服を着た別の医官が待機していた。

「伊熊少佐、所見を」

「琢磨中佐、体表面に銃創が多数、うち胴体には5〜6発、四肢には10発以上、また貫通が確認されたものよりも、盲貫の銃創の方が多そうです。」

出血も多く、予断を許せないと思われます。

ただ状況を鑑みても、長時間のオペになりそうですが、疲労なども見られ耐えられそうにありません」

「分かった」

手袋をはめた両手を、眺めてから琢磨中佐は手術室に入った。

完全に閉鎖され、ランプの着いた廊下の前で立ち尽くす堀北少尉は傍らの伊熊少佐に尋ねる。

「大丈夫でしょうか？」

「大丈夫でしょう。」

あなたの学友はそんなに柔なのですか？」

返答した伊熊少佐に、そう問い直されて、堀北少尉もそれが愚問だったと気付いた。

「確かに、愚問でした。」

奴は私以上に、ホット・ミッション 実戦という環境のなかに、身を置いてきたでしょうから」

考えてみたら、堀北少尉と佐竹中尉が国防大学校3年のとき、上層部からの命令で半ば強制的に上海に飛んで、上海騒乱事件に最前線で戦ってその作戦が終了して、帰国する前に中華民国空軍の戦闘機を借りて乗り回して、台湾海峡上空で中国人民解放军と睨みあったり、こいつ学生じゃないよなレベルのことをしまくっていたのだ。

「台湾でF-16C/Dファイティング・ファルコンを乗り回してた男ですから、こんなことで死ぬようなタマじゃないですね」

堀北少尉が言ったのを、伊熊少佐が返した。

「F-16C/Dファイティング・ファルコンですか。」

それは、すごいですね。

本当に海軍の人なんですか？」

「書類上は……ですね。」

それこそ、陸戦、海戦、空戦、何でもござれな奴ですからね」

そこへ第二小隊の通信兵と、第1歩兵旅団司令部第6幕僚部（民事作戦担当）の指揮直轄部隊である特別憲兵部隊の隊員がやって来た。

「堀北少尉ですね？」

白と黒の腕章を着けた戦闘服の兵士が言う。

「ええ」

「今回の件で、一応、我々はあなたに説教をせねばなりません」

堀北少尉の肯定の意を含む返答を聞いた特別憲兵部隊の隊員は言

う。

「ええつと、今回の走行に関して、現場の部隊から苦情が来ています」

「苦情ですか？」

特別憲兵部隊の隊員から発せられた言葉に、堀北少尉は困惑を隠せなかった。

「ええ、苦情です。」

第二小隊の運転が荒っぽい、速度が速くてひかれないようにするの
で精一杯だった、第二小隊の小隊長の息が臭い、あと全体的に臭い、何
もかもが臭い、臭すぎて戦闘どころじゃない、同じ堀北なら女優の方
に会いたいなど多数の苦情が寄せられています」

特別憲兵部隊の隊員は、神妙な顔つき、声音で苦情を並び立ててい
くが、正直に言って最初以外どこが苦情なのか全く持つてわからな
かった。

「ですので、車を運転するときは、安全運転に留意してください。」

戦時だろうと、平時だろうとです」

「あの、1ついいですか？」

説教の言葉を聞いていた堀北少尉には、疑問点が1つあった。

「並び立てられた苦情があるじゃないですか？」

堀北少尉が1語1語慎重に紡ぐ言葉を、特別憲兵部隊の隊員は頷く
ことで肯定する。

「何か個人を攻撃してませんか？」

最後の方の苦情」

「えっ、まあそうですね。」

そうですね。」

確かに、最後の方のやつは、苦情ではないですよ」

堀北少尉の指摘に、特別憲兵部隊の隊員もたじたじだ。

「それにしても今回、逮捕者は続出ですか？」

「ええ」

堀北少尉の問いかけ、強引な話題の変更でもあるこの問いに特別憲
兵部隊員が答えた。

「対テロに伴う治安出動とはいえ、野党の一部には殲滅を前提とする、

今回の計画は受け入れ難いものがあつたのでしよう」

事前の予告を受けて、日本皇国陸軍を中心に立案された作戦計画案においては、国際的な陸戦規約に基づいた殲滅作戦を中心としていた。

武器を捨てて投降すれば逮捕、捨てなければ射殺、これが日本皇国陸軍参謀本部対遊撃戦対策室の策定した基本方針だった。

世界初とも言える先進国の首都、人口が密集し、中心街にあつては高層ビル群の林立する近代的な都市空間のなかでの市街地戦闘であり、例えばアフガンやイラクで米軍が得たものとは、比べ物にならないこの戦訓は米軍も喉から手が出るほどほしい代物だろう。

「そうですねえ。」

表現の自由、思想の自由がある以上は、規制線ギリギリでのシユプレヒコールぐらいなら構わんですが、区域内に無断で立ち入ろうとする人間が多くて、それが困りましたよ」

「戦場の危険性を無視した人間の面倒すら軍任せ、そんな民間人に死傷者が出れば、左翼は軍を叩きにかかる。」

そんな人間のために、600人も余分な任務に割かれることになった。

600人も人間がいたら、旅団隷下の両方の歩兵連隊にそれぞれ2個中隊を新編して、最前線に張り付けることができるのに」

現役兵により2個中隊を新編すると、戦時に連隊に編入される内の予備役中隊2個が横滑りで編成から弾き出される。

それを動員解除で予備役を減らすか、別部隊を新設するなどして減らさないかは、上が決めることだ。

「とりあえず、参謀本部よりの通達。」

事態は終息に向かいつつあり。

陛下は東大病院で簡単な検査を受けた後、赤坂御用地に入られる予定となっていて、一応の安全は確保されているとのことだ」

堀北少尉が特別憲兵部隊の隊員との会話を終えた頃合いを見計らった通信兵からの報告を受けて、堀北少尉は感慨深い気持ちになった。

佐竹、お前の守った陛下は無事だぞ。

お前も無事に戻ってこい、そう心のなかで呟いて、手術室の方に、ちらつと視線を流した堀北少尉は踵を返して、第二小隊の本隊と合流すべく、通信兵と共に玄関に向かう。

「第二小隊は、直ちに国防省警備に就き、事態の変化に備えよ。」

とのことであります」

第二小隊の通信兵が、上級司令部からの命令を伝えた。

「了解。」

これより第二小隊は、日本皇国軍統合市ヶ谷基地施設警備隊の増援に就く。

総員配置に着け」

第一中隊が攻略に苦戦している頃、その戦場となっている皇居正門の隣、警備上の問題から普段は閉じられている坂下門からの皇居攻略を目指す第一歩兵連隊第二中隊の前線は、徐々に徐々に皇居の方へ進んでいた。

「敵兵の姿が見えんな。」

どこにいるんだろうか？」

この事案に第一に対処するために出動したのは、首都を守るは我がありをモットーとする第一旅団の全隊だ。

最前線での掃討作戦を実施する2個歩兵連隊のほか、第一旅団司令部と司令部付き隊と各隷下部隊は、赤坂御用地に集結していた。

アメリカ同時多発テロ以降に、東京でのテロ発生を憂慮した陸軍参謀本部と宮内庁による長い時間に及ぶ交渉の結果、得られた宮内庁の許可のもと、皇太子殿下がお住まいになられている東宮御所などのある赤坂御用地内に衛生補給所を設置し、最前線で戦う歩兵連隊の戦闘支援を行っている。

坂下門の攻撃を指揮するのは、第一歩兵連隊第二中隊長の浅井啓一少佐。

中隊長である浅井少佐は、大阪生まれ大阪育ちの大阪人ではあるが、国防大学校を卒業して、日本皇国陸軍の歩兵小隊長として任官した。

そのときの初給料で買った双眼鏡で、周りを眺める。

決してお値段的に安くはなかった双眼鏡で眺めながら思うのは、最初の任地である北海道だった。

ほんの10年ほど前まで、北方配置戦略に基づき、北部ほど優秀な人材の多い場所はなかったのだ。

そして、そこに配属される新人は、エリートコースを進むことを約束された人間なのだ。

そんな北海道地域の、いや日本の最北端である宗谷岬を防衛範囲に持ち、すわつ、冷戦下におけるソ連の侵攻となれば、そこに立ち塞がっ

て遅滞戦術による時間稼ぎを主任務とする第2旅団第2歩兵連隊第三中隊第二小隊、そこが最初の仕事場だった。

第2旅団の陸軍部内での異名は、北の雄、冬戦狂、陸軍最強、狂戦士、バーサーカーマル冬、ロッキードロッキード米軍を震撼させた奴らなど、多数ある。

北海道に侵攻してくるであろうソ連軍、今ではロシア軍だが、それらと戦う以前に、吹雪が襲う冬の雪山、草木が芽吹き雪解け水が流れ出る夏の山や湿地帯、それに付随する氷雪上や泥の泥濘と戦い生き残ることは、かなり厳しいものだった。

そんなことを思いながら、皇居周辺を見回す。

皇居周辺には、いつもは見かけるスーツ姿の人間やジョギングをしている人間などもおらず、見ているだけで何か異様な光景だった。

その一見して、生物は存在しない空間に、この日本のどこにでもありそうなトラックが数両と、さらには東京駅近辺とはいえ、これまた日本のどこにでもありそうな観光バスがさらに数両停車していた。

双眼鏡から覗く中隊長からは見えないが、精鋭中の精鋭である敵の作業員たちは、その影に息を潜めて隠れているのだ。

皇居の坂下門の2km手前の路肩に停車した82式指揮通信車、この車両は中隊本部として使用している。

機動戦闘車改造の機動指揮通信車の配備が作戦軍司令部や旅団司令部から連隊本部にまで行き渡ったために、中隊本部用車両として配備されたお古である。

周辺の確認を終えたのか、その車両のハッチから、中隊長は乗り出していた身体を、車内に戻した。

「隸下の各小隊は、すでに到着しています。」

あとは、中隊長の命令一下、直ちに突撃します」

82式指揮通信車の車内にいた通信兵が、車内に戻った中隊長に報告する。

「血の気が多くてはいかんよ。」

蛮勇は身を滅ぼす。

死ぬのは、勇気ではないからな」

報告を聞いた中隊長は、諭すように言う。

「防護陣形を組め」

中隊長が指示を出す。

古来より守りを固められた場所を、攻撃して攻略するのは、かなり骨が折れる行為だ。

日本帝国軍時代からの日本皇国軍戦史で言えば、日露戦争の乃木希典將軍の指揮した旅順要塞攻囲戦しかり、太平洋戦争の栗林忠道將軍の指揮した硫黄島の戦いしかりである。

どちらの戦いにおいても、攻撃側の損害が甚大なものとなっている。

そのような根底があり、中隊長は兵士が無駄に生命を散らすというようなことはあってはならないと考えているのだ。

「にしても、うちの機関砲隊の本領発揮ってとこだな。

今日の戦いは。

余り物の二中と呼ばれるのは、今日までだ」

そう呟いた中隊長は、部隊の面々や歴史を思い出していた。

今では”火力の元祖の12中”の異名をとる第1歩兵連隊第二中隊は、第1機甲群の対戦車大隊や旅団隷下の第一高射砲兵大隊から余剰となった予備兵器を調達してきては、隷下の各小隊に配備して、それを運用している。

これを聞いた当時の陸軍首脳部は、この計画を事後ではあったが承認して、全国の部隊に機能別部隊の編成を訓令として発令した。

その結果、第一中隊はレンジャー中隊、第二中隊は火力等強化中隊、第三中隊は狙撃兵重点配置中隊、第四中隊、第五中隊は車両機動能力特化中隊に再編された。

ただ予備役兵で構成された部隊である第六中隊、第七中隊、第八中隊、第九中隊には特にこのような能力は要求されていない。

なぜなら、日本皇国陸軍における予備役兵の定義はアメリカ軍の州兵に相当するパートタイムの兵士たちである。

普段は別の仕事をしているが、

そのような兵士に、特別な訓練を受けさせることは、時間的に見ても、予算的に見ても現実的ではないからだ。

それでも、大半の中隊の編成は中途半端な状態にあり、特にレンジャー中隊として編成される第一中隊が問題となっている。

そして、これは単純な計算だが日本全国にある30個旅団隷下の歩兵連隊は60個、つまり、第一中隊を名乗ることになる部隊は60個ある。

そして、歩兵連隊の指揮下にある1個歩兵中隊の定数は160名だから、合計で9600名ものレンジャー歩兵が必要な計算となる。

それだけの人員にレンジャー訓練を受けさせるだけの予算も暇もないのが、日本皇国陸軍の実情だ。

だから、第一中隊は指揮隷下にレンジャー小隊を1個だけ編成している。

小隊だけであれば、3000名程度の要員を育成するだけで済むからだ。

また、特殊部隊の支援部隊である挺進連隊や第82レンジャー連隊、他にも第6空挺旅団、第10空中機動旅団隷下の歩兵連隊は、現状で連隊長含め全員がレンジャーである。

この集団を維持するだけで、現状の日本皇国陸軍のレンジャー教育課程は、要員のにも予算的にも精一杯なのだ。

「各小隊重火器分隊は、即座に展開して、部隊の進行を援護せよ」

中隊長の指示を受けて、道幅一杯に展開したのは、高射砲兵大隊から配置換えになった35mm連装高射機関砲L-90-iである。

前述の訓令が発令された直後には、正式に中隊指揮隷下にあった各小隊の第四分隊を解散し、重火器分隊を編制した。

歩兵小隊の編制下に組み込んだ重火器分隊は、35mm連装高射機関砲L-90-iを2基4門装備している。

3個小隊の重火器分隊だと、6基12門もの量となる。

そして射程4000メートルというのは、中距離、短距離、近距離のすべてでミサイル全盛の高射砲兵部隊から見れば、かなり短く、そして砲弾を発射する機関砲である以上、命中精度はかなり低いために、旧式と見なされ高射砲兵部隊からは退役したものの、歩兵直協火器として見るならば十分な性能を保持しているのだ。

その前面には、在留邦人保護の緊急避難的行為として、必要に応じ
て紛争地に派遣されることになる歩兵科部隊援護のために国際派遣
仕様として重装甲に改善された軽装甲機動車と炭素繊維防弾盾を保
持し、屈強な防護陣形を組む第二中隊の各小隊の姿があった。

「各小隊、進め」

改めて掛けられた中隊長からの号令に、各小隊は隊列を乱さずに、
一歩一歩進んでいく。

一挙一動がたゆみなく行われ、そこには日本皇国陸軍歩兵の血と汗
の努力のあとを思わせる。

日々の演習のなかで、繰り返し叩き込まれた挙動は、実戦でも十分
に生かされていた。

「中隊長より各小隊。」

距離450で発砲、敵の気先を制せよ」

未だに距離は、おおよそ2800〜3000メートル離れている。

それに伴い、35mmという大口径機関砲の恐怖感は、じりじりと敵
兵の精神にじり寄っているはずだが、敵兵もよく耐える。

「敵兵もよく訓練されている。

まだ、撃ってこんとはな」

双眼鏡を使わず、肉眼で遮蔽物の向こうに隠れているはずの敵兵を
眺めて、第二中隊長が言う。

何も動きがない、日本歩兵など取るに足らないとでも考えているの
だろうか？

当たり前の話だが、神でもなんでもないただの人間である中隊長
に、敵兵の考えなんてものが分かるわけもない。

中隊長が今いる地点から、左に数百メートル進んだ先に、皇居正門
があり、第一中隊が激しく戦っているはずだ。

「第一中隊よりの通信。

我、敵狙撃兵と交戦中。

我々、第一中隊は損害続出なるも、戦闘を継続している。

皇居周辺に展開中の各中隊は、狙撃兵の存在を警戒せよ。

との通信が入っています」

伝令として、駆け寄ってきた通信兵が報告する。

「了解、隷下部隊にもその旨、通達しろ」

「了解」

第一中隊からの通信にあった敵狙撃兵の存在は、中隊長に一抹の雲のような不安を残した。

しかし、指揮官という職に在る者は、特に人の生命を預かる警察や軍隊などの指揮官は、その不安を解消しなくてはならない。

感じてはいけないのではなく、解消しなくてはならないのだ。

少しでも不安を感じるということは、すなわちそこに何かしらの危険を感じるということだからだ。

それこそ、落ちるかもしれないから高いところが苦手だとか、飛行機が苦手だとかというところにもつながってくるのだと思う。

「通信兵、各分隊に連絡して、^{マークスマン}選拔射手を召集せよ。

独力で敵狙撃兵の射座を推定し、必要に応じて撃滅する」

中隊長の言葉が中隊本部となっている82式指揮通信車内に響いた。

その数分後には、各小隊に配属されている^{マークスマン}選拔射手が、中隊本部に集結する。

「敵狙撃兵ですか？」

中隊長が呼び出してから、数分以内に全員が集まる。

この辺が日本皇国軍が、世界で最も優秀だと言われる所以かもしれない。

「奴らも十分に狡猾だ。

恐らくの話だが、我々が下手に進めば、十字砲火を浴びせかけられる危険がある」

中隊長がきつぱりと言い切った。

「十字砲火ですか？」

ならば、ここからこの辺りのビルが怪しいですな」

第二中隊で、最先任そして最も経験豊富な^{マークスマン}選拔射手である富田兵曹長が、意見を述べた。

先任選拔射手である富田兵曹長の意見は、狙撃兵の交戦距離である

800メートルと一般的な歩兵の交戦距離は、400メートルであり、その二つの円が重複しうるエリアに敵狙撃兵の射座があるというものだ。

「富田兵曹長、選拔射手を連れて、このビルから敵狙撃兵の射座を特定し、可能ならばこれを殲滅せよ」

日本皇国軍地理測量局発行の都市戦闘地図を睨んでいた中隊長は、地図の一点を指差して命じた。

その時、上空から聞こえてきたのは、ヘリコプターのローター音だった。

しかし、それは歩兵たちが日頃から演習で聞き馴染んだ、少なくともUH-1の各型やUH-60Jのものではなかった。

その間にも、選拔射手たちは、自らの射座に散っていった。

「この音は、CH-47Jじゃないし、UH-1…いやでもこれは、少なくとも関東近郊の部隊からは退役してるから違うとは思いますが、

それにその後継のUH-60JやUV-22Cの類いでもないですよ。

挙げたのよりか、聞いている感じの馬力も強いですし、普通のヘリじゃないですよねえ。

もしかしたら、もしかしたらの話になりますけど、木更津のAH-64D Jですかね？」

上空を見つめていた通信兵が言う。

林立するビル群の間にいる第二中隊には、ヘリコプターの接近は分かっても、種類や正確な位置までは分からないのだ。

「対空戦を下命しますか？」

徐々に近付いてくるヘリコプターのローター音に、通信機を片手にした通信兵が聞いてくる。

こういうときのための、91式携帯地对空誘導弾は、各小隊に配布済みだ。

いざとなれば、各小隊長の判断で迎撃ができるのだ。

「奴らが判断して迎撃するだろうし、今敵兵に背中を向けるのはまずい。

それに、空軍なかもを信じろ。

米軍曰く世界最強の奴らが、敵性機いや敵機をむぎむぎ首都上空、陛下のお膝元の上空に侵入させると思うか？」

中隊長の言葉に、通信兵は黙って頷くことで、肯定の返事を返したが、1つ疑問があつたので、中隊長に聞いてみた。

「陸軍には、味方を味方と思わない精鋭部隊第10空中機動旅団がありましたよね」

長い沈黙のあと、中隊長は答えた。

「……我々の仕事は、待つことだな」

強引な話題の変換だったが、通信兵は気付かなかったことにした。通信兵も、その方がいいと感じたからだ。

そんなこんなしたあと、その数分後には、木更津の対戦車ヘリコプター隊のAH―64DJアパッチ・ロングボウが1機、姿を見せた。

「描かれていたのは、木更津葵だったか？」

第二中隊の上空を、颯爽と1航過したアパッチの機体には、女の顔が描かれていた。

「恐らくは」

中隊長の問いに、同じく上空を見つめていた通信兵が答えた。

「それなら、木更津駐屯地のどれかの飛行小隊の2番機だな。」

多分、そこそこのベテランが乗ってるはずだ……」

そう言いながら、上空を注視していた中隊長は、旋回するAH―64DJアパッチを見て、さらに呟いた。

「あれに乗ってるのは、下手な奴か？」

動きが単調すぎる。

多分、次で墜ちるな。

これは違うか、間違えた。

次で奴らに、撃ち墜とされるな」

AH―64DJアパッチを見送った中隊長は、続ける。

「次は右に旋回するはずだ。」

多分、そのときに尻ケツを狙われるはずだ」

2度目の1航過で精密な射撃を行ったAH―64DJアパッチは、中隊長の言った通りに、右に旋回して、そこを狙われた。

RPG-7のロケット弾が尻に着弾し、燃え上がるAH-64Dのアパッチは、皇居外壁の向こうに消えた。

「こりゃあ、ヤバイことになった。くそが。」

通信兵、緊急事態だ。

連隊本部に通信、アパッチが墜ちた。

マークスマン
選抜射手を呼び戻せ。

大至急だ」

周辺のビルの上にいるはずの、選抜射手マークスマンを戻らせる。

その指示を出した直後に、通信兵が駆け寄ってくる。

仕事が早い、選抜射手マークスマンを呼び戻してすぐに、連隊本部に一報を入れたのだろうと想像できる。

「連隊本部より中隊長宛。

通信コード：19450815宛で連絡願うとのこと、繰り返します、通信コード：19450815宛で連絡願うとのことでありませ

のだが、直属の連隊本部宛には、中隊長自らが連絡する。

中隊長が連隊本部に通信するときは、旅団司令部通信部が作成した使い捨ての暗号通信コードを通信兵から受け取り、それを入力することで、自動暗号化システムが割り振られた回線が開かれる。

中隊長や通信兵が戦死した場合は、それを確認した将兵が、自らに割り振られた番号をスマホに入力し、それを報告する決まりになっている。

『通信コードを確認した。

連隊本部より第二中隊。

送れ』

連隊本部よりの通信が、骨伝導スピーカーを通じて聞こえてくる。その声は、日本皇国陸軍に在職してから何回も世話になり、自分の結婚の際には仲人すらも務めてくれた第1歩兵連隊連隊長、市場清隆大佐の声だった。

「こちら第二中隊長、浅井啓一です。」

送れ」

連隊本部よりの呼び掛けに、中隊長は応答を返した。

『坂下門に、第二中隊の目の前にアパッチが墜ちたのは、見たな？』

送れ』

連隊長に言われるまでもなく、中隊長はこの目で見ていた。

敵兵の放ったロケット弾が命中し、撃墜された攻撃ヘリのその様子を、はつきりと見ていたのだ。

「はい。」

生存者の可能性を踏まえ、これより機体周辺の制圧及び乗員の救出のための戦闘行動を開始する予定です。

送れ」

墜落地点と思しき、場所からは黒煙が上がっている。

通信兵が回線を開いて呼び掛けても、AH-64DJアパッチの通信機は、完全に沈黙していた。

生存者の可能性を否定はできないが、かなり低いと思われる。

その言葉が口から出そうになるが、思いとどまる。

これは言ってはならないことだと気づき、中隊長はあわてて、口をつぐむ。

戦死認定に携わる日本皇国陸軍参謀本部庶務課の戦死認定基準では、戦場における味方の生死は、第一には確実な物的証拠である死体を以て、第二には認識票ドッグ・タグもしくはそれに相応するもの、例えば装備していた銃器類などを以て、確認することとなっている。

というのも、戦死認定に携わっていた当時の庶務課長が、死体を誤魔化して戦死したことにするという設定の出してきたアメリカのアクション映画を見て、顔の確認できない焼け焦げた死体や首から上がない死体、それは本当にそいつのものかを、確認するためのDNAデータバンクを設立し、庶務課内で運用している。

そこで、DNA鑑定の戦死認定を受けないと正式に死亡とは言えないのだ。

だから日本皇国陸軍部隊では、余程のことがない限り、味方の死体は投棄せずに帰投するのが普通であるし、滅多なことでは現場の人間

である兵士が判断する必要がないのだ。
『うむ。』

機体は全損していると思われるが、何があるか分からん。すべては慎重に、万難を排して行え。

あと、在空中の対戦車ヘリコプター隊が、制圧爆撃を行うはずだ。坂下門の制圧は、あと少し待て。

送れ』

その通信の間にも、第二中隊の目標である坂下門の上空には、AH—64DJアパッチが集結しつつあった。

「第二中隊、了解。」

万難を排して、味方の救出に当たる。

送れ」

『連隊本部、了解。』

終わり』

その間にも、集結しつつあったAH—64DJアパッチのうちの1機が急降下して、猛攻を加える。

正確な照準で放たれたロケット弾が、地上にいた敵兵の周囲に着弾する。

爆発が連続して起こり、爆煙を瞬間的に噴き上げさせる。

「派手で汚い花火ですよねえ」

「ああ、全くだ」

呆気にとられた第二中隊は、立ち止まっていた。

上空からの猛攻に、敵は押し潰されそうだ。

「アパッチが暴れたから、戦果が残ってるかは分からんが、一気に押しきれ」

中隊長は、慎重に進んでいた中隊を、一気に加速させた。

「機関砲分隊、制圧射撃。」

撃て」

数発の弾薬グリップを装填した弾倉の中身全てを撃ち尽くす勢いで、35mm機関砲は撃ち続ける。

これは日本皇国海軍沿岸警備部隊の不審船対処艦艇が採用してい

る機関砲と同じものであり、敵兵が遮蔽物の代わりとして使用しているトラックを撃ち抜き、その後ろの敵兵ですらも殺傷していく。

「突撃、皇居坂下門を制圧せよ」

包囲戦を企図した陸軍参謀本部の意図は果てしなく単純で、戦場においては民間人と工作員を接触させないことであつたし、万が一そうなる前に、全員を殲滅する。

それが、今回出動した陸軍歩兵に課せられた使命だ。

その使命に燃えているのかは知らないが、第二中隊の兵士たちが89式小銃を構えて、坂下門に向かって突撃していく。

その過程で、前線の至るところにおいて、激しい銃撃戦が生起した。互いの撃ち合う銃弾が飛び交うなかで、を、第一小隊長が怒鳴った。

「おどれら、怯むな。」

敵のタマ取つてこいやあ

その怒鳴り声に対しては、「あいさー」だとか「ういー」だとか「ウラー」だとか「なのです」だとか、気の抜けた三者三様、十人十色な答えが返ってくるが、それでも第二中隊第一小隊の攻撃は苛烈だった。

「ちっ、このハジキ使えやしねえ。」

このドスも斬れやしねえ」

小隊長が銃剣を着剣した89式小銃を乱射して、弾が切れると振り回す。

この89式小銃に装着する銃剣、制式には89式銃剣といふこの銃剣が、いやこの世界中のほとんどの銃剣が、人を斬れないのは、当然のことである。

世界最強の刃物として名高い日本刀であっても、数人の人を斬っただけで、使いものにならなくなるのだ。

着剣した際の機能が、刺突に特化している上に刃渡りが短い89式銃剣は、槍として使うしかないのだ。

だから、斬っただけじゃ死にはしない。

「兄貴い、これをどうぞ」

第一小隊の1人から装填済みの89式小銃がぶん投げられ、小隊長

がそれを受け取る。

その姿には、首を傾げざるをえない。

「あいつら、あれは官品だぞ……」

第一小隊の1人が放り投げた小銃は、1挺20万円もする高級品だ。

こんな使い方をできるのは、中央機動憲兵隊特別儀仗中隊に儀式用に配備されている老朽化で廃棄寸前のM―1ガーランド小銃くらいのものだ。

89式小銃が84試小銃として開発されていた当時には、値段相応の性能はあったとは思うが、少々旧式化している感は否めない。

それでも少なくとも、簡単に壊してはいけない代物だ。

「…落として、壊したらどうするつもりなんだ？」

現用の89式小銃は、性能では初期のM―16小銃よりは遙かにまじだったが、それでもM―16小銃が実戦という試練を受けた今ではトントンくらいというのが、現場の兵士の意見だ。

「そういえば、あれはどこの奴らだ？」

やくざのごとき暴れっぷりで、坂下門に殺到した小隊を見て、中隊長が聞いた。

「えーと、あのマークは第一小隊ですね」

返答を聞いた中隊長は、第一小隊の面々を思い浮かべる。

奴らは真面目ということはなかったが、少なくとも大人しい目の人間たちだったはずだ。

「バトル・ハイってやつですかね？」

この状態を戦闘中の1種の興奮状態だと、通信兵は予想した。

その可能性はなきにしもあらずだが、中隊長は思った。

「それにしても、変わりすぎじゃね」

第二中隊第一小隊は、このときから数カ月の間、少々の皮肉も込めて、やくざ組と中隊長に呼ばれることになる。

「俺もいく。」

奴らに任せてたら、何をしでかすか分からん」

この状況を見ていた中隊長や通信兵は味方に対する信頼というも

のを失っていた。

「確かにそうですね。」

「私もお供します。」

中隊長が傍らの銃を持ち、後部のハッチを開き、82式指揮通信車から出た。

中隊長の後に続くように、通信兵も外に出る。

「中隊長から中隊各員に告げる。」

坂下門制圧後は、天皇陛下の保護は隣の門の第一中隊に任せて、第二中隊は直ちに撃墜されたアパッチの乗員の収容作業にかかれ。

敵中に墜ちた仲間を、助けに行こう。

以上、送れ」

中隊長の腰の通信機は、各部隊、各将兵宛に設定されている。

『第一小隊、了解。』

送れ』

中隊長の訓示から、数秒、第一小隊から連絡が入った。

『第二小隊、同伴。』

送れ』

『第三小隊も同伴。』

送れ』

「中隊本部、了解。

終わり」

それに遅れること数秒後には、中隊長宛に、第二小隊や第三小隊からの返答が続々と舞い込んでくる。

「通信兵、第1衛生大隊に通信。」

第二中隊宛へ、2トン救急車の搬送を要請せよ」

「了解」

第二中隊は坂下門を制圧しつつあった。

2トン救急車は、日本皇国陸軍衛生大隊の装備する装甲救急車である。

装輪式装甲救急車で、最新型のものだと、10式戦車の外装式装甲を取り付けられるようになっており、戦場での生残性の向上を図って

いる。

『第二小隊より中隊本部。

送れ』

「こちらは、中隊長だ。

どうした？

送れ」

『墜落地点を制圧、生存者の搜索及び収容作業を開始しました。

なお、機体の残骸部には、パイロットを確認できず。

送れ』

報告を聞いた中隊長は、第二小隊に改めて注意を促した。

「中隊長、了解。

搜索中の味方の受傷事故発生に注意。

敵兵の待ち伏せや、仕掛け爆弾の類いには、十分警戒せよ。

送れ」

『第二小隊、了解。

直ちに取りかかります。

終わり』

第二小隊との通信を終えた中隊長は、あることを失念していたことに気付き、無線で連絡を入れた。

「中隊長より第一小隊と第二小隊へ。

坂下門に2トン救急車が到着する。

ギリギリまで車両が進入できるように、障害物をどかせ。

以上、送れ」

坂下門前に乗り捨てる形となった車両や、元々置いてあったトラックやバス、敵兵の死体、排除する対象は多数ある。

『こちら第一小隊、了解。

送れ』

『第三小隊、同伴。

送れ』

中隊長は89式小銃を片手に、坂下門に向かう。

皇居の手前に停車した82式指揮通信車の停車しているところか

ら、数百メートルを走り抜けて、坂下門に到達した。

「第二小隊は？」

「もつと、奥に散ってます」

坂下門に群がるように止まっていた車両を退かせて、今は死体の片付けに当たる兵士に聞く。

返答を聞いた中隊長は、89式小銃のスリングを引いて、89式小銃の本体を引き寄せる。

ここから先は、何が起こるか分からない戦場だ。

89式小銃の銃把を持つ手に力を込めて、安全装置を解除する。

A・タ・レの文字に合わせて、つまみを回して、タの文字つまり単射に合わせる。

引き金に指を添える。

その状態のまま、皇居のなかに進入する。

少し進んだところで、墜ちたAH-64DJアパッチの残骸を見つけた中隊長は、周囲を呼び掛けた。

「第二小隊、第二小隊のやつはいるか？」

周辺は変に静まり返っていた。

そんななかでは、中隊長の声はよく通る。

「えっ、嘘、中隊長？」

あつ、いえ、失礼しました。

自分は第二小隊第一分隊所属の富樫軍曹であります。

14時25分現在、自分を除く小隊全員で、捜索中ではありますが、未だに搭乗員を発見できておりません」

「分かった」

富樫軍曹の報告を聞いた中隊長は、頷くと無線機を取り上げようとした。

「グレネード！」

遠くで第二小隊の隊員の声があった。

直後には、爆音と爆風が中隊長を襲う。

爆風に巻き上げられた砂が遅れて落ちてきて、中隊長たちに降りかかる。

「この時期に黄砂に遭うなんて、聞いてない」

頭上から落ちてくる砂の量は、中隊長の予想を遥かに上回っていた。

「生存者、発見！」

グレネードが発見されたのとは、また別の方向からその声は聞こえてきた。

「兩名とも骨折等の所見が見られるものの、生命に別状なし…」

声のする方へ、急いで向かう。

「…ただ、グレネードが仕掛けられている模様で、手が出せません」
中々に敵さんは、狡い手を使う。

旧軍とは違い、日本皇国軍の将校や下士官兵に至るほとんどの人間が、縦や横の繋がりでの仲間意識、絆を持っている。

戦場においても、味方を見捨てられないのが、日本皇国軍軍人である。

声の上があった方向に、中隊長は駆けつける。

「状況は？」

そこには、第二小隊の隊員が集結していた。

到着した中隊長は、開口一番、部下たちに状況を尋ねた。

「発見したときには、既にこの状況だったのですが、パイロットの腹部の下側に手榴弾があるようです」

第二小隊の発見者の報告に、中隊長は頷いた。

悔しいという気持ちは、この場にいる全員が共有している。

「ベトコンのやり方だが、それよりも狡い。

生きている仲間を囚にするとは、俺たちを余程怒らせたいうだな。

俺たちを舐めくさってるのか」

中隊長は、腹の底から沸き上がってくる怒りに、そう言うのがやつとだった。

「まだ門前にいる第三小隊を呼ぶ。

その兵力を合わせて、我々が敵兵を殲滅する」

目の据わった中隊長は、舌鋒鋭く指示を出した。

「通信兵、第三小隊を呼んでいい」
「了解」

中隊長と同じく目の据わった通信兵が、無線機を取り上げる。
通信兵が第三小隊を呼び出している間に、新たな脅威が迫っていた。

「敵兵、多数接近中」

パイロットたちが手榴弾で生命の危機に晒されている場所一番外側で、警戒に当たっていた第二小隊の兵士が叫んだ。

「撃て、撃て。」

「殲滅せよ」

中隊長の指示に被せるように、小隊長が指示を出す。

「第一、第二分隊、突撃、俺に続け。」

第三分隊、支援、遠隔の敵兵を排除せよ。

残った重火器分隊は、中隊長指揮のもと、パイロットを守れ。

以上、総員かかれ」

着剣した状態の89式小銃を片手に、突撃した25名は、一気呵成に攻め立てて敵兵を殲滅していく。

84mm無反動砲を持った兵士が、遠隔の敵兵の群れを一撃で屠る。

この84mm無反動砲から発射される砲弾は、対人戦を考慮したAD
M-401フレシエット散弾と呼ばれるもので、砲弾外殻の内部に
1,100発もの子弹を内蔵する。

そして有効射程が100mほどのこの砲弾は1㎡あたり5-10
発の密度で子弹をバラ撒くのだ。

復讐心に燃える第二小隊は、ものの数分で敵兵を殲滅した。

「敵兵はまだ、このなかにいる。」

「警戒を怠るな」

周辺を警戒している第二小隊は、周辺に散っていく。

それを傍目に見ていた中隊長は、あることを思いついた。

「液体窒素を持ってるとよなあ?」

携帯用液体窒素ボンベ、日本皇国陸軍兵士には、必携とされている
ものである。

爆弾の処理、駐屯地施設等での初期消火に使えることから、全国の将兵に配布されたものだ。

「持っています」

重火器分隊の将兵は答えた。

他の中隊の歩兵であれば、野営用の背囊に入れて持ち歩く程度だが、第二中隊は違う。

大口径の機関砲を扱う重火器分隊を隷下に持つ第二中隊は、所持する弾薬の誘爆の危険に晒されてきた。

だから、大半の兵士が液体窒素ボンベをベルトから吊り下げていたのだ。

「確か、2年前の報告で手榴弾を液体窒素で処分した話があったはずだ」

2年前の7月、弾薬消費のための実弾演習中だった歩兵部隊の兵士が、手榴弾の投擲に失敗するという事態が起こった。

前代未聞のこの事態に、パニックになったのは、投擲に失敗した本人ではなく、直属の上官である下士官だったという。

通常の手榴弾は、安全ピンを引き抜いてから数秒後に爆発する。

その猶予のなかで、下士官は手榴弾に向けて液体窒素を噴射した。

「そのときは、数秒の遅滞のあとに爆発したんだが、そうなる前に下士官が遠くに投げて処理したんだ。

今回も、その手が使えるかは分からん。

だが、やってみる価値はあるだろう？」

ボンベを片手に持った中隊長は、他のその場にいる兵士たちに聞いた。

「はい」

そう重火器分隊の兵士たちは、笑顔で答えた。

「よし」。

じゃあ、誰か毛布を持ってこい。

あとの残りは、地面に深めの穴を掘れ」

液体窒素は触れたものすべてを、—196度というその驚異的な低温で凍らせるだろう。

それは、陸軍の飛行服も例外ではない。

それは、――196度という空間内での活動を考慮していないからだ。

有機物だろうが、無機物だろうが、バリバリに凍らせる。

飛行服は使い物にならなくなるだろう。

ならば、毛布が必要になるだろう。

「あとは、中隊本部に連絡して、予備の戦闘服を要求しろ」

中隊長の指揮のもと、テキパキと準備が進む。

”用意周到””動脈硬化”とは、細かい準備は簡単に行うが、それに慣れて融通が利かないという陸軍の体質を揶揄した言葉だが、中隊長の思いつきの実行のために、いや仲間を救うために準備に奔走している状況を、見た今となつてはそれも頷けるのである。

重火器分隊の1人の兵士は毛布を用意し、残りの兵士は深い穴を掘る。

「あと少しの我慢だ。

頑張れ」

死への恐怖から涙や鼻水を垂れ流す若いパイロットに、声をかける。

それでも流石に、日本皇国陸軍で鍛えられてきただけのことである。

一般人ならば、この状況では失禁等をしてもおかしくはないのだ。

「準備が完了しました。

いつでもやれます」

「一気にやれ」

重火器分隊の兵士からの報告に、中隊長は返した。

予備の戦闘服や毛布が到着し、いつでも救出できる状況にある。

1人の兵士が液体窒素を、パイロットの身体の下に流し込む。

ボンベ1本分まるまるを使いきる。

「まず1人」

ある兵士が呟いた。

1人目のパイロットが助け起こされる。

——196度もある液体窒素の冷氣によって、凍結した手榴弾を掘った穴に投棄する。

続いて、2人目にも取りかかる。

的確に液体窒素で処理された手榴弾は、1発目の手榴弾と同じ穴に投棄され、手榴弾を投げ込み、誘爆させて爆破処理する。

「やれるもんだな」

と呟いた中隊長は、緊張していたのか荒い息を整えながら、一気に破顔した。

「よくやった。」

パイロットは第三小隊に任せて、俺たちは本隊と合流するぞ」

そう言うと、中隊長は坂下門の方を確認する。

第三小隊が来ていた。

「2名の確保に成功。」

これより、撤退させる」

手榴弾の処理が完了したのを見届けた中隊長が、第二小隊の後方に来ていた第三小隊に叫ぶ。

「後送しろ」

中隊長は、駆け寄ってきた第三小隊の兵士に、パイロットを預けた。そのまま第三小隊に背を向けると、第二小隊に合流すべく先を急いだ。

「小隊長」

駆け寄った先にいる人物に、中隊長は声をかけた。

先刻から敵兵相手に、激戦を繰り広げている第二小隊長だ。

「中隊長、パイロットたちはどうなりました？」

中隊長に顔を向けた小隊長が、中隊長に聞く。

「先程、無事に救助した。」

第三小隊が護衛しているはずだが？」

小隊長は気にしていたことが聞けたとばかりに、顔を正面に向けた。

「小隊長、正面より敵兵、多数接近中。」

敵兵の第2波です」

88式鉄帽を目深に被った兵士が、駆けつけて報告する。

その報告を聞いて、中隊長と小隊長はにっこりと笑いあった。

「中隊長から第一小隊長。」

中隊長の指揮権を、第一小隊長に委譲する。

「送れ」

「第一小隊長、了解。」

「終わり」

短い無線での通話のあと、中隊長は肩から提げた89式小銃を外した。

「こうなるのは、あの演習以来、7年ぶりですね」

「そうだな。」

第二小隊長のMINIMIを借りるぞ」

中隊長が初任の小隊長だった時、北部方面を統括していた当時の北部方面軍が主催する北海道冬季師団対抗大演習、これは道北から道東にかけてを担当地域とする第2歩兵師団、道央を担当地域とする第7歩兵師団、後詰めとして道南を担当地域としている第11機甲師団の3個師団が機動戦闘を対抗演習という形で披露する唯一の機会であり、この演習において、敵中に孤立した第2歩兵連隊第二中隊第三小隊は、味方の救出部隊が来るまでに、幾度となく来襲する仮想敵部隊に反撃を加え、さらには逆襲の夜襲を行い、仮想敵部隊を壊滅判定になるまで叩きまくった。

このとき、周辺を包囲していたのは、演習のために予備役動員を行い、完全編成に戻った第7歩兵師団である。

第7歩兵師団創設時に、旭川に司令部を置きたいと駄々をこねた挙げ句、割りを食わされた第2歩兵師団にしてみれば、復讐のチャンスである。

まあ、そのときの中隊長は、負傷した機関銃手から奪ったMINIMI軽機関銃片手に、後に師団司令部より感状が贈られるほどの戦果をあげていた。

「懐かしいですな。」

「もう一働きしますか」

中隊長や小隊長は、各自の持つ88式鉄帽、MINIMI軽機関銃、89式小銃を確認する。

「いやはや、あれの再現を実際には出来るとは思いませんでしたよ」

MINIMI軽機関銃と89式小銃を構えた中隊長と小隊長が、敵兵に向かって突撃していく。

「第一分隊、中隊長、小隊長に続け」

「第二分隊も遅れるな」

「第三分隊、突撃」

「重火器分隊、援護、狙撃戦用意」

敵兵に向かっていった中隊長と小隊長を追いかけて、第二小隊は大きく躍進する。

「じわじわ来るぜ。」

来るぜ、来るぜ、来るぜ」

そう叫んだ第一分隊長は、狂人のごとく銃を構えて乱射していく。

中隊長を先頭に、後に坂下門の虐殺として記録される戦闘の始まりだった。

『こちらは第一作戦軍司令部第三幕僚部。

皇居内に突入中の各隊に告げる。

直ちに、皇居外周部100メートル以内から撤収せよ。

繰り返す、皇居内に突入中の各隊に告げる。

直ちに、皇居外周部100メートル以内から撤収せよ』

第一作戦軍司令部第三幕僚部から流されたアナウンスを無視して、

第二中隊は進撃を続ける。

敵兵は三々五々に逃げ散っており、それに伴って第二小隊も各方面に散り散りになっていた。

「どんどん、押せ押せ」

敵を蹴散らしていく小隊長から号令がかかり、第二小隊はさらに奥に入っていく。

『第三小隊より第二小隊。

司令部より退避命令が出ています。

すぐに戻ってきてください。

送れ』

第二小隊が戻ってこないことに気付いた第三小隊の呼びかけを、第二小隊は無視する形となった。

『第1作戦軍司令部第3幕僚部より第二中隊の第二小隊へ。

直ちに皇居内より退避せよ。

繰り返す、直ちに皇居内より退避せよ』

まだ、第二小隊が残っていることに気付いた司令部からも、退避命令が伝えられたが、それも無視した。

気付いていたのかは不明だが、そこに例の唐辛子エキス入りの水が降ってきた。

目の前の戦闘に夢中になっていた第二小隊は、上を見上げた兵士から目と喉をやられていった。

「目が、目がア」

「喉が、喉がア、焼けるように痛い」

「○●☆△×#◇」

人の言うことを聞かないバカどもの末路とは、悲惨なものである。

降下している最中に、霧状に広がった唐辛子エキス入りの水は、人の気付かないうちに、体内に侵入し、蝕んでいった。

対核兵器用に調達された放射線防護服を装備して、皇居内に突入してきた特殊武器防護大隊の隊員によつて救出されるまでの1時間、第二小隊の兵士は、そこらじゅうでのたうち回っていた。

彼らは、一応助かった。

人間の尊厳は、大分と失ったが。

そして、自身が呼んだ2トン装甲救急車に乗り込む羽目になるとは、呼んだときの中隊長は、想像もしなかっただろう。

この事件のあと、中隊長+第二小隊の面々は、命令無視の件を連隊本部から咎められ、減給処分を受けたという。

飛行隊司令官よりの命令を受けて出動した、SH—60Mシーカイトのクルーたち4名は、SH—60Mを駆って、館山から東京に飛び、やっとの思いで千代田区皇居の上空にたどり着いた。

やっとな、ここまで飛んできた。

そんな安堵の空気が、SH—60Mのなかを漂っていた。

「嘘だろ？」

アパッチが墜ちてる……」

ちょうど坂下門の上空を通過したときに信じられないものを見たかのように、機長は絶句する。

「まさか、そんなわけないじゃないですか？」

我が陸軍最強のヘリですよ」

機長の隣に座るコ・パイロットが言う。

信じられないことを目前にして、コ・パイロットは本音がほろつと出たようだ。

安堵の空気が一瞬で消失すると、SH—60Mの機内を陰鬱とした重苦しい空気が支配する。

この場にあるのは、警戒感や恐怖心である。

そんななかで、機長は命令を下した。

「音探員、特号機材を準備せよ。」

戦術航空士、投下用意を急げよ」

整備小隊により急設されたラック内に格納されている特号機材を、ソノブイ・シューターの脇に置いておく。

「音探員、投下用意。」

特号機材の装填を急げ」

「了解」

音探員は、ソノブイ・シューターの蓋を開け、特号機材を装填を始める。

「陸軍が地上でドンパチやっています」

ふと顔を横に向けて、陸軍のいるはずの地上を見て、状況を報告し

た音探員が指示通り、ソノブイ・シューターに、第1弾を装填する。技本の要員から手渡された取扱説明書を片手に慎重に、慎重に作業する。

「装填完了しました」

地上では、警告を受けた陸軍部隊が退避を始めるところだった。

「戦術航空士^{タク}、5分待て。

何い、友軍部隊が皇居内にまだいる？

分かった。

音探員は次弾装填の準備を急げよ」

陸軍との通話は、この場の最高階級者である機長が行っていた。

どうやら、皇居内に友軍部隊が残っているようだ。

「了解」

ヘリコプターの騒音のなかにも、4人は自らの仕事を継続していた。

都市上空というのは、海上を飛ぶ以上に気を使う。

「あれじゃないですか？

残っている友軍部隊って言うのは」

特号機材を装填中に、ふと外を見た音探員は指を指した。

「馬鹿者、方位と距離をはつきりさせろ」

音探員の曖昧な報告に対して、機長が後ろに怒鳴る。

「はっ。

方位10、距離2000、角度は45度」

機長は音探員が言った通りの方角を見る。

日本の植生に合わせた迷彩を使用している戦闘服を着た兵士たちが、そろそろ進出している。

野戦防護衣と呼ばれる防弾チョッキを装着した兵士たちが、敵兵を蹂躪していた。

「おう。

あれか？」

それを眺めた機長は、改めて確認をいれる。

「おそろしくおま

機長の問いかけに、音探員は頷く。

「戦術航空士^タ、マイクで呼び掛けてやれ。」

スピーカーからなら、バカどもにも聞こえるはずだ」

「了解」

機長の命令を受けた戦術航空士^タが、マイクを取り上げた。

「おい、そこのバカども。」

さっさと坂下門から200メートルのところに戻れ。」

「これは命令だ、回避しろ」

戦術航空士^タが呼び掛けるのだが、気付いた様子はない。

「聞こえているのか？」

「おい」

大声で呼び掛けている。

だが、反応がない。

「ちっ、死にたがりのバカ共め」

マイクを叩きつけるように、戦術航空士^タは規定の場所に納める。

「こちらからの呼びかけを無視。」

「どうしますか？」

「改めて、陸軍にお伺いをたてる。」

「特号機材投下の是非をだ」

赤坂御用地、第1作戦軍司令部

「第二小隊はまだなのか？」

「やつらはまだ、撤退しないのか？」

仮設のテントには、多数の幕僚たちがいて、第1旅団の隷下部隊である第1通信大隊が、電線を敷設して開設した電話越しに、現地部隊と連絡を取り合っている。

「攻撃はまだ行わないでください。」

友軍部隊が、まだなかにいるらしく」

「第1旅団の特殊武器防護大隊を呼び寄せろ。」

「こうなれば、ヘリの誤爆も考慮のうちだ」

陸軍最大の戦闘単位である作戦軍は、通常は司令部のみで、旅団などのより実戦的な戦闘単位を持たない。

有事、戦時の際に、戦闘部隊を臨時に配備されて、初めて戦闘能力を保持しうるものである。

「司令官、ご決断を」

誰かが言った。

今までの各方面との調整に奔走している幕僚たちの発していた喧騒が、一気に静まり返る。

「奴さんらは撤退せえへんのか？」

「はい」

司令官からの問いかけに、幕僚の1人が答えた。

「じゃあないな。」

仕方ない、奴らもろとも殺つてしもたれ。

わしが許可したる」

司令官の言葉に、幕僚たちが慌ただしく動き始める。

司令部に投下の許可を得ると、機長がそう述べた数刻後には、陸軍から許可が下りた。

いや、下りていたというべきか。

「戦術航空士、許可が出た。」

例の物を、落としてやれ」

日本皇国海軍沿岸警備部隊が装備しているSH—60Mは3つのタイプが存在する。

ソノブイ・シューターを搭載したタイプである1型、吊り下げ式デイツピング・ソナーを搭載したタイプである2型、両方を混載したタイプである3型である。

今回の飛行を行っているSH—60Mは、それら両方を混載した3型である。

ただでさえ、各種の重い機材を搭載した上に、今回の特号機材は重量がかさんでいる。

いつものSH—60Mの俊敏性などは見る影もなく、愚鈍な機体と成り下がっている。

「しかし、友軍部隊がまだ残っています」

「陸軍の上の方の許可は出ている。」

今更ながら、俺たちが何をグダグダ言っても、結果は変わらない。

今は、自分の任務に集中しろ」

「了解、任務に集中します」

不満の色は隠せていないものの、戦術航空士^タは、返事を返す。

そして、目覚めの悪いこの気分を切り替えるために、自分の両頬を叩く。

「しゃあー」

自然と掛け声も出た。

気合いを入れ直し、ディスプレイに向き直る。

「音探員、投下用意。」

マルチ、ナウ・ドロップ」

戦術航空士^タが、投下ボタンを押す。

ソノブイ・シューターから射出された特号機材は、重力の影響を受けて、加速しながら落ちていく。

速度がある程度まで加速すると、特号機材の頭部に装着されたパラシュートが開く。

特号機材の加速に一気に急減速がかかり、目に見えてゆっくりになる。

そして、ある一定の高度に達すると、特号機材の本体より霧状に噴出した唐辛子エキス入りの水が地上に降り注ぐ。

それを確認することなく、戦術航空士^タは次の指示を出す。

「第2弾、投下用意。」

装填急げ」

SH-60Mは、特号機材を必要量である15個ほど積み込んだ。

新開発の特号機材1個が7kgほどの重さであり、30個合わせての重さは200kgを優に越える。

1個単位では、スパーで売られている米袋程度の重さであり、音探員はすらすらと装填していく。

「装填完了。」

いつでもいけます」

「了解。」

マルチ、ナウドロップ」

音探員の報告に、戦術航空士は投下ボタンを操作した。

2個目の特号機材も、1個目と同じように落下していく。

「今、思っただんですが、良いですかね？」

「構わんよ」

戦術航空士が疑問に思ったことを、機長にぶつける。

「なんで、うちなんでしょう？」

「は？」

「どういうことだ？」

間抜けな声を出した機長は、思わず聞き返してしまった。

そういうのは、柄じゃないと思いつつも。

「こういう暴徒鎮圧は、普通なら陸軍の領分でしょう？」

機長に聞き返された戦術航空士は、慌てて質問の意図を説明する。

「まあ、そうだな」

戦術航空士の言いたいことを、機長は理解もできず、同じ気持ちである。

「なんで、UH-60Jを使わなかったのかなって、そんな細かいことを気にしちゃうんです」

日本皇国陸軍の保有するUH-60Jは、米軍のUH-60Aを、日本でライセンス生産したものだ。

本家本元の米軍の要求によってメーカーは、UH-60をベースにSH-60を開発したのだ。

SH-60ほどではないが、ベースとなっているUH-60も武装を取り付けることは可能である。

SH-60Mのように1機で、任務を遂行することはできないだろうが、2機以上の複数機の編隊を飛行させれば済む話だ。

「まあ、そうだな。

そんなことになっていけば、俺たちは今ここにいないだろう。

だが、俺はこれで、こうなってよかったと思ってる」

機長はそう言った。

「どうしてですか？」

しかし、戦術航空士は納得しなかった。

機長は改めて、戦術航空士に問いかける。

「これは、ある人からの受け売りなんだが、後世で歴史と呼ばれるものを作るのは、誰だと思う？」

「歴史を作るのは、ですか？」

「そうだ」

「政治家たちですか？」

「それは違う。」

歴史を作るのは、今この時代を生きてる俺たちだ。

俺たちが何か行動を起こせば、それは歴史として記録される。

今回の件もそうだ。

歴史に名前は残らなくとも、歴史の1ページを飾る事件に関わったんだ。

それが、俺たちの誇りだ」

機長の言葉には、重みがあった。

「さあ、俺たちは、俺たちの仕事を終わらせよう」

調子の一転した声で、機長は言った。

「了解」

話をしながらも、作業を続けていたおかげで、特号機材の残りは半分を切っていた。

「残りはもう半分です」

特号機材の残り個数を、音探員は報告を入れた。

何回も装填を繰り返し返していただけあって、もう慣れきっていた。

「よし、やりきるぞ」

出動していたSH-60Mは、皇居上空で大きく旋回した。

次々、多数の特号機材を彼らは、阿吽の呼吸で落としていく。

「さあ、次で仕事も終わりだ。

酒盛りすんぞ」

機長の一声に、ウエイイと機内は盛り上がる。

「最後の1個、最後の1個」

酒盛りと聞いた音探員がノリノリで、装填を行う。

ソノブイ・シューターの蓋を閉め、戦術航空士^タに対してサムズ・アツプを行うと、同時に報告をする。

「装填を完了しました」

「最後の1個、投下用意。」

最後の1個、ナウドロップ」

この空間にいる全員のテンションがおかしい気がするが、ヘリという密室空間ゆえに誰も気にする人がいないので、放置されている。

「よっしゃ、仕事は終わった。」

館山に帰るぞ」

時は少し巻き戻って、SH-60Mシーカイトが千代田区の皇居上空に到着した頃

東京・神奈川県境周辺の東京湾・羽田空港沖

この事態を受けて、沿岸警備法の規定により、警戒海域及び制限海域に指定された東京湾には、沿岸警備部隊所属の多数の艦艇が散っている。

沿岸警備部隊の艦艇群は、艦艇毎の性能差が激しいために、現代の艦隊戦には対応できないが、後方地域におけるこういった数の動員は、沿岸警備部隊の得意とするところである。

「大田区沿岸域より、小型船艇が出航。

方位015、速度22kt、距離17500。

外洋に向けて、進行中」

CIC内にあるレーダー・ディスプレイを監視していた下士官が告げる。

「意外と近いな。

臨検部署発動、対水上戦闘及び臨検戦用意。

直ちに立入検査隊を召集せよ」

陸空軍部隊と連携する形で、東京湾に展開した横須賀鎮守府艦隊のイージス巡洋艦“そうや”の艦内は、慌ただしく動き始める。

北朝鮮の核及び弾道ミサイルによる恫喝が相次いで発生する状況にあつて、非核保有国は核保有国に対して安全保障を求めると判断した日本皇国海軍と国防省は、弾道ミサイル防衛能力拡充のため、保有するイージス艦の増勢を決断した。

しかし、だからといって予算や様々な問題からすぐには増やせる状況にはなく、あたご型の追加建造、つまり新造艦による取得を諦め、退役したばかりのタイコンデロガ級ミサイル巡洋艦を購入し、大改装を施すことよつて、日本皇国海軍全体のイージス艦の増勢を行った。

アメリカ側の好意によりイージスシステムのベースラインのアップデートが行われた上で、1隻3億ドルという破格の価格で売却され

た。

ヴァージニア州のノーフォーク海軍基地で、空路からアメリカに入国した回航要員に引き渡され、各艦に日本皇国の海軍籍にある軍艦であることを示す旭日旗が掲げられた。

中継点であるハワイ・真珠湾を経て、日本に到着した各艦は日本各地の造船所に入渠し、大改装を施された。

その再進水の際に、ネームシップであるCG-47"タイコンデロガ"が"みようこう"、CG-48"ヨークタウン"が"ちようかい"、CG-49"ヴェンセンス"が"そうや"、CG-50"ヴァリー・フォージ"が"あおぼ"、CG-51"トーマス・S・ゲイツ"が"きぬがさ"と再命名されている。

建造当初から搭載していた装備のうち、Mk. 45 5インチ単装砲2基、Mk. 38 25mm単装機銃2基、Mk. 15 20mm CIWS・2基と、M2 12.7mm単装機銃4基は性能的に問題がないと見られたため換装されず、ミサイル装備の中核をなすMk. 26ミサイル連装発射機2基のみが取り外され、Mk. 41垂直発射装置64セル2基が付与された。

ここまですにかかった総予算は約4000億円、新規建造したときの値段は約9000億円前後と見積もられており、大幅な予算圧縮となった。

搭載するイージスシステムのベースラインのアップデートにより、弾道ミサイル防衛能力を得たみようこう型は、SM-3 Block II Bの配備を以て、各地の要所に配置された沿岸警備部隊隷下の艦隊に配備され、実戦配備に就いた。

"1つの中国"を主張する中国側の圧力によって、台湾にイージス艦の供与ができないアメリカ海軍は、日本皇国海軍のイージス艦戦力を充実させることによって、中国への軍事的圧力としたい構えだった。

自国の領域を守るための弾道ミサイル防衛能力の強化のためにイージス艦が欲しい日本皇国と、中国を刺激せずに台湾を守るための圧力をかけたいアメリカの、その両者の思惑が一致したことにより、

今回のイージス艦の一括売却が認められたのだ。

これが、タイコンデロガ級イージス巡洋艦が日本皇国海軍軍艦籍にある理由である。

そして、艦長の発令した命令に従い、立入検査隊の要員に指定されている者は、武器管理を担当している下士官から銃器を受け取り、甲板上に集結する。

その頭には88式鉄帽テッパチを被り、救命胴衣カボックの上から着込んだ防弾チョッキをも兼ねるタクティカル・ベストには、大量の弾倉を差し込んでいる。

腰にはナイフとピストルが光り、実戦であることを感じさせる。

その様子は、イージス巡洋艦“そうや”の随所に据えられたTVカメラが捉え、CICのモニターでも確認できる。

「やらなければならないことが、不審船対処なら、この旧式艦にも出番があるさね」

CICのメインモニター、立入検査隊の隊員が映るそれとはまた別のモニターに映されたレーダーの画面を見る。

「距離1000まで接近する。

取り舵15」

海面を滑るように、大きく旋回していく”そうや”の艦体は、発見した小型船艇の方に進んでいく。

”そうや”と該船舶との距離は、3500まで近づいた。

「該船に船舶記号なし。」

「明確な沿岸警備法違反です。」

モニターに映し出された目標船舶の画像を見た法務担当士官である砲術士が述べた。

法務担当士官とは、日本皇国海軍における作戦行動に法的な瑕疵がないかを確認し、それを承認することを認められた士官のことである。

覚えなければならぬ法律の量から、彼らは”歩く六法全書”と揶揄されているのだ。

沿岸警備法第25条の規定によると、日本の領海もしくは排他的経

済水域内を航行する船舶に対しては、日本皇国海軍に届け出をし、担当部署より数桁の数字の船舶記号の付与を受け、さらには日本の水域内を航行しているときには、それを確認できるように掲示することを義務付けている。

「方位・速度ともに変わらず。

距離1000」

「停船命令を発令せよ。

停船が確認でき次第、立入検査隊による臨検を開始する」

沿岸警備部隊が活動の根拠法とする沿岸警備法では、現場の指揮官に大きな裁量を認めている。

さらには、沿岸警備法は第27条において、重大な事態が発生した際には、政府の承認なしに沿岸警備部隊は特定海域における民間船舶の航行を制限する命令を発令できると規定している。

今回、沿岸警備部隊横須賀鎮守府艦隊が出動したのも、この規定により東京沿岸が警戒海域として航行禁止に、東京沿岸と近接する東京湾内を制限海域として、指定されたがためにそれを守るように監視するためであった。

沿岸警備部隊は、民間船舶の航行を自粛するよう要請しているが、これは事実上の命令だった。

「該船は、2つの違反か。

パクするには、十分だな」

別件逮捕、日本警察の大好きな言葉であるが、それは沿岸警備部隊も変わらなかつたりする。

ある事案における明確な違反行為を確認した場合、警察や沿岸警備部隊は容疑者の他の違反の有無を確認することが多い。

「該船は、本艦よりの停船命令を受信しましたが、それを無視しました」

「3つ目だ…3つ目の違反だ。

このことから、悪質な違反者だと思われる。

適度な範囲での、武器使用が必要と判断される。

以上」

沿岸警備部隊に大きな権限を認めている沿岸警備法には、さらに臨検の忌避に関する条文がある。

これは、武器使用を判断する大きな指針となっているもので、沿岸警備部隊の艦艇より発せられた停船命令を無視した船舶は、直ちに敵対意思のある敵性船舶と判断され、艦載のミサイルを含むありとあらゆる兵器群による攻撃を認めるという条文となっている。

法律論上の議論のなかのさらに極端な意見ではあるが、そこに核があっても、指揮官の判断でそれを使用しても問題ないと判断できるのである。

これは、朝鮮戦争の際に北九州については日本全土への難民の大量流入を防げなかったへの反省を含んだ内容となっている。

というのも、朝鮮半島における南北間での戦争勃発の報を受けた日本政府は、時の宰相吉田茂首相のもと、召集された関係機関と協議の上、今後発生するであろう難民を対象とした人道的支援の必要性を確認し、草案として纏められていた朝鮮半島における戦争勃発に伴い発生した難民受け入れに関する特別措置法、これを事前に国会で制定していた。

その基本方針は、言い方は悪いが”難民の強制隔離”である。

難民が大挙して押し寄せるであろう北九州各地に収容所を設置し、日本に到着した難民を受け入れ、戦争が小康状態となり次第、入国管理局の係官の付き添いで、国外に退去させるという穏当な形の案ではあった。

そして、国、地方自治体、警察庁、国防省、法務省、実働部隊である福岡県警と沿岸警備部隊の共同でたてられたその計画の草案によると、難民の無秩序な流入は海上で阻止するとの記述があったのだが、しかし、実際には阻止しきれなかった。

沿岸警備部隊は、海上公安法と呼ばれていた当時の活動根拠法の法律上の問題から、海上での指示に従わない難民船への威嚇も含めた発砲ができず仕舞いで、不法と判断できる難民への摘発が後手後手に回ったのだ。

沿岸警備部隊の警戒線が突破されたときに備えて、北九州や山陰に

ある港湾を警戒するはずの警察官は、日本全国からかき集めようと
も、同じように日本全国の駐屯地から、陸軍の歩兵を動員しようとも、
絶対数が足りなかった。

1度、魚に食い破られた網は、使い物にならないように、態勢を再
構築し直しても、沿岸警備部隊や警察の敷いた二段構えの警戒線は穴
だらけだった。

そして、そのときに入り込んだ難民が、現在の在日韓国人の中核を
なすものとなっている。

そのことには、大きな訳がある。

なぜなら、戦前や戦中にやって来た韓国人、当時の言い方で言えば
朝鮮人は、戦後すぐに日本への帰化か、僅かばかりの金を渡されての
国外退去かを選択させられていたためで、大半の人物が、日本から独
立したばかりの南北朝鮮の国籍を放棄した。

その人物らは、日本に帰化するに当たって、自ら善き一市民として、
法律を守り、日本への害となる行動を起こさない旨の誓約書にサイン
をして、日本国民になつていたのである。

「結局、我々は2度目の轍を踏むことはない。

それは、絶対だ」

最大望遠で該船を捉えたモニターを見据えた艦長が言う。

「そうや」乗員に配布されるキャップの上に、さらに鉄帽テツパチを被り、
作業服の上から救命胴衣カボックを着込んだ日本皇国海軍独特の戦闘服装だ。
「この仕事を一生の仕事にすると決めた我々には、危機にある国民の
生命を、財産を守る義務がある。

それは、いかなる相手であろうとだ」

だからこそ、日本皇国軍はどんな相手だろうと、一步も引かずに喧
嘩を挑む。

その相手が犯罪者や敵軍とは限らないのだ。

例えば、在日米軍兵士による少女暴行事件が発生した際には、政府
の命令があり次第、各地にある在日米軍基地を制圧できる態勢で、陸
軍部隊が展開していた。

この圧力が効いたのかアメリカ国防総省は、公式に日本国民に謝罪

し、不平等な条項の目立つ日米地位協定の改定及び米軍兵士の夜間外出禁止を含めた実効的な再発防止策を早期に実施することを、議会の承認のもと発表した。

いずれの時代であっても、国家の命運よりも、国家の尊厳が優先されるべき時もある。

それが、鎌倉時代の元寇であり、幕末の生麦事件、下関外国船砲撃事件、昭和時代の太平洋戦争である。

大抵の場合、いや元寇以外のその行動の結果は見るも無惨なものに終わっているが、目に見えない成果もあった。

国の命運と尊厳を天秤にかけて、適切な判断ができる人材の育成に成功したからだ。

近代日本の礎を築いた明治維新の原動力となった人材は、各々が生麦事件を原因に勃発した薩英戦争や下関外国船砲撃事件を原因に勃発した下関戦争の時代を戦った薩長の若い青年たちだし、長かった太平洋戦争が終わり、荒廃しきっていた日本皇国の戦後復興を支えた人材もまた、戦争世代である。

無駄に話は長くなったが、ときに国家の尊厳や意思を主張することは、右翼左翼関係なく、政治家には必要なことなのだ。

「撃沈警告を送れ。」

該船に対し、警告射撃用意。

弾数4発、弾種は第1射・第2射は徹甲弾、続けての第3射は榴弾、第4射は85弾を使用、弾種変更は5分で完了させよ。

以上、直ちにかかれ」

「了解」

艦長の指示を受けて、砲雷科員たちは忙しく動き始めた。

元はアメリカ海軍の艦艇である”そうや”の主砲であるMk. 45のシステムは、他のアメリカ海軍の艦船と同じように、砲塔と船体の構造間にガン・マウントと呼ばれるシステムが介在しており、Mk 45 砲塔のガン・マウントは自動装填で、装弾数は20発である。Mk 45の砲塔自体は無人化されており、完全な自動管制のもとで射撃がなされる。

そして、最大発射速度で20発を使い果たすのに1分少々かかり、その後の射撃に備えて、ガン・マウントは甲板下で3名のオペレーターによって砲弾の供給がなされる。

露天甲板の下の第1甲板では、ガンマウントさらに砲架から装填されていた砲弾が取り出され、新たな砲弾が込められていく。

艦長の指示通り、弾種変更は5分以内に終了した。

「弾種変更完了。」

いつでも、撃てます」

”そうや”の前甲板に据えられたMk. 45と呼ばれる5インチ単装砲は、該船に指向していく。

”そうや”のMk. 45砲が出しうる最大限の旋回速度を以て、5インチ砲は目標に指向する。

「主砲、撃ち方用意。」

警告第1射、発射用意。

撃て」

「砲術士、第1射、撃て」

艦長の号令に被せるように、砲雷長が命令を叫んだ。

砲雷長の命令に従い、砲術士は引き金を引いた。

そのまま流れるように旋回した”そうや”上甲板の5インチ砲が咆哮する。

その光景をCICのモニター越しに見ていた艦長は、発砲の瞬間、腹にずしりとした衝撃を感じた。

人間の目では捉えきれないが、超音速で空中を飛翔した砲弾は、該船と呼ばれる小型船舶のすぐ脇の海面に突き刺さった。

5インチの砲弾が着弾した海面には、大きな水柱がたつ。

それが終息する頃には、”そうや”の艦影が大きく迫っていた。

「第1射、夾叉」

モニターを見ていた若い砲術士官が報告する。

「続けて第2射、発射用意。」

撃て」

「砲術士、第2射、撃て」

さきほどと同じ順序で命令が下り、砲術士は引き金を引いた。

「第2射も夾叉。」

繰り返します、第2射も夾叉」

モニターを見ていた砲術士は、そこで信じられないものを見たかのように、また報告をする。

実際に2回連続の動く目標に対しての射撃で、どちらも夾叉を叩き出すのは、不可能に近いことだ。

「第3射は命中コースに乗せ、着弾直前に起爆させよ」

「弾火薬供給所、第3射は装填済みか？」

まだ？

分かった。

第3射に使用する榴弾には時限信管を使用し、発射後2秒がたつてから起爆するように、設定せよ。

よろしく頼む」

艦長の命令を受けた砲術士が、弾火薬供給所にいる部下たちに命令を下す。

その言葉に込められた艦長の意図は簡単だ。

敵に恐怖を、心からの恐怖をじわじわと与えていくつもりなのだ。

また、相手が韓国人であろうと言う艦長自身の判断もあり、最初の砲撃は4発連続で行うことを決めていた。

四し死しとして、この”し”という音で繋がるこの数字を、不吉の数字として嫌がる日本人も多いのだが、その日本人以上に韓国人はそれを嫌うのだとか。

だから、韓国のビルの多くには、4階の表示はないらしいと、艦長はそんな話を、韓国の駐在武官だったことのある米軍士官から聞いたことがあった。

「第3射、発射用意。
撃テて」

元々の目的が、嫌がらせのための警告射撃だ。

2発の夾叉弾の着弾は、こちら側は相手をいつでも殺せることを、分かりやすく明示したはずだ。

「第3射、撃^{テッ}て」

艦長の号令に被せるように、また砲雷長が命令を下す。

Mk. 45 5インチ砲は、火を噴いた。

「全艦、合戦準備。」

立入検査隊^{たちけんたい}に対して、銃火器携帯命令を発令する。

銃を携帯した兵員は、直ちに露天甲板上に集合せよ。

砲雷長、指揮を頼む」

砲撃の結果を待たずに、艦長は命令を下す。

「了解」

指示を聞いた砲雷長は返事をして、C I Cから出ていく。

C I Cのモニターから見た”そうや”の砲撃は、きちんと該船の直前で破裂し、爆炎と爆風を周囲に撒き散らした。

発生した爆炎は該船の甲板や外装を焦がし、そして爆風は甲板上にある備品を吹き飛ばした。

「第4射、発射用意^{テエ}撃^{テエ}て」

艦長の指示は、砲雷長がいないために、ダイレクトに砲術士に伝わった。

発射された85弾は、該船とその周囲に破片を撒き散らした。

その破片群は、該船を沈黙させるには十分だった。

「該船、沈黙しました。」

立入検査隊^{たちけんたい}を送りますか?」

「うん?」

ああ、立入検査隊^{たちけんたい}か?

まだ、構わん。

該船は……まあ、放っておけ。

今、甲板で待機させている立入検査隊^{たちけんたい}は、絶対に動かすなよ。

何かが起こるやも知れんからな」

モニターを見ていた砲術士の問いかけに、モニターを流し見て、該船の状態を確認した艦長は答えた。

何かしらの胸騒ぎがしていた。

こういう第六感が全力で警鐘を鳴らしているときは、大抵の場合、碌なことが起こらないと、それなりに長い人生のなかで艦長は身に染みて分かっていた。

そして今、その通りのことが起こりつつあった。

「電探に感。」

多数の対水上目標が本艦に向け、接近中。

方位335、距離5000、数は数えきれません」

「やっぱしか」

そう漏れたのは、艦長が腹から絞り出した掠れた声だ。

「該船との共同正犯関係ありと判断。」

これより、”そうや”は先制攻撃により、これを撃滅する。

主砲は、多目標同時対処となる。

そうなると旧式の主砲を、酷使うことになるだろうが、大丈夫か？

「大丈夫です。」

これが、何回も続くようならば、

「砲撃戦用意。」

現時点で本艦にもっとも近接しつつある目標群、これを第1目標とし、指示あり次第、主砲にて撃滅せよ。

続いて、第1目標の後方にあつて、次に近接しうる目標群、これを第2目標と呼称、25mm機銃及びCIWSにて対処せよ。

さらに本艦に近接せし目標群、第3目標と呼称、ブローニング12.7mm重機関銃を含む、甲板上に展開中の立入検査隊たちけんたい隊員による射撃で対処せよ。

以上、かかれ」

艦長の指示が飛ぶ。

「了解。」

主砲、砲戦用意」

その指示を受けて、砲術士官がインカムマイクに向かって叫んだ。

「主砲、撃ち方用意。」

目標、第1目標中の1隻、選択は砲術士に任意で任せる。

主砲、第1目標、撃ち方始めうちかたはじめえ」

艦長の指示が出て、砲術士は引き金を引いた。

タイムラグもなく、発射された砲弾は、狙った舟艇を一撃で粉碎する。

「第2射」

C I Cのなかで、砲術士は呟いた。

さらに、別の舟艇に狙いを定めて、引き金を引く。

”そうや”の5インチ砲から発射されたそれは、先ほどの光景を再現する。

それを何回も、何回も、何回も、何回も繰り返した。

「畜生、敵が減らない。」

これじゃあ、きりがないぞ」

人の生命を殺傷することに、疲弊した砲術士が呟く。

「接近してくる該船は第2目標、急速接近中」

「それらの目標に関しては、25mm機銃及びC I W Sで対処せよ。」

第1目標以遠の敵を、主砲は撃滅せよ。

C I W S、コントロール・オープン」

対水上電探のモニターを監視していた下士官の報告に、艦長が砲雷科に指示を出す。

対水上電探のモニターの、その方向は小型舟艇の群れで覆われている。

「手加減は必要ないぞ。」

自爆船だったら、やばい」

付け加えるように呟いた艦長の、その声はC I Cに響くことはなかった。

射撃を開始したM k. 38 25mm単装機銃とC I W Sの射撃は、正確だった。

接近してくる舟艇群を、的確に射撃して、沈黙させていく。

「なおも、て、該船は接近中。」

以降、第3目標と呼称する」

「敵船と呼称して構わん。」

これは、もう既に戦争に発展している」

敵船と言おうとして、訂正した下士官に、艦長はそう呼称する許可を与える。

「了解。」

第3目標、距離1200」

改めて、CICのレーダーのモニターを見ると、第3目標の舟艇群が接近しつつある現状が見てとれる。

「砲雷長、接近しつつある第3目標の状況は確認できるな？」

…よろしい。

適宜、発砲して撃退せよ。

以上だ」

艦長は、甲板上にいる砲雷長に指示を与える。

そして、艦長から指示を与えられた砲雷長は、立入検査隊員に指示を出す。

「接近しつつある第3目標に対して、発砲用意」

砲雷長の声に、甲板上にいる全員が銃を構えた。

彼らが持っているのは、必要なときに威力不足で使えない89式小銃ではなく、64式小銃と同じ7・62mm NATO弾を使用する90式小銃である。

開発時期が被っているため、部品の大半を89式小銃と共用しているとはいえ、7・62mm NATO弾の強すぎる反動を抑えるための反動抑制装置を組み込んである。

その結果、発射した際の反動は、64式小銃の3分の1程度にまで、軽減された。

同じ7・62mm NATO弾を使う64式小銃の採用から26年間で、その間の技術の進歩によって、90式小銃は64式小銃よりも使いやすく作られているのだ。

「各員、安全装置は外したな？」

砲雷長の問いかけに、甲板上にいる全員が頷く。

「分かった。」

各員は目につく目標に対して発砲、撃^{テッ}て」

距離200メートルにまで、引き寄せられた舟艇群は、次々と”そうや”立入検査隊員により、狙い撃たれて沈黙した。

「まだまだ、奴らは来るぞ」

艦長の出した最初の指示から、数分がたち、それでも敵の攻勢は止まらない。

そのことを考えていた艦長は、まだまだ敵が来ると判断していた。

その考えの通り、この戦場の状況は、混沌としてきていた。

Mk. 45 5インチ砲が、Mk. 38 25mm単装機銃が、CWSが、立入検査隊員が発砲を続けていく。

そのなかでも、敵はにじりにじり近寄ってくる。

「第3目標、本艦にさらに近接」

”そうや”CICでは、電探を監視していた下士官の報告に、艦長が指示を出す。

「距離100になったら、炭酸ガスシステムを使い」

統一的な海上消防組織が存在しないことから、沿岸警備部隊は消防設備の拡充にも力を入れてきた。

というよりも、入れざるを得なかったのである。

その不断努力の結晶が、火災消火システム3型である。

技術研究本部と中小企業が共同で開発した特殊な薬品により、空气中の酸素を炭酸ガス化させ、さらにそれを凝固させることによって、発生した火災の鎮火を行うと同時に、火災の周辺における温度の低下を促すものである。

現場の部隊でも、本来の用途である消防用設備として使われたり、さらに今回の場合のように、用途外も甚だしいのが、不審船対処で使われることもある。

このシステムの大きな特徴が、システムの投射能力の向上である。

同じようなシステムである炭酸ガス消火システムは、固定式で設置した場所でしか使えなかった。

そんな旧式に比べて、07式擲弾発射機に40mm擲弾の弾頭として装填可能であり、遠距離から窓や扉をぶち破るだけの威力とともに、射程も大幅に延長された。

携帯性もあるために、現場では様々な用途に使用されているのだ。少なくとも対人集団戦であれば、今現在使われている7・62mm NATO弾や5・56mm NATO弾よりは威力があると考えられている。

発射された擲弾は、舟艇の船室に飛び込み、破裂した。弾頭のなかに入っていた薬品は、船室内の酸素を奪い、人員を窒息させた。

それどころか、空気中にあつた酸素から変化した二酸化炭素により、エンジンが停止にまで追い込まれた。

行き足の鈍った舟艇は、屠殺されるのを待つ家畜でしかない。

そのなかの乗員は全滅しており、自らの運命を悟り、悲観そして後悔するものなどいかなかったのだ。

敵の舟艇が次々撃破されていく現状では、敵の物量にも限界があるはずだ。

意外にも、その限界はすぐに来た。

「電探が捉えていた目標、全滅」

電探担当の下士官が、声をあげた。

「残弾数を教えてくれ。」

必要なら交代の艦を呼んで、補給を受ける」

敵の波状攻撃を凌ぎきつた”そうや”だったが、その代償が弾薬の消耗である。

”そうや”はもう既に、満身創痍だった。

次はもう止められない。

そう気づいてしまったのだ。

「はっ、報告します。」

主砲弾は元々の搭載数が少なく、残弾はありません。

C I W Sも即応弾薬は、既に撃ち尽くしています。

M2ブローニング、90式小銃等は、まだ在庫はありますが、それも心許ない状況です。

補給を受けることを、要請します。

以上です」

砲雷科士官の一人が報告する。

「はあ、そうか。」

よろしい。

通信士、艦隊司令部宛に、この旨打電してくれ」

艦長の命令を受けて、通信士は通信室に連絡を取る。

「新たな目標、捕捉。」

本艦との距離1000を維持したまま、離脱中。

方位260、速度45kt、以上」

一段落したと思われるところへ、それを裏切る一報が入る。

「主砲、CIWS、どちらも弾切れ。」

阻止不能だ」

モニターの画面には、その目標が映っていた。

あれが本命だったのか。

数多くの船が沈んだこの海域には、その破片がまだ散乱している。

それだけの船を捨て駒にして、彼の船は逃がっている。

CIICのなかに、目に見えて落胆が広がっていた。

自分たちが今までやってきたことは、なんだったんだろうかと。

誰もが無力感にうちひしがれていた。

その次の瞬間、モニターを閃光が包む。

「何だ？」

真っ白になったモニターを見ていた艦長が叫んだ。

画面が回復する頃には、黒い服を着た男たちによって、その船は制

圧されていた。

何が起こったのか分からないほど一瞬で、その船は制圧されていた

のだ。

「たぶん、江田島の特殊制圧部隊SAGですわね。」

こちらから内火艇を使って、立入検査隊立ちけんたいを送りますか？」

「そうしてくれるか？」

砲術士が状況を冷静に判断をし、艦長に提案をする。

そして、艦長はそれを承認した。

ほとんど停止状態に近かった”そうや”であったが、今では完全に

停止していた。

甲板上では内火艇要員たちにより、作業が進んでいた。
「うむ。」

これでいいのだ」

それを見ながら、艦長は言った。

最初に、この話に登場する彼らの話をしよう。

日本皇国海軍最強の陸戦部隊であり、世界の海洋における日本船籍にある船舶群の保護を行う部隊だ。

そして、何かと物騒なこのご時世では、海賊の襲撃、戦争当事国の海軍部隊、さらにはテロリストなど、日本船籍の船舶への脅威はいくらでも存在するのだ。

そして、江田島の海軍特殊作戦支援センターを根拠地とする特殊制圧部隊^Aは、そのための部隊であり、正規軍指揮下に編制されている特殊部隊の元祖のような存在だ。

所属元である日本皇国海軍沿岸警備部隊そして連合艦隊は、能登半島沖不審船事案の対処において、船舶を強襲して制圧する能力が欠如していることが露呈した。

その結果、特殊部隊の編成を決断し、それに着手した海軍は、明確な目的を検討していた。

いかなる部隊であっても、運用目的が明確でなければ、使いどころを誤って、磨り潰されるかもしれない。

そんな懸念が上層部にはあったのだ。

取り敢えず、”船舶の強襲制圧能力の確保”を明確な運用目標として、編制された特殊部隊の能力は、この20年で情報作戦に投入できるレベルにまで、大きく向上している。

そんな裏の活動に投入されている彼らの、表の行動の1つが今回の東京湾^{オペレーション・コーストウォッチ}査察作戦である。

東京湾沿岸・羽田空港第1エプロン

日本皇国軍にとって、寝耳に水の事態である皇居襲撃事件とは関係ないことはないのだが、特殊制圧部隊^Aは東京近郊にある羽田空港にいた。

後部の空挺降下用のハッチを開放して、臨時の喫煙所に使っていた。

ほとんど無税に近い軍内売店で買ったセブンスターを啜えて、機長は言う。

「寄り道なんて聞いてないぞ」

横浜上空の航路帯を飛行中に、飛行管制から届いた命令に対して、機長はつい口を荒げる。

「正式の命令もまだ来ていない。」

予定通りだったなら、今頃、千歳空軍基地で給油している頃なんだから」

火を着けた煙草を燻らせながら、羽田空港を見渡す。

周りはずいぶん、軍事オタクに囲まれていた。

この機体が行おうとしていたのは、月に1回、持ち回りの小隊が参加する長距離巡航からの空挺降下及び潜水からの船舶強襲訓練である。

沖縄の嘉手納航空基地を発進した編隊は、無給油で北海道の千歳空軍基地まで飛び、そこから夏に近いとはいえ海面へと空挺降下の後、敵軍が島嶼に密かに上陸し、占拠したという設定の硫黄島にある施設の奪還作戦を行うものだ。

この極秘の訓練計画は、その飛行ルートから三角関数オペレーション・タンジェント作戦と呼ばれている。

その平穩無事な日常を崩したのは、MC-130Rアスタリフター特殊部隊支援機の司令部設備の1つである衛星電話である。

その電話をとることを許されるのは、この場における最高階級保持者である。

この場合は、特殊制圧部隊S第1小隊長である大尉であった。

こうして、訓練は中止になり、この機体とこれに乗り組んでいる特殊部隊には、待機命令が発令されているのだ。

羽田空港の第1エプロンに集結している軍事オタクたちは、この機体は海軍航空隊輸送飛行隊の機体だと考えているだろう。

C-130RハーキュリーズとMC-130Rアスタリフターの見た目には、塗装を含めて違いがない上に、公式には特殊部隊支援機は、最新技術を付与するために改修中とされているからだ。

「市ヶ谷の情報本部の正式な情報によると、今後24時間以内に緊急事態が発生しそうだ」

遅れて顔を出したのは、特殊制圧部隊^{S A G}第1小隊の小隊長だった。自分の煙草を持ち出し、火を着け、大きく息を吸い込む。

この行為自体が惰性で行っているものであったが、それでも止められないのだ。

「出動命令がかかるのか？」

「分かん。」

今、言えるのは、未だに出撃命令^Qでも、出撃準備命令^R、治安出動命令^Tですらも発令されていない。

そして、治安出動準備命令^{T R}が、今さつき出たそうだし

外にいる群衆に視線を向けながら、小隊長は言う。

「間が悪いな。」

これから、俺たちは訓練だったんだ。

結局、どうなんだ？」

「だから、分かんと言っているんだ」

声を荒げた第1小隊長が答えた。

「いや、今、何が起こってるんだ？」

「この日本皇国という国で……」

「それこそ、分かん。」

どっかの国のテロリストが皇居でも、襲撃したのかもしれない

煙草を燻らせながら、小隊長は推測を述べたが、それは今回の騒動

そのままとは、このときの誰しもが思わなかった。

「こちら、ワイルドベア・プラトーン。」

用件をどうぞ」

数十分後に、MC—130Rアスタリフター特殊部隊支援機の電話機に電話がかかってきた。

この番号を知るのは、海軍軍令部と統合参謀本部特殊作戦司令部のみである。

『特殊制圧部隊^{S A G}第1小隊ですか？』

「そうです。」

出動命令ですか？」

『こちらは、海軍軍令部ですが、その通りです。』

貴隊は、東京湾封鎖に当たる横須賀鎮守府艦隊支援のために、直ちに出勤してください」

海軍軍令部の若い参謀が、電話機の向こうから話しかけてくる。

「了解。」

作戦計画は、首都防衛作戦計画における海域封鎖のものでよろしいか？」

『それで、大丈夫です。』

出来るだけ早く、お願いします」

「了解」

受話器をもとの位置に戻した小隊長は、背後にいる部下たちの方にきびすを返して、大声で叫ぶように言った。

「直ちに出勤する。」

我々にとつて、初めての实戦だ。

事故等のないように、各員は装備をきちんと確認せよ」

第1エプロンに駐機中のMC-130Rアスタリフターのなかで、特殊制圧部隊第1小隊長が、待機していた部下たちに、さらに声をかけた。

「サブ・マシンガンと閃光爆弾を持っていけ」

彼らの主武装は、特にはない。

この状況により、メインとなる武器を切り替えるためであり、さらにはそのすべての武器の取り扱いに熟達しているからである。

今回の場合は、肩から提げたH&K MP-5JNと呼ばれるサブマシンガンである。

その他に、レッグ・ホルスターにSIG-ZAUER P-226ピストルを、腰に装着した弾薬囊にスタングレネードや手榴弾を携帯する。

さらに、胴体には防刃防弾ベストを装着している。

これは、日本の誇る炭素繊維をふんだんに使い、仕上げられた逸品である。

炭素繊維で織られた布を、同じく炭素繊維ケーブルを使って縫製して、後からセラミックプレートを挿入して、完成するものである。

PALSテープと呼ばれる陸軍の防弾ベストと同じシステムを採用しており、各種の装備品を、簡単に装着できる。

各自が、その銃器や装備を点検する。

「確認よろし。」

異常なし」

日本皇国海軍特殊部隊の迅速な展開を支援する航空機として、MC-130Rアスタリフター特殊部隊支援機が使用されている。

ロッキード・マーチン社製の完成機を輸入し、川崎重工で大改装を加えたこの機体のなかにある巨大な機内スペースには、特殊部隊の仮設司令部と武器弾薬庫が設置され、さらには赤外線暗視装置などの様々な装備が追加搭載されているが、この機体は輸送機としての能力も、十分に残るように設定されている。

「状況説明を始める。
フリーファイニング

全員、集まれ」

海軍の部内では、部隊帽と呼ばれているキャップを被った隊長が、部下たちを呼び集める。

現時点の羽田空港は、特殊部隊の仮の行動拠点となっている。

この事件の発生した際に、偶々この特殊部隊支援機が特殊部隊ごとここにいたのである。

これ幸いとばかりに、軍令部はこの部隊を他任務に転用したのである。

「我々の任務は、東京湾封鎖任務に当たる横須賀鎮守府艦隊の支援である。」

これは、首都防衛作戦計画の2項に該当する」

東京湾の地図が貼られたホワイトボードの正面に、部隊長は立って話し始めた。

「ほんの少し前に発生した皇居襲撃事件に伴い、我々、日本皇国陸海空軍に出動命令が下った。」

そこで、羽田空港に臨時に展開している我々も、東京湾封鎖に転用されることが決まった。

我が部隊における作戦名は、オペレーション・コーストウォッチ東京湾査察作戦。

この作戦の概要について説明する。

これを見てくれ」

部隊長は手元のタブレットからあるアプリの画面を、プロジェクトアターを使ってホワイトボードに映写する。

それは、東京や千葉、神奈川などの東京湾沿岸の関東地方を含む東京湾の地図であった。

「陸軍と警察は、環状7号を4個旅団と機動隊を使い、完全に包囲中だ。

その環状7号の描く円内には、さらには第1旅団が活動中である」
部隊長の声に合わせて、映像に部隊ピンが現れる。

どの部隊がどこにいて、何をしているのが、一目瞭然だ。

「それに、海軍航空隊が、制圧作戦の支援を行っている。

また先にも言ったが、横須賀鎮守府艦隊が東京湾の封鎖に駆り出されている。

我々はその外周部に展開して、水上艦隊の網から、抜け出た不審船を強襲制圧する。

抵抗があるなら、即座に排除しろ。

そのためであれば、射殺もやむなしと軍令部も言っている」

部隊長が口にしたのは、射殺許可命令が発令されているも同然のことだった。

全員がそれに頷く。

その言葉を聞いたとき、その場にいた全員が、自然と自らが持つ銃器に手を伸ばした。

彼らは1回も実戦を経験したことがなく、人に向かって、引き金を引いたことがない。

人を殺したことがないのだ。

自然と緊張が、彼らの身体を強ばらせていた。

「配置について、説明する。

目標となるのは、おそらくプレジャーボートレベルの小型舟艇となると思われる。

よって、今ここにいる第1小隊を4個班に分割して運用する。

羽田にて待機中のMH-60Jを使い、展開する予定だ。

詳しい座標はヘリの乗員に指示しているが、1班はここ、2班がここ、3班がここ付近に展開する。

さらに4班はここで待機、補給を受ける各班と入れ替わりに、展開することになる。

分かったな？」

部隊長は、手に持っていたレーザー・ポインタで、地図上の一点をそれぞれ指し示す。

「了解」

「以上、かかれ」

部隊長の一声で、状況説明を終えた部下たちは、部隊内でバラクレーバと呼ばれている目出し帽を被った。

その上からヘルメットを被って、紐を顎のところで固定する。

それを行ってから、彼らは自分たちが乗るヘリコプターの方に歩いていった。今回の出動での前線基地となる羽田空港には、特殊作戦航空群のヘリコプター飛行隊が呼ばれて、すぐにでも発進できるように、準備すらも完了して待機していた。

つまり、滑走路脇に待機しているMC-130Rアスタリフターの隣には、MH-60Jアイランドホークがいつでも離陸できる状態で待機していたのだ。

日本皇国軍の特殊作戦ヘリコプターであるMH-60Jアイランドホークは、日本皇国陸軍のUH-60Jブラックホークをベース機として、日本独自の改良と改造を行い、防弾性能を含めて、米軍の特殊作戦ヘリコプターを凌駕するように仕上げられていた。

「全員、乗り込んだな？」

8名からなる1個班を4個と小隊本部から特殊制圧部隊^Sの1個小隊は編成され、全体としては部隊司令部と3個小隊、降下誘導小隊、水中作戦教導小隊で編成されており、そのうちの1個小隊がここに展開していた。

8名の顔を見回した班長が、機長に対して、発進用意よしと伝える。それに頷いた機長は、整備誘導員を見る。

MH-60Jアイランドホークのフロントガラス越しに、エンジン起動の許可が下り、機長はエンジンをかける。

「エンジンスタート」

海軍航空隊の装備するSH-60Kと同じT700-IHI-401C2エンジンが、ターボシャフトエンジン特有の甲高い音を立てて、動き始めた。

それに伴い、ローターも回転を始める。

『シャドー・フライトリーダーよりトウキョウ・コントロール。』

滑走路への進入許可を求む』

シャドー・フライトの先任機長は管制塔に連絡を入れた。

『トウキョウ・コントロールよりシャドー・フライト。』

あゝ、えゝ、うん、はい、今、上空の機体の状況を確認しました。滑走路への進入を許可します。

離陸許可についても、随時与えますが、飛行管制に関しては、非常事態につき、国防省の管轄になっているので、上空を飛んでいるはずのワルキューレ・ゼロワンを呼び出してください』

管制塔からのそんな声が届いた。

許可を得た機長は、さらにエンジンをふかしていく。

エンジンの回転数が上がっていき、目に見えてローターの回転が早くなる。

第1エプロンの待機位置から、滑走路へと進入していった。

『トウキョウ・コントロールよりシャドー・ゼロスリー』

「こちらゼロスリーです」

『トウキョウ・コントロール、離陸を許可します』

管制塔からの許可が下りた。

「テイク・オフ」

機長の一声と同時に、機体がフワツと浮かび上がる。

それから数十分後、羽田空港に残置しているMC-130R機内にある司令部で、特殊制圧部隊第1小隊の小隊長は、戦況の映る電子画面を見つめていた。

「横須賀鎮守府艦隊の設定した警戒線に、敵船は接触した模様です。」

戦闘の発生を報告している艦は、みようこう型巡洋艦”そうや”です」

小隊本部班の兵士が、横須賀鎮守府艦隊からの情報を報告する。

「映像、届きました。」

メインモニターに出します」

「パターン青、国籍不明の不審船です」

「交戦位置は？」

「羽田空港沖合、こここの近くです」

モニターを見ながら、本部班の若い兵士が報告する。

「直ちに1班を急行させろ。」

これだけの数なら、撃ち洩らしがあるやもしれん」

「了解」

命令を受けたとき、MH-60Jは大きく旋回しながら、上空待機を続けていた。

そこから機首を、羽田空港の方へ向けた。

「みようこう型を発見。」

艦番号は……183、横須賀鎮守府艦隊の”そうや”です」

それから少しして、交戦海域の上空に到着したMH-60Jアイランドホークのキャビンの窓から、必死に海面を睨んでいた兵士が見つけた。

「その奥、目標を捕捉しました。」

あれですね」

海面にそびえる巨大な艦は、前後にある主砲を振り回して、敵舟艇部隊を殲滅していった。

「第1小隊1班より本部」

応答願う」

「こちらは本部」

どうした？」

「目標群を発見。」

上空にて待機、適宜支援を行う」

「了解。」

終わり』

本部との通信を終えた機内では、海上での戦いの行方を注視していた。

「これは間に合わん。

直ちに降下する。

ロープを用意せよ」

そう班長が、部下たちに命じる。

ロープの投下を、部下たちが行うべく待機している。

日本皇国海軍特殊部隊として一番有名である特殊制圧部隊^S第1小隊^Aは制圧作戦を開始しようとしていた。

「降下用意。

続けて、閃光弾、投下用意。

投下始め」

「投下始め、よおそろ」

MH-60Jの武器員がディスプレイを操作して、武器システムから投下のコマンドを押す。

機体外のパイロンに吊り下げられていた閃光弾の外殻部分が切り離される。

その中には、手榴弾サイズの閃光弾が数十発入っていて、滞空時間を考慮した上で、時間差をつけて起爆する。

また、外殻部のの合間には、マグネシウム片が大量に差し込まれており、これも一気に誘爆する。

MH-60Jアイランド・ホーク特殊作戦ヘリに分乗した特殊部隊は、ラペリング降下による急襲を基本として訓練を受けているのである。

基本的な手順は、何度も何度も訓練を受けて、身体に叩き込まれている。

頭のなかでそれを確認してから、モニター越しに閃光弾の効果を確認する。

MH-60Jアイランドホークの外側に付けられたカメラが捉えた映像の映る画面が真っ白になり、なにも見えない状態となってい

る。

「よし、敵は混乱しているな。

各員、降下始め」

「降下始め、よおそろー」

班長の号令と同時に、MH-60Jのキャビンのドアが開かれ、同時にロープが投げ落とされる。

そのロープの状況を確認した部下の兵士たちがロープを伝って、ボートまで降りていく。

『第1小隊1班より各方面』

ボート、クリアー』

たった2人だけだった。

外洋に脱出しようとする狭いボートの上に降り立てたのは、そして、敵舟艇の確保にはその2人だけで十分だった。

10秒もしないうちに、敵舟艇の確保に成功する。

「班長、了解。

すぐに迎えが来るから、対象の監視を継続せよ」

『了解』

無線通信を終えた班長は、機内に残る部下たちに告げた。

「後続の存在があるやもしれん。

警戒を厳となせ」

閑話 バレンタイン・ウオーズ

「今日はバレンタインだな?」

「ああ、そうでしたね。」

ろくな思い出がないので、忘れてました」

二階堂少佐の言葉に、佐竹中尉が返す。

「ろくな思い出がない?」

じゃあ、どんな思いでならあるのか、話してみしてほしい」

二階堂少佐からの頼みで、どんなことがあったのかを、佐竹中尉は思い出していた。

「そうですか。」

そうですねえ、あれは国防大学校3年の頃でしたか……………」

ある年の2月14日……

「今日、集まってもらったのは、他でもない。」

我が学年のなかに、我々の血の盟約に背いた裏切り者がいる。

諸君、今日は何の日だ?」

「血の盟約の日バレンタインデーである」

「うむ、その通りだ。」

ただでさえ、この学校は女子が少ない。

我々に出会いがないのだ。

だが、ある学生、仮にSとしておくが、彼はチョコを大量に貰ったらしい。

これは、非常に羨ましいし、妬ましい。

よって、直ちに彼を襲撃する。

作戦名は”オペレーション・サーチアンドデストロイ捜索と殺戮作戦”とする。

諸君らは、直ちに準備、実行にかかれ」

「了解」

2月14日午前8時

国防大学校本部庁舎応接室

「国防大学校3年、佐竹紀一入ります」

「うむ、楽しんでくれ」

国防大学校長に呼び出された若かりし日の佐竹中尉は、そのそばにある包みを見て、すべてを悟った。

ソファに座る校長の後ろには、包装紙が山を作っていた。

「非常に困ったことになりました。」

毎年、毎年、この時期になると、この学校の男子連中は、殺気だち始めます。

何故か、分かりますよね？」

ソファに座ったまま、佐竹中尉に視線を向ける。

「恐らくはですが。」

ただ、これは貰えない癖みと言うやつですので、まともに相手にするだけ無駄では？」

「その意見は尤も。」

だが、そんな意見がまかり通るほど彼らも大人じゃないということだ」

過去には、バレンタインチョコを貰ったらしい教官や同級生を襲撃する事件が続発していた。

これがこの学校の伝統なのかもしれない。

「ほら、この部屋の周りには、もうネズミが嗅ぎ付けている。」

今年も血で血を拭う戦争が勃発するでしょうな」

校長の目線の先につられて、窓の外を見ると、レーザーを搭載したドローンが1機、国防大学のシンボルである時計台の上に偵察隊が3人、その他にもいるのだろう。

「まさか、盗聴!？」

しかもあれは、情報軍人教育用の装備で、私的には使えない筈じゃあ……」

「この部屋に関しては、海軍情報部の要員が、クリッキング検索したので、安全と踏んでいたんですがね。」

彼らの執念、恐るべしというべきでしょうかね。

仕方ありません。

申し訳ありませんが、このメモを見てください。

見たら、こちらに渡してください。

適切に処理します」

校長の手渡したメモには、チョコの総数と送り主が書かれていた。日本以外にも、台湾やアメリカ人がいるのは、ご愛敬と言うべきか。

「これらに関しては、一応、こちらで預かり、随時返却します」

「分かりました」

校長の言葉に頷いた佐竹中尉は、メモを返却した。

メモを受け取った校長は、そのまま火を着けて、メモ自体を灰にした。

「用件はこれで終わりです。」

ですが、今日1日、強く生きてください」

校長の言葉の意味が理解できなかった佐竹中尉は、顔にハテナマークを浮かべたまま領くと、部屋を退出していった。

『いたぞ。』

奴だ。

怯むなあ、撃て、撃て』

どこからか、調達してきたのだろう電動ガンを片手に、男たちが陣形を組む。

獲物を追い詰める狩人のような手際で、敵を追い詰めた。

国防大学の敷地内の至るところにて、怒号と電動ガンの駆動音が響く。

「この声は、3班、真下か？」

詳しい状況を報告せよ」

この戦争には、学年に関係なく3個大隊編成の連隊規模の1600名が参戦していた。

そして、ここは連隊指揮所に指定された部屋である。

『こちら、3班。』

奴を路地裏に、追い詰めた。

…うわ、やめろお：ギヤアア』

10人で1班の討伐隊が生まれ、既に70隊以上が出動している。

そのうちの半数以上が撃退されたり、全滅に追い込まれている。

「くそつ、3班がやられた。」

最終の報告地点は、ポイント・アルファ付近だ。

周辺の各班は、直ちに急行せよ」

本部庁舎を出た佐竹中尉は、襲撃者と接敵していた。

「何だ、お前ら？」

佐竹中尉の目には、電動ガンを持ったこの奇怪な連中が映ってはいた。

「この恨み晴らさしておくべきか」

そう言うなり、この奇怪な連中は電動ガンを佐竹中尉に向けた。

上海での一件以来、佐竹中尉はこのようなことには過敏になっていた。

ついでと言うべきか、佐竹中尉から殺気が漏れる。

一対多の戦闘は、佐竹中尉に一日の長があつた。

1人目と佐竹中尉が接触したとき、その右手は折られていた。

と同時に、首筋に打撃を加えられ、すんなりと落ちた。

1人目がダウンすると、2人目の番だ。

声をあげる間もなく、2人目は首を捻られた。

3人目は腹に一撃を加えられ、2人の仲間と同じように、気絶させられた。

4人目は、自らが持っていた電動ガンで殴られ、あっけなく気絶。

5人目以降は、佐竹中尉が4人目から奪った電動ガンで撃ったBB弾によって、撃退された。

気絶した襲撃者の装備をすべて回収して、寮に戻ろうとした佐竹中尉は立て続けに襲撃を受けた。

スタンガンなどの強奪した装備によって、撃退はできたものの、佐竹中尉は満身創痍の状態だった。

「おい、根拠地はどこだ？」

スタンガンで行動不能になっている1人に、武器をちらつかせながら聞く。

上海での一件以来、今のときのように佐竹中尉の暗黒面、通称：ブラック佐竹が現れることがある。

「生きて虜囚の辱しめは受けぬ。」

くっ、殺せ」

オタクではない佐竹中尉に、そのネタは通用しない。殺すつもりで、拳を握り、顔面に叩きつけた。

「いつの時代の軍隊だ？」

阿呆」

さらに顔を殴り、腹を蹴る。

「捕虜虐待反対。

捕虜への虐待禁止は、ジュネーブ協定にも明記されている。

明確な戦争犯罪だ」

顔や腹に暴行を加えただけで、男は前言を翻した。

「ユー・ダイ」

何故か片言の英語で、佐竹中尉は男の運命を宣告した。

そこで、殴られた男は気絶した。

聞き出すための捕虜なら、まだまだたくさんいるとばかりに、周辺を物色する。

いい感じに、この場にいる全員が怯えている。

「次はお前だ」

無情な宣告だった。

対象となった男は、すべてをペラペラとしやべった。

「分かった。

ありがとう。

もうおねんねの時間だぜ」

男を気絶させた佐竹中尉は、目的地に向かっていった。

「嘘だろ、おい」

連隊指揮所に置かれた戦況図の状況を見ると、状況はかなり悪化していた。

「送り出した150隊のうち、142隊が行動不能？

残りに関しても、奴を撃退するのは不可能だ」

連隊指揮所は、絶望のなかにあった。

「奴は、どこだ？」

それでも、希望を捨てない奴はいた。

電動ガンを片手に持ち、何かあれば、すぐに対処できるだろう体勢で待機している。

「奴って言うのは、俺のことかい？」

自分の背後から、声が聞こえた。

ゆっくり振り返ると、奴と呼んでいた佐竹中尉がいた。

「ユー・ダイ」

電動ガンの駆動音が響いて、それから目覚めるまでの記憶が彼にはない。

結果として、死者こそでなかったが、負傷者が1415名を越えたこの騒動は、多数の退校者を出すこととなったとか、ならなかったとか。

「とんでもないアホの話だ」

話を聞いていた二階堂少佐は怒り出すが、ストレスの発散がてら大暴れした佐竹中尉は、恥ずかしかった。

「まあ、にしてもだ。

話をしてくれた君には、これをやろう。

手作りではないがね」

二階堂少佐から差し出されたのは、赤い包み紙にくるまれたそれは、まさしくチョコだった。

「ありがとうございます。」

ホワイトデーには、お返しをしますね」

東京都日野市にある日野駐屯地

ここに駐屯している第1旅団第1特殊武器防護大隊に代表される日本皇国陸軍化学科部隊は、核・生物^B・化学兵器群^Cへの対応を主任務としている部隊であり、大宮に所在するする化学防護戦司令部を頂点として、中央特殊武器防護群と各旅団の特殊武器防護大隊によって構成される部隊群である。

地下鉄サリン事件など、核^N・生物^B・化学兵器^Cに関連する数多くの事案に出勤し、実戦経験を鑑みて世界最強の化学戦部隊として、世界に名を知られている。

「大隊長、旅団司令部^Hよりお電話です。」

盗聴防止回線に切り替えて、電話に出てほしいとのことでした

歩兵科部隊が忙しく働いているこの最中であっても、化学科部隊である第1特殊武器防護大隊には、お呼びのかからない、つまりは関係のない事件であろうと考えていた。

「分かった……」

はい、第1特殊武器防護^{特防}大隊の島田軍医中佐であります」

部下より電話を受けた大隊長は、電話の先から聞こえてくる言葉に、表情を固くする。

「分かりました。」

直ちに準備し、出勤します」

日野駐屯地に駐屯している第1旅団第1特殊武器防護大隊の大隊長は、椅子から立ち上がると、電話を切った。

その上で、椅子に掛けてあった戦闘服の上を着込み、八角帽を頭に着けた。

「直ちに出勤する。」

装備を点検、準備せよ」

「大隊長、既に点検は終了しており、直ちに出勤できます」

「よろしい。」

では、行くぞ」

駐屯地業務隊本部庁舎から飛び出ると、その前に止めてある大隊本部車両の高機動車改造の指揮車に乗る。

その後部から、直ちに指揮を執り始める。

モニターには、皇居周辺の状況が写し出されていた。

「ホット・ゾーンは、皇居の中心から半径3.5 kmとする。

ウォーム・ゾーンは、さらに外周の2 kmとする。

また必要に応じて、近隣の医療機関に対して、負傷者の受け入れを要請せよ」

CBRNEは、化学（chemical）・生物（biological）シーバーン・放射性物質（radiological）・核（nuclear）・爆発物（explosive）による頭字語であり、それらによって引き起こされた災害のことを指す。

そして、大隊長の与えた命令は、それらの対処の定石通りのものであった。

「除染計画だが、変に気張る必要はない。

訓練通りにやれ」

都心外周部をぐるりと回る環状7号線には、警察の機動隊と陸軍歩兵部隊によって、完全に封鎖されていた。

「第1特殊武器防護大隊の島田だ。

旅団司令部よりの出動命令で、皇居に向かっていているところだ。

通っているか？」

身分証を見せた大隊長は、許可を得て環状7号線の内部に進入する。

日野駐屯地から1時間もすれば、集結地点である赤坂御用地に着く。

旅団司令部は赤坂御用地とその周辺にあった。

故に、その周辺は陸軍の車両で混雑していた。

「旅団長」

赤坂御用地の入口には、旅団長が立っていた。

その周辺には、負傷者の収容を行っている

「私から簡単な状況説明を行っておく。」ブリーフィング

我が軍が使用したのは、唐辛子成分の濃縮エキスだ。

それによつて、通常の個人防護装備に関して、それを使用したとしても効果が薄いと判断された」

「どういうことですか？」

「唐辛子エキス成分の粒子が細かい上に、使用した唐辛子エキスの濃度が濃度だけに、直接、皮膚に触れただけでもかぶれを引き起こす恐れがあり、呼吸器内に入った場合には、目も当てられんらしい。

そうになると、レベルA相当の化学防護服を持つ特殊武器防護大隊の出動が必要だと判断した」

消防・危機管理用具研究協議会（CFASDM）の定める救助隊用化学防護服化学防護服は、防護レベルに応じた次の4種類がある。

レベルA化学防護服、・高度の呼吸保護、皮膚及び目の保護を必要とする危険区域（汚染区域）で作業する要員が装着する防護服。

レベルB化学防護服、呼吸保護は概ねレベルA化学防護服と同水準を要求するが、皮膚防護はレベルA化学防護服より低くてよい危険区域（汚染区域）で作業する要員が装着する防護服。

レベルC化学防護服、・皮膚保護は概ねレベルB化学防護服と同水準を要求するが、呼吸保護はレベルB化学防護服より低くてよい危険区域（除染区域を含む）で作業する要員が装着する防護服。

レベルD化学防護服、呼吸保護は必要としないが、最小限の皮膚保護を必要とする警戒区域で作業する要員が装着する防護服。

軍用の化学防護服といえど民間規格に合わせた製品を採用している。

化学科部隊の装備する化学防護服は、レベルAからC相当であり、通常部隊の将兵が装備する個人防護装備一式が大体、BからDに相当する。

「なるほど、了解しました。」

直ちに作業に取りかかります」

唐辛子エキスの粒子が細かいために、風に煽られて未だに空気中に蔓延しているのだ。

渋滞のなかを、赤坂御用地にたどり着いた第1特殊武器防護大隊

は、現場の細かな状況を知ることもなく、皇居に向かうことになった。第1旅団第1特殊武器防護大隊の化学防護車などの車列は、千代田区の皇居に向かって進行していた。

化学防護車、生物防除車、核・生物^N・化学警戒車^B、化学警戒車^C、その他支援車両と拠点機能形成車、医療支援車からなる専門部隊である。

化学防護戦任務の特性上、消防機関とほぼ同じ装備を持っている。拠点機能形成車は、消防の持つ同名の車両とほぼ同一仕様であり、ナンバー・プレートやOD色の塗装、サイレンの有無など細部が異なっている。

医療支援車に関しても同じで、基本的には東京消防庁の運用する特殊救急車スパーアンビュランスと同一仕様であり、こちらに関しては緊急自動車の指定を受けており、サイレンが装着されている。

これらの装備は限定的な採用であり、部隊使用承認という形で採用されているため、制式採用の装備のように〇〇式という言葉は、付けられていない。

全国にある陸軍系の日本帝国軍病院と、中央病院移動医務隊、衛生大隊、特殊武器防護大隊に配備され、負傷兵の救護に当たっている。

また、通常の出動であっても、内科と外科の軍医が乗務し、適宜、治療を行えるのが特徴だ。

特殊救急車の姿が、赤坂御用地には各支援部隊が拠点を置いていることから、ちらほらと見られた。

赤坂御用地の中心にある旅団司令部より北側の地区には、野戦病院が設置され、発生した負傷兵への治療に当たっていたり、回収できた友軍兵士の遺体が安置されている。

南側の地区には、関東補給処から派遣された要員によって、物資補給所が置かれ、戦闘を支援していた。

大隊の本部拠点には、その北側のエリアの一部が予定されていたのだが、それを固辞した上で、皇居ギリギリに仮設拠点を設置した。

道路上に停車した拠点機能形成車、医療支援車の胴体部分が開き、各中隊の活動可能になっていく。

現場の準備が進むなかで、今回の事件の現場である皇居の方向をに

らんだ大隊長の前に、化学防護服に身を包んだ隊員が整列する。

「配置を指示する。」

第1中隊は直ちに突入、負傷していると思われる兵士を収容しろ。

そして、皇居内全域を搜索し、敵味方関係なく生存者がいれば、絶対に連れ帰れ。

第2中隊は、除染の準備を進めておけ。

第3中隊の1個小隊は、トリアージを行うぞ。

以上、かかれ」

「了解」

既に医療支援中隊である第三中隊のうち、2個小隊を野戦病院での医療支援に当たらせている。

あとは貸与した化学防護服を着込んだ歩兵2個小隊の援護のもとで、直ちに負傷者の救助に当たるのだ。

大隊長の命令で、皇居内に突入した第1中隊は、直ちに負傷者の捜索を開始した。

「濃度が未だに濃いなあ」

皇居に侵入して数百メートル、レベルAの化学防護服を着込んだ兵士が、空気中の検体の濃度を見て言う。

その周辺では、小銃を持った兵士が周辺を警戒しながら、いつでも射撃できる状態で待機していた。

「負傷者、発見」

突入した第1中隊の面々は、負傷者の惨状を見て、これは殺りすぎだと思おうのを通り越して、そう確信していた。

「担架、持ってこい」

第1特殊武器防護大隊の拠点で、第二小隊の呼んだ2トン半救急車は、軽傷のパイロットを治療しながら、一応は巻き込まれた形になる第二小隊の到着を待っていた。

そこまで、無事に届けることを願いながら、第1中隊と歩兵第二中隊の2個小隊は、皇居内を走っていた。

「第1中隊より大隊本部。」

送れ」

第1中隊の中隊長が、化学防護服に付属する呼吸器の内側に付けられたマイクから、通信を行う。

『こちら大隊本部。』

送れ』

通信を行っている中隊長の横では、第1中隊の隊員が負傷者を収容していた。

それには、敵味方関係なかったのだが、数が膨大すぎた。

「負傷者を発見。

数は味方は51名、敵は数えきれないほどいる。

これより後送するが、我々の所見を報告しておく。

送れ」

「了解、こちらも第3中隊に報告しておく。

詳細をお願いしたい。

送れ」

「了解、今から送ります。

それぞれの負傷者の状況は、唐辛子エキスによるかぶれ、さらには呼吸器に炎症が見られます。

送れ」

『大隊本部、了解。

終わり』

その通信が入ったとき、大隊本部は除染計画を立案していた。

皇居周辺の都市地図、縮尺1/5000レベルの詳細な地図に、グリッド図を書き入れて、除染計画のタイム・スケジュールを決めている。

日本皇国軍の地理部隊が衛星写真と労働力を総動員して、書き上げたその地図は半年ごとに更新され、古いものは破棄される。

そのデータ自体は、民間の地図に反映されることも多い。

「この計画でいこう」

大隊長は中隊本部の天幕に向いて、除染を担当する第2中隊の中隊長や幕僚たちと、使用された唐辛子エキスの除染計画を練っていた。

「吸収剤が大量に必要ですね。」

必要なのは、大体、6トンぐらいでしょう。

持ち込んだ分だけでは、足りないと思われます」

吸収剤と言うのは、化学防護戦司令部隷下の化学防護戦研究隊が人工的に化学合成した表面に穴の多い物質のことであり、その穴のなかに有害物質を吸着させるものである。

通常は専用の溶液で、泡状にして使用する。

また、それ専用の溶液を含めて、自然の水に溶けないために、水源近くでも使用できる代物だ。

ただ、水中に溶けてしまった分の有害物質には使えないのが難点だ。

「そうだな。」

それは、心配しなくていいぞ。

既に手配してある。

もうすぐ、追加分が届くはずだ」

第1特殊武器防護大隊は、保有分の1.1トンをここに持ち込んでいた。

また、陸軍化学防護戦司令部は、第1特殊武器防護大隊の要請を受けて、さらに関東補給処日野特殊装備廠にある備蓄分1.2トン、さらに工場から出荷される分が0.3トン、東京消防庁を含む近隣の消防からかき集めた1.5トン、合計3トンを皇居に向けて、第1ヘリコプター団といった航空部隊を使って送っていた。

また、関西補給処、東北補給処に備蓄されている分を、取り急ぎ全て東京に送らせて、不足分を充足する予定だ。

鉄道にて輸送されているそれは、今後、2日以内に、皇居付近に到着する予定になっている。

「分かりました。」

では、順繰りに作業を開始します」

「ああ、よろしく頼む」

「はい、よろしく頼まれました」

大隊長の言葉に、第2中隊長は軽口で返した。

大隊本部の天幕に戻った大隊長は、大隊本部要員からの報告を受けた。

「第1中隊からの報告。」

数は味方は51名、敵は数えきれないほどいる。

それぞれの負傷者の状況は、唐辛子エキスによるかぶれ、さらには呼吸器に炎症が見られるとのことであります」

「第3中隊には？」

その報告は、医療支援に当たる第3中隊にこそ、意味のあるものだった。

「既に報告済みです」

その報告を聞いて、大隊長はにっこりと笑い、大きく頷いた。

「負傷者の第1陣が到着しました」

天幕に顔だけ出して、報告したのはここに残る第3中隊の1個小隊の小隊長だった。

「分かった。」

私も直ぐに行く」

大隊長は、そう返事をして、天幕の外に出た。

東京都千代田区 皇居

第1中隊の連れてきた負傷者は、全員が重篤な状況にあった。負傷者全員が、同量の唐辛子エキスを吸い込んでいたのだ。

唐辛子エキスの雨のなかにいたのであるから、当然のことである。第1中隊が地面に寝かせた負傷者は、水をかけられることによつて、体表についた唐辛子エキスを洗い流される。

この作業には、第2中隊が動員されて、第3中隊を支援していた。「野戦病院からありつたけの救急車を、ここに呼んできてくれ。

1 個小隊だけじゃ対応できない」

国防大学校医学部出身の軍医であり、軍医中佐の階級にある大隊長は、すぐさま手が足りない状況を、現場から見とつた。

後方から応援を呼ぶか、すぐに後送しなければ、ここの能力は破綻するのだ。

「旅団司令部に要請を出せ。

中央特殊武器防護群の出動を願う。

以上だ」

中央特殊武器防護群、通称を中特防とするこの部隊は、化学防護戦司令部の直轄部隊であり、旅団の隷下部隊である特殊武器防護大隊とは、単純に規模と年季が違う。

1948年8月22日、陸海軍省復員局による再編計画が終了し、国防省と皇国陸海空軍が発足した。

それと同時に、旧陸軍の防疫給水部の要員を召集して、教育部隊として編成したのが、第101化学防護隊である。

そこを起点として、日本皇国陸軍の化学科部隊は、規模の拡大が図られてきたのだ。

1951年には、実戦部隊としての第102化学防護隊を新編し、続けて第103化学防護隊、第104化学防護隊を、新しく置いた。

さらに、イラン・イラク戦争が、1980年から1988年にかけて勃発し、その戦争の停戦間際である1988年3月16日に、化学

兵器の使用が疑われるハラブジャ事件が発生すると、日本皇国陸軍は危機感を抱いた。

もし、日本にて化学兵器の使用が行われた場合、現状の勢力で対応できるかどうかである。

後に、634号研究として、シミュレーションされたこの研究は、冷戦下ということもあり、いくつかのパターンが想定された。

第1に、ソ連軍が北海道に侵攻し、日本皇国陸軍の防衛部隊の集結を妨害、または分断するために、後方地域で使用される場合。

第2に、朝鮮戦争が再燃し、韓国防衛のために、日本が米軍の出撃基地となり、それを妨害するために、日本という後方地域で使用される場合。

第3に、とある民間の団体が、テロ組織に変貌し、自らの政治的な目的の実現のために、各地で同時多発的に使用される場合。

大別して、この3パターンが上げられ、検討対象とされた。

いずれの場合においても、初動対応は現地の消防や警察が行うことになるだろう。

それでも、装備や要員の能力によって、対処しきれないと判断できる。

そうなれば、陸軍の出番であり、矢面に立たされる化学科部隊の増強は、必然であった。

参謀本部に直隸する化学防護戦司令部の創設と、第101から104化学防護隊を解隊して、2個大隊からなる化学防護群と化学防護戦研究隊、化学防護戦教育隊を置いた。

さらに、地下鉄サリン事件以降は、指揮隷下に1個大隊を新編し、3個大隊体制として、また名称を中央特殊武器防護群と改称して、24時間の出動体制の構築を行っているのに対して、旅団の特殊武器防護大隊は、1個大隊単体であり、対処能力には限界がある。

そのことを踏まえ、応援部隊の派遣の要請を命じた大隊長は、直ちに第3中隊の実施するトリアージに参加した。

「いいつは、すぐに後送しろ。」

救急車はすぐに来るはずだ」

トリアージ用のタグは、日本皇国陸軍では使用していない。代わりに、戦闘服の袖にテープを張り付ける。

死亡は黒、重傷であれば赤、軽傷であれば黄色という具合である。今回はほとんどの連中が、赤いテープを腕に巻かれて、救急車による搬送を待っていた。

「多いな。」

中特防の到着まで、ここは持つのか」

大隊長の脳裏に浮かんだ疑問は、すぐには晴れなかった。

赤坂御用地にある野戦病院から、次々と救急車が来ては、運び出されてきた負傷者を収容して、去っていく。

「第二小隊は、全員収容した。」

敵兵の回収に移る」

最後の味方の兵士を連れてきた第一中隊の将兵が、大隊長に伝えた。

「こいつが最後か。」

了解した」

慣れた手つきで、腕に赤テープを巻いて、救急車に乗せていく。

「次からは、敵兵だ。」

気張ってかかれ」

手の空いた大隊長は、全員にそう声をかけた。

味方の負傷者と同じように、手当てをしていくものの、やはりいすべきか、銃創や刺創のある重傷の敵兵、既に事切れている敵兵等が目立つようになってきた。

簡単な応急手当だけでなく、外科的な治療であっても、軍医中佐の階級にある大隊長や大隊に配属されている軍医たちによって、行えないのではないのだが、全員がトリアージに駆り出されていて、人員が足りない。

「おい、島田ア」

戦場のなかで、トリアージを行っていた大隊長に、呼び掛ける声があった。

「これは山田少将の声？」

でも、まさか」

「島田、そのまさかだぜ。」

中特防、ただ今推参」

中央特殊武器防護群、陸軍化学科部隊の中核、中核をなす部隊であり、大規模な作戦を遂行できるその部隊が、たつた今駆けつけたのだ。

「取り敢えず、こつちには1個大隊を連れてきた。」

赤坂の方にも、1個大隊を待機させてある。

気張ってかかるぞ」

中央特殊武器防護群群長である山田軍医少将は、島田軍医中佐の医学部時代の先輩だった。

「了解。」

これより、医療支援車両を使った外科手術を行う。

こちらには、重傷者を優先しろ」

1個大隊の来援で、余裕が出た第1特殊武器防護大隊は、直ちに緊急の外科手術を行うこととした。

衛生大隊や野戦病院は、距離が遠すぎた。

そして、今、ここに運び込まれている者たちは、元々から怪我の程度のひどい者たちである。

今、トリアージを受けて、最優先で救急車での搬送されても、その途中に、死亡する確率の方が高い。

「手術ですか?」

「そうだ。」

直ちにかかるぞ」

大隊長の台詞に疑問を呈した部下に、大隊長である島田軍医中佐は返した。

そうしている間にも、医療支援車に積載されていた手術衣を着込んだ大隊長は、手術の準備を始めていた。

緊急事態の際には、特殊武器防護大隊の要員が手術を行うことを、陸軍上層部も認めている。

だからこそ、衛生大隊や野戦病院に次いで、軍医の配属数が多いのだ。

また、銃撃による負傷であれば、手術で救える命もあるはずだ。「野外手術システムもありませんよ。」

「装備的に不可能では？」

部下の指摘に、大隊長は莞爾として、笑って言う。

「そのために、中特防を呼んだんだ。」

道具は全て、ここに持ってきてるはずだ」

麻酔とそれを扱う麻酔科医も含めて、全ての準備は整った。

それに、現用の医療支援車には簡易ではあるが、手術できる装備を付与されている。

手術に対しての、障害もなくなった。

「副大隊長、指揮は任せた」

救急救命士の資格を持つている副大隊長は、恙無くこの現場の指揮を執れるはずだと、大隊長は確信していた。

特殊武器防護大隊の要員は、衛生大隊の要員以上に、救急救命士の資格取得に熱心だった。

それは、少なくとも医師や看護師資格の取得に比べれば、それほど予算も時間も喰わないからだ。

また、国防大学校医学部出身の軍医や、特定技能幹部候補生として採用された一般大学出身の軍医の割り当ては、陸軍内では野戦病院や衛生大隊が優先されて、化学科部隊にはなかなか回ってこないという事情もある。

そのために、化学科部隊の求める最低の技能レベルが、救急救命士の資格なのである。

「はいはい、分かりましたよ。」

トリアージは、我々のような本職に任せて、大隊長は自分にしかできないことをしてください」

そんな事情は、長く陸軍で暮らしている副大隊長も理解している。また、大隊長が根っからの医者であることも、彼には分かっていた。副大隊長のその言葉に、片手をあげることで、大隊長は返事を返した。

医療支援車には、東京消防庁の保有する特殊救急車スーパーアンビュランスのように8床

のベッドがある。

それを手術台に転用する。

そうできるように、車内の天井にはライトも据えられている。

車体下のスペースにある燃料電池から、車内で使用する電力の供給を受けるなど、システムの独立性にも留意されている。

「直ちに、緊急の開腹手術を行う」

青緑の手術衣を着用し、頭には同じ色の帽子を被り、マスクとゴーグルを着ける。

腹部に被弾した敵兵を連れてきて、手術台に寝かせた。

そこへ、直ちに麻酔科医による麻酔が行われ、手術の準備が進む。

「メス」

「はい」

腹の被弾の痕を、丹念に見てとる。

そして、助手の看護師から受け取ったメスで開腹する。

内蔵の一部をズタズタにしながら、それでもわずかな隙間を抜けて、貫通していた。

輸血を断続的に行いながら、肝臓の出血を止めるために、傷口を塞ごうとする。

こうした場合に、最適な装備がある。

体内用絆創膏と部内では、呼称されているものである。

ある暇な軍医の1人が、体内組成の研究と同時に、主要な内蔵の壁を構成する要素の研究を行い、それを固形化することによって、体内での出血を抑制し、また、人間の持つ自己再生能力を向上させるといふ効果を得た。

それを切り開いた腹のなかの臓器に、貼り付ける。

拒否反応もなく、それは傷口を覆った。

開腹した傷口を縫合して、包帯を巻く。

「よし、終わった。

次」

大隊長が、今やっていることは、応急手当どころの話ではない。

当たり前の話ではあるが、軍医の仕事は、戦場で発生した負傷者の

救護である。

兵科の違いはあっても、それが軍医の使命である。

その使命を完遂するために、島田軍医中佐は奔走していた。

臨時に設置した天幕の病床に、手術を終えた敵兵を収容する。

皇居内には、既にほぼ3個中隊の兵士が入って、負傷者の捜索に当たり、第2中隊以下の除染作戦に従事する部隊は、その準備に追われていた。

各自が各自の仕事を全うしている。

「手術器具、持ってきました」

中央特殊武器防護群の隷下の1個大隊に所属する第3中隊の要員が、手術の補助をしてくれる。

日本皇国陸軍の保有する特殊救急車である医療支援車は、外付け用に拡張パックが存在し、それを連結することによって、本職である陸軍衛生大隊の運用する野外手術システムに近い医療システムを構築することができる。

拡張パックは、中央特殊武器防護群装備運用隊、各補給処の衛生装備隊に装備されていて、必要と判断された場合に、各部隊に貸与される。

だからこそ、衛生面で安全な手術が行えるのだ。

「ありがとう」

大隊長は礼を言ってから、次の患者に取りかかった。

出動してから数時間がたち、昼も過ぎて、太陽が西に傾き始めた。

「よし、これで終わりだ」

数百名に及ぶと見られている敵兵は、広大な皇居敷地内の至るところに倒れていた。

既に死体となっているものは放置されていて、負傷者は第1特殊武器防護大隊まで、随時、運ばれていた。

トリアージや緊急手術を受けた負傷者は、赤坂御用地にある野戦病院に後送された。

「除染作戦の具合は？」

幾人もの血で染まった手術衣を脱いだ大隊長は、大隊本部の天幕に

戻った。

「はっ、いつでも行けます」

敵兵も味方も、全員を救助した。

だから、吸収剤の使用に障害がなかった。

「よろしい。」

直ちに準備せよ」

道路上に設置した大隊本部の一面に、停車した拠点機能形成車には、任務を終えた第1中隊が、休息をとるために集まっていた。

「第2中隊、集合」

それと入れ替わるように、中央特殊武器防護群からの増援を受けた第2中隊の面々が、皇居に入るために準備していた。

「作戦について、説明する。」

我が部隊が保有するタンクローリーより、吸着剤の散布を行い、的確に処理する。

また、水中の汚染状況について、別途で調査を行い、適宜、処理する。

以上だ」

戦闘服に戻った大隊長が、集合した第2中隊の隊員に対して、作戦の説明を行った。

既にタンクローリーには、放水銃が設置され、いつでも作戦の決行が可能であった。

「放水用意」

タンクローリーの上部には、第2中隊の兵士が立って、いつでも作戦を開始できるように待機していた。

散布用のホース、それに吸収剤を送るためのポンプ、そしてそれらを扱う兵士たちが配置に着いた。

「放水始め」

大隊長の号令と共に、第2中隊の兵士たちが放水を始める。

吸収剤を含んだ水は、皇居内に降り注いだ。

有害物質を吸着させた吸収剤は、空気中の窒素と反応して、白く固まり始める。

「うわあ、グチヨグチヨしてやがる。
精液かよ」

回収の担当に当たっている兵士が、固まった吸収剤を持ちながら、そう呟いた。

固まっても、未だに粘度の高いこれは、確かにそれに見えるが、それを言うことはセクハラになりかねない。

白く固まった吸収剤は、一輪車に乗せられると、後方に運ばれる。そこに用意されていた気密容器に、流し込まれて封印されると、日野駐屯地内に設置された高温処理炉に放り込まれる。

1700度という超高温で、灰すらも残らぬように、燃やし尽くされる。

皇居脇に停車した74式特大型トラックに、その気密容器が運ばれていく。

74式特大型トラック1台で、40個もの容器を運搬可能だ。

トラックが1台、また1台と出発しては、到着してを繰り返していく。

「グリッドナンバー、A1からA16が完了。

「Bエリアに入ります」

グリッド地図の大きなマスには、AからZまでの数字が、そのなかを4×4に区切るなかには、1から16の数字が割り当てられている。

適宜、第2中隊からの報告を受けて、一つ一つの小さなマスが塗りつぶされていく。

「吸収剤の補充は、在庫が到着し次第、行う。

最新の情報を、常に送らせろ」

「JR貨物の特別便が、京都と仙台を出発しました。

明朝には、品川と上野に到着します」

やはりというか、陸軍の初動は早かった。

吸収剤の在庫が足りないと見ると、東北補給処や関西補給処の在庫を、補給本部鉄道部の保有する貨車に積み込ませ、そのまま機関車を連結させると、東北本線や東海道本線に乗り入れて、一路東京を目指

している。

「吸収剤の残量、7割」

「5割を切ったら、報告しろ」

大隊本部に集まる情報は、大隊長の元へと集約されている。

「首都圏にある全ての在庫が到着しました。」

至急、溶剤と混合します」

「野戦病院から要請。」

医師の数が足りないそうです。

うちから何人か、寄越せって言ってきてます」

「黙殺して、構わん。」

第3中隊の要員に、暇な者などおらんのだ。

未だに、負傷者の後送は終わっていないと言うのに」

奴らは何も分かってないと、ボヤク大隊長の言葉の通り、病院ではないはずの天幕に、未だに山のように残る負傷者たちは、ここで必要な応急手当を受けて、後送されることを待っていた。

監視を行う要員は、第3中隊から抽出している。

戦闘を終えたばかりの歩兵部隊は、こんな状況ではあるが、戦場掃除に駆り出されており、そこからの応援は見込めない状況だ。

「了解」

救急車の到着自体が遅れてきており、負傷者がいつこうに減りそうもない状況下では、応援を派遣することすらも難しい。

捕虜等の取り扱いは、国際法や関連する国際条約の条文においても、かなり曖昧な部分が多く、細心の注意が必要である。

今回の場合、この全員が規定にある軍服等を着用していない。

このことが、事態をさらにややこしくしていた。

捕虜の取り扱いには、十分な注意が必要だと判断し、部下たちにもその旨を了解させましたとは、第1特殊武器防護大隊の大隊長が、国会で語った言葉である。

結果として、第1特殊武器防護大隊の尽力は、東京の混乱を鎮める上で、必要不可欠なものであった。

除染作業は、1週間ぐらいを目処としており、皇居の敷地面積の大

きさを考えれば、吸収剤の効果はてきめんであると言えた。

国防省正門は、第二小隊が固めた。

それ以外の門は、固く閉じられているし、日本皇国軍統合市ヶ谷基地施設警備隊の陸空の警備隊が監視している。

「日本皇国軍統合市ヶ谷基地施設警備隊海軍警備隊の狭山だ」

第二小隊と共に正門を守るのは、海軍から派遣された基地警備隊だった。

海洋迷彩と呼ばれるブルーパターンの迷彩服を着込んだスキンヘッドの男性を筆頭とした部隊である。

海軍部内では、市ヶ谷陸警隊と呼称される彼らは、1個小隊分の兵員数だった。

海軍の狭山さんの海洋迷彩服の襟を見ると、海軍大佐の階級章が光っていた。

「第二小隊の堀北少尉であります」

陸軍の主導による敵の残党狩りはまだ終わっていない。

第一歩兵旅団隷下部隊は皇居での敵兵の武装解除等に時間を取られ、都心の掃討作戦は周辺を包囲していた3個旅団に任された。

「いま、ここで手術してる奴は、堀北少尉の知り合いか？」

89式小銃をスリングで肩から吊った状態で、堀北少尉たちは立哨中に会話していた。

「防大の同期でして、まあ落ちこぼれだった私に比べれば、優秀な人間だったんですけど」

「親しかったのか？」

「まあ、共通授業のノートを見せ合うくらいには」

周囲に視線を巡らしながら、話を続ける。

「そうかい。」

「じゃあ、ここはきっちり守りきらなきゃな」

狭山大佐の目線の先には、どこから湧いてきたのか、武装した民間人が現れた。

赤いヘルメットにマスク、長袖長パンの銃で武装した民間人たちが

ある。

堀北少尉が、大声で指示を出す。

「非常事態法第27条に基づき、武器使用の必要性ありと判断。武器を構えろ」

堀北少尉がそう言うなり、80人ほどの将兵が、思い思いの位置について、射撃体勢をとる。

非常事態法、正式には非常事態に関する国民保護および非常事態に直面した国民の生活維持のための経済、道路等の統制に関する法律と称される。

この法律は、憲法に非常事態条項がないことから制定された国防関連法である。

大災害や戦争、擾乱事件など、国民の生命や財産が危機に陥り、また憲法の保障する文化的な最低限度の生活を維持できないと判断できうる場合に、その生活を維持させるために、国家がすべてを統制する際の、それを成しうる権限の付与とその権限の制限を定めた法律である。

例えば、大震災におけるガソリン等の燃料油や食糧の供給と輸送の統制、軍部隊、警察部隊、消防部隊、各種支援を行う機関の展開可能場所の強制収用などを行う際の根拠法である。

敵軍との交戦に関する基準、例えば、平時であつても敵と認定される人物もしくは部隊、つまりは工作員の攻撃への応戦などの場合での武器使用基準は交戦規約に纏められているが、その交戦規約には国民に武器を向けることなどは考慮されていない。

それに関しても、こちらの非常事態法第27条の条項に規定されている。

非常事態法第27条では、展開中の軍や警察の各部隊に対して、武器を向けた民間人は、速やかに無害化するよう求めている。

また、その第27条に基づく武器使用に関する施行令では、警察官職務執行法第7条及び国家公安委員会の定めた警察官等けん銃使用及び取扱い規範を準用して、武器使用をすることが定められている。「武器を所持している民間人に告げる。」

武器を捨て、両手を頭の後ろに着けて跪け。
繰り返す、武器を所持している民間人に告げる。

武器を捨て、両手を頭の後ろに着けて跪け。
さもなくば、射殺する」

拡声器越しに伝えられた最後通告に対しても、武装した民間人たちに動揺は見られない。

左翼系の学生運動が活発化した50年前、そして宗教系テロ組織が日本で猛威を振るった20年前、そして今、この50年という激動の時代が流れている間に、日本陸軍は秘密裏に対民間人発砲手順の策定と、それを準用した訓練を開始していた。

銃で武装したテロリストが、民間人がいる街中を闊歩する。

そんな時代を予感していたのだ。

非常事態法施行後もそれに関する手順の改訂と確認、訓練は続いていた。

「威嚇発砲、一番」

事前の訓練通りの手順に従って、一人の兵士が上空に小銃を向ける。

「撃て」

指定された射手である兵士が、単射で1発、銃を発砲する。

発砲音、銃声を聞いても民間人に動揺は見られない。

何か隠し玉でもあるのかのように、ただただ堂々としている。

「我らは赤衛軍、正義を騙る国賊に鉄槌を下さんとするものである」

そのリーダーと思しき人物が叫んだ。

「公僕なんざ、いてこましたれ」

リーダーに続いて、関西弁の男が氣勢をあげる。

その声に呼応して、一部のメンバーが侵入の構えを見せる。

「阻止、阻止。」

奴らの侵入を阻止」

狭山大佐の叫び声と同時に、堀北少尉が叫ぶ。

「煙幕を展開。」

誰か、1／2トンと高機を前へ。

「楯となる遮蔽物を作れ」

堀北少尉が出した指示の通りに、発煙手榴弾が投擲され、一時的に視界がとれなくなる。

1 / 2 トントラックや高機動車が、土嚢に代わる遮蔽物として、正門を塞ぐ。

煙が吹きすさぶ風に吹き払われて、視界が徐々に開けてくる。

「国賊め、正義の裁きを受けるがいい」

AK-47を構えた民間人が発砲する。

フルオートで放たれた銃弾の嵐は、高機動車の窓ガラスを粉碎し、ドアの鋼板すらも穴だらけにしていく。

「民間人を敵兵と認定。」

正当防衛危害射撃、応射。

撃て」

単射に設定された89式小銃が火を吹く。

散発的に発射される銃弾は、確実にその戦闘能力を奪うべく、直進する。

直進した銃弾は、敵兵の肩を撃ち抜き、肘を砕く。

元々が玄人VS素人の戦いだったから、数分もしないうちに、銃撃戦は終わる。

「医官を呼んでい。」

応急処置を受けさせる」

傷口を押さえて踞る敵兵を見た堀北少尉は指示を出した。

それを聞いた兵士の1人が、中央病院に向かって走る。

「国賊の施しなど受けん」

堀北少尉の指示を聞いた赤衛軍のリーダーは告げるものの、堀北少尉はそれを無視する。

「負傷者ですか？」

数分の後、兵士と共に、息を切らした医官が駆け寄ってくる。

先程まで、一緒にいた伊熊少佐だった。

「取り敢えず、消毒して絆創膏を貼っておこうか」

全員の腕を見た伊熊少佐は、銃撃による傷口はきれいに貫通しとる

と、言った。

「これ、どうするの？」

応急処置を受けて、寝転がされた状態の赤衛軍メンバーたちを見た伊熊少佐が聞く。

「拘束して、憲兵に引き渡します。」

憲兵から警察に引き渡されるでしょうし」

堀北少尉が、そう言うのと伊熊少佐は頷く。

それを見た堀北少尉は、全員を拘束するように指示を出す。

堀北少尉の指示を受けて、全員が結束バンドで拘束される。

日本皇国陸軍におけるテロ対処部隊であり、戦時には捕虜対応部隊となる歩兵部隊の兵士には、梱包用の結束バンドが拘束用の機材として、手錠に代わり支給されている。

従来の手錠が、1個当たりの予算が高くつき、さらには重く嵩張るものだったのに対し、結束バンドはそうでもないからだ。
「よし。」

留置施設にぶちこんでおけ」

部下たちが連れてきた軍医から応急処置を受けたのち、兵士たちによって後ろ手に縛られた赤衛軍グループを、数人の兵士が監視しながら、留置施設まで連行する。

「残りの連中は、戦場掃除を開始しろ。」

奴らが持っていた銃器と空薬莖、回収できる弾丸は最優先だ」

『正門前を警備中の第二小隊へ。』

こちら裏門を警備中の陸空軍警備小隊。

敵兵の攻撃を受けて、警戒線を突破された。

我々も敵兵を追跡しているが、至急、支援を要請する。

現在地点は、国防省地下3階通路、座標は13—2』

国防省本省庁舎の所在する市ヶ谷駐屯地は迷路のような地下通路群が設計当時から建設されている。

一応、迷ったときのために、全兵士に

「二分隊、地下に降りるぞ」

堀北少尉が踵を返して、地下に向かう。

正門脇の警衛所に封印されている地下の入り口を通り、地下に侵入する。

急な角度のついた階段を駆け下る。

「第二小隊より周辺に展開中の部隊に告げる。」

各部隊の状況を知らせ」

『我々、対テロ特殊部隊は機密庫の守りを固める。』

敵の追撃は第二小隊に頼む』

『特殊測量部隊第一小隊は23—1にあり、これより現在地手前で待機し、追撃戦に参加する。』

以上』

特殊測量部隊とは、アメリカ海洋大気庁士官部隊と同様の任務を付与された部隊である。

平時における測量活動において、国土地理院の支援を行い、また演習における仮想敵部隊として、任務を遂行することが求められている。

また、戦時における戦場となる地域の測量活動を担い、陸海空軍地上部隊の機動展開を支援する部隊である。

敵の勢力が妨害に出てくる可能性を踏まえて、通常の歩兵用の銃火器だけでなく、この部隊は最大限の自衛手段を与えられている。

例えば、現場指揮官であるこの部隊の小隊長には、必要に応じて陸軍砲兵科部隊の支援砲撃、海軍艦隊の艦砲射撃支援、空軍の戦闘攻撃機への空爆支援を要請できるだけの権限が与えられている。

戦時において、臨時に編成される日本皇国陸海空軍統合打撃部隊《Joint Strike Force》の指揮下でのみ、やっと陸軍歩兵部隊はそれらの支援を要請できる。

「了解。」

第二小隊より各隊へ。

気張ってかかってください」

『了解』

階段を駆け下り、第二小隊は地下通路内に突入する。

コンクリートを打ち付けただけの簡単な内装の地下通路には、空調設備が完備されているのか、じめつとした不快な空気はなかった。

『侵入者あり、侵入者あり。』

各ブロッック封鎖担当下士官は、事前に策定された手順に基づき、封鎖を完了せよ』

日本皇国軍陸軍参謀本部市ヶ谷駐屯地戦闘要項という分厚い本がある。

建物内でのテロ・ゲリラコマンド戦闘の発生を主眼においた作戦計画であり、機密保持のための破壊工作及び侵入者を阻止するための、全ての作戦が記載されているものである。

非常ベルが鳴り響き、警報ランプが赤く染めた地下通路のなかを、慎重に走っていく。

「今回の敵は既に友軍に向け、発砲している。

発見次第、撃つてよし。

分かったな？」

「了解」

前列にいる全員が小銃の代わりに、拳銃を構えている。

「目標、発見」

敵兵の姿を見たとの報告に、堀北少尉たちは、体を硬直させる。

身体の強ばりを解すように、深呼吸してから、地下通路を慎重に進んでいく。

その報告にあった敵兵の姿を捉えたとき、堀北少尉が指示を出した。

「撃つて構わん。

射殺しろ」

マズル・フラッシュ

銃 火が数瞬、明滅し、遅れて数発の銃声が響いた後には、数体の死体があった。

「周辺の搜索を開始せよ。

改めて言っておくが、敵兵の姿を認めるときは、躊躇わずに撃て。法律云々よりも、自己の生命の保全が最優先だ」

地下を慎重に進む堀北少尉以下の第二小隊の面々は、敵兵の第二群と激突した。

「撃て、撃て。」

奴らを生きて帰すな」

拳銃を振り回しながら、堀北少尉は敵兵の群れに躍り込んでいく。

日本皇国軍市ヶ谷駐屯地国防省本省庁舎地下5階、海軍軍令部フロアの男子トイレに田中大将の姿はあった。

いくら、歴戦の雄たる田中大将であっても、生理現象である尿意には勝てないのだ。

「総長、横鎮司令部よりの報告。」

現在、東京湾沿岸部を封鎖を継続中、小型船多数を撃破、1隻を拿捕したとのこと」

海軍軍令部の参謀が、トイレを終えたばかりの田中大将に報告を入れる。

「分かった。」

日本海側の各警備実施部隊、さらには太平洋・瀬戸内海側の各警備実施部隊にも警戒を呼び掛ける。

横鎮にいる特別偵察中隊を、こちらに向かわせておいてくれ。

嫌な予感がする」

「了解。」

特別偵察中隊は野戦装備^甲、もしくは警備装備^乙、どちらを携行させますか？」

指示をメモしていた参謀が、改めて聞く。

特別偵察中隊は、特殊部隊として位置付けられている日本皇国海軍陸戦部隊における空挺作戦部隊である。

松江と相浦にいる陸戦大隊が揚陸作戦、江田島にいる特殊制圧部隊、関西空港にいる特殊警備隊が不審船・テロ対処、舞鶴の特殊武装偵察隊や大湊にいる冬季斥候中隊、そして横須賀の特別偵察中隊は偵察作戦に、それぞれ特化している。

特に、特別偵察中隊は空挺作戦に、特殊武装偵察隊は潜水、威力偵察に、冬季斥候中隊は秘密裏に偵察することに長けている。

「武器は甲装備、被服は乙装備を使用せよ」

甲装備とは、野戦装備、つまり陸軍式の戦闘軍装だ。

30発入りの弾倉を装填済みの89式小銃とマガジンポーチに予備弾倉として30発入り弾倉を8個、各種手榴弾を5個ずつ携帯する。

さらに自衛用火器として、何かしらの拳銃1挺と、その予備弾倉を4個携行し、銃剣や警棒を装備する。

また、必要に応じて、爆薬、その他を携行することもある。

「了解。」

すぐに呼びます」

そう返事をした部下は、すぐに立ち去っていく。

『侵入者あり、侵入者あり。』

各ブロック封鎖担当下士官は、事前に策定された手順に基づき、封鎖を完了せよ』

スピーカーから、そんな声が聞こえた直後、田中大将の目の前には、黒い服を着た男が現れた。

「あっ」

田中大将にとつても、相手にとつても不測の事態であった。

「……えっ?」

「先手必勝」

そう叫んだ田中大将は、呆然と立ち尽くす黒い服を着た男の首を掴むと、そのまま首の骨を折った。

ポキッという案外、軽めの音が響いた後には、それまでは人間だったものだけが残された。

「こんなところにも、敵兵が来ているのか。」

この調子じゃあ、病院の方も危ういな」

男が持っていたサブマシンガンを手で拾い上げた田中大将は、使えそうなものを全てを剥ぎ取った。

服しか残っていない死体を残して、田中大将は立ち去る。

「敵別動隊、統合作戦指揮所付近に到達しました。」

各部の隔壁の封鎖により、ここまで到達するまで、あと10分はかかる模様」

下士官からの報告に、市ヶ谷駐屯地防衛司令官を兼任する前田大將が頷いた。

「これを機に、一気に殲滅するしかないか。」

二酸化炭素消火装置、スタンバイ」

統合作戦指揮所には、国防省の内部への侵攻という絶望的な状況に対して、籠城やその他の防衛手段の行使および情報収集のために、備え付けられている警備システムを、警備室より優先して、使用できる台があり、そこには24時間365日、専任の下士官が待機している。「了解」

その下士官が、警備システム専用の台を操作する。

「座標は、A7区画、C7区画、D7区画全域とする。」

二酸化炭素消火装置、準備完了」

目標となる人物の数が多すぎて役には立っていないようだが、自動警戒排除システムも、未だに起動していることは、それから転送されてきた映像の映るモニター画面を見ていたら分かる。

Automatic Warning Removal
自動、警戒、排除の頭文字、そして、WとRの間にandを入れたものに、システムのSを付け加えて、AWARSと呼称される。

このシステムは、日本皇国軍の技術研究部門により開発され、販売権の委託を受けたさくら警備保障によって、民生品としても売られている代物である。

いくつかバージョンはあるが、ベースとなる純正品は、空間全体を捉える広角カメラ、顔がはつきり映る高感度カメラ、熱源を感知するサーモグラフィカメラの3つのカメラと顔認証システムと、これを連結したのが脅威度判定装置であり、これの判断で自動的に排除する。

また、脅威の排除に使用されるエアガン方式のテザー銃は、購入者が銃刀法に引っ掛からない仕組みにすることを、念頭に開発されて

いる。

国防省に使用されているモデルは純正品で、広角カメラ内に動く目標を捕捉すると、サーモグラフィカメラと高感度カメラによる精査を開始する。

サーモグラフィカメラが熱源を感知し、脅威度判定装置により、これが人間であると確認されると、顔認証システムが使用される。

顔認証システムは、高感度カメラが捉えた顔が、データベース上に存在するかを確認する。

そこに、合致するデータがなければ、直ちに攻撃を実施する。

攻撃自体は単純で、圧搾空気により、撃ち出された電極がスタンガンとなる。

この電極はワイヤレスタイプで、銃弾の形をしていて、弾底部と先端部にある特殊金属が互いに接触することで、瞬間的に高圧電流を発生させる。

これに接触した侵入者を昏倒させ、急行した警備員が捕縛するという仕組みで、運用されている。

「第二小隊、接近中。」

「この付近に展開中の、敵別動隊を排除していきます」

モニターを見ていた下士官が叫んだ。

「攻撃中止、攻撃中止。」

次の命令を待て」

部屋の外からは銃声が響き渡り、市ヶ谷駐屯地が戦場と化していることを実感させる。

「統合^I作戦^O指揮所^C前面^Pの廊下から、敵が排除されたら知らせてくれ。」

田中大将らだろうから、迎えに行く」

「了解しました」

同時刻・市ヶ谷駐屯地病院棟正面玄関

「来るんじゃない。」

「ここは、この場所は君たちが来る場所じゃない」

3脚に据えられたブローニング12.7mm機関銃と医官が1人、土囊の裏ではあったが、ここを通すわけにはいかないという気概に溢れ

て、立っていた。

それに対抗して睨み合うのが、二十数人の集団である。

彼らの主な武装はAK―74と言った自動小銃で、機関銃の火力をもつてしても、制圧できるかは不明である。

彼らは彼らにとつて、もつとも重要な任務を与えられていた。

すなわち、佐竹中尉の暗殺である。

皇居攻撃部隊がしくじり、天皇と佐竹中尉をみすみす取り逃がした。

ここで諦めることになったとしたら、実行グループの家族全員が飛ぶ。

人質の存在が彼らを、奮い立たせていた。

「そこを退け」

双方の睨み合いが、集団の強引な突破で終結に向かおうとしていたそのときに、ブローニング12・7mm機関銃が猛然と火を噴いた。

不用意に動いてしまったことで、軍医が引き金を引いてしまったのだ。

やたらめつたらに飛ぶ銃弾は、連続して人体に命中すると、その場にミンチを作り出した。

ブローニング12・7mm機関銃に与えられた肉切り包丁ミート・チョッパーの名は伊達ではなかった。

たった3分の射撃で、盾にできるものがなかった集団は、呆気なく全滅した。

「あれ？」

やり過ぎたかなあ」

「このまま、統合戦指揮所I C Pに向かうぞ」

機密庫などには、特殊測量部隊等がいて、防御を固めているはずだ。ならば、向かう場所は決まってくる。

そう判断した堀北少尉は、最寄りの階段を一気に駆け下った。第二小隊の面々も、あとに続く。

それは、地下5階に差し掛かった頃のことである。

「ビヤッハー」

世紀末のような掛け声をあげて、大暴れしている人間が来た。

「絶対に撃つなよ、だから撃つな」

日本皇国海軍の黒い制服を着て、MP―5を片手に持ったキングコング：じゃなくて、じゃあ、あれは何だという問題が浮上する。

しばらくして、堀北少尉は答えを得た。

「あれは味方のはずだ、確か」

うる覚えの記憶の片隅から、引つ張り出した情報は、堀北少尉の国防大学の同期生である佐竹中尉の叔父、田中大将であった。

「あつ」

中二病チックな言動を、階級的な意味での部下に、そして自分の知り合いの知り合いに、見られたことへの驚愕が、田中大将の表情に表れていた。

そこで、堀北少尉がとった行動は、この一切を見なかったことにすることだった。

「第1歩兵連隊第一中隊第二小隊の堀北少尉であります。

海軍軍令部の田中大将ですね？

これより我々は、統合作戦指揮所^{I C P}に向かうところではありませんが、ご一緒になされますか？」

「うむ、分かった」

先程までの事態をなかつたことにしたい田中大将は、この提案に乗ることにした。

再び第二小隊は、階段を駆け下っていく。

統合作戦指揮所^{I C P}周辺の廊下には、敵兵が終結しつつあった。

「直ちに排除せよ」

堀北少尉の指示が、小隊全員に送られる。

射撃しながら、遮蔽物から飛び出した兵士は、一気に前進する。

銃弾が飛び交うなかを、普通は着実に前進することは不可能で、それには機関銃が存在が重要なポイントである。

このときの敵側には、それが存在しなかった。

だからこそ、第二小隊の中央突破の成功に繋がったのである。

統合作戦指揮所^{I C P}付近の廊下から、侵入者の駆逐することができた。

逃亡する侵入者の追撃部隊として、堀北少尉の指揮下にある2個分隊を送った。

国防省の地下層からの排除を、迅速に行うべきだと判断したのだ。「第1歩兵連隊第一中隊第二小隊の堀北少尉であります。」

統合参謀本部長、参謀総長の皆様にご無事で何よりであります。報告します。

この周辺より敵兵の大多数を駆逐しました。

これより周辺の搜索を開始します」

統合作戦指揮所^{IC}のドアが開き、出てきた人物に、堀北少尉は敬礼して報告した。

「うむ、ご苦労。」

「ここまで働きづめのようだが、士気は大丈夫かね？」

第二小隊は皇居の戦鬪以降、働きづめいや戦いづめであった。

「ご心配おかけします。」

まだ、大丈夫だと思えます。

では、失礼します」

立ち去った堀北少尉を見送った前田大将に、田中大将が話しかける。

「気になるか？」

「うん、彼は出世しそうだね。」

うちの甥っ子と違ってさ」

前田大将には、甥っ子がいたらしい。

「といつても、名家の出の人間らしく、我が儘で傍若無人で、勤務評定は低かった。」

「よくて中佐、悪かったらこのまま退役だな。」

妹の子供なんだが、バリバリの阿呆でな」

「ああ、島野君だったか。」

「今は、第2近衛連隊にいるんだっけ？」

「ああ、あれはただの無能だよ」

作戦指揮機構のトップとして、前田大将は今回の事態に託つけて、近衛旅団を解隊させるつもりであった。

ただでさえ、癒着や汚職、犯罪の温床となっているとの指摘が相次いでいたのだ。

前田大将のなかで、このことは決定事項となっていた。家族の情なんてものが、それに介在することは一切ない。

「まあ、妹からどやされるかもしれないが、奴も甘やかすだけが愛情じゃないって分かってるはずだ」

「だと、いいがなあ」

「ひえ〜」

陸海空軍の軍令機関の集中するフロアで、防弾仕様の事務机を盾にしながら、抵抗をするのは事務を担当する軍人たちだ。

弾切れで使えないライフルを捨て、腰に差していたピストルを抜いて、1人が1発撃つごとに、30発近いライフル弾が撃ち込まれる。

10式戦車の装甲と同じ部材で作られた事務机は、7.62mmや5.45mmのライフル弾によく耐える。

戦車の装甲板の値段が高いことに気付いた調達関係者が、民生品に転用できないかを検討した結果が、この事務机であった。

事務机をベースとして、カウンターが開発されると、銀行などの犯罪に狙われやすい場所で、普及は進んだ。

今では、金庫室の外壁などにも用途が広がってきているのだ。

「弾薬だ、最前列に渡せ」

各フロアに1個はある武器庫に備蓄されている銃弾を、すべてかき集めて、抵抗しているこのような場所が国防省内に多数あり、それぞれが孤立しながらも、味方を信じて抵抗を続けていた。

「味方が来るまでは、戦い抜くぞ」

決意を決めた兵曹長に、部下の兵曹が食いかかる。

「無茶ですよお」

それを無視した兵曹長は、89式小銃を構えて発砲する。

そこには、人間性や法律の介在する余地はなかった。

「無茶でもやるしかないんだ。」

「これが、俺たちの生き残るための最後の術だ」

「徹底的に搜索しろ。」

この中にいるであろうネズミ1匹、見逃すな」

堀北少尉は、部下にそう訓示していた。

その訓示を受けて、第二小隊の全員が動き出した。

「敵を見逃すことは、我が陸軍にとって最大の汚点となるだろうな」

広大な地下空間に散っていった部下たちを見送った堀北少尉は、周辺を警戒しながら言う。

地下7階はクリア、その報告を受けてから、堀北少尉は地下6階の敵兵を掃討し始めた。

「地下5階には、病院棟を含む市ヶ谷駐屯地の施設に連絡する地下通路があつたはずだ。

そこに向かうにしても、足元をしつかりと固めないといかん」

追撃に出動している2個分隊と、相互に連絡を取りつつ、堀北少尉たち、第二小隊は敵兵を挟撃する。

地の利は、互いにない。

ならば、地図なりを持つ方が優位に立てる。

全員が持つ官給品のスマホには、市ヶ谷駐屯地の地図がデータ・リンクを介して、共有されている。

統合¹作戦指揮所^cにあるリンク装置から、アップ・リンクされた情報には、対敵情報を含む様々な状況に対応できる情報があつた。

その情報に従い、第二小隊は敵を殲滅した。

地下6階の敵兵の沈黙を確認してから、地下5階に続く階段の途中で、第二小隊の全員に堀北少尉は言った。

「弾薬の補充は済ませておけよ。

1階分の掃討が終わるまでは、絶対にできないからな」

「あんたらも、大概にしつこいなア」

地下5階の地下通路でも、戦闘が勃発していた。

ここでも、医官が40mm擲弾を次々に撃ち込み、敵兵を沈黙させていく。

ただでさえ、地下階に病院の重要施設は集中している。

今ここで、ここを突破されるのは、民間のビルが爆破される以上にまずい。

「上はどうやら、片付いたみたいやし。」

ここを通すわけには、こつちとしてもいかんのや」

10式戦車の装甲を転用した防火扉に身を隠しながら、銃を乱射する。

日本皇国軍の想定する全ての状況において、この防火扉は優れた頑丈さを誇っていた。

「こつちは、小銃だけやと思うなや」

お手製の爆弾を投げ込んでから、防火扉を閉める。

爆弾に仕掛けられた時限信管には、10秒の猶予しかなかった。

そして、TNT火薬2kgの威力は、投げ込んだ医官の想像を越えていた。

さつきまで、ひっきりなしに響いていた銃声がなくなり、そんな状況に敵の罠を疑いつつも、医官が顔を出す。

「やったか？」

世界で一番有名なフラグを立てたものの、生身の人間が爆発の衝撃に耐えられるはずもない。

防火扉に殺到していた敵は全滅していて、フラグは不発だったのだが、爆発音に新たな敵が集結し始めていた。

地下5階から爆発音が響いたとき、堀北少尉以下の第二小隊は、地下5階に向かって階段を駆け上がっている最中だった。

「建物内に爆発音。」

音源は、5階地下通路付近」

耳のいい兵士が、堀北少尉に報告する。

「小隊、止まれ」

堀北少尉は、部下の報告を聞いて、小隊の進行を止めさせた。

「通信兵、統合作戦指揮所に連絡。」

現状で分かる情報で、詳細なものを要求してくれ」
「了解」

通信兵が問い合わせている間に、第二小隊は作戦を練っていた。

「小隊長、報告。」

統合作戦指揮所によると、病院防衛のために医官が爆弾を使用したら

しく、病院に侵入を試みた集団は壊滅。

ただし、新たな集団が接近中とのこと」

「分かった。」

一分隊、二分隊は、医官の援護。

三分隊、四分隊は、抵抗を続ける兵士を救出しろ。

分かったな？」

「了解」

堀北少尉の指示に、無線機からも周りにいる部下たちからも、承諾の返事が来た。

それに領いた堀北少尉は、突撃を指示した。

「第二小隊は、直ちに突撃せよ」

階段を上がりきった第二小隊は、分隊ごとに地下5階フロアに突入した。

2ヶ所しかない階段からは、それぞれ20名を越える兵士が雪崩れ込んでいく。

「敵兵！

直ちに排除せよ」

敵兵に出会った分隊長が叫ぶ。

次の瞬間には、銃声が1発響いて、敵兵は倒される。

「もう少しで、地下通路だ」

堀北少尉の率いる2個分隊は、地下構造のなかを縦横無尽に動いていた。

病院に襲撃を仕掛ける彼らの目標は、佐竹中尉の暗殺に違いなかった。

「地上とここ以外には、侵入路はない。」

「ここを守りきれば、我々の勝利と言うわけだな」

無意識のうちに、そう呟いた堀北少尉は、おもむろに大声をあげた。

「こちらは、日本皇国軍だ。」

俺たちは、ここにいますぞ」

突然響いた大声に、振り向いた敵兵の額を、堀北少尉の部下が射抜いた。

挟み撃ちされる形になった敵兵は、次々に倒されていった。

そして、この集団の最後の1人が沈黙するまでに、時間はそれほどかからなかった。

「国防省に攻撃？」

部下からの報告に、素つ頓狂な声をあげたのは、第1旅団の旅団長だった。

「はい。」

皇居攻撃に参加した部隊の別動隊のようです」

「はあ…確か、第1歩兵連隊からの報告によると、皇居攻撃に参加したのは900名近くいたよな？」

「はっ、撤退するまでに確認した数を集計すると、850名ほどになるかと思われまます」

溜め息を吐きながら、旅団長は部下に確認をとった。

「多すぎるぞ。」

これじゃあ、連隊規模じゃないか。

我が国の警備というか、警戒がそれだけ緩かったのか？」

旅団長は、愚痴をこぼした。

これは、その場にいる幕僚たちも思っていたことである。

しかし、彼らとて知らないわけではなかった。

沿岸警備部隊が、どれだけの血を流しながら、国境線を守ってきたかを。

「分かりません」

「まあ、こんなことはくつちやべってる暇はないな。」

それで、国防省の現状は？」

「参謀本部の命令を受けた11中隊の第二小隊が、現状では対応に当たっていますが、負傷者もいて今では高々40人程度に減ってますし、第1歩兵連隊から応援を派遣すべきと、自分は考えます」

残敵掃討の準備中だった第1旅団の各部隊は、まだ戦えるだけの武器弾薬、そして人員を保持していた。

一部の部隊、例えば偵察大隊などはすでに先行して、周辺の搜索を開始している。

「うむ、その通りだと思う。

先遣隊として、とにかく11中隊を送っておけ。

五月雨式の出勤は下策中の下策だが、こうなっては致し方あるまい」

「分かりました。

直ちに11中隊を送り、その報告を待つて、後続部隊を送ります」

「よろしく頼む」

「次で最後の階になるであろう1階だ。

1階の敵兵を排除した後、すべてを検索せよ。

敵兵の痕跡を見逃すな」

驚くべきほど短時間で、第二小隊は地下構造物内を掃討し終えていた。

というのも、各階では味方の職員たちの抵抗が続いていたから、それだけ敵兵が分散させられた。

だから、局面局面で第二小隊は、数の優位を作り出すことができたから、奪還は簡単であった。

そして今、第二小隊は1階に踏み込んだ。

1階には、エントランスがある。

国防省事務棟のエントランスは、3階までを吹き抜けにして、開放感に富んだ設計にしつつも、それでいてしっかりとした抗堪性を持たせる構造となるように、配慮されて設計されている。

耐久性に関する一定の基準が、エントランスの各部位に設定されていて、特に地下に繋がる場所の周辺はかなり強固で、50キロトンの戦略核にも耐える設計だ。

「上層部に通ずるシャッターに、異状はありませんでした」

「分かった。

現在、中隊の本隊がこちらに向かっている。

旅団の部隊も非常時に備えて、待機しているらしい。

上層部に通じる場所には警戒要員を置き、敵兵の再びの攻撃に注意

せよ」

「了解」

1階の各所に散って、89式小銃を構える将兵たちには、一切の油断も見られなかった。

『第一分隊から小隊長。』

11中隊、現着。

状況の報告を要請してきてます』

「小隊長、了解。

今からそっちに行つて、俺が報告する」

「了解」

「直ちに、各小隊に状況を報告させ」

皇居内の掃討を終えた第1歩兵連隊第一中隊は、直ちに次の戦いの準備を進めていた。

赤坂に進出していた野戦補給廠から、備蓄分の弾薬を受領させ、赤坂の野戦病院に負傷者を後送していた。

中隊本部の衛生大隊所属の救急車が、多数の負傷者を呑み込んで、野戦病院へと去っていく。

「旅団司令部よりの命令が、我が中隊宛に送られてきました」

「やつと来たか。」

「それで内容は、何だ？」

中隊長のいる場所に近寄ってきたのは、中隊付きの通信兵だった。

「はっ、報告します。」

第1歩兵連隊第一中隊は、直ちに国防省、市ヶ谷駐屯地に進撃し、敵兵と交戦中の第一中隊隷下の第二小隊を援護せよとのこと」

「分かった。」

直ちに出動する。

隷下の部隊に、そう伝えてくれ」

中隊長の言葉に頷いた通信兵は、そのまま立ち去っていった。

「堀北少尉、状況は？」

「報告します。」

現在、第二小隊の独力で国防省の本庁舎より敵兵を駆逐。

第一中隊本隊の到着を待つて、上層部の確認を行うつもりであります。

「また現在、予備警衛員登録者の招集を急がせております」

陸海空軍の市ヶ谷駐屯地の基地警備隊の要員には、死傷者が続出していた。

全体の死傷者は、4割を越えるレベルにまで達し、全滅と判断されるレベルになっていた。

「また、地下の重要区画にある装備品の損害復旧を、当直員には急いでもらっています」

地下区画の一部には、兵器システムのデータを保管している区画、情報本部の行っている諜報や防諜に関する業務のデータを保管している区画、さらには各種レベル機密接触資格者名簿といった最高レベルの機密情報を保管している区画もある。

「うむ、上層部へと繋がる場所に異状は見られなかったのか？」

「はい。」

小隊から抽出した警戒要員を各所に配置して、警戒を厳としていきます」

「分かった。」

「直ちに確認に移ろう」

国防省庁舎内に突入した第1歩兵連隊第一中隊の活躍によって、国防省内にはもう敵兵がないことが判明した。

よって第1旅団の活動は、環状7号線内での敵兵の掃討だけとなった。

埼玉県狭山市稲荷山2丁目3番地にある日本皇国空軍入間基地には、情報本部情報業務・防諜業務群公安部隊東部方面隊本部と関東地区隊が所在している。

入間基地の本部庁舎の脇に建つ6階建ての建物に、入間憲兵隊、さらには日本皇国軍情報保全隊入間基地派遣隊と同居している形となっている。

同じような業務を実施している彼らではあるが、任務の内容や指揮系統は大きく異なる。

統合参謀本部長直轄組織である情報本部を上部組織に持つ公安部隊に対して、情報保全隊は国防大臣に、憲兵隊は所在基地もしくは地区の司令官に直隸するとされており、事務連絡機関として憲兵隊司令部が統合参謀本部の下にあるのみである。

また、公安部隊が軍内外において、防諜活動ならびに情報収集活動を実施しているのに比べ、情報保全隊は軍内部における情報活動、また憲兵隊は軍内部における司法警察活動、軍人の関係する事件の調査が主な仕事であり、その力は大きく差がある。

「奴らの拠点はどこだ？」

隈無く探せ、必ずどこかにあるはずだ」

作戦指揮本部と化した会議室の机の上には、大きな地図が広げられていた。

そこには、多くの情報が貼り付けられ、電話が設置されていた。

そのうちの1台の電話に、着信があった。

近くにいた係員が、電話機にとりつく。

「群馬県警公安課よりの通報。

最終的に群馬県内のNシステムにNヒット……」

日本皇国陸軍歩兵部隊が都心部にて、敵工作員と激闘を繰り広げている最中であって、公安警察や情報部隊は全力をあげて捜査に当たっていた。

「最前線にいる奴等が命懸けてんだ、俺等は命を懸けることはない分、

他のことに全力を尽くすのが筋だろうぜ」と、上司は言う。

さらには、現場のレベルで報復策の検討すらも、考えられており、そのうちの現場の責任で起こせるものはすでに実施されていた。

「対象の拠点は、防犯カメラ捜索の結果、榛名山付近にあると思われる」

短い会話の後に、係員が報告をあげる。

現在、首都圏内及び近接する地区に所在する各部隊は日本皇国軍統合衛星通信系に入系中である。

統合参謀本部事態対処チャットからは、入系した各部隊に対して、情勢報告が送られている。

第1旅団の激闘はまだ続いている。

海では、羽田空港沖合にて、沿岸警備部隊と不審船が戦闘を開始したとの報告も入った。

「直ちに特殊部隊を送り込め。

すぐにも、制圧するのだ」

陸軍の特殊部隊は、既に大宮駐屯地や宇都宮駐屯地に展開して、すぐにも出動が可能な状態だ。

海軍特殊部隊が最前線に近いところにいるのに、お 対して、陸軍が通常部隊の編成のみを皇居に送り込んだのには、いくつかの理由があった。

情報本部情報業務・防諜業務群公安部隊中部方面隊中国地区隊からの報告により、密入国した工作人員の存在が知らされていたことがある。

密入国を手引きした人物の供述は、記憶の曖昧などところがあり、総数までははつきりしなかったのである。

「俺たちも現場に向かうぞ」

隊長の言葉に、走り出した隊員の一人の頭のなかに、沿警隊の捕まえたあれは、今思えば僥倖だったのかもしれないなどと言う考えが浮かんだ。

そうかもしれないと思いながらも、そんなことを考えている暇は、彼らにはなかった。

榛名山中にあった敵拠点には、陸軍特殊部隊が攻撃を仕掛け、制圧を完了していた。

その特殊部隊の活動の前には、情報収集に当たった情報要員達のと汗の努力があった。

一夜のうちに、特殊部隊による攻略は完了し、現場は駆けつけてきた情報本部の要員に引き渡された。

薬莖や銃器の回収や死体の収集などといった戦場掃除のために残る特殊部隊員の他は、既に駐屯地に帰還しており、ここに残るのは血と硝煙の臭いにまみれていた。

「こりゃあ、ひどいな」

地元の大宮駐屯地から借り出した高機動車から下りた要員が、足下に転がる死体を見ながら言った。

情報本部の車両は、軍の一般車両とほぼ同仕様のものを採用している。

今回、乗ってきたのは、高機動車であり、

昨夜には鮮血の撒き散らされた現場は、今では黒ずみが残るのみとなっていた。

「敵さんの服装は、至って普通……じゃありませんねえ」

転がっている敵兵の死体、下はカーゴパンツにこれは見た目には普通に見える。

だが、死体を動かしてみて、さらには服を脱がせてみると、Mad e in Koreaの文字がタグに印刷されていた。

「韓国産の物品は、我が国は輸入することはないのにな」

7.62mmのライフル弾が数発、胴体に命中して、絶命したと見られるこの死体の服には、ドッグタグ認識票が縫い付けられていた。

「これはきれいな認識票だな。ドッグタグ」

名前が読み取れるぞ」

布製で、そこまでの強度はないドッグタグ認識票ではあるが、今回は辛うじて文字を読み取ることができた。

「キム・ヨンファ。」

「これがこの死体の名前かな？」

ハングル文字の読み書きや韓国語の会話は、対朝鮮半島情報を取り扱う部署では必須とされているスキルである。

米国防務省の韓国を担当する外交官を講師として招き、韓国語の習得を行わせるのである。

少なくとも、韓国の情報機関よりは、日本の情報機関の方が柔軟であった。

死体から調べることは、専門部隊である公安部隊関東方面科学調査隊法医学班の仕事である。

死体袋に詰められた死体は、冷蔵トラックに載せられると、埼玉にある国防大学校医学部附属病院に送られる。

隣の芝は知らないことマッドサイエンティストの多い日本皇国軍の部署において、**狂科学者**扱いを受けているのが、科学調査隊の隊員たちである。

別荘地は人の手が、表向きは入っていないことになっている。

どの建物を見ても、廃墟に近い状態で放置されており、雨風を凌ぐので精一杯のようだ。

「やはり奴らは、ただの一般人ではない。

過酷な訓練を何度も受けた軍人たちだ」

この空間は、一般人には耐えられない。

どこからか異臭が漂い、これが人が生活していた時の臭いであったとしたら、耐えられない臭いだ。

「ゴミ、ゴミ、ゴミ、どこを見回しても、ゴミだらけやないか。

こりゃあ、臭うに決まっとるわ。

ここに残ってるのは、後方支援要員か？」

「どうやら、そのようです。

証拠品の一部はすでに破棄されており、証拠は集められそうにありません。

破棄の仕方は、プロのやり方に近いですね」

警察の鑑識ならば、見過ごされてもおかしくない。

そんなレベルまで、破棄を進めていた。

「破棄を進めていたということは、奴らも実行部隊が帰ってくることは、はなから期待してなかったゆうことやな」

「そのようです」

部下の言葉を聞いた班長は、あるものを見つけた。

「キムチや。」

大久保のコリアンタウン製やな」

朝鮮ではキムチは国民食であることは有名であるが、朝鮮で作られているものと日本で流通するものとは、味が根本的に異なる。

開けて匂いを嗅いただけで、製造元を断定する。

本場のものに近い匂いであつたからだ。

朝鮮系土台人組織の内偵を続けていた彼には、大久保のコリアンタウンに入ったこともある。

観光客のふりをした調査では、

「いくら、キムチがポピュラーなってきた言うたかて、こんなに食うんは朝鮮人くらいや」

キムチはまだまだ大量にあつた。

「この箱の中身は、すべてキムチです。」

大体、キロ単位で包装されてますね」

「全部押収せい。」

土台人の基盤は、まだまだでかいちゆうことが、これで分かつたんや、それだけでも儲け物やと思うで」

これから、この事件の捜査が終わつても、彼らには続けなければならぬことができた。

大久保に所在する土台人組織の内偵である。

「お前ら、次の仕事ができたぞ」

数時間に及ぶ現場の捜索は終了した。

現場を見た限りでは、数百人が生活していた形跡を確認でき、韓国の関与が認められた。

「ふう、よろしい」

現場から集められるだけの情報は、日本皇国軍情報部員の手によつて、収集できた。

残りの仕事は、科学の力を使い、すべてを明らかにすることだ。

東京都新宿区市ヶ谷・日本皇国軍中央病院特別病室

そこには、今回の騒動における最大の功労者である佐竹中尉が、入院していた。

より多くの医療スタッフ、そして最新、最高の医療機器や技術を投入して、佐竹中尉は延命に成功していた。

その裏には、重傷を負ったものの、放置された負傷者の存在があった。

「退避命令を無視した馬鹿共は放っておけ」と言い、佐竹中尉の治療を優先するように命令したのは、統合参謀本部長の河野大将であった。「状態は安定しています。」

数日中にも目を覚まし、歩行可能なレベルにまで回復するものと思われまます」

眼鏡をかけた女性医官が、カルテを見ながら、言う。

「だが、これは聞いてないぞ」

「私も予想していなかった事態です。」

マウスでの実験の際には、このような症例は見当たりませんでした。

かなり稀に、このような女体化いえ、性転換現象が副作用として、生起するようです」

この分析は的を射ているようで、的外れであった。

なぜなら、副作用であることは間違いないが、ごく稀ではなかったからである。

人間での治験は今回ではじめてであったため、確認ができていなかったのである。

詳しい原理はわからないが、体組織の修復の段階で、人間の遺伝子の性別を決定するY遺伝子が汚染され、X遺伝子に変容するものであったためである。

「治る見込みは？」

「確実とは言えませんが、もう一度この薬を投与すればあるいは」

「ふむ、確実にできれば困るな。」

無論、こちらとしては治らなくとも、困らないのだが」

言外に、確実に治るよなあとという圧力を込めて、田中大将は言う。

「それに最近は女性海軍軍人も増えているからな。」

そんなに目立たないだろうが」

WAVEというのは、Woman Accepted for Volunteer Emergency Serviceを略した言葉であり、女性海軍軍人を意味する言葉である。

「速やかに治療法の完成を急ぎます」

「そうしてくれるか。」

そのための人員、機材は優先的に回す。

無論、人権もない奴隷もだ」

「奴隷もですか？」

「ああ、今回の事件の捕虜、さらには凶悪事件の死刑囚、日本皇国軍及び公安警察が秘密裏に処分したい人物、それらの人物は諸々の官庁が書類を書き換えれば、十分に存在を抹消できる連中だ。」

使い潰してくれて、構わない」

田中大将の言葉は、人体実験を繰り返しても構わないと言う許可だった。

「了解しました。」

直ちに取っかかります」

「うむ、田所少佐、万が一、万が一にも失敗したのなら、分かっているね」

田所美沙少佐の肩に、ポンと手を置いた田中大将はそのまま病室を去っていった。

病室のベッドに寝かされた佐竹中尉は夢を見ていた。

自分達に集まってくる工作員に、滅茶苦茶に撃たれる夢であった。

「このくそ野郎共、ぶっ殺してやる」

呻き声と共に、佐竹中尉の罵声が漏れる。

そこから数分呻いた後に、佐竹中尉は目を覚ました。

「ハハハハ？」

目が覚めたら、見知らぬ天井だった。

そんな事情以上に、驚くべきことは自らの声だった。

声変わりする前と比べても、かなり高いソプラノ声だった。

そして、自分の胸を見ると、盛り上がっていた。

「なんじゃ、こりゃあ」

佐竹中尉の絶叫が、中央病院に響き渡った。

夢の内容すらも、忘却の彼方に向かうような衝撃だった。

そんなときに病室のドアが開き、女性が入ってきた。

「目を覚まされたようですね。」

私は、国防大学校医学部付属病院外科医官、田所美沙少佐です。

佐竹中尉の主治医を勤めます」

「はあ、すみませんが、この状況に対する説明を求めます」

「分かりました。」

まず、怪我の説明から行います」

田所少佐の言葉に、佐竹中尉は頷いた。

「戦闘における銃創は全身に及んでいたため、早々に我々、医官は外科的治療を諦め、私が開発中だった新薬の投与という方針に切り替えました」

田所少佐の説明に、佐竹中尉は大きく頷いた。

「説明を続けます。」

私の開発した新薬は、艦隊娘これくしょんに出てくる高速修復材のようなものです。

体内の修復力を前借りして、その効果を数倍に増幅して作用させるというものです。

その効果の高さは、佐竹中尉の体を見ればわかりますが、思わぬ副作用がありました、これより副作用を研究していきます。

それで今後の治療の方針ですが、薬の半減期及び体の修復力の回復を待ち、再度、投与します。

そこまで、およそ半年から1年の予定です」

「分かりました」

事件のあとで、世間は

とあるニュース番組

「東京事件の続報ですが、本日、日本皇国軍による環状7号線の封鎖が解かれました。」

現場の倉橋さん、倉橋さん」

スタジオから画面は切り替わり、現場にいるリポーターが写る。

「はい、現場の倉橋です。」

私は今、封鎖線の外縁部、検問所の設置されていた場所に来ています。

今では、検問所の撤収作業が本格化しており、陸軍兵士の動きも慌ただしいものとなっています。

未だに装甲車の姿が町中に見られ、戦闘の傷跡が未だに深いと感じさせます。

平穏な日常とはほど遠いですが、これから事件の爪痕を乗り越え、復興へと進んでいくでしょう」

リポーターが、事前に用意していた原稿を読み上げる。

「日本皇国陸軍によると、作業員の残存勢力はほぼおらず、これよりの治安維持は警視庁により行われるとのことです。」

戦後初めての治安出動でしたが、内閣危機管理監の安室さん、今回の戦闘はどうでしたか？」

「そうですね。」

今回の戦闘では多くの戦死者が出て、全滅した部隊もあります。

そんな中でも、多くの陸軍部隊は奮戦しました。

そんな彼らに賞賛を与えたいと思います」

「弁護士小林さんはどう思われますか？」

「今回の戦闘において、法律的な問題が多くありました。」

例えば、戦闘ヘリコプターによる敵兵士への攻撃などはその最たる例でしょう。

日本皇国軍法に規定のある治安出動では、武器使用に関しては警察官職務執行法を準用することとなっており、警察官の武器の所持につ

いては、警察法第67条で、「警察官は、その職務の遂行のため小型武器を所持することができる」と定められている。また武器の使用については、警察官職務執行法第7条に規定されており、その内容は次のとおりであること。

警察官は、犯人の逮捕もしくは逃走の防止、自己もしくは他人に対する防護または公務執行に対する抵抗の抑止のため必要であると認める相当な理由のある場合においては、その事態に応じ合理的に必要と判断される限度において、武器を使用することができる。

ただし、次の一つに該当する場合は除いては、人に危害を与えてはならない。

(1) 刑法第36条(正当防衛)または同法第37条(緊急避難)に該当する場合。

(2) 死刑または無期もしくは長期3年以上の懲役もしくは禁錮にあたる兇悪(きょうあく)な罪を現に犯し、もしくはすでに犯したと疑うに足りる十分な理由のある者がその者に対する警察官の職務の執行に対して抵抗し、もしくは逃亡しようとするとき、または第三者がその者を逃がそうとして警察官に抵抗するとき、これを防ぎ、または逮捕するために他に手段がないと警察官において信ずるに足りる相当な理由のある場合。

(3) 逮捕状により逮捕する際または勾引(こういん)状もしくは勾留状を執行する際その本人がその者に対する警察官の職務の執行に対して抵抗し、もしくは逃亡しようとするとき、または第三者がその者を逃がそうとして警察官に抵抗するとき、これを防ぎ、または逮捕するため他に手段がないと警察官において信ずるに足りる相当な理由のある場合とされています」

事前に用意されていたフリップを見せながら、弁護士の小林は言う。

「先ほど挙げた戦闘ヘリコプターの例で言えば、彼らの行った戦闘行為は過剰防衛ととられかねません。

つまりは、今回の出動にあっては適正な武器使用であったと、断言できるだけの根拠がないのです。

そこをついて、自称、人権派弁護士が、殺人罪での告訴の検討をしているようです」

「それは大変な事態ですね」

「ですので、これからの武器使用には躊躇いがでないように、適正な法的根拠が必要です」

「やはり、そうですねか？」

弁護士の言葉に対して、キャスターは頷く。

「東京事件の報道のなかで、初めていいニュースが、入ってきました。明治大学病院に検査入院していた陛下ですが、すべての検査を終え、退院されました。」

結果に問題はなく、今日中にも赤坂御用地内の仮設御殿に移られる予定です。

入院していた明治大学病院にいる島野さん、お願いします」

「明治大学病院に入院していた陛下は、先ほど

宮内庁の車両で病院を出られました。

車両に乗り込まれる前に、陛下のお言葉を発表されました。

読み上げます。

『天皇家、皇室の創設以来、2700年が過ぎた。

天皇家のなかでも、多くの血が流れてきた歴史がある。

しかしながらも、それは兄弟間の争いであつたり、内部の争いであつた。

今回初めて、我が国の者ではない者に襲われた。

そんな未曾有な事態にあつても、日本皇国軍は日常業務を継続し続け、皇国の首都、我が皇室のお膝元である東京から敵兵を排除した。

彼らは高潔で、高い士気、高い技術を以て、国防の任についている。

彼らこそ、今の日本に必要であると思います。

彼らがいたからこそ、今ここに私は五体満足で立てているのだから』

侍従長を通じて、マスコミに配布されたこのお言葉は、すでに日本皇国軍部隊に通達されているとのことです。

明治大学病院前からは以上です」

画面はスタジオに切り替わる。

戦後以来、敵の攻撃を受けたことのない東京が攻撃を受けたことは、国民に大きな衝撃を与えた。

放送局の報道は、この事件に対する物が多くなりつつある状況であった。

「明治大学病院前の倉橋さん、ありがとうございます。」

さて、今回の事件に関しての戦闘状況の概略が、国防省及び統合参謀本部から発表されました。

この発表にもある通り、事件発生が午前9時とあります。

しかし、戦闘に巻き込まれた民間人はほとんどいませんでした。

そこにはなにか理由があるのですか？」

「事前に東京近辺で、皇室関連の騒乱事件発生の可能性があることを、日本皇国軍情報部隊は把握しており、非常時避難計画の試験的運用の名目で、企業や官公庁は休業しておりました。

また、民間人のほとんどは避難指示を受けて、域外へと退避してまいりました。

陛下は自らの意思で、皇居に残られました」

「えっ、それで護衛は大丈夫だったんですか？」

「精鋭の近衛連隊が2個、また近隣の歩兵連隊が待機していました。

それに英雄もその場にいましたから」

「英雄とは……………」

キャスターの言葉に、解説の安室が頷きながら言葉を続ける。

「はい、英雄です。」

日本皇国海軍所属の軍人で、先の竹島沖海戦で単艦で敵艦隊を撃滅した人物です。

戦闘状況の概略にもある通り、事件の序盤、通報を受けてから、陸軍部隊が駆けつけるまでの間、陛下を守りきった人物です。

その映像がこちらです。

身元の判明を避けるため、モザイクがかかけられていることは、ご了承ください」

VTRが始まると、キャスターも食い入るように見つめる。

中身は襲撃犯を、1人の男が撃滅していくものだ。
流されていた映像が終わると、キャスターは口を開いた。

「失礼ですが、人ですか？」

「ええ、人です」

映像の衝撃に、キャスターは放心していた。

解説の安室が、声をかけてキャスターは復活する。

「失礼しました。」

続いているニュースは……………

世界最凶の日本皇国海軍について語るスレPart54

1：ミリタリーな名無しさん

このスレは、数々の武勇伝を打ち立てた日本皇国海軍について語るスレです。

特にルールはありませんが、荒らしは厳禁。

次スレについては、>>950が宣言してたてること。

2：ミリタリーな名無しさん

グダグダ続いて、54か。

思い返せば、長かったな

3：ミリタリーな名無しさん

>>2

ですね。

4：ミリタリーな名無しさん

>>2>>3

テンプレだな。

もつと捻りを利かせろ。

日本皇国海軍士官は、ウイットなジョークが言えてナンボだぞ。

5：ミリタリーな名無しさん

>>2>>4

ここまでがテンプレ。

毎回同じじゃねーか、コノヤロー。

6： ミリタリーな名無しさん
>>5

テメーもだよ、コノヤロー。

7： ミリタリーな名無しさん

>>2>>6

てめえらは、硫黄島送りだよ。

8： ミリタリーな名無しさん

>>2>>7

お土産は島唐辛子ですね。

分かります。

9： ミリタリーな名無しさん

6だけど、俺も入ってんのか。

10： ミリタリーな名無しさん

いつか、この件だけで、スレが消費されてしまうのだろうか。
いやないとも言いきれない。

11： ミリタリーな名無しさん

とりあえず流れを無視して投稿。

おまいら、今日のニュース見たか？

12： ミリタリーな名無しさん

見た見た。

あれだろ、あれあれ。

あれって、何だったっけ？（目そらし）

13： ミリタリーな名無しさん

あれは夢だったのだ。

14： ミリタリーな名無しさん

確かに、そうに違いない。

15： ミリタリーな名無しさん
少なくとも、あれは人ではない。

国のために戦った日本の軍人に対して失礼だが、同じ日本人と認めたくない。

16： ミリタリーな名無しさん

>>15

日本には船坂弘という前例があつてだね。

かのアンガウル島の戦いでは、米軍にやたらめったら撃たれても、けろつとしていて、捕虜収容所から脱走。

米軍の弾薬庫を破壊した御仁だ。

それに比べたら、あれくらい………

17： ミリタリーな名無しさん

映像見て、草原生やしたの俺だけ？

18： ミリタリーな名無しさん

>>17

いつの間に俺は書き込んだのだろう。

19： ミリタリーな名無しさん

あれで海軍軍人って、信じられるか？

20： ミリタリーな名無しさん

俺には無理だ。

21： ミリタリーな名無しさん

俺にも無理だ。

22： ミリタリーな名無しさん
同志スターリン、やつがいる限り、北海道占領は不可能です。

23： ミリタリーな名無しさん
共産厨は、国に帰れ。

24： ミリタリーな名無しさん
でだ。

映像に出てた奴の防大の同期が、俺の高校時代の

同級生だったんだけど、そいつの話によると問題の人物Xは3年の
ときに、台湾に留学してたらしい。

そのときに伝説を残したんだとよ。

25： ミリタリーな名無しさん

>>>24

k w s k

26： ミリタリーな名無しさん

>>>24

全裸待機

27： ミリタリーな名無しさん

そのときは、ちょうど台湾の国家主席が行方不明になった時だった
らしい。

急に防大からいなくなったんだが、その時は誰も気にもしてなかつ
た。

4ヶ月ほど姿が見えなくて、帰ってきた時に台湾に行ってたって聞
いた。

28： ミリタリーな名無しさん

問題の人物Xとか言うな。

仮にも英雄だろうが。
草原を生やしちまうだろうが。

29： ミリタリーな名無しさん

>>28

どう言えと？

海軍の田中さんとも呼べばいいのか？

30： ミリタリーな名無しさん

逆ギレすんなし。

うん、海軍の田中さんでいいよ。

31： ミリタリーな名無しさん

続きだぞ。

その海軍の田中さんは、台湾空軍のF-16戦闘機で、中共空軍のSu-27とドッグファイトしてたらしい。

性能差からか、味方機が苦戦する中、敵機を5機単独撃墜、4機を共同撃墜、7機を撃破したらしい。

32： ミリタリーな名無しさん

>>31

嘘だろ？

陛下を守った英雄は、日本の誇るエースパイロット様かよ。

33： ミリタリーな名無しさん

米軍「うちにも星井」

34： ミリタリーな名無しさん

間違えた。

正しくは「欲しい」な。

脳内変換よろしく。

35： ミリタリーな名無しさん
中国軍「やべー、勝てねー」

36： ミリタリーな名無しさん

韓国軍A 「どうにかして奴を殺すニダ」

韓国軍B 「無理ニダ」

同 A 「諦めるな、諦めたら試合終了ニダ」

同 B 「みんな死んじまったニダ、これ以上は無理ニダ」

同 A 「やべー勝てねー」

までは見えた。

37： ミリタリーな名無しさん

>>>31

海軍の田中さんでいいのか？

38： ミリタリーな名無しさん

>>>37

そこは気にするところじゃない。

分かったね。

39： ミリタリーな名無しさん

うん、一家に1台、田中さん。

要らないなあ。

40： ミリタリーな名無しさん

知り合いの特殊部隊の人が言ってたんだが、国防大学の学生に助けられたことがあるらしい。

丁度、台湾の国家主席が行方不明になった時くらいに。

そいつの素性は知らんらしいが。

41： ミリタリーな名無しさん
は？

何で、知ってんの？

42： ミリタリーな名無しさん

>>41

そいつを、酔わせて聞いた。

43： ミリタリーな名無しさん

最強の特殊部隊の弱点が、酒とはな。

44： ミリタリーな名無しさん

同感やわ

45： ミリタリーな名無しさん

にしても、強すぎじゃね。

海軍の田中さん。

46： ミリタリーな名無しさん

>>45

何をわかりきったことを。

47： ミリタリーな名無しさん

あれは国の宝だ。

あれさえあれば、中国にもアメリカにも負けん。

48： ミリタリーな名無しさん

この国に生まれてよかった。

49： ミリタリーな名無しさん

陛下が襲われたのは、誠に遺憾ではあるが。

この国の軍隊の強さを再確認できたな。

……以後もスレは続く……

東京都新宿区市ヶ谷・日本皇国軍中央病院特別病室

そこには、今回の騒動における最大の功労者である佐竹中尉が、入院していた。

「目覚めたばかりで悪いのですが、精密検査のお時間です。

ちなみに拒否権はありません」

「では、あなたを拒絶します」

田所少佐の言葉をけんもほろろに、佐竹中尉は拒絶した。

「そんなこと、言わないでくださいよう。」

私だって、お仕事なんですよ」

と言って、田所少佐は泣き出した。

なまじ美人なだけに、居心地が悪い。

つまり何が言いたいのかというと、女の涙に男は勝てないということである。

「検査自体は拒否しませんよ。」

少し南国の方で、その物の言い方を反省してもらっただけで…」

「沖縄ですか？」

「いいえ、南鳥島です」

「えっ？」

「南鳥島です。」

あそこには、鳩間軍曹がおられるので、舐めた口を矯正してくれま
すよ」

南鳥島は日本皇国海軍南鳥島航空基地があり、日本最東端にある日本皇国海軍沿岸警備部隊の航空基地である。

日米SAR協定に基づき、救難航空機が24時間体制で、スクランブル待機している。

「南鳥島教育隊送りですか？」

「知ってましたか？」

田所少佐は、佐竹中尉の言葉を肯定と受け取った。

そして、南鳥島には指導困難者更正施設、通称南鳥島教育隊が設置

されている。

「そりゃあ、もう有名ですからね。」

「どんなやつでも、好きな人物は船坂弘、ハンス・ウルリツヒ・ルーデル、シモ・ヘイへの殺戮マシーンに変貌します」

「枢軸国の三大チートじゃないですか。」

「ヤバイですよ、それ」

「南鳥島とはそういうところですよ」

「それは勘弁してほしいな」

「それはあなたの態度次第ですよ」

じつと田所少佐を見る佐竹中尉の顔は、真剣そのものだった。

「分かりました。」

精密検査がありますので、準備をお願いします」

「分かりました」

茶番だなど思いながら、佐竹中尉は検査着に着替えた。

女性の体になって、不便さを感じることはあっても、便利さを感じたことはなかった。

「まずは身体検査です。」

体が丸ごと、変わってますからね。

「どんなことでも、データが必要ですよ」

日本皇国軍中央病院内には、市ヶ谷地区で働く数千人の健康診断のための施設がある。

そこは、国防省職員、日本皇国軍人の健康管理のための施設である。

「身長を測りますね。」

156.5 cm、女性の平均身長。ピタリです。

体重は46.5 kg、平均よりは少し軽いですね。

「次いきましよう」

場所を移動して、血圧計の前に来た。

「血圧を測ってください」

言われた通り、佐竹中尉は血圧を測る。

「女性軍人の平均からすると、少し低いようですね。」

低血圧という訳ではありませんが」

血圧を測った後、田所少佐は巻き尺を取り出した。
心なしか、手がわきわきしている気がする。

「スリーサイズ、測ります。
検査着を脱いでください」

佐竹中尉の精神面も考慮して、スリーサイズについては、田中大将によつて国家機密とされ、国防省地下深くの書庫に格納された。

「胸大きいですね。」

慎ましい大ききさしかない私からしたら、羨ましいです」

バストサイズを測り終わると、田所少佐の手が、佐竹中尉の胸に伸びていく。

「やっ、やめて」

女性特有の快感というものを、はじめて味わうのであろうその身体を、田所少佐は味わおうとしていた。

その時、背後のモニターに、映像が映る。

映ったのは、佐竹中尉の叔父、田中大将であった。

『お痛が過ぎるぞ。』

田所少佐、それ以上、手を出すというのならば、中央機動憲兵隊女性介入部隊をそこに突入させる。

そのこの様子は、女性軍人にモニターさせてあるし、録画もされている。

田所少佐、君を軍法会議にかけるには、十分な証拠だ。

その事は説明したはずだが、忘れてことに及ぼうものならば、分かっているよなあ』

普段の田中大将からは、想像できないほどのかおの歪みっぷりであった。

憎悪の念が、モニターを震わせていた。

「ひゃ、ひゃい」

その憎悪の念を、まともに受けた田所少佐の声は震えていた。

『では、私はネット小説でも読んでるので、続けてくれ。』

私のおすすめは、『異世界転生？勇者の唇でお願いします』だ』
とんでもない爆弾を落として、田中大将はモニターから消えた。

「仕事をしろオ、この馬鹿ア」

佐竹中尉は、消えたモニターの先に、声の限り叫んだ。

その声が届いたのかは、不明のままではあるが。

そんな佐竹中尉に、田所少佐は声をかけた。

「では、次いきましようか?」

視力検査であつたり、レントゲンであつたりといった健康診断を終わらせた佐竹中尉は、病室に戻るとため息を吐いた。

「はあ、疲れた。」

もう寝よ」

「田中総長、この機密データはなんですか?」

午後5時、退庁の準備を進めていた田中大将に詰め寄る人物がいた。

海軍部次官であるアホ（田中大将談）、そして名も無きモブである。

「このとは?」

「私にも閲覧する権利があるレベルのデータ。」

なぜパスワードが必要なのですか?」

しかも、パスワードはこちらに知らされていない」

田中大将らが内心で、こいつスパイなんじゃないだろうか、危惧するレベルで、国家機密を閲覧していた。

「だから?」

だから、なんだと言うのだ」

「タイトルに個人情報と記入されている。」

普段ならば、注意の情報ははずだ」

「あなたは女性のスリーサイズに興味がおありで?

変態ですね」

「は?」

スリーサイズウ!」

「えと、知らなかったんですか?」

タイトルに書いてありますよ」

画面のExcelファイルのタイトルには、特殊薬剤の副作用における身体の変化について（スリーサイズも含む）とある。

「は？」

「これは、見下げ果てた変態ですね。

死ねばよろしいのでは？」

「へ？」

「だから、万が一にも外部に漏洩して、その女性に精神的ショックがあつたら、どうするんですか？

責任とれますか？

この変態」

顔を青くした次官に、田中大将が止めをさす。

「変態であるとの結論に、何も言えないようですね。

お帰りはあちらですよ。

さつさと帰らないと、憲兵を呼ぶぞ」

田中大将にそう言われた次官は、すぐごと帰っていった。

「昼は邪魔されましたけど、夜ならば邪魔はいないはず」

夜間の非常灯しかついていない中を、田所少佐は目的地に向かって、静かに歩いていく。

ナースステーションの看護師には、薬を盛った。

邪魔するものはいない。

目的の病室の前まできた。

「昼は楽しめなかった果実を堪能するときがきましたね」

ドアを開け、中に踏み込んだ。

「のーりこちゃん」

間髪いれずに、ベッドにダイブする。

それは、見事ナルパンドライブであつた。

「えっ、嘘？」

が、あっけなく制圧された。

組み伏せられ、もがくことすら許されない状態に追い込まれて、田所少佐は自分の状況を理解する。

「このまま意識を失うか、それ以外か選んでください。

今度は昼のようには、いきませんよ。

どうしますか？」

月の光が差し込む病室の中で、身動きができないながらも、田所少佐は次の策を考えていた。

「それ以外でお願いします」

この選択肢で時間が稼げたなら、逆転の目は必ずあるはずと、この時点では考えていた。

「分かりました。」

では、一晩私と過ごしましょうか?」

「え?」

「大丈夫です。」

痛くしませんし、経験もありますし」

「へ?」

経験?」

驚く間もなく、田所少佐は拘束された。

「朝になったら、解放しますよ」

そこから、自室で目覚めるまでの記憶は、田所少佐にはなかった。

「田所少佐、少し話したいんだがいいかね?」

明朝、目が覚めたばかりの田所少佐のもとを訪れたのは、田中大将であった。

「昨夜、中央病院7階のナースステーションの看護師が、全員眠っているのが見つかった。」

なお、差し入れのクッキーを食べたら、いつのまにか眠っていたと、全員が証言している。

そのクッキーの出所が、君だと言うことも。

申し開きはあるか?」

「本来なら傷害事件として、憲兵に身柄を渡さねばならんのだが、条件を飲むと言うのなら、不問に付しても構わない。」

どうかね?」

「はあ」

「佐竹中尉ハーレム計画への協力を依頼したい」

「は?」

もとより、田所少佐には断ることができないのだが、どうということ

か聞き返してしまった。

「いやー、アメリカ軍のお偉いさんからうちの娘を嫁にどうか何て言われてるもんだから、うちで囲んどかないとねえ。

どうする?。」

「そのお話、慎んでお受けいたします」

田中大将からの問いかけに、田所少佐は頭を下げた。

「そうか、分かった。

よろしく頼む」

東京都新宿区市ヶ谷・日本皇国軍中央病院特別病室

そこには、今回の騒動における最大の功労者である佐竹中尉が、入院していた。

「女性士官の制服、サイズまでぴったりじゃないか？」

機密保持のため、佐竹紀子名義となつているこの病室のなかで、佐竹中尉は制服に袖を通していた。

今日は外せない用事があり、こうやって制服に着替えている。

海軍軍令部付きの海軍中尉という身分を、仮として与えられている彼いや彼女は、総理大臣への状況説明という大きな仕事のために、今日は首相官邸に向かうのだ。

「体調はどうですか？」

ドアを開いて入ってきたのは、主治医である田所少佐である。

意識が回復して数日、精密検査の他はやることもなく、暇を弄んでいた。

久しぶりの仕事に心を弾ませながら、佐竹中尉は着替えていた。

「そうですね、普通です」

「似合いますね。」

白い制服、肩の階級章、男性の奴とは違う良さがあります。

私の好物です」

「憲兵さーん」

じゅるりとよだれを垂らすその様を見て、佐竹中尉は憲兵を呼んだ。

先日の件もあり、佐竹中尉には憲兵の護衛がつくことになった。

手配したのは、田中大将である。

田中大将の相談を受けた中央機動憲兵隊も、入間憲兵隊からの報告を聞いて、ことの重大性を理解しており、速やかに要員を派遣した。それがこの状況である。

「はい」

「こいつです」

扉の向こうから現れた憲兵を見て、佐竹中尉は田所少佐を指差した。

「なんで？」

「なんで、いるの？」

「憲兵は今、忙しいはずなのに」

「忙しいですけど、海軍のトップからの要請ならしかたないですよね」

「そう言っつて、じりじりと近づいていく。」

「えっ？」

「ちよつとタンマ、待つて、降参。」

「ヘンザ、ヘンザ」

「憲兵の纏う不穏な雰囲気を感じたのか、田所少佐は反射的に両手を挙げた。」

「そんな田所少佐を、憲兵は連行していく。」

「言い訳は事務所の方で聞きますからね」

「いやああ」

「無情にも田所少佐は、引き摺られていった。」

「去り際には、憲兵たちの仕事を増やさないでくれといった愚痴が聞こえてきた。」

「すみません。」

「海軍軍令部総長秘書官室付きの高野少尉です」

「その経過を外から見ている一人が、入ってくる。」

「はい、どうぞ」

「本日をお願いするのは、首相官邸での状況説明となります。」

「運転手も用意してありますので、準備をお願いします」

「分かりました」

「準備ができましたら、出てきてください。」

「それから向かいましょう」

「すでに準備を終えていた佐竹中尉が病室を出ると、連絡を受けたのか、憲兵が二人と高野少尉が待っていた。」

「3人と一緒に、ナースステーションまで来ると、看護師の一人が、佐竹中尉に声をかけた。」

「呉鎮守府の山口中佐という方が、都合のいいときに電話してくれそうです」

「無視しててください」

山口中佐、佐竹中尉にとって聞きたくない名前だった。

佐竹中尉の複雑な家庭事情を知るものは、海軍内でもそういない。

一般に知られているとしても、両親も元海軍軍人、叔父が海軍軍令部総長、もう一人の叔父が元海軍軍人で内閣危機管理担当補佐官を現在勤めている生粋の海軍一族出身ということぐらいだろう。

看護師も噂程度で、そのくらいは知っているし、それを言わない分別もあるがしかし、まさか実父が海軍閥に疎まれているとまでは、知らなかった。

そして、その実父こそが山口中佐である。

「無視して良いんですか？」

「あんな万年中佐、怖くはないですよ。」

今年の賞与は、デルタでしょうし」

山口中佐は、経験豊富な指揮官ではあるが、多くの処分も食らってきた問題児でもあった。

主にその原因は、元妻に対するストーキングに近い行為が原因だった。

「この事は他言無用ですよ」

「はは、分かっていますよ」

水兵から曹長、士官予定者課程を経て、士官になった高野少尉は、その辺りもきちんと理解していた。

だから、苦笑しながらも、他に話すつもりはないと、言った。

「あなたが連行されてくるのは、何回目ですかね？」

軍令部総長もお怒りですよ」

憲兵隊の事務所の取調室に連れてこられた田所少佐に、取り調べを行う憲兵はそう言った。

「田中総長は、おいこら、この野郎と、怒鳴っておられました。」

部下数人がかりで、落ち着かせています。

そこら辺を弁えないと、痛い目を見ますよ」

ほとほと呆れたといった様子で、憲兵は言う。

憲兵隊には、階級というものが通用しない。

憲兵隊は軍事警察であり、日本皇国軍の規律維持のための部隊であるからだ。

そのため、直接の指揮権は、文民である国防大臣が握っている。

とはいえ、国防大臣の職は、退役軍人の座るポストなので、憲兵の指揮権は軍が掌握しているとも言える。

かといって、戦前のような振る舞いをすれば、市民が黙っていないので、そこまでの強権を発動することはない。

しかし、軍の利益のためならそれすらも厭わない。

事態が露見すれば、憲兵隊はすべての泥を被る覚悟もある。

あるアニメ映画だったか、公安警察お得意の違法作業だとの台詞があった。

なにも違法作業が得意なのは、公安警察だけではないということだ。

「海軍軍令部総長の庇護があるとはいえ、好き勝手やってると、我々が消しますよ。」

そういうのは、我々は得意ですからね」

「ひえー」

そう忠告する憲兵の声音は、いつも通り平坦なものだった。

「ふざけないでください。」

本当の話ですからね」

忠告はしましたよと、憲兵の口調は変わらない。

はあ、とため息を漏らしたのは、やはり憲兵側であった。

「ここを通してもらおうか?」

ドタドタという大きな足音と共に、大きくよく通る声が廊下に響く。

「軍令部総長の命令であっても、お受け致しかねます。」

申し訳ありません」

取調室の扉の前には、屈強な憲兵たちが控えていた。

もちろん、田中大将を止めるためである。

「申し訳ないと思うのなら、ここをどけえ」

「致しかねます」

「なぜだ？」

既に田中大将と扉の前にいた憲兵たちはもみくちやになりながらも、押し問答を繰り返していた。

「憲兵隊運用規則第二条、事件捜査中の憲兵隊に対するあらゆる介入の禁止。」

それに伴う施行令により、憲兵隊の取調室への部外者の立ち入り禁止が定められております。

施行令に反する行為は、日本皇国軍法により処罰されます」

「では、連れてきてくれ」

「それも二条に抵触します。」

お止めください」

「何ならできる?」

「伝言くらいなら、融通を利かせましょう。」

それくらいですよ、できるのは」

「分かった。」

では、次にやらかしたら、潰すとだけ、伝えてくれ」

「分かりました。」

といつても、我々も警告はしてますよ」

それを素直に聞くななら、こんな場所には何度も来ないでしょうと、憲兵は笑う。

その言葉に田中大将も頷くほかなかった。

「では、伝言を伝えにいつてきます」

「ああ、頼んだ」

最後には納得した田中大将は、乱れた制服を直して、軍令部の方へと体の向きを変えた。

「田中大将は、帰られましたよ。」

伝言を預かりました。

次にやらかしたら、潰すとおっしゃられてましたよ。

彼女、大丈夫ですかね?」

「やらかさなければ、大丈夫だろう。」

「やらかさなければだが」

憲兵の言葉には、呆れと達観が入り交じり、そしてその言葉には信頼が入っていないかった。

「ですよね」

埼玉にある国防大学校医学部付属病院は、入間憲兵隊の管轄である。

が故に、田所少佐の悪癖の噂は同期から聞こえてくるのである。

「じゃあ、今日のところは帰すか？」

「そうですね。」

我々にもやることは、たくさんあります。

この変態に関わる時間ももつたいない」

その頃、佐竹中尉一行は、正面玄関にたどり着いていた。

その病院の正面玄関には、対テロ作戦部隊の隊員が警備として立っていた。

対テロ作戦部隊も市ヶ谷駐屯地の警備に動員されるほどまでに、警備隊の人員に負傷者が続出していた。

「横須賀の特殊偵察中隊もいますね」

2個近衛連隊の全滅、市ヶ谷基地警備隊の壊滅、この2つの出来事は、国防省に大きな衝撃を受けた。

1つは予想されていたとは言え、2000人もいた兵士が、敵に一矢報いることなく消滅したと言うことに、驚きが隠せなかった。

正面戦力では勝っていたはずなのに負けた。

この結果を聞いた前田大將は、近衛旅団の解散命令書に即刻でサインをした。

いまの混乱に乗じて、陸軍内の膿を出しきるつもりだ。

「陸軍がより強くなれば、皇国の守りは万全だ」

とは、前田大將の言葉だ。

警備隊の壊滅に関しては、韓国軍特殊部隊の隊員が関与していた疑いがある。

皇居攻撃と言う派手な花火を皮切りに、国防省の庁舎を攻撃した。

練度で言えば、警備隊でも歯が立たないと分かっていた。

「まあ、日本各地の部隊から、兵士を引き抜いて、再建はするんでしようけど」

佐竹中尉はポツツと呟いた。

市ヶ谷基地施設は、日本皇国軍の指揮中枢だ。

さらには、陸海空軍の全ネットワークの中枢サーバーも設置されている。

その基地をいつまでも丸裸と言うわけにはいかない。

「まあ、そうでしょうな。」

このままでは、私のような老骨にもお呼びがかかってしまう」

「いやはや、まだまだ現役でしょう。」

その胸の徽章は、誤魔化せませんよ」

高野少尉の胸には、特殊作戦徽章が輝いていた。

なおかつ、同年代の幹部に多い肥満体ではなく、未だに鍛えているのだろう筋肉が制服の上からでも分かるくらいについていた。

「私はもうロートルですよ」

そういう高野少尉に、佐竹中尉は耳元でささやいた。

「いやいや、レットウォール上海の生き残りではありませんか？」

「なぜ、その言葉を…」

言葉に詰まる高野少尉は、こちらを見つめていた。

「やはり、あなたの顔には見覚えがありました。」

海軍特殊制圧部隊の第一小隊におられましたよね」

「となると、あなたもあの地獄に？」

「ええ、まあ」

「この話は、ここではできません。」

車に乗ってしましましょう」

第三章

VOYAGE. 56

「佐竹中尉は、あの時、国防大学校学生だったと思うんだが、どうして上海のことを？」

病院の地下駐車場に止まっていた車両に乗り込むと、高野少尉は開口一番そう言った。

「いえ、縁がありまして、そこに行くことになったんですよ」

「はは、縁ですか？」

「台湾総統の孫介石さん、我々が助けにいった。

その方と知り合いだったんですよ」

「知り合いですか？」

「日本としては日台相互防衛条約として、台湾軍の要請があれば、軍事行動を起こさざるを得ない訳ですがね。」

特に救出作戦ともなれば、味方と識別できなければならぬ。

正規の行動ではないから、制服や部隊章を着けていくわけにはいかないし、そこに知り合いがいれば、違うだろうという判断で、戦地に送られた訳ですね」

「それはついてないですね」

「にしても、あの時は死ぬかと思いましたがね。」

「初っぱなから空挺降下させられましたし」

「あの時は初度潜入部隊は空挺降下で進出したんですよ。」

私は二次部隊だったので、輸送艦からの上陸だったんで楽でしたけどね」

「都市全域を制圧するなんて、数百人の部隊では無理がありすぎましたね。」

本来なら数時間、監禁されていたビルと港湾エリアを守ればよかったですね」

「まあ、あれは、失敗して当然の作戦だったんですよけどね」

「まあ、郊外の空き地付近に空挺降下で進出して、目標のビルを制圧し

て救出したまではよかったですね、そのあとが不味かったですよね」

「ああ、数個師団の展開が速かったことですね。

敵の攻撃によって、ビルとの間が敵に制圧されてしまったこと、あれは酷かった」

「幾重にも包囲されて、救出部隊は孤立しましたしね。

ゲリラ的に襲撃してくる中国軍を、撃退する度に人数が減って、終いには私が銃剣突撃して包囲網を突破したんですよ」

「あの時の混乱は、酷かった。

我々は港湾の防備に就いていたんですが、我々も市内に投入されましてね」

「台湾軍が作戦の指揮を執ってたらしいですね」

「ああ、だからか。

港湾部から市内に出向いた部隊は、あっちこっち行かされた上に、台湾軍の盾に近いこともやらされたって言ってましたね」

「ぐちゃぐちゃにかき回されて、あれならまだ数個の師団を動員して、限定的侵攻を行うべきでしたよ」

「上海は広すぎるでしたか?」

「報告書にはそう書かれてたんですね。

懐かしいなあ」

新宿にある国防省を発って、10分、車は総理大臣官邸の敷地内に入った。

「昔話をしていたいところですが、目的地に到着しました。

続きは個人的にやりましょうか?」

「そうですね、そうしましょう」

東京都千代田区永田町

首相官邸地下にある危機管理センター、現在は東京都同時多発襲撃事件対策本部が設置され、東京の情勢を見守っていた。

未だに公安警察、憲兵隊の捜査の終わらぬ状態では、対策本部は解散できないというのが、内閣の判断だった。

「佐竹中尉、今回の事件では苦勞をかけました。

陛下を守ってもらったこと、閣僚一同、深く感謝しています」

危機管理センター区画に入った佐竹中尉を出迎えたのは、総理大臣以下の全閣僚だった。

「早速で悪いが、状況説明を頼む。

ああ、心配は要らない。

公安警察と憲兵が、私も含めて、ここにいる全員の身辺調査をしているからね」

今日行われる状況ブリーフィングは、定例のものである。

本来であれば、統合参謀本部長、情報本部長の2名が報告に現れるのだが、特別措置として佐竹中尉も参加させられた。

「では、始めてくれ」

「了解しました。

竹島方面の情勢報告について、現在、第3艦隊が展開しており、韓国軍の攻勢は起こり得ないとの判断であります。

また、第2艦隊が釜山近海において警戒監視中ですが、異常な行動は報告されておりません」

「竹島はそうだろうか。」

今の韓国軍には、陸軍以外には予備戦力はない」

防衛大臣は元軍人だけあって、理解も早かった。

「米国としても、今回の件をきっかけに在韓米軍の縮小に動き出すと思われれます」

「あの大統領にしては、遅すぎる決断だな。

まあ、米国製兵器の顧客ではあるからな。

同盟国という関係をもとに、売りまくったわけだが」

総理大臣の発言に対して、官房長官が言葉を繋ぐ。

「これまで韓国は、対北作戦を放棄した戦略を取り続けてきた訳だが、本土防衛はどうなる？」

「今回の作戦において、兵員を消耗したのは、海空軍と海兵隊のみです。

無論、陸軍も我が軍の上陸に備えて、展開していましたが、直接の戦闘は少なかったため、損害は少ないものと思われれますが、空軍力の

低下には、一時のリスクがあるものと思われれます。

現在、即応可能な空軍力は米空軍のF-16戦闘機で編成されている2個戦闘航空団のみです」

韓国軍はただでさえ、稼働率が低いのに、この攻撃で主力機を消耗していた。

韓国空軍には、F4E戦闘機もしくはF5E戦闘機の第3世代機しかなかった。

これでは、万全とは言えないだろう。

F4Eは日本皇国空軍でも採用されていた機種だが、後継として採用されたF35A戦闘機に後を託して、既に退役リタイアしている。

「機数で言えば、どのくらいになるんですか？」

「およそ160機です。」

ただ、これは定数の機体数であり、在韓米軍の過去の稼働率を考慮すると、110機ほどかと思われます」

「大体、60%くらいかな。」

本国や日本の部隊は、70〜80%と聞いているが、1割くらい低いな」

「長期的に軍事力のプレゼンスを維持するために、わざと稼働機を減らしているのでしょうか。」

韓国においては、我々が生殺与奪の権利を握っておりますので、米軍は長期間の展開を目的として、わざと稼働機を減らしているのでしょうか」

「仮に全機分の消耗品を補給してもらったとすると、それを100機分しか使用しない。」

じゃあ、残りの60機分の消耗品は、ストックできるといふことか」
統合参謀本部長の言葉に、副総理が分かりやすく口に出す。

副総理の解説に、閣僚の何人かはなるほどと口に出した。

「その通りです。」

仮に日韓の戦争が勃発しても、1ヶ月間の作戦行動が可能と思われる
ます」

「結局、撤収したら同じだがね」

「いえ、軍人というものは、常に現状を維持することを求める生き物ですよ。」

特に撤退しない場合はですね。」

駐留軍の撤退を決断するのは、首脳の仕事ですから」

「ふむ、確かに重大な決断をするのは、我々政治家の仕事だな」

「そして、一時駐留拠点を我々に求めてくると思われます」

「駐留経費はどうなんだね？」

「そこまではわかりませんが、今の大統領は請求してくるかもしれない」

「我々としては、払う義理はないのだがね。」

「軍の予算的にはどうですか？」

「1年や2年なら問題ないと思いますが、それよりも土地の問題があります。」

「ご存じの通り、在日米軍は現在、横田、横須賀、佐世保、キャンプ座間、キャンプシュワブ、ホワイトビーチ、岩国、三沢の各基地にのみ展開しています。」

また、我が軍の弾薬庫、燃料廠を共有しており、完全に後方支援機能、兵站基地としての機能のみであることが分かります。」

そこに新たに、1個旅団戦闘団を受け入れる余裕はありません。」

また、2個戦闘航空団を収容できる航空基地はありません」

「そこで新たな基地の要求か？」

「その通りです」

「人員だけであれば、速やかに本土に帰還できますが」

「兵士だけは輸送機に乗れますからね」

「その通りです。」

ですが、重装備はそうはいきません」

十数年前、陸軍参謀本部作戦部運用課長の職にあった河野大將は、当時から重装備の展開計画に頭を悩ませていた。

長距離輸送ともなると、JR貨物との調整、海軍の輸送艦もしくは民間商船の手配、とれる手段は限られていた。

「確かに戦車や装甲車や火砲は、航空機で運べん。」

皇国陸軍もそうだし、米軍もそうだったな。

戦車は船舶か専用トレーラー、装甲車でも船舶か鉄道輸送に頼っている」

総理大臣は軍事には門外漢だったはずだが、よく勉強されていた。

「船舶の手配等の問題もあります」

「陸軍の演習場を転用できないか？」

さすがに、今さら在日米軍基地を増設はできん」

「大半の演習場は、内陸にあるために、重装備の搬入はリスクが大きすぎます。」

特に、反在日米軍の動きは未だにあります。

新たな米軍の動きは、彼らを刺激する恐れがあります」

「米軍基地撤去に対する先人たちの苦勞を、我々は知っている。」

本土で、沖縄で、それに米軍が進駐したそれぞれの国であったことは、とてもじゃないが口には出せない」

過去、在日米軍兵士は、日米地位協定を知ってか知らずか、好きにやりたい放題やってきた。

日本皇国軍は、その状態に対し、腹に据えかねていたし、それは警察も同じだった。

だからこそ、基地警備の名目で、陸軍部隊が各基地を包囲し、人の出入りを規制した。

「米軍にも善良な人物は多いのだがね。」

悪い話の方が広まりやすい、日本人の性質かもしれないが」

「他人の不幸は蜜の味と言うことですよ。」

何か事件が起これば、野次馬がうじゃうじゃと出るようにね」

「韓国で波乱が起これば、我々は否応なしに巻き込まれるそこを考慮しておかないとな。」

明治の元老が、朝鮮を併合した理由がわかる気がするね。」

奴らは、自分本位過ぎる」

「我々の仕事の範疇ではありませんので、」

「いや何、ただの愚痴だ。」

やつらの考えることは、何一つとして分からん。

我が国のいや、それ以上に強きに流れ、弱きを叩く」

「我が国は、それとは違います。」

国民はそう傾向があるかもしれませんが、国としては信義を重視して参りました」

戦後、日本皇国は日米相互防衛条約に基づいた日米同盟を堅守する立場を守っていた。

また、日米地位協定の改正による日米対等の関係が出来上がってからは、在日米軍とのカウンターパートとして、地元に寄り添いつつも、米軍に協力していた。

ブリーフィングの話題が別の方向へ白熱するなか、官房長官が咳払いをして、話を戻した。

「話がそれたが、それで韓国軍が戦力を再建するのに必要な時間は？」
「おそらくは、短くて数年、長くて10年以上かかると思われます。」

また、米国軍需産業筋の話によると、米国政府より韓国に対する無期限の輸出禁止措置が勧告されているそうです。

新たな武器の獲得は、現時点では不可能でしょう」

統合参謀本部長の言う通り、米国は韓国に対する武器禁輸措置を発動すると同時に、国防総省のスタッフが、日本に牙を剥かないレベルの武器のリストアップに追われていた。

「じゃあ、次に動くのは中国か北朝鮮か、どっちだと思う？」

と副総理が、説明していた統合参謀本部長に聞いた。

「そこまでは、判断できません。」

ただ現時点においては、中国軍、北朝鮮軍には、特異な現象は認められておりません」

「そうかい」

なぜかつまらなさそうに、副総理は返答した。

「続きまして、陛下襲撃事件の報告に入ります」

「頼む。」

我々にとっては、そちらの方が優先順位が高い」

「では、鹵獲した兵器からの分析ですが、ロシア、ドイツといった国々の兵器が混在しており、使用国の特定には至っておりません。」

また、情報本部公安部隊の調査によると、拠点と目される場所より、韓国製もしくはその系統の食品多数や製品が見つかっております。

また、詳しくは本人から説明させますが、実行犯は韓国語ないしは朝鮮語を使用したことを確認しております。

少なくとも、半島の国家が関わっていることは確かです。

佐竹中尉、説明を頼む」

統合参謀本部長の言葉のあとに、佐竹中尉が説明を行う。

「はい、では確認した私から説明をさせていただきます。

私か韓国語らしき言葉を聞いたのは、陛下と面会中に、そこを襲撃してきた敵を撃退したときです。

投げ込んだ手榴弾の爆発に、驚いたようで何か叫んでいました」

「それが韓国語だと?」

「はい、間違いありません」

佐竹中尉の説明に、総理大臣は小さく唸った。

「韓国語か……」

「まだ断定はできませんが、状況証拠はバツチリだな。

軍としてはどういう方針だ?」

「統合参謀本部長命により、既に韓国軍に対する行動方針は定められております。

また、民間船舶においても、通常通りの対応を行っております」

統合参謀本部長の言葉において、強調されているのは、通常通りの対応に徹すると言う一点だ。

こちらとしては人道的配慮はするが、それ以外は絶対に行わない。

「過去の特例措置は、すべて停止し、速やかに撤廃されます」

過去には、関係改善の動きが出た際には、軍事的交流も含め、いくつかの特例が認められるようになっていた。

「それはそうだな」

「まだ北朝鮮の方が、よかつたんじゃないかねえ。

こちら、日本皇国の友好国いや同盟国、アメリカの同盟国が韓国だからなあ」

敵の敵は味方、味方の味方は味方何て理論は、韓国には成立しない。

成立するのなら、戦争など吹っ掛けないだろうし、そんな希望を持てるほど、韓国と言う国は素直ではない。